京都府遺跡調査報告集

第181冊

１．満願寺跡第２次

２．新名神高速道路整備事業関係遺跡平成27～29・令和元年度

（１）保安塚

（２）長井野塚

（３）岨田遺跡第１・２次

（４）砂川古墳

（５）奥城土遺跡

（６）禅定寺城跡第３次

２０２１

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版１　満願寺跡第２次



(1)調査地・西舞鶴市域を望む(南から、空撮)



(2)礎石建物SB15　礎石群全景(南東から)

巻頭図版２　満願寺跡第２次



(1)黒釉白堆線文壺



(2)出土遺物集合写真



保安塚１区塚全景（北から）

巻頭図版４　新名神高速道路整備事業関係遺跡



保安塚１区塚全景（北から）

序

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは昭和56年４月に設立され、昨年で創立40年を迎えました。以来、40年間にわたって埋蔵文化財の発掘調査を実施して、その成果を『京都府埋蔵文化財調査報告集』として刊行するとともに、速報展やセミナーなどを通じて公表してまいりました。

本書は『京都府遺跡調査報告集』として、平成30～令和元年度に京都府中丹東土木事務所の依頼を受けて実施した満願寺跡、平成27～令和元年度に西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施した保安塚、長井野塚、岨田遺跡第１・２次、砂川古墳、奥城土遺跡、禅定寺城跡第３次の発掘調査報告を収録したものです。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深めるうえで、ご活用いただければ幸いです。

発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都府教育委員会・舞鶴市・宇治田原町教育委員会などの各関係機関、ならびに調査にご参加、ご協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

令和３年３月

公益財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

理　事　長　　井　上　満　郎

例　　言

1．本書に収めた報告は下記のとおりである。

（1）満願寺跡第２次

（2）新名神高速道路整備事業関係遺跡平成27～29・令和元年度

保安塚、長井野塚、岨田遺跡第１・２次、砂川古墳、奥城土遺跡、禅定寺城跡第３次

2．遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

	遺　跡　名	所　在　地	調査期間	経費負担者	執筆者
1．	満願寺跡第２次	舞鶴市万願寺地内	平成31年２月４日 ～３月22日 令和元年７月２日 ～令和２年２月４日	京都府中丹東 土木事務所	竹村亮仁 桐井理揮 山中　凌
2．	保安塚 長井野塚 岨田遺跡第１・２次 砂川古墳 奥城土遺跡 禅定寺城跡第３次	宇治田原町郷之口宇治山 宇治田原町郷之口長井野 宇治田原町岩山 宇治田原町禅定寺砂川 宇治田原町禅定寺奥城土 宇治田原町禅定寺小坂本	平成27年12月16日 ～平成28年３月４日 平成28年４月26日 ～平成28年８月10日 平成29年11月９日 ～平成30年２月27日 平成31年４月16日 ～令和元年５月28日 令和元年７月１日 ～令和元年８月６日 令和元年５月22日 ～令和元年７月23日	西日本高速道 路株式会社	加藤雅士 橋本　稔 内藤　京

3．本書で使用している座標は、原則として世界測地系国土座標第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。なお、現地調査及び過去の調査との整合性のため日本測地系を使用している場合もある。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

4．本書の編集は、調査課調査担当者の編集原案をもとに、調査課企画調整係が行った。

5．現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査課企画調整係調査員武本典子が行った。

本 文 目 次

１．満願寺跡第２次発掘調査報告---------- 1
付編１　放射性炭素年代測定報告----------49
付編２　満願寺跡出土炭化物の同定および放射性炭素年代測定----------52
２．新名神高速道路整備事業関係遺跡平成27～29・令和元年度発掘調査報告----------75
保安塚、長井野塚、岨田遺跡第１・２次、砂川古墳、奥城土遺跡、禅定寺城跡第３次
付編１　岨田遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定----------143
付編２　岨田遺跡出土炭化材の樹種同定----------146

挿 図 目 次

１．満願寺跡第２次

第１図　舞鶴市位置図---------- 2
第２図　地形分類図---------- 2
第３図　周辺遺跡分布図---------- 4
第４図　トレンチ地区割図---------- 7
第５図　調査前地形測量図---------- 8
第６図　満願寺跡基本層序柱状図及び谷部横断面図---------- 9
第７図　調査トレンチ全体平面図----------11
第８図　１トレンチ北壁土層断面図----------12
第９図　１トレンチ東西土層断面図----------13
第10図　遺構配置図(室町時代)----------14
第11図　礎石建物ＳＢ02平面図及び断面図----------15
第12図　溝ＳＤ13平面図----------16
第13図　遺構配置図(鎌倉時代)----------16
第14図　礎石建物ＳＢ15平面図及び断面図----------17
第15図　礎石建物ＳＢ03平面図及び断面図----------18
第16図　石組み溝ＳＤ01平面図----------19
第17図　石組み溝ＳＤ01断面図----------19
第18図　石組み溝ＳＤ01平面図及び立面図----------20
第19図　溝ＳＤ75平面図及び土層断面図----------21
第20図　溝ＳＤ18平面図----------21
第21図　土坑ＳＫ20平面図及び断面図----------21

第22図　土坑ＳＫ50・埋甕ＳＸ51平面図及び断面図----22
第23図　柱穴ＳＰ62、土坑群ＳＫ58 ～ 61・63 ～ 74平面図及び断面図----22
第24図　遺構配置図(平安～鎌倉時代)----23
第25図　礎石建物ＳＢ22平面図及び断面図----24
第26図　溝ＳＤ21平面図----25
第27図　溝ＳＤ21断面図----25
第28図　土坑ＳＫ28平面図及び断面図----25
第29図　２トレンチ平面図----26
第30図　石組み溝ＳＤ01ほか出土遺物実測図----28
第31図　土坑ＳＫ20出土遺物実測図----28
第32図　土坑ＳＫ25・28出土遺物実測図----29
第33図　埋甕ＳＸ51出土遺物実測図----30
第34図　２トレンチ出土遺物実測図----31
第35図　整地層第11層上層・第11層出土遺物実測図----32
第36図　整地層第18層出土遺物実測図----33
第37図　整地層第20層出土遺物実測図----34
第38図　整地層第20層出土遺物実測図(土師器以外)----35
第39図　整地層第21層出土遺物実測図----36
第40図　整地層第21層出土遺物実測図(土師器以外) 1 ----37
第41図　整地層第21層出土遺物実測図(土師器以外) 2 ----38
第42図　炭化物層出土遺物実測図----39
第43図　第44層出土遺物実測図 ----40
第44図　出土銭貨・炭化米・銅製品・石製品実測図----40
第45図　出土鉄製品実測図----42
第46図　弥生土器実測図----43
第47図　整地層別土師器皿の割合----44
第48図　出土瓦器編年案----45
第49図　建物変遷図----46

２．新名神高速道路整備事業関係遺跡平成27 ～ 29・令和元年度　保安塚、長井野塚、岨田遺跡第１・２次、砂川古墳、奥城土遺跡、禅定寺城跡第３次

第１図　宇治田原町の位置----75
第２図　新名神高速道路の路線と調査対象遺跡----78
第３図　地質分類図----80
第４図　調査地周辺主要遺跡分布図----82

第５図　調査地区割図----84
第６図　保安塚・長井野塚周辺地形測量図----85
第７図　保安塚調査前地形測量図----86
第８図　保安塚１区平面図・土層断面図----87
第９図　保安塚遺物出土状況図----89
第10図　保安塚２区平面図・土層断面図----90
第11図　保安塚出土遺物実測図----91
第12図　保安塚出土土師器皿の口径分布と残存率----94
第13図　国絵図にみる周辺の交通路----95
第14図　保安塚周辺地形の概略図----96
第15図　長井野塚調査区配置図----97
第16図　長井野塚１区平面図・土層断面図----98
第17図　長井野塚２区平面図・土層断面図----99
第18図　長井野塚３・４区平面図・土層断面図----100
第19図　長井野塚出土遺物実測図----101
第20図　岨田遺跡調査区配置図----102
第21図　岨田遺跡１～８区平面図----104
第22図　岨田遺跡土層柱状図----105
第23図　岨田遺跡７区平面・柱穴断面図----106
第24図　岨田遺跡10区平面・土層断面図----107
第25図　岨田遺跡11区平面・土層断面図----107
第26図　岨田遺跡12区平面・土層断面図----108
第27図　岨田遺跡13区平面・土層断面図----110
第28図　岨田遺跡17区平面・土層断面図----111
第29図　岨田遺跡21区平面・土層断面図----112
第30図　岨田遺跡14区平面・土層断面図----113
第31図　岨田遺跡15区平面・土層断面図----114
第32図　岨田遺跡16区平面・土層断面図----115
第33図　岨田遺跡18区平面・土層断面図----116
第34図　岨田遺跡19区平面・土層断面図----117
第35図　岨田遺跡20区平面・土層断面図----119
第36図　岨田遺跡出土遺物実測図１----119
第37図　岨田遺跡出土遺物実測図２----120
第38図　砂川古墳平面図----122
第39図　砂川古墳土層断面図----124

第40図　砂川古墳　炭窯ＳＹ１平面・断面図----------125
第41図　砂川古墳出土遺物実測図----------125
第42図　奥城土遺跡調査区配置図----------127
第43図　奥城土遺跡１区平面・断面図----------128
第44図　奥城土遺跡２区平面・断面図----------130
第45図　奥城土遺跡３区平面・断面図----------131
第46図　禅定寺城跡調査区配置図----------132
第47図　禅定寺城跡１・２・12トレンチ平面・土層断面図----------133
第48図　禅定寺城跡３・４トレンチ平面・土層断面図----------134
第49図　禅定寺城跡５・13トレンチ平面・土層断面図----------136
第50図　禅定寺城跡６～８トレンチ平面・土層断面図----------137
第51図　禅定寺城跡９～11・14トレンチ平面・土層断面図----------138

付 表 目 次

１．満願寺跡第２次

付表１　出土土器観察表(土器・陶器)----------58
付表２　出土土器観察表(貿易陶磁器)----------72
付表３　出土土器観察表(弥生土器)----------73
付表４　出土銭貨観察表----------74
付表５　出土金属製品観察表----------74
付表６　出土石製品観察表----------74

2. 新名神高速道路整備事業関係遺跡

付表　出土土器観察表----------149

図 版 目 次

巻頭図版１　満願寺跡第２次　(1)調査地・西舞鶴市域を望む(南から、空撮)
(2)礎石建物ＳＢ15　礎石群全景(南東から)
巻頭図版２　満願寺跡第２次　(1)黒釉白堆線文壺
(2)出土遺物集合写真
巻頭図版３　新名神高速道路整備事業関係遺跡
保安塚１区塚全景(北から)
巻頭図版４　新名神高速道路整備事業関係遺跡
保安塚１区塚全景(北から)

１．満願寺跡第２次

図版第１　(1) １トレンチ全景(南から)

(2) １トレンチ遺構集中箇所全景(北東から)

図版第２　(1) １トレンチ礎石建物ＳＢ02全景(南から)

(2) １トレンチ礎石建物ＳＢ02復元全景(南から)

図版第３　(1) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石１(南から)

(2) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石２(南から)

(3) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石３(南から)

(4) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石４(南から)

(5) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石５(南から)

(6) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石６(南から)

(7) １トレンチ礎石建物ＳＢ02根石(南から)

(8) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石９(南から)

図版第４　(1) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石10(南から)

(2) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石11(南から)

(3) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石13(南から)

(4) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石14(南から)

(5) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石15・16(南から)

(6) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石17(南から)

(7) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石18(南から)

(8) １トレンチ礎石建物ＳＢ02土師器出土状況(南東から)

図版第５　(1) １トレンチ素掘り溝ＳＤ13全景(南西から)

(2) １トレンチ鉄製品出土状況(南から)

(3) １トレンチ礎石建物古銭出土状況(北西から)

図版第６　(1) １トレンチ礎石建物ＳＢ15全景(南から)

(2) １トレンチ礎石建物ＳＢ15復元全景(南から)

図版第７　(1) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石115(南から)

(2) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石116(南から)

(3) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石119(南から)

(4) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石23(北から)

(5) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石24(西から)

(6) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石25(北から)

(7) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石26(北から)

(8) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石27(南から)

図版第８　(1) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石28(南から)
(2) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石29(南から)
(3) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石30(南から)
(4) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石31(南から)
(5) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石32(南から)
(6) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石33(南から)
(7) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石35(南から)
(8) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石36(南から)
図版第９　(1) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石37(南から)
(2) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石38(南から)
(3) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石39(南から)
(4) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石40(南から)
(5) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石42(南から)
(6) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石43(南から)
(7) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石44(南から)
(8) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石45(南から)
図版第10　(1) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石46(南から)
(2) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石47(南から)
(3) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石48(南から)
(4) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石51(南から)
(5) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石52(南から)
(6) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石124(南から)
(7) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石125(南から)
図版第11　(1) １トレンチ石組み溝ＳＤ01全景(東から)
(2) １トレンチ石組み溝ＳＤ01全景(南西から)
図版第12　(1) １トレンチ石組み溝ＳＤ01検出状況(西から)
(2) １トレンチ石組み溝ＳＤ01土層断面(西から)
(3) １トレンチ石組み溝ＳＤ01遺物出土状況(南東から)
図版第13　(1) １トレンチ東拡張区石組み溝ＳＤ01全景(南西から)
(2) １トレンチ西拡張区石組み溝ＳＤ01完掘状況(東から)
(3) １トレンチ東拡張区土坑群完掘状況(南西から)
図版第14　(1) １トレンチ礎石建物ＳＢ02全景(南東から)
(2) １トレンチ礎石建物ＳＢ02復元全景(南から)
図版第15　(1) １トレンチ礎石建物ＳＢ03礎石57(南から)
(2) １トレンチ礎石建物ＳＢ03礎石58(南から)

(3) 1トレンチ礎石建物ＳＢ03礎石59(南から)
(4) 1トレンチ礎石建物ＳＢ03礎石60(南から)
(5) 1トレンチ礎石建物ＳＢ03礎石61(南から)
(6) 1トレンチ礎石建物ＳＢ03礎石75(南から)
(7) 1トレンチ礎石建物ＳＢ03礎石62(南東から)
(8) 1トレンチ礎石建物ＳＢ03根石(南西から)
図版第16 (1) 1トレンチ礎石建物ＳＢ03礎石63(南から)
(2) 1トレンチ礎石建物ＳＢ03礎石65(北から)
(3) 1トレンチ礎石建物ＳＢ03礎石66(南から)
(4) 1トレンチ礎石建物ＳＢ03礎石67(南から)
(5) 1トレンチ礎石建物ＳＢ03礎石68(南から)
(6) 1トレンチ礎石建物ＳＢ03礎石69(南から)
(7) 1トレンチ炭化物層検出状況(南東から)
(8) 1トレンチ炭化物層土層断面(西から)
図版第17 (1) 1トレンチ土坑ＳＫ20遺物出土状況(南から)
(2) 1トレンチ土坑ＳＫ28完掘状況(北東から)
(3) 1トレンチ瓦器椀出土状況(南から)
図版第18 (1) 1トレンチ礎石建物ＳＢ22全景(南から)
(2) 1トレンチ溝ＳＤ21全景(南東から)
図版第19 (1) 1トレンチ礎石建物ＳＢ22礎石80・81(南から)
(2) 1トレンチ礎石建物ＳＢ22礎石83(南から)
(3) 1トレンチ礎石建物ＳＢ22礎石84・85(南から)
(4) 1トレンチ礎石建物ＳＢ22礎石94(西から)
(5) 1トレンチ礎石建物ＳＢ22礎石96(南から)
(6) 1トレンチ礎石建物ＳＢ22礎石99(南から)
(7) 1トレンチ礎石建物ＳＢ22礎石100(南から)
図版第20 (1) 1トレンチ溝ＳＤ21土層断面(東から)
(2) 1トレンチ土坑ＳＫ50・埋甕ＳＸ51遺物出土状況(南から)
(3) 1トレンチ土坑ＳＫ50遺物出土状況(南から)
図版第21 (1) 1トレンチ埋甕ＳＸ51土層断面(南から)
(2) 1トレンチ埋甕ＳＸ51内容遺物除去状況(南から)
(3) 1トレンチ埋甕ＳＸ51埋甕除去状況(南から)
図版第22 (1) 1トレンチ土層断面１(西から)
(2) 1トレンチ土層断面２(北西から)
(3) 1トレンチ土層断面３(南西から)

図版第23　(1)１トレンチ土層断面４(西から)
(2)１トレンチ土層断面５(北から)
(3)１トレンチ内南北土層断面１(南から)
図版第24　(1)１トレンチ内南北土層断面２(南から)
(2)１トレンチ内東西土層断面１(南から)
(3)１トレンチ内東西土層断面２(南から)
図版第25　(1)１トレンチ内東西土層断面３(南から)
(2)１トレンチ東拡張区内東西土層断面(南から)
(3)１トレンチ西拡張区内東西土層断面(南から)
図版第26　(1)１トレンチ東西拡張区全景(南西から)
(2)２トレンチ全景(北西から)
図版第27　(1)溝ＳＤ01、礎石建物ＳＢ03、土坑ＳＫ24・25出土遺物
(2)土坑ＳＫ21出土遺物
図版第28　２トレンチ出土遺物
図版第29　土坑ＳＫ20出土遺物
図版第30　埋甕ＳＸ51出土遺物
図版第31　整地層第18層出土遺物
図版第32　整地層第20層出土遺物
図版第33　(1)整地層第20層出土遺物
(2)整地層第21層出土遺物
図版第34　整地層第21層出土遺物
図版第35　整地層第21層出土遺物
図版第36　整地層第21層出土遺物
図版第37　(1)土坑ＳＫ28出土黒釉白堆線文壺
(2)黒釉白堆線文壺　内面全景
(3)黒釉白堆線文壺　底部全景
(4)黒釉白堆線文壺　内面及び断面拡大
(5)黒釉白堆線文壺　垂線文拡大
図版第38　(1)炭化物層出土白磁四耳壺
(2)出土遺物(中国製陶磁器)
図版第39　(1)出土遺物(中国製青磁　外面)
(2)出土遺物(中国製青磁　内面)
図版第40　(1)出土遺物(中国製青磁　外面)
(2)出土遺物(中国製青磁　内面)
図版第41　(1)出土遺物(中国製青磁　外面)

(2)出土遺物(中国製青磁　内面)
図版第42　(1)出土遺物(中国製青磁　外面)
(2)出土遺物(中国製青磁　内面)
図版第43　出土遺物(中国製陶磁器)
図版第44　(1)出土遺物(中国製褐釉盤　外面)
(2)出土遺物(中国製褐釉盤　内面)
図版第45　(1)出土遺物(中国製陶磁器・炭化米塊)
(2)出土遺物(銭貨・銅製品)
図版第46　(1)出土遺物(鉄製品)
(2)出土遺物(鉄製品)
図版第47　(1)出土遺物(鉄製品)
(2)出土遺物(石製品)
図版第48　出土遺物(弥生土器)

２．新名神高速道路整備事業関係遺跡

(１)保安塚

図版第１　１区塚全景(北から)
図版第２　(1)調査地遠景(西から、空撮写真)　白川道が宇治田原盆地へ延びる
(2)１区調査区全景(北から)
図版第３　(1)１区調査着手前状況(北から)
(2)１区調査着手前状況(北東から)
(3)１区調査作業状況(東から)
図版第４　(1)１区塚調査状況(北から)
(2)１区塚調査状況(北東から)
(3)１区塚南畦断面(東から)
図版第５　(1)１区塚東半部の状況(東から)
(2)１区塚テラス部の状況(北西から)
(3)１区塚西半部の状況(西から)
図版第６　(1)１区塚北畦断面(北西から)
(2)１区塚頂部断割断面(南西から)
(3)１区盛土下確認状況(北から)
図版第７　(1)２区完掘状況(南西から)
(2)２区頂部の状況(北西から)
(3)２区斜面部の状況(南から)

図版第８　(1)土師器皿３・４出土状況(西から)
(2)土師器皿５出土状況(西から)
(3)土師器皿６出土状況(北から)
(4)土師器皿10出土状況(南から)
(5)土師器皿12出土状況(東から)
(6)土師器皿14・18出土状況(東から)
(7)寛永通宝28出土状況(東から)
(8)鉄銭29出土状況(南から)

(２)長井野塚

図版第９　長井野塚遠景(南西から)写真左奥がトンネル区間入り口
図版第10　(1)１区調査着手前状況(南西から)
(2)２区調査着手前状況(北東から)
(3)３区調査着手前状況(南東から)
図版第11　(1)１区完掘状況(南西から)
(2)１区完掘状況(北東から)
(3)１区畦設置状況(西から)
図版第12　(1)２区完掘状況(南西から)
(2)２区完掘状況(北東から)
(3)２区畦設置状況(南西から)
図版第13　(1)３区完掘状況(北東から)
(2)３区完掘状況(南西から)
(3)３区南壁(北西から)
図版第14　(1)４区調査着手前状況(南西から)
(2)４区完掘状況(東から)
(3)４区完掘状況(南から)

(３)岨田遺跡第1・2次

図版第15　(1)１～９区調査区設置状況(南西から)
(2)１～９区調査状況(北東から)
(3)２区完掘状況(東から)
図版第16　(1)３区完掘状況(東から)
(2)４区完掘状況(東から)
(3)５区完掘状況(東から)
図版第17　(1)６区完掘状況(東から)
(2)７区上層(西から)
(3)７区完掘状況(東から)

図版第18　(1) 10区完掘状況(西から)
(2) 11区完掘状況(西から)
(3) 12区完掘状況(西から)
図版第19　(1) 13区完掘状況(西から)
(2) 14区完掘状況(南西から)
(3) 15区完掘状況(西から)
図版第20　(1) 16区完掘状況(南から)
(2) 17区完掘状況(北西から)
(3) 17区完掘状況(南東から)
図版第21　(1) 18区完掘状況(東から)
(2) 19区完掘状況(南東から)
(3) 19区南壁(北東から)
図版第22　(1) 20区完掘状況(北東から)
(2) 20区完掘状況(北から)
(3) 21区完掘状況(南西から)
(4)砂川古墳
図版第23　(1)調査着手前状況(北から)
(2)調査着手前状況(西から)
図版第24　(1)砂川古墳上半部土層断面(南から)
(2)下半部東西土層断面(北から)
(3)旧表土層からの遺物出土状況(北から)
図版第25　(1)炭窯SY01検出状況(南から)
(2)炭窯SY01完掘状況(西から)
(3)炭窯SY01完掘状況(南西から)
図版第26　(1)炭窯SY01燃焼室と焼成室の境細部(南東から)
(2)炭窯SY01焼成室土層断面(西から)
(3)炭窯SY01燃焼室土層断面(西から)
(5)奥城土遺跡
図版第27　(1)調査地遠景(南東から)
(2)調査地遠景(北から)
図版第28　(1) 1 区完掘状況(南から)
(2) 1 区完掘状況(北西から)
(3) 1 区調査区東壁断面(南西から)
図版第29　(1) 2 区完掘状況(南から)
(2) 2 区完掘状況(北から)

(3) ２区調査区東壁(南西から)
図版第30　(1) ３区完掘状況(南から)
(2) ３区完掘状況(北東から)
(3) ２区調査区東壁(南西から)
（６）禅定寺城跡第３次
図版第31　(1)調査前全景(北から)
(2)調査前全景(北東から)
(3) １トレンチ全景(南東から)
図版第32　(1) ２トレンチ全景(南西から)
(2) ３トレンチ全景(南東から)
(3) ４トレンチ全景(北西から)
図版第33　(1) ５・６トレンチ全景(北から)
(2) ５トレンチ全景(南から)
(3) ６トレンチ全景(北から)
図版第34　(1) ７トレンチ全景(南から)
(2) ８トレンチ全景(西から)
(3) ９トレンチ北部断ち割り状況(南から)
図版第35　(1) ９トレンチ検出石垣全景(南西から)
(2)10トレンチ全景(北から)
(3)11トレンチ全景(南から)
図版第36　(1)12トレンチ全景(南西から)
(2)14トレンチ全景(北東から)
(3)作業状況

図版第37　保安塚出土遺物
図版第38　(1)岨田遺跡出土遺物１(凹面・内面)
(2)岨田遺跡出土遺物１(凸面・外面)
図版第39　(1)岨田遺跡出土遺物２(凹面)
(2)岨田遺跡出土遺物２(凸面)
図版第40　長井野塚、砂川古墳出土遺物

１．満願寺跡第２次発掘調査報告

１．はじめに

今回の発掘調査は、万願寺川支渓通常砂防（防災安全補正）事業に伴い、京都府中丹東土木事務所の依頼を受けて実施した。

調査対象地は、現在の満願寺から北東に位置する谷部に所在している。当該地は山からの土砂の流入が著しく、土砂が民家へ迫るような状況にあったため、砂防堰堤の建設が計画された。本調査は砂防堰堤建設に伴う発掘調査である。満願寺跡の発掘調査は、これまでに京都府教育委員会が行った試掘調査以外になく、その詳細は不明であり、本格的な発掘調査は本調査が初めてである。

調査にあたっては、京都府教育委員会、舞鶴市をはじめ、各関係機関にご協力を得た。記して感謝したい。

なお、調査に係る経費は、すべて京都府中丹東土木事務所が負担した。

（竹村亮仁）

〔調査体制等〕

平成30年度

現地調査責任者　調査課長　小池　寛

現地調査担当者　調査課課長補佐兼調査第１係長　細川康晴

同　第２係調査員　面　将道

調　査　場　所　舞鶴市万願寺地内

調　査　期　間　平成31年２月４日～３月22日

調　査　面　積　2,500㎡

令和元年度

現地調査責任者　調査課長　小池　寛

現地調査担当者　調査課課長補佐兼調査第３係長　中川和哉

同　第２係調査員　竹村亮仁

調　査　場　所　舞鶴市万願寺地内

調　査　期　間　令和元年７月２日～令和２年２月４日

調　査　面　積　1,100㎡

〔整理作業体制等〕

令和２年度

現地調査責任者　調査課長　小池　寛

現地調査担当者　調査課参事調査第３係長事務取扱　中川和哉

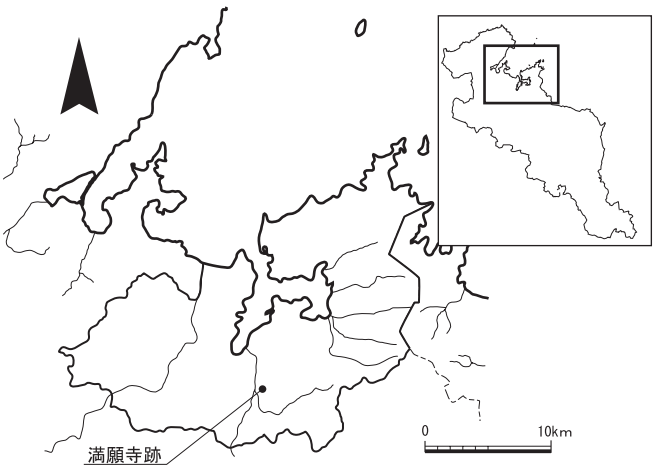
同　第３係　主　任　竹村亮仁

整　理　期　間　令和２年８月３日～令和３年３月31日

２．地理的・歴史的環境

１）地理的環境

舞鶴市は、京都府北部に位置し、日本海に面した都市である。北は若狭湾、東は福井県、南は綾部市・福知山市、西は宮津市に接している。



第１図　舞鶴市位置図

市域は、大きく５つに分かれており、田辺藩の城下町・商港から発展した西地区と海軍の軍港から発展した東地区の両地区が特徴的な市街地を形成している。この２地区を囲むように中地区、加佐地区、大浦地区が存在する。舞鶴湾は、宮津湾や敦賀湾、小浜湾などとともに、若狭湾の支湾であり、沿岸域には海岸平野がほとんど認められず、埋没した谷の上に低地が形成され、沿岸域の多くで山脚が直接海に没している。舞鶴湾には大河川が注いでおらず、安定した湾であることから、古くから良湾として機能していたと考えられている。(注1)



第２図　地形分類図

地質的には、舞鶴市は「舞鶴帯」と呼ばれる構造帯の北東端にあたる。舞鶴帯は、福井県西部から広島県にかけての地域を占める。舞鶴市は、その中でも古生代に堆積した「舞鶴層群」と呼ばれる黒色泥岩及び砂岩、暗色石灰岩で形成されている。満願寺跡は、弥仙山から続く丘陵に属しており、舞鶴層群砂岩帯上に位置している(注2)（第２図）。

２）歴史的環境

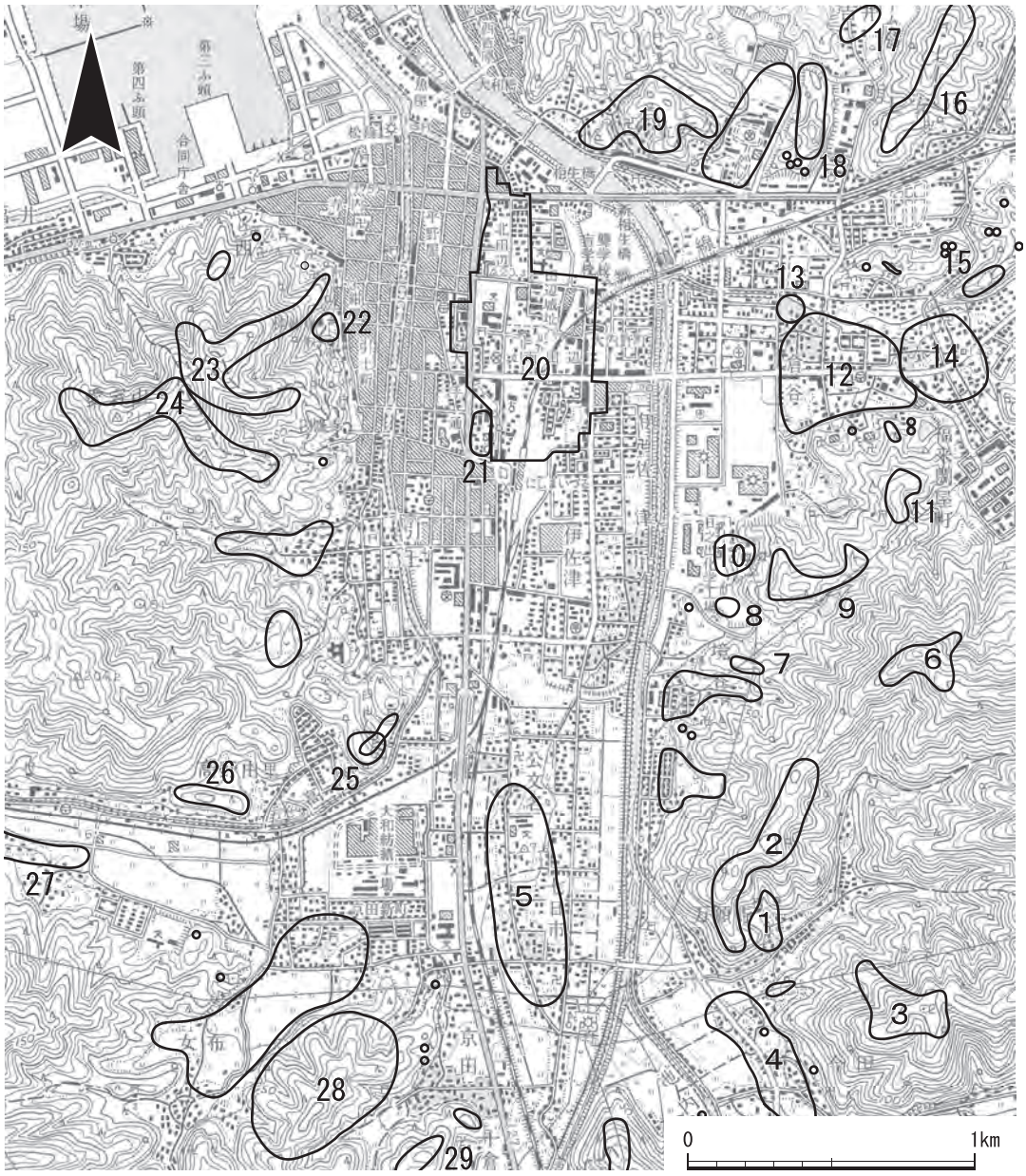
舞鶴市では縄文時代草創期の尖頭器が河川工事中に出土しているが、旧石器時代の様相は不明である。縄文時代になると、由良川や伊佐津川の周辺、大浦半島で集落跡が確認されている。大浦半島の浦入遺跡では、早期から前期初頭の遺物が層位的に確認されたほか、前期においては隠岐や北陸の石材も用いた製品や長大な丸木舟が出土していることなどから広範囲の交流が行われていたことを示す遺跡である。由良川沿岸域の志高遺跡では、早期から前期末にかけての遺構群が良好な土器群とともに出土し、同じく桑飼下遺跡では後期の炉跡などがみつかっている。舞鶴湾奥地区での縄文時代の遺跡の詳細は明らかではない。

弥生時代には、志高遺跡で前期の土器が出土しているほか、中期には竪穴建物群や方形周溝墓群と貼石墓群、船着き場と推定される堤状遺構が確認されている。舞鶴湾口では前述の浦入遺跡で後期の竪穴建物が検出されている。西舞鶴地区では、菖蒲谷遺跡、女布遺跡、行永遺跡などが知られているが､行永遺跡でみつかった中期後半の竪穴建物１基以外にその詳細は明らかでない。遺構に伴うものではないが、下安久で袈裟襷紋銅鐸２口が見つかっている。

古墳時代前期から中期の古墳は少ないが、志高遺跡など由良川沿岸では古墳時代を通じて遺物が確認されていることから、人々の生活は縄文時代から断続的に営まれている。市内には400基以上の古墳があり､横穴式石室を採用する古墳は舞鶴湾沿岸に多く分布している。前期古墳では、伊佐津川右岸に組合式石棺をもつ切山古墳が築造され、京都府北部最古の首長墓の１つと考えられている。中期の様相は明らかではなく、古墳時代後期になると、東舞鶴地域に京都府北部でも有数の後期古墳群である大波・奥原古墳群が形成される。同群の総数は78基を数え、多くは横穴式石室が簡略化される終末期古墳の様相を呈する小規模古墳で構成されている。西舞鶴地域では切山古墳が確認されているほか、無袖式の横穴式石室を採用する白杉古墳、上殿古墳や海浜部の喜多家奥古墳、三角古墳などがある。伊佐津川の両岸に万願寺古墳群・山崎古墳群・天狗岩古墳群など小規模の古墳群が数多く形成された。なお、舞鶴湾の出口に位置する千歳下遺跡では、古墳時代中期の祭祀遺構から斜縁獣帯鏡や銅釧などの青銅器をはじめ700点以上の鉄製品や鉄片類、1000点に達する玉類や石製模造品が出土した。

飛鳥・奈良時代には倉谷遺跡で竪穴建物、掘立柱建物が確認され、官衙的な様相を持つ遺跡と指摘されている(注3)。

平安時代には、浦入遺跡で多量の製塩土器が出土している。古墳時代までの浦入遺跡は、海洋性の集落として発展するが、奈良・平安時代になると製塩炉や作業場などと考えられる遺構が確認され、生産遺跡としての性格を強くする(注4)。西舞鶴地区では倉谷遺跡で多量の緑釉陶器とともに



第３図　周辺遺跡分布図

１．満願寺跡	２.万願寺城跡	３．今田城跡	４．今田遺跡	５.七日市遺跡
６．佐武ヶ嶽城跡	７．垣ノ内城跡	８．切山遺跡	９．境谷城跡	10．境谷遺跡
11．倉谷城跡	12．倉谷遺跡	13．飯田倉谷城跡	14．福来遺跡	15．福来大光寺
16．上安城跡	17．吉囲遺跡	18．上安久遺跡	19．上安久城跡	20．田辺城跡
21．円満寺遺跡	22．桂林寺遺跡	23．愛宕山北城跡	24．愛宕山城跡	25．引土城跡
26．高野由里城跡	27．高野由里遺跡	28．女布城跡	29．京田城跡	

廂をもつ掘立柱建物群を検出している。行永遺跡では、丹後型黒色土器、丹波型瓦器、貿易陶磁器などが一括資料として確認されており、12世紀中頃に位置付けられ、満願寺につながる重要な成果である。平安時代末期には、大内荘・志楽荘などが成立した。『丹後国諸荘園郷保惣田数帳』によると、市域全域で荘園や郷が成立していたと考えられる(注5)。西舞鶴は田辺荘、大内荘にあたると考えられる。『東寺百合文書』には「寄進　所領大内郷事　在丹後国管　伽佐郡内　四至　東

限丹後国何鹿郡八田上林　西限田辺郷堺子午仟佰并赤前山　南限丹波国八田郷堺三俣谷　北限余部堺方神山并倉橋郷堺（後略）。」と記載されており、田辺郷との境は検討が必要だが、満願寺跡周辺は大内荘に属していたと考えられる。大内荘は、寿永３（1184）年に平辰清から八条院女房の弁局に寄進されている[注6]。また、山の多い舞鶴市域では多くの山城が造られ、遺跡分布調査によると170か所以上確認されている。多くの城が築城されたのは、丹波と若狭の間にあたる舞鶴が戦略的な拠点として重要な地域であったからであろう。満願寺跡周辺でも万願寺城跡・今田城跡・今田下村城跡などがある。中世後期以降一色氏が治めていたが、天正８（1580）年、織田信長の命により丹後国は細川藤孝・忠興親子の所領となり、本能寺の変後に田辺城が築かれる。慶長５（1600）年の関ヶ原の戦い以降は京極氏が統治し、以後藩主がかわるものの西舞鶴地域は田辺城の城下町として栄えていく[注7]。

（山中　凌）

３）満願寺の来歴

現在の満願寺には、江戸時代に再建された十一面観世音菩薩座像を本尊とする観音堂と裏庫が残されている。その創建は弁円上人が願主とされ、鎌倉時代前期、建保年間（1213～1219）と伝わる。創建当初は七堂伽藍で、多数の僧坊などが備わった寺院とされている。その後、永禄年間（1558～1570）に焼失した。山崎神社の棟札には、慶長12（1607）年に奥之坊があったことが記されている。寛文年間には円隆寺の智恩院宥宣院主が堂宇を再興し、天和３（1617）年に開帳供養され、以後智恩院の末寺となった。昭和44（1969）年に現在の位置に移築されている。現在でも満願寺周辺には「西ノ坊」・「上ノ坊」などの地名が認められ、調査区から南西180m付近で山門の礎石と考えられる石が見つかっているなどその隆興をうかがわせるようなものが知られている。本尊である十一観世音座像の膝裏には「建保六年　建立」と墨書銘があり、満願寺の建立時期の根拠の資料でもある[注8]。

（竹村亮仁）

３．調 査 の 経 過 と 方 法

１）調査に至る経緯

本書で報告する満願寺跡は砂防堰堤建設範囲にあたり、それに伴う造成工事範囲を対象に発掘調査を実施することとなった。本事業に係る発掘調査は、平成29年度に京都府教育委員会により試掘調査（第１次調査）が行われた。対象地の谷部に４か所の調査区を設定し、試掘調査を行っている。結果、遺構は確認されなかったが、土師器や貿易陶磁器、炭化物層などが確認された。出土した土師器は13世紀前半頃のもので、創建期とされる時期と一致している。また、貿易陶磁器は椀や皿などの供膳具ではなく、壺類が出土している。出土遺物は炭化物層から出土したが、その性格を判断することはできなかった。しかしながら、創建期頃の遺物と炭化物層を確認し、対象地内に満願寺の遺構が展開する可能性が指摘された(注9)。このことを受け、平成30年度には砂防堰堤建設に伴う対象地内の樹木伐採、調査前地形測量を当調査研究センターが行った。続いて令和元年度に当調査研究センターが発掘調査を実施した。

２）調査の経過

１トレンチの調査経過　調査は令和元年７月23日に開始した。まず、重機で表土や堆積土の除去を行った後、人力による精査を実施した。その結果、礎石建物４棟、石組み溝１条などを検出した。11月２日に現地説明会を行い、その後、空中写真撮影を11月21日に行った。また、トレンチの東西に谷裾部近くまで、遺構の広がりを確認したことから、12月21日に２トレンチの掘削と合わせて重機により東西を拡張し、表土や堆積土の除去を行った後、人力による精査を実施した。

２トレンチの調査経過　１トレンチの排土置き場として使用していたため、まず、排土の移動を行った。排土移動については中丹東土木事務所の協力を得て、12月９日より開始した。その後、12月16日より重機により表土や堆積土の除去を行った後、人力による精査を実施した。その結果、石材を多く検出したが、建物などを構成していないものと判断した。また南部では、素掘り溝を１条確認した。土層断面の観察から、江戸時代の畑に伴う耕作溝と考えられる。

なお、11月２日の現地説明会は、晴天にも恵まれ、93名の参加があった。

３）調査の方法

（１）調査の方法

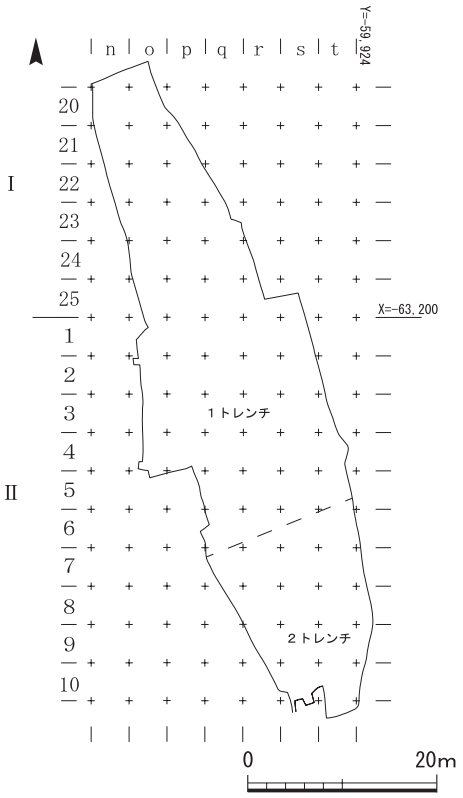
調査にあたっては、調査区を２か所（１、２トレンチ）設定し、国土座標にもとづく地区割を設定した。

調査開始にあたっては、まず、調査区の設定および基準点の設置作業を行った。その後、遺構面直上まで重機で表土を除去し、さらに人力による遺物包含層の掘削、遺構面の精査作業を行い、遺構の検出に努めた。検出した遺構は、その位置を縮尺1/100の平面図に記録しながら、順次、掘削作業を行った。遺構の掘削を終えると、必要に応じて縮尺1/10ないし1/20の平面図や断面図、あるいは縮尺1/10ないし1/5の遺物出土状況図などの記録図面の作成を行った。並行して遺構や

土層断面などの記録写真の撮影を行った。遺構面全体の調査終了の後、全景写真を撮影した。さらに必要に応じて空中写真とそれによる図化作業を実施した。

（２）地区割の設定

出土遺物の位置などを記録する目的で、対象地全域を覆う地区割を国土座標（世界測地系）にもとづいて設定した。対象地全域には100ｍ四方の大地区を２つ設定した。大地区の基準は、国土座標に一致させ、Ｘ＝－63,100、Ｙ＝－60,000を起点とし、北からⅠ区、Ⅱ区とした。この大地区をさらに４ｍ四方に区画し、小地区を設定した。こちらも国土座標に一致させ、南北方向は北から１、２、３・・・・、25とし、東西方向を西からａ、ｂ、ｃ・・・・ｙとした。両者の交点をａ１、ｂ１、ｃ１などとし、地区名は北西隅の交点の名称で示す。国土座標にもとづく地区名は「Ⅱ－ｂ１区」のように表記する（第４図）。



第４図　トレンチ地区割図

（３）遺構番号の付与

検出した遺構は、調査トレンチ全域で通し番号をつけ、遺構を示す略号をつけた。遺構記号は、基本は調査時に付与したものである。なお、礎石については、遺構番号とは別に番号を付与した。

使用した略号は、礎石建物；ＳＢ、溝；ＳＤ、土坑；ＳＫ、柱穴・ピット；ＳＰ、不明遺構・その他；ＳＸである。

４）報告書作成作業

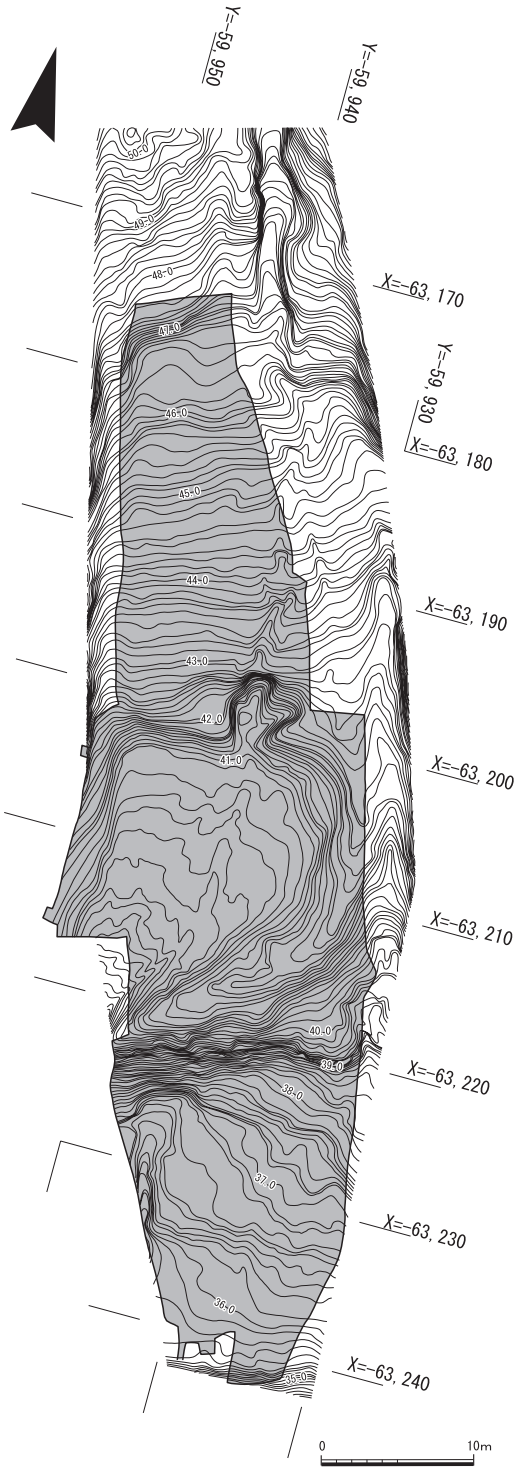
整理作業は、出土遺物の台帳登録、洗浄作業を行い、その後、注記、接合を行った。以上の作業と並行し、報告書に掲載すべき出土遺物を選別して、実測作業を行った。

本報告に伴う遺構図は、現地で作成した実測図、オルソ画像を基にそれぞれ作成した。遺構図のトレースのほか、遺物の写真撮影、本文執筆、遺物観察表の作成、出土遺物の集計などを実施した。

４．調査前の地形と基本層序

１）調査前地形測量

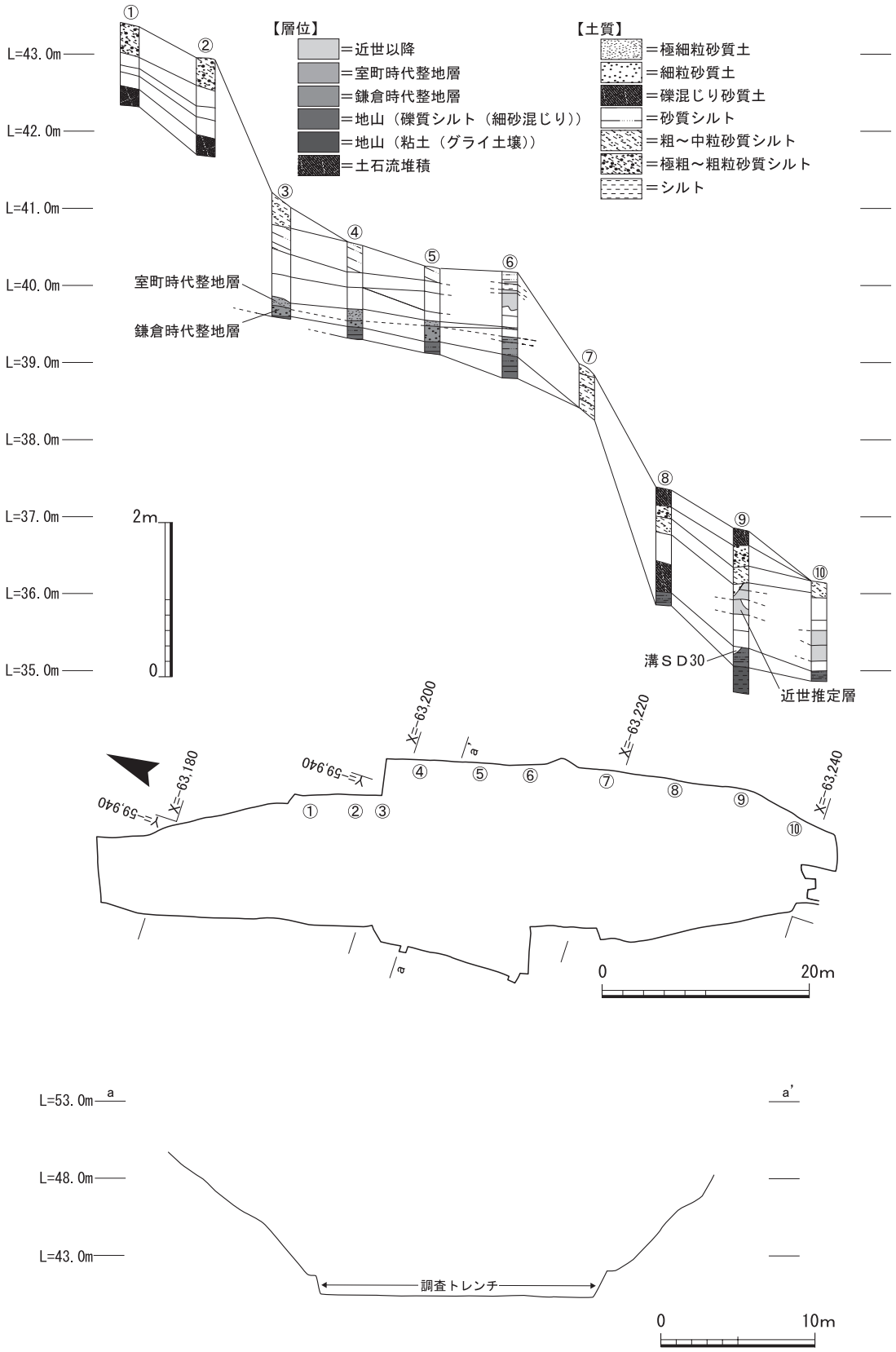
調査前に現況の地形測量を行った（第５図）。事前の測量成果からは、背後の山から流れ込む複数の自然流路や現代の造成を確認することができた。現代の造成は、山から流れ込んだ堆積土を１ｍ近く掘削し、平坦地を造成している。また、その掘削した土砂を平坦地の東から南にかけて土手状に移動させている。平成29年度の京都府教育委員会の調査ではこの土手にトレンチを設定し、現代の盛土として判断していることを地形測量図から追認することができた。土手から南は、２～３ｍ程度地形が低い状況であった。調査範囲全体を通じて、満願寺の痕跡を示すような地形の変化などは認められず、後世の削平や改変を確認できた。



第５図　調査前地形測量図

２）基本層序

満願寺跡の基本層序を第６図に示した。全体に耕作土、自然堆積土が厚く堆積し、その下層に室町時代や鎌倉時代の整地層を確認した。また、谷部の横断図を見ると、斜面が調査区横まで迫り、幅30m程度の谷の底一帯に、遺構が広がることがわかる。標高45～46m付近に認められる傾斜変換は、山塊崩壊によって形成されたと考えられる。柱状図①・②では、建物群を検出した範囲から２ｍ程度地山が高くなる。これは満願寺建立時に行われた平坦面造成に伴う切土に起因するものである。５層に分けることができ、上位３層はビニールなどが含まれることから現代の耕作土などと考えられる。下位２層は礫を多く含み、弥生時代の遺物が出土する。調査範囲内に弥生時代の遺構は確認できないことから、谷奥からの流れ込んだ堆積土中に混入したと考えられる。柱状図③・④の下位層では室町時



第６図　満願寺跡基本層序柱状図及び谷部横断面図

代、鎌倉時代の整地層が認められる。その上位層には、切土や谷斜面から流入した土砂が堆積している。整地層はおおむね極細～細粒砂が主体に堆積している。詳細な土層図は第８・９図に示した。柱状図③から⑤では、整地層上層に土砂が厚く堆積している構造に変化はない。柱状図⑥では、標高40.0m前後で現代の造成により盛られたと考えられる堆積が確認できる。柱状図③から⑤に認められる上端の傾斜は、谷地形を反映していると考えられる。柱状図⑥では、造成による堆積層は第５図の地形測量図の東に認められる舌状の起伏に現れている。柱状図⑦ではすべてが土石流と思われ、谷下に向かって流れるような堆積構造をなしている。調査の都合上、図化できなかったが、第５図で認められる土手状の起伏は、柱状図⑥で認められた造成による層が柱状図⑦の上位層として堆積していたと推定される。柱状図⑧から⑩は、土手状の起伏の下に位置する。地山を検出した標高の差が2.5m程度あることから、柱状図⑦から⑧の落ち込みは、自然地形に由来する可能性が高い。上位３層（柱状図⑧･⑨）は、現代の竹の耕作土が厚く堆積している。柱状図⑨では中位２層に畑と考えられる層位が確認できる。またその下層では、溝ＳＤ30を確認したが、出土遺物から近世以降の溝と考えられる。なお、江戸時代に書かれた地図には柱状図⑧から⑩にかけては、「屋敷地」として記載されており(注10)、柱状図⑨・⑩の地山直上層はそれに伴う造成土の可能性も考えられる。柱状図⑨では、下層確認のために地山の砂質シルト層を掘削し、その下層で、青灰白色シルトを確認した。掘削と同時に湧水が認められた。遺物などは出土していない。

５．１トレンチの調査

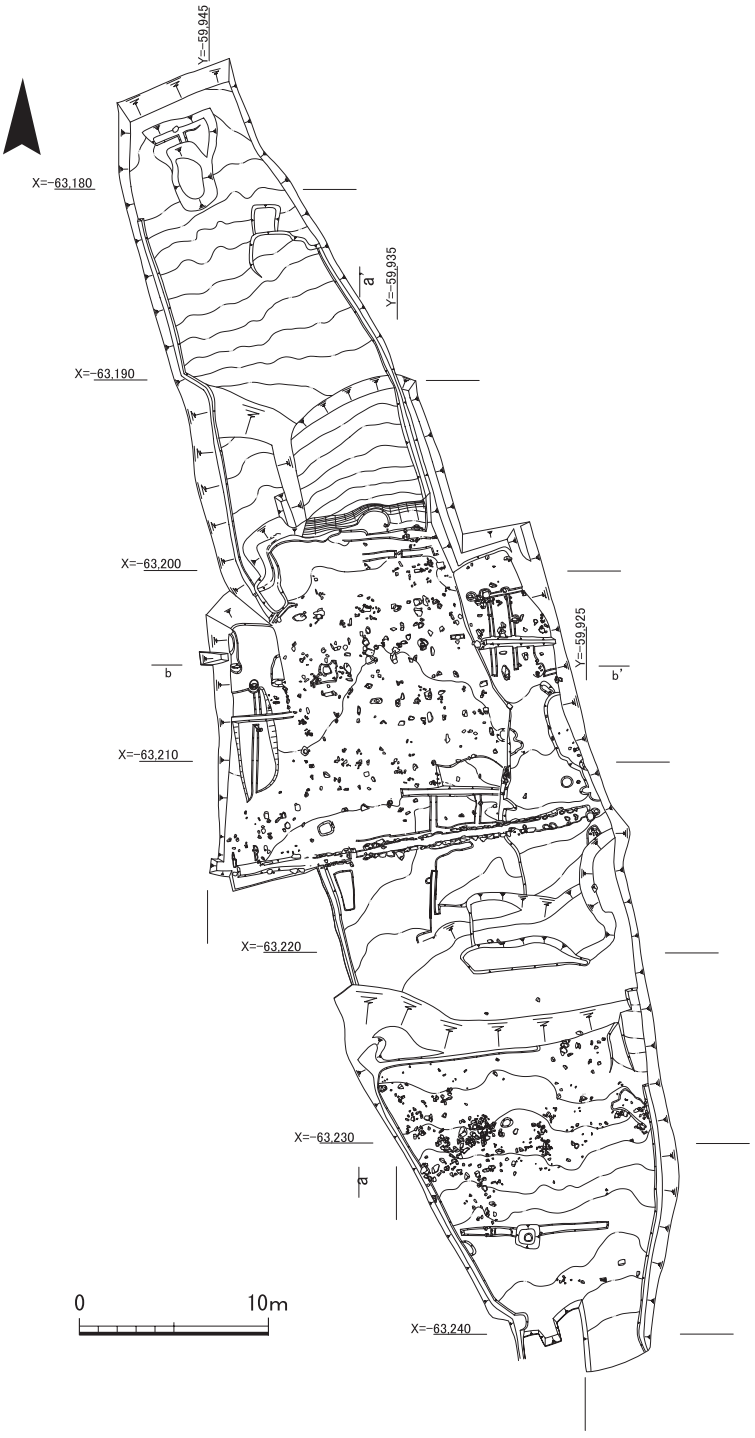
谷奥から現在の造成盛土付近に設定した調査トレンチである。谷が狭小のため、掘削土置き場確保のため、谷奥から調査を行った（第７図）。トレンチ内には平安時代後半から室町時代の建物が展開し、それに伴う整地層を確認した。当初は、谷部の地中央付近10m程度の幅で調査区を設定したが、遺構が東西に広がることが判明したため、必要範囲を拡張し、調査を行った。東西拡張区についても、合わせて１トレンチとして報告を行う。

１）層序

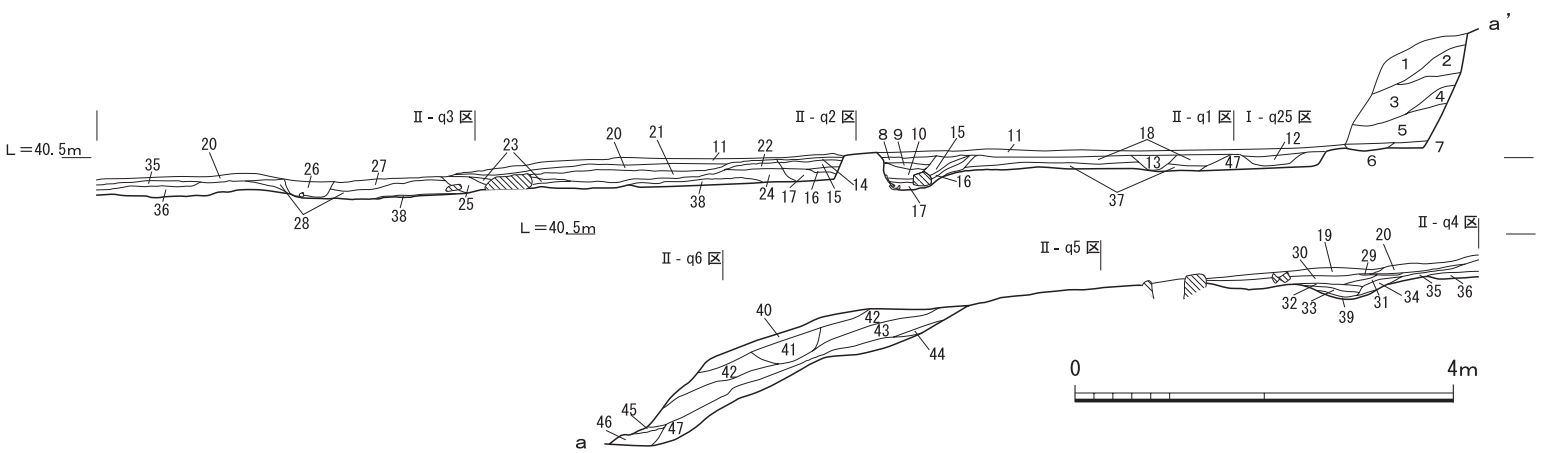
遺構確認範囲に４ｍの地区割を利用し、南北はｑ列、東西は２列に整地層の詳細観察のため畔を設定し、２つの畔はｑ２区の基準点で交差している（第８・９図）。調査区全体の土層は第６図で示したとおりである。第８図１～５層は､谷奥からの流入土である。全体の層厚は1.2mである。第９図３・５～７層は谷斜面からの流入土である。堆積は西から東への移動が認められる。７層では、泥質の中礫混じり細粒砂が無層理に堆積している。６層では、砂質シルトが均一に堆積している。５層では、正級化構造が認められる。５～７層に認められる堆積構造は、斜面部の崩壊により構築されたものと考えられる。第８図40～47層では全体として、谷下方向への流動が顕著である。42・45層は遺物、炭を包含している。その他の層には礫が多く含まれ、47層には地山の風化土が流入する。Ⅱ-ｑ６からｑ７にかけては第６図柱状図⑦から⑧にみられる地山の急傾斜地にあたり、その比高は2.5m以上を測る。また、第６図柱状図⑧の地山直上では湧水が認めら

れる。斜面地に位置することから斜面崩壊が発生し、一部遺構面、遺物包含層を巻き込みながら堆積したものと考えられる。第８図37、38、47層は地山である。37、47層は鎌倉時代以前に発生した土砂崩れによる堆積土、38層は崖錐堆積物と考えられる(注11)。38層が谷斜面部より堆積し、後に37、47層が谷奥から堆積したものと推定される。上記層位が遺構確認範囲の自然堆積層である。

室町時代整地層は第８図７・11層、第９図37層である。層厚0.1m程度で整地され、土師器や炭が混じる。土師器は小片化しており、その場に置かれたような状況ではない。また、炭化物も

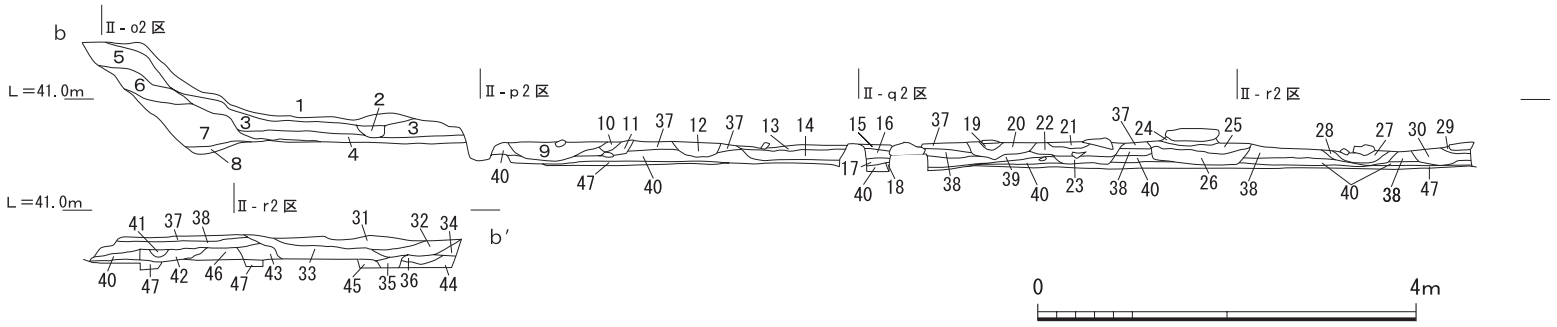


第７図　調査トレンチ全体平面図



1．明黄褐色（10YR7/6）シルト質極細粒砂質土
2．にぶい褐色（7.5YR5/3）礫質細粒砂質土　シルトごく少量が混じる
3．褐色（7.5YR4/3）シルト質細粒砂質土
4．灰褐色（7.5YR4/2）　礫質細粒砂質土
5．にぶい黄褐色（10YR5/4）　礫質粗粒砂質土
6．にぶい橙色（7.5YR7/3）　シルト質極細粒
7．黄褐色（10YR5/3）中粒砂質シルト 炭・土師器片混じる【室町時代整地層】
8．黒褐色（2.5Y2/2）極細粒砂質土 炭・土師器片混じる【ＳＫ20 最終埋土】
9．灰黄褐色（10YR4/2）細～極細粒質土 炭・土師器片混じる【ＳＫ20 埋土】
10．にぶい橙色（7.5YR5/3）細粒砂質シルト 径５cm 大の礫が 60%程度混じる【ＳＫ20 埋土】
11．黄褐色（10YR5/3）中～細粒砂質シルト 炭・土師器片混じる【室町時代整地層】
12．灰褐色（7.5YR5/2）細粒砂質シルト 炭混じる【鎌倉時代 SD18】
13．にぶい橙色（7.5YR5/3）シルト質中粒砂 下部にシルト強く堆積する
14．黒褐色（2.5Y2/2）細粒砂質シルト 炭・土師片混じる
15．暗赤褐色（５YR3/2）細粒砂質シルト 鎌倉時代地業痕跡
16．黄褐色（10YR5/3）中粒砂質シルト 鎌倉時代地業痕跡
17．にぶい橙色（7.5YR5/3）極細粒砂質土 鎌倉時代地業痕跡
18．にぶい橙色（7.5YR5/3）極粗粒砂質シルト 炭・土師器片混じる【鎌倉時代整地層】
19．明褐色（7.5YR5/8）細粒砂質シルト 径５cm 大の礫を 10%程度混じる【鎌倉時代整地層】
20．にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト質細粒砂質土　炭・土師器片混じる【鎌倉時代整地層】
21．褐色（10YR5/8）極細粒砂質シルト　極細粒砂質シルト（7.5YR8/8）がブロック状に混じる
固く締まる【鎌倉時代整地層】
22．黄褐色（10YR5/3）シルト質細粒砂質土　炭・土師器片混じる【鎌倉時代整地層】
23．黒褐色（7.5Y3/2）細粒砂質細礫　土師器片混じる【鎌倉時代整地層】
24．にぶい黄褐色（10YR5/3）細粒砂質シルト 炭・土師片混じる【鎌倉時代整地層】
25．黄橙色（10YR8/8）中粒砂質シルト　27 層がブロック状に混じる【ＳＢ22 地業痕跡】
26．浅黄色（2.5YR8/4）　シルト質細粒砂質土　炭・土師器片混じる【地業痕跡か】
27．オリーブ褐色（2.5YR4/6）　中～細粒砂質土　【ＳＢ22 整地土】
28．黄褐色（2.5YR5/3）シルト質細粒砂質土　炭・土師器片混じる
29．黄褐色（2.5YR5/6）シルト質細粒砂質土　炭・土師器片が 10% 混じる
30．暗褐色（10YR3/3）細粒砂質シルト　礫・炭・土師器片が 10%混じる
31．にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質細粒砂　炭が少量混じる
32．暗褐色（10YR3/4）細粒砂質シルト　礫・炭・土師器片が 10%混じる【ＳＤ21 埋土】
33．黄褐色（2.5YR5/3）極細粒砂質シルト　礫・炭・土師器片がごく少量混じる【ＳＤ21 埋土】
34．暗褐色（10YR3/3）中～細粒砂質シルト　土師器片少量混じる【ＳＤ21 埋土】
35．褐色（10YR4/6）極細粒砂質土 土師器片少量混じる
36．暗褐色（10YR3/3）シルト質中粒砂質土 【ＳＢ22 整地土】
37．黒褐色（7.5YR3/2）シルト質中粒砂質土【地山】
38．褐色（7.5YR4/4）シルト質極細粒砂【地山】
39．にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト質細粒砂質土 径１ｃｍ大の礫 40%混じる【地山】
40．明黄褐色（2.5Y7/6）粗粒砂質シルト　径５ｃｍ礫混じる　谷下への流動が顕著
41．オリーブ褐色（2.5Y4/3）細粒砂質極粗粒砂質土　南側に２cm 大の礫が多く堆積している
42．オリーブ色（５Y6/6）中粒砂質シルト 炭化物・遺物を包含する
43．黄褐色（2.5Y5/6）極細粒砂質シルト　谷下への流動が顕著
44．暗褐色（10YR3/4）シルト質中粒砂質土　若干粘性　地下水の影響か
45．黒褐色（2.5Y3/2）極再細粒砂質シルト 炭を多く包含する
46．黄色（2.5Y8/6）　シルト質粗粒質土
47．黄色（2.5Y7/8）　中粒砂質シルト　風化土がブロック状に混じる
地山が崩壊し、流入したものと考えられる

第８図　１トレンチ北壁土層断面図



1．黒褐色（7.5YR3/1）中～極細粒砂質シルト　【現代の耕作土】
2．黒色（2.5Y2/1）極細粒砂質シルト　【現代の耕作溝】
3．暗灰黄色（2.5Y5/2）細礫混じり細粒砂質土　谷斜面からの流入土
4．黄褐色（2.5Y5/4）中粒中礫混じり中粒砂質土 谷奥からの流入土
5．黄褐色（10YR6/8）細礫混じり中粒砂質シルト　谷斜面からの流入土
6．明黄褐色（10YR6/8）中粒中礫混じり中粒砂質シルト　谷斜面からの流入土
7．オリーブ褐色（2.5Y6/3）中粒中礫混じり中粒砂質土　谷斜面からの流入土
8．オリーブ褐色（2.5Y4/4）中～極細粒砂質シルト　中世ＳＤ06 埋土
9．黒褐色（10YR3/1）シルト質細粒砂質土　橙色（5YR7/8）がブロック状に 30%混じる
10．黒褐色（10YR3/1）中粒砂質シルト　【地業痕跡】
11．褐色（10YR4/6）細～極細粒砂質土　【地業痕跡】
12．にぶい黄褐色（10YR4/3）細粒砂質土　炭化物・土師器片混じる　【地業痕跡】
13．南北土層断面第９層相当
14．南北土層断面第 10 層相当
15．南北土層断面第８層相当
16．南北土層断面第 14 層相当
17．南北土層断面第 15 層相当
18．黒褐色（10YR3/1）細粒砂質シルト　層中下層に炭化物が多く堆積する
19．明黄褐色（10YR7/6）中粒砂質シルト【地業痕跡】
20．明黄褐色（10YR7/6）中粒砂質土　　【地業痕跡】
21．褐色（10YR4/6）細～極細粒砂質シルト【地業痕跡】
22．暗褐色（7.5YR3/4）シルト質細粒砂質土　炭化物・土師器片混じる　【地業痕跡】
23．黒褐色（10YR3/1）細粒砂質シルト　炭化物・土師器片混じる
24．暗褐色（7.5YR3/3）細粒砂質シルト　　【地業痕跡】
25．暗赤褐色（5YR3/2）中粒中礫混じり細粒砂質土　【地業痕跡】
26．褐色（10YR4/6）シルト質細～極細粒砂質土【地業痕跡】
27．褐灰色（7.5YR6/1）中粒中礫混じり細粒砂質土　【地業痕跡】
28．にぶい褐色（7.5YR5/3）粗～細粒砂質土【地業痕跡】
29．にぶい黄褐色（10YR5/2）中～細粒砂質土【地業痕跡】
30．暗褐色（10YR3/3）極粗粒砂質細粒砂質土【地業痕跡】
31．黄褐色（2.5Y5/4）中礫混じり中粒砂質土
32．オリーブ褐色（2.5Y4/4）中粒砂質礫
33．黄褐色（10YR5/6）極細粒砂質土
34．黄褐色（10YR5/8）粗粒砂質土
35．にぶい褐色（10YR4/3）粗粒砂質土
36．明赤褐色（5YR5/8）極細粒砂質土
37．黄褐色（10YR5/8）中粒砂質シルト　【室町時代整地層】
38．暗オリーブ褐色（2.5Y2/3）細～極細粒砂質土　炭化物・土師器片混じる【鎌倉時代整地層】
39．暗褐色（10YR3/3）極粗粒砂質細粒砂質土　【鎌倉時代整地層】
40．暗褐色（7.5YR3/4）粗礫混じり細粒砂質シルト　【鎌倉時代整地層】
41．にぶい黄褐色（10YR5/4）極細粒砂質土
42．橙色（5YR6/8）細粒砂質シルト
43．オリーブ褐色（2.5Y4/6）シルト質中粒砂質土
44．オリーブ褐色（2.5Y5/6）礫質極粗粒砂質土
45．橙色（7.5YR6/5）細粒砂質極粗粒砂質土
46．褐色（10YR4/6）礫質極細粒砂質土
47．黄褐色（10YR5/6）細粒砂質極粗粒砂質土

第９図　１トレンチ東西土層断面図

細かく、全体に混じりこむ。鎌倉時代の整地層は第８図18・20～24・27・28・36層、第９図38～40層と推定する。層厚0.2m程度である。18層では、極粗砂質シルトである。整地層はさほど締まりがない。ほぼ同一レベルでそろう、第８・９図20、27層、第９図38・39層では砂質土が主体の堆積構造をなす。21層ではシルトが主体となり、ブロック状のシルトを含む。この層は周辺に比べ、固く締まる。第８図24・36層・第９図40層では、堆積土の主体がシルトになる。土師器や炭の包含量は若干多くなり、陶磁器を包含する。

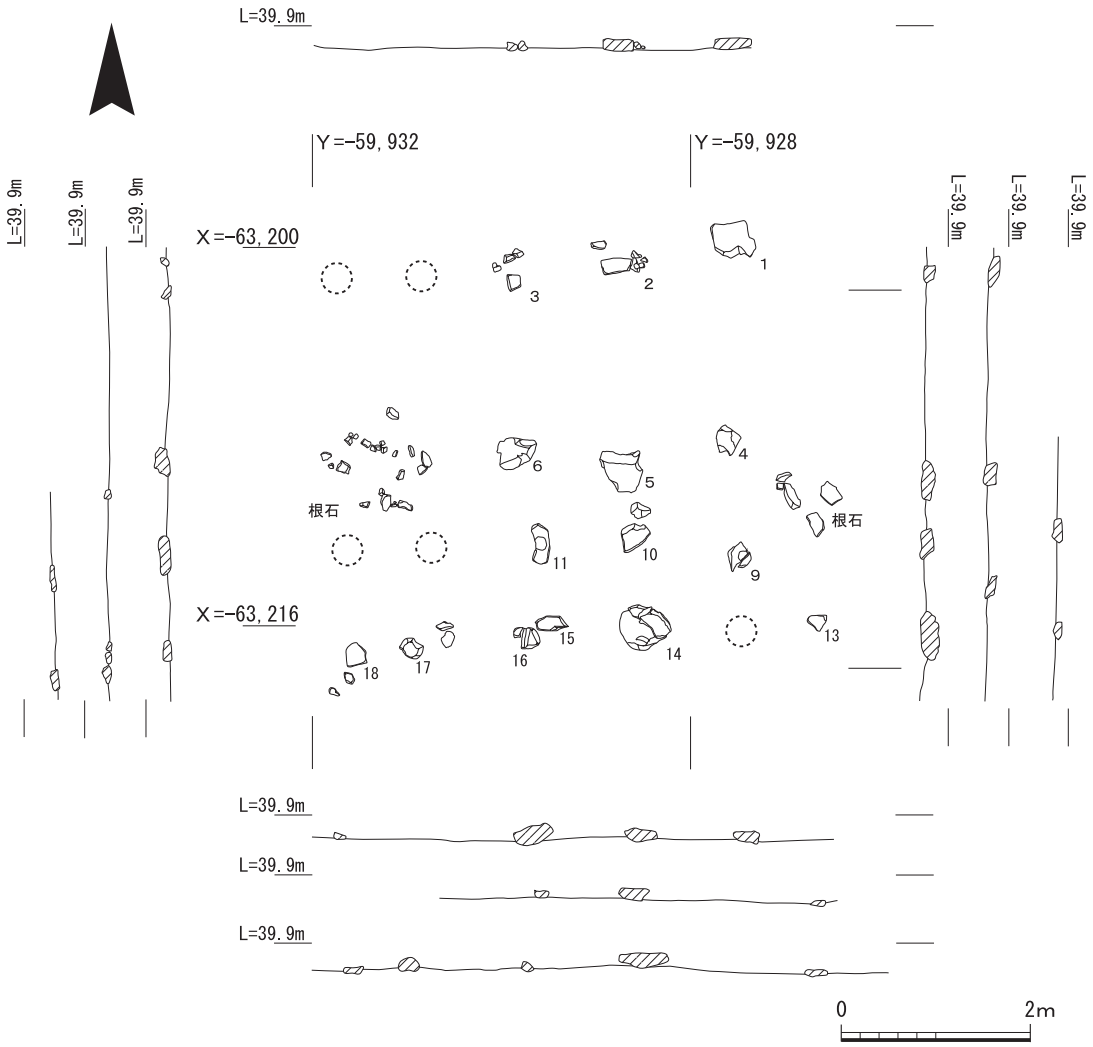
２）検出遺構

（１）室町時代

礎石建物ＳＢ02（第11図）　調査地中央、若干東よりで検出した礎石建物である。東拡張区には展開しない。原位置を保っていないものも認められるが、14個の礎石が残存している。また、礎石そのものは失われているが、根石と思われる礫が残存している。礎石および根石から、その規模は南北４ｍ、東西５ｍの建物と考えられる。礎石の間隔は約0.9mであり、３尺（１尺＝30.3cm）間隔で配されている。礎石の大きさは一定ではなく、柱、束柱の区別は困難である。礎石は標高約38.8mで高さをそろえている。礎石１から礎石４、礎石２から礎石５などのように建



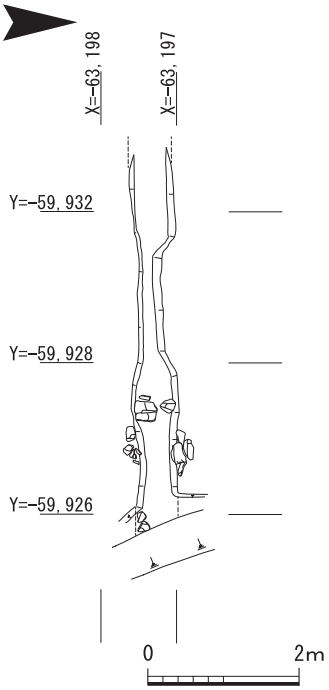
第10図　遺構配置図（室町時代）



第11図　礎石建物ＳＢ02平面図及び断面図

物北側の礎石の間隔が、約1.8mと広くなっていることから、内陣のような施設を推定することができる。調査区内を横断する土層断面の観察の結果、礎石を据えるための地業痕跡を確認することができた(第９図第24～26層など)。礎石13～18では地業痕跡を確認することができた。これらの状況からすべての礎石に地業痕跡があったものと考えられる。礎石14～18では礎石と接する部分に粘性の強いシルトが認められる。これは礎石を固定するために計画的に敷かれたものと考えられる。また、礎石13の地業痕跡ではシルトではなく礫が認められることから、礫による根固めを行っていたものと考えられる。礎石15・16と17・18は重複しており、礎石15・16の地業を行った後、礎石17・18の設置作業を行ったようである。

溝ＳＤ13(第12図)　礎石建物ＳＢ02から北に約２ｍに位置する素掘り溝である。規模は、検出長4.6m、幅0.3m、深さ0.1ｍを測る。東西延長部は、後世の谷斜面の崩落により、削られているものと考えられる。南東側で一部石材が配列されているようにも見えることから、石組みの溝であった可能性も考えられる。埋土の堆積状況だが、第８図６層がＳＤ13の埋土に相当する。溝



第12図　溝ＳＤ13平面図

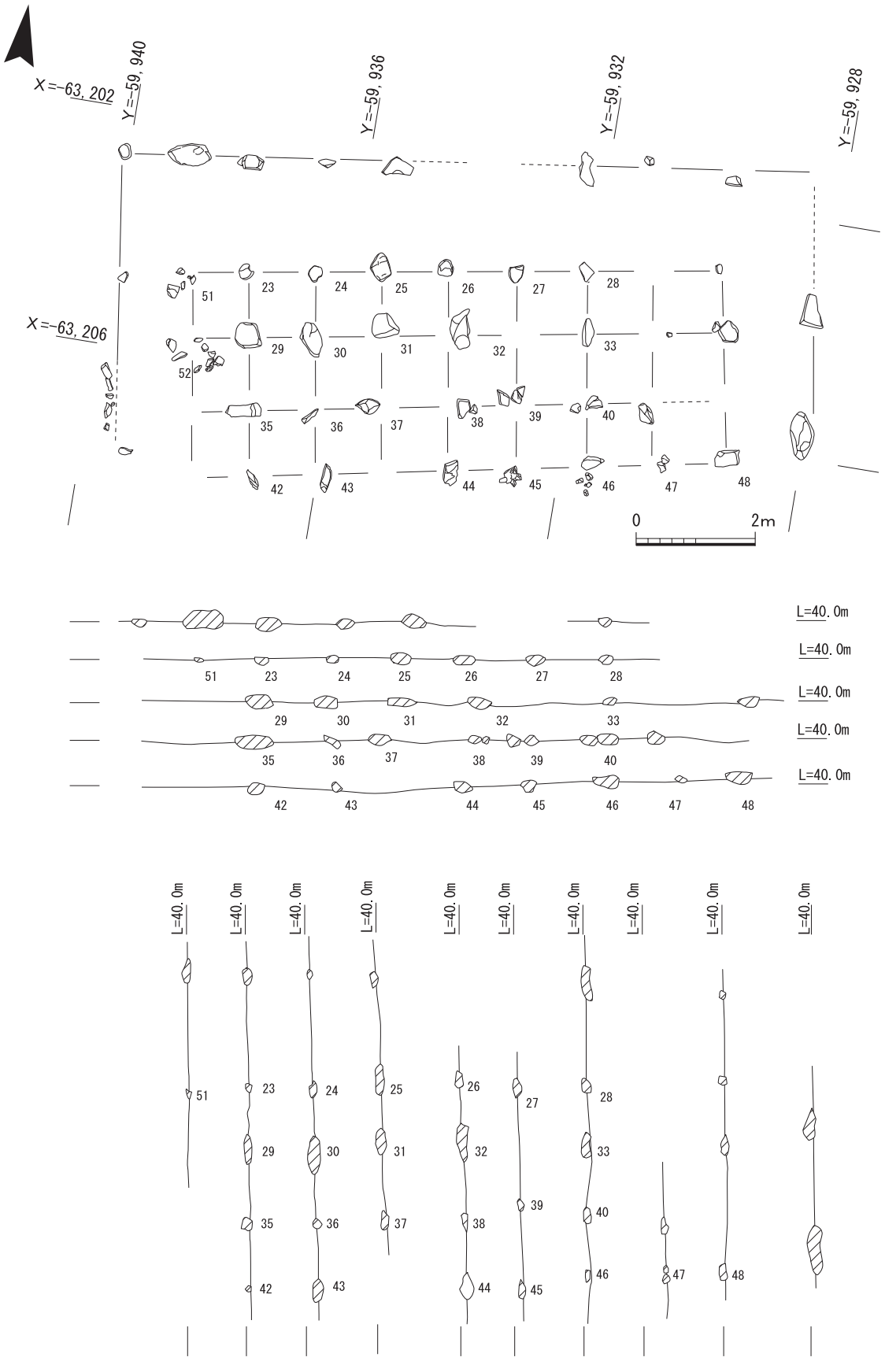
中にはシルト質極細粒砂が堆積している。上層には谷奥からの流入土が厚く堆積し、南北向きの斜め方向の堆積構造が確認できる。また、溝の断面構造に葉理は確認できないことから、溝の機能時に堆積したものではないと考えられ、山側の排水溝としての機能が失われてから同図５層が堆積するまでの一定期間溝は開口しており、細かな土が徐々に堆積することで埋没したものと考えられる。

（２）鎌倉時代

礎石建物ＳＢ15（第14図）　調査地中央で検出した礎石建物である。南北３ｍ以上、東西９ｍの建物に復元することができる。建物を構成すると考えられる礎石・根石は40石確認した。23～52の礎石群が建物の中心部を構成し、周囲の11石により、内陣のような施設が伴うものと推定する。礎石23～51は約1.1ｍ間隔で配されており、３尺より10cm程度広くなる。礎石間に差異は認められない。礎石の大きさでは、礎石29～32が他の石材より大きいことから、重量のあるものを支えていたと考えられる。その他の石



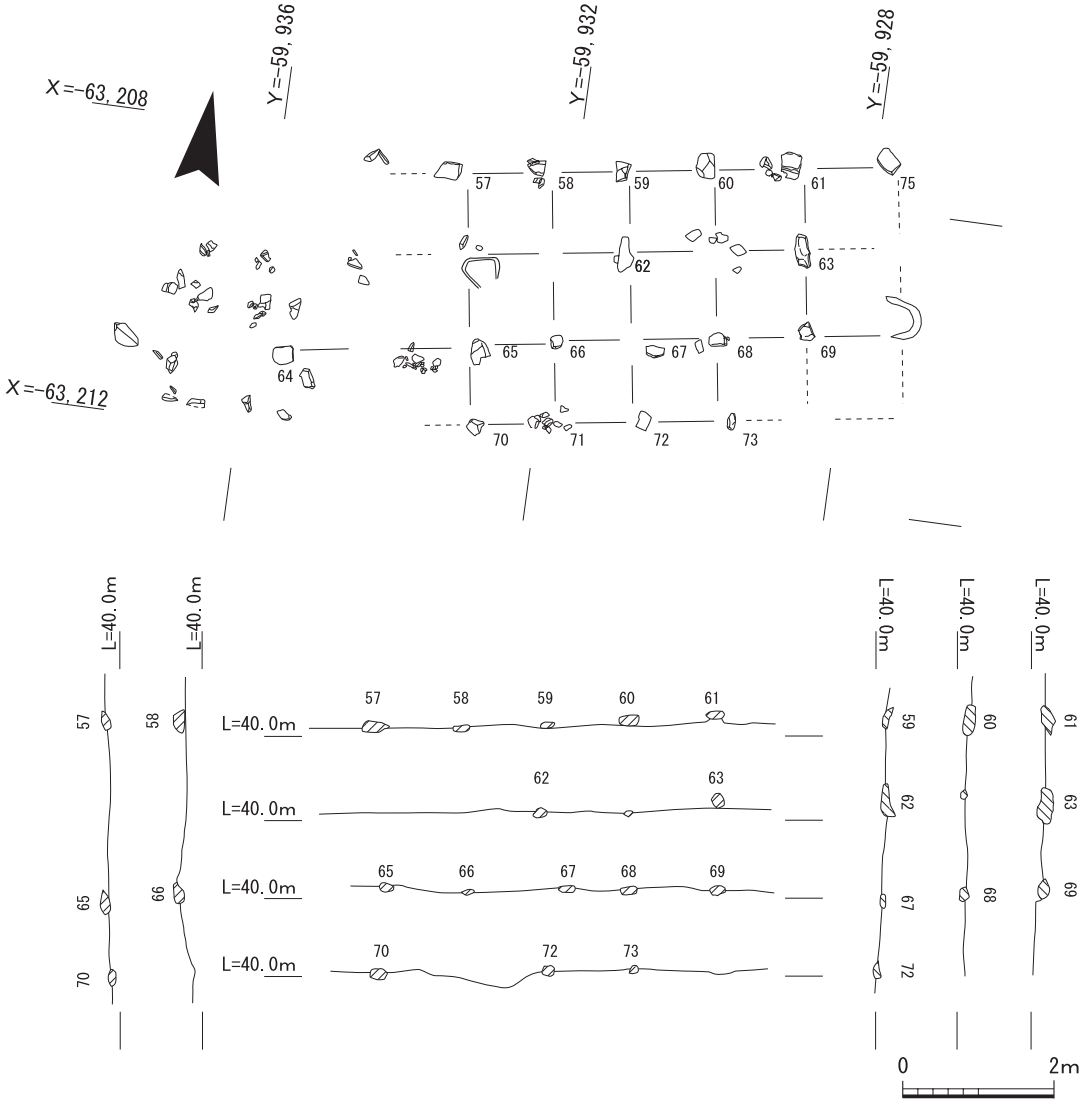
第13図　遺構配置図（鎌倉時代）



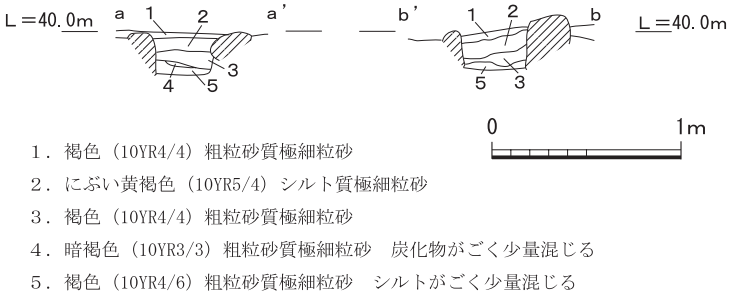
第14図　礎石建物ＳＢ15平面図及び断面図

材はさほど大きくないことから、床などの構造物を支えていたものであろう。礎石の上面は標高40.1～40.6mを測る。北側の礎石列に向かい、上端の高さは高くなる傾向にある。第８図の土層断面の観察から、整地層、地業痕跡を確認した。整地層は第８図18～21層、第９図38～40層である。整地土中には、細片化した土師器や炭火物などが混じる。厚さは0.1～0.2mを測る。整地は切土部から石組み溝までの範囲で認められる。整地後の地業痕跡の埋土は、整地土とさほど変わりのない土であり、平面的に視認することが困難であった。そのため、土層断面で確認することしかできなかった。

礎石建物ＳＢ03（第15図）　礎石建物ＳＢ15の南約１ｍで確認した東西方向の礎石建物である。南北６ｍ以上、東西3.4m以上の規模になると考えられる。建物を構成すると考えられる礎石・根石は17石確認した。落ち込み状の地形変化が２か所認められ、その位置から礎石が据え付けられていたものと考えらる。礎石は約1.1mの間隔で据えられており、ＳＢ15と同一規格で作られ

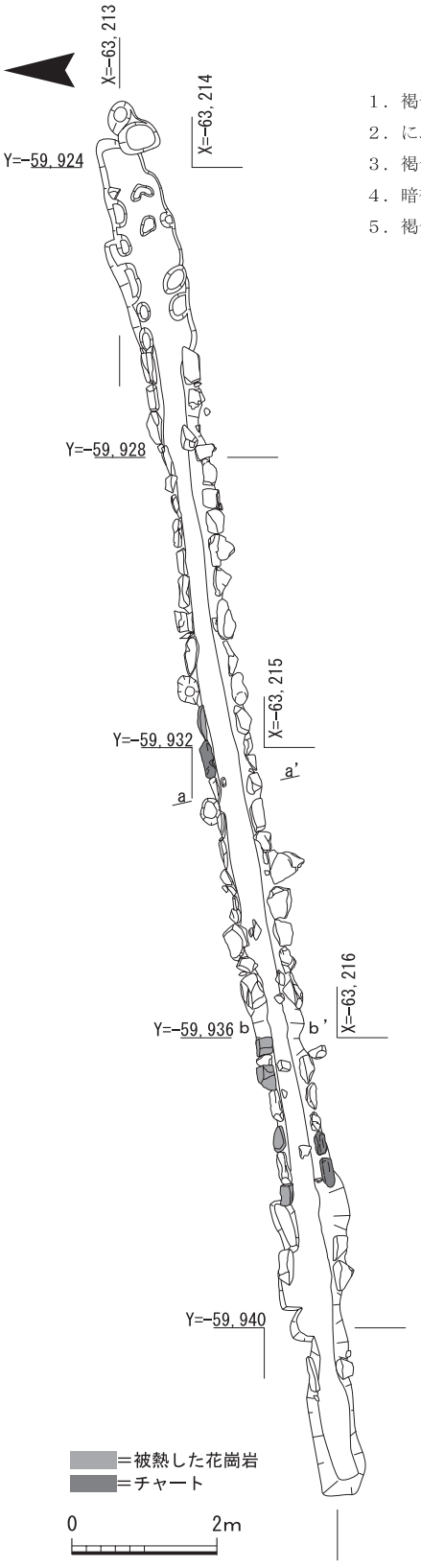


第15図　礎石建物ＳＢ03平面図及び断面図



１．褐色（10YR4/4）粗粒砂質極細粒砂
２．にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト質極細粒砂
３．褐色（10YR4/4）粗粒砂質極細粒砂
４．暗褐色（10YR3/3）粗粒砂質極細粒砂　炭化物がごく少量混じる
５．褐色（10YR4/6）粗粒砂質極細粒砂　シルトがごく少量混じる

第17図　石組み溝ＳＤ01断面図

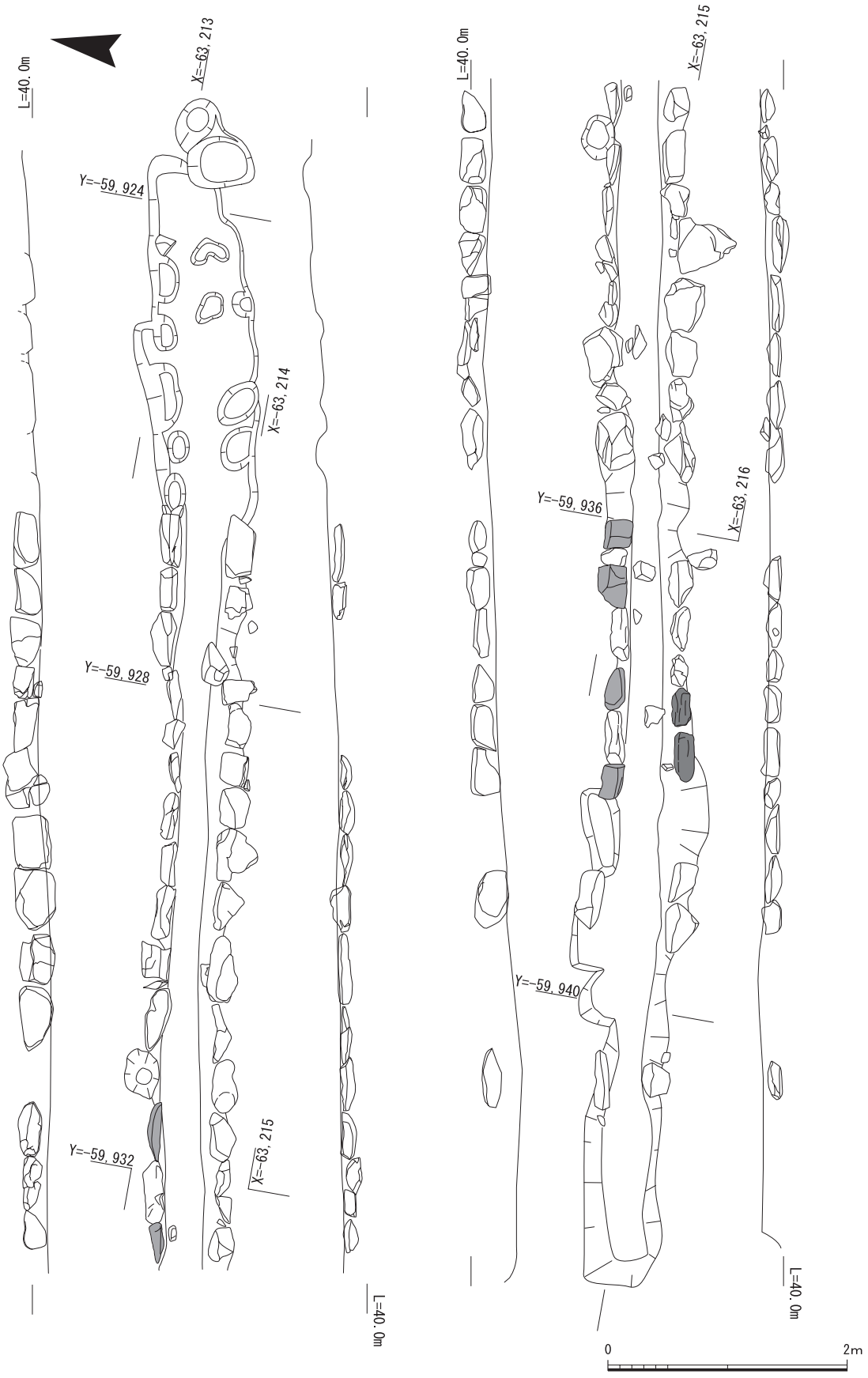


第16図　石組み溝ＳＤ01平面図

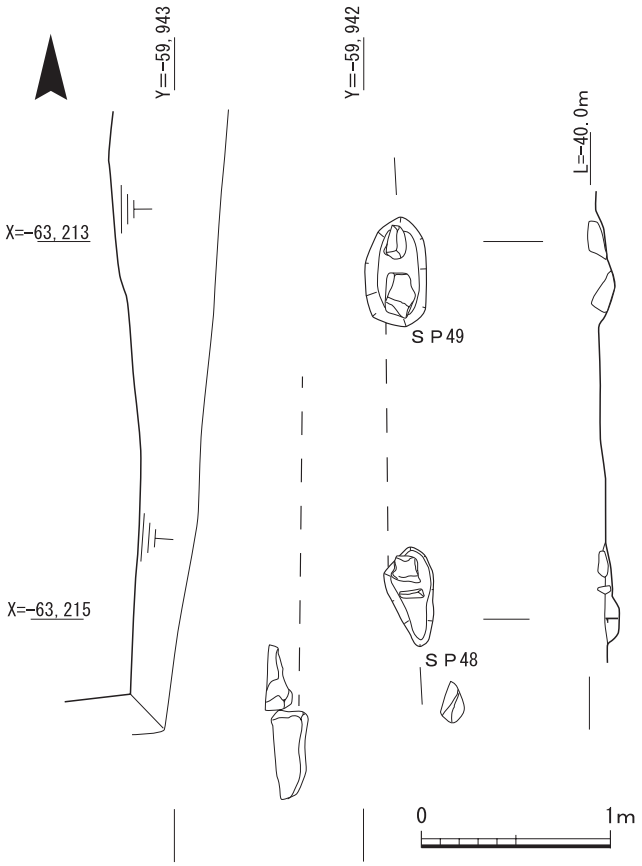
ていると考えられる。礎石は、一辺0.3～0.5ｍの石材が使用され､大きさや形状に差異は認められない。礎石の上端は標高40.2ｍを測り、ＳＢ15のような高低差は認められない。整地土は第８図の土層断面の観察から、整地層22・24層と考えられる。整地土中には、細片化した土師器や炭火物などが混じる。厚さは0.1～0.2ｍを測る。石材の規模からＳＢ15と区別して復元を行ったが、第８図21層が内陣部の上がりとも考えられ、１棟にまとまる可能性も残る。

石組み溝ＳＤ01（第16～18図）　トレンチ南部で検出した東西方向の溝である。長さ19ｍ、幅3.3ｍを測る。溝は西から東に向け、若干の傾斜を持つ。西側では、溝の南北方向の溝の残欠を確認し、溝同士接続していることが確認できた。東側では南北方向の溝は近世以降の攪乱により確認できなかった。石材は68石が残存している。石材が消失している箇所でも、据え付け穴と考えられる痕跡が認められることから、19ｍにわたって石組みが構築されていると考えられる。多くは花崗岩を使用しており、一部チャートも含まれている。また、石材には熱を受けた痕跡が認められるものもあり、最下層の礎石建物ＳＢ22の礎石などを転用したものも含まれると考えられる。石材の転用が認められることから、礎石建物ＳＢ03、15の再建期に浚渫されたものと考えられる。

溝ＳＤ75（第19図）　１トレンチ西拡張区で検出した南北方向の溝と考えられる痕跡である。検出規

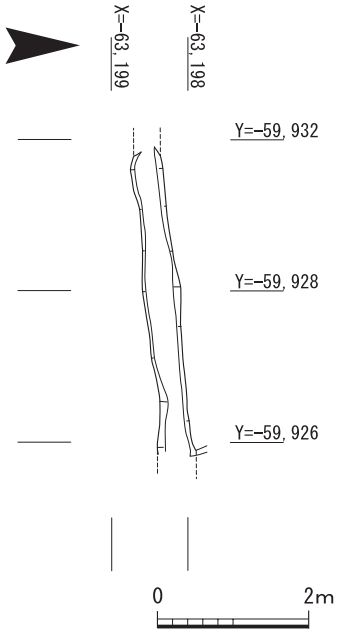


第18図　石組み溝ＳＤ01平面図及び立面図



１．褐灰色（7.5YR4/1）中粒砂質シルト　遺物炭化物含む

第19図　溝ＳＤ75平面図及び土層断面図

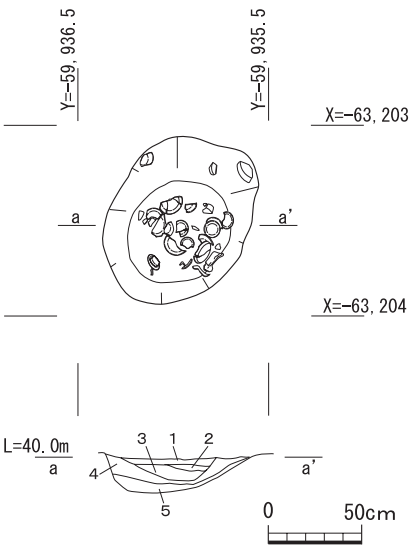


第20図　溝ＳＤ18平面図

模は東側礎石間1.7m、幅0.7mである。一部石材は残るが、後世の造成などで、若干の痕跡が残る程度である。掘形などは判然としないが、石組溝ＳＤ01の西側に接続する。礎石２か所、抜き取り痕跡SP48・49が確認できることから、本来は石組溝と考えられる。溝底部の痕跡も薄いため、明確な溝として、確認することができなかったが､検出位置や石組溝との関係から、溝の痕跡と考えられる。

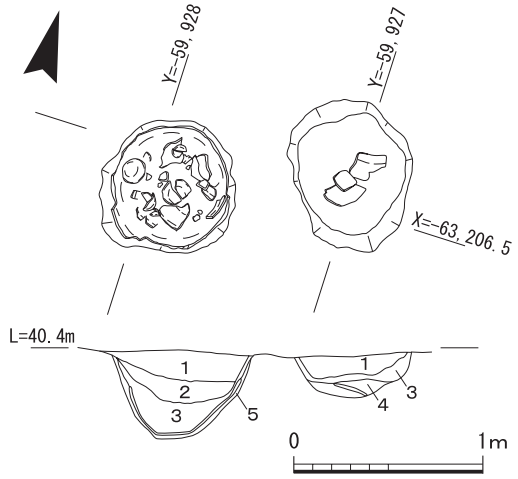
溝ＳＤ18（第20図）　室町時代の素掘り溝ＳＤ13の南、0.73mで検出した素掘り溝である。検出規模は長さ4.4m、幅0.47mを測る。第８図13層シルト質中粒砂が堆積しており、下部にシルトが堆積している。素掘り溝ＳＤ13とさほど検出位置が変わらないことから、２つの溝は谷奥から流れこんだ雨水などを排水する目的で掘削されたものと考えられる。

土坑ＳＫ20（第21図）　礎石建物ＳＢ15の礎石25と



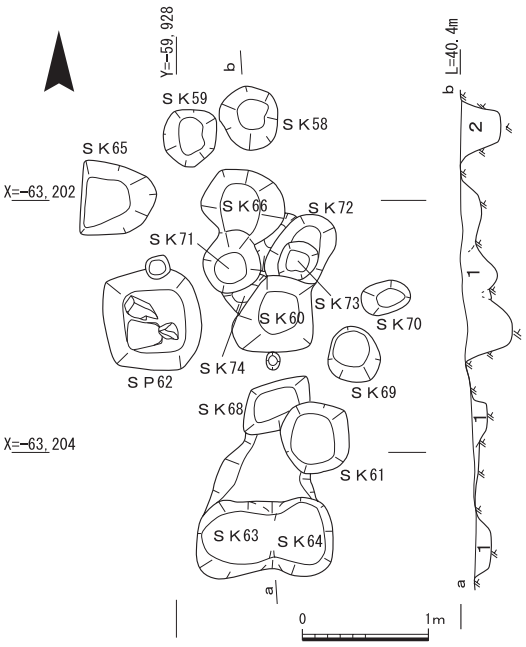
１．黒褐色（2.5Y2/2）
　極細粒砂質土 炭・土師器片混じる
２．灰黄褐色（10YR4/2）
　細～極細粒質土 炭・土師器片混じる
３．にぶい橙色（7.5YR5/3）
　細粒砂質シルト径５cm大の礫60%程混じる
４．暗赤褐色（５YR3/2）細粒砂質シルト
５．黄褐色（10YR5/3）中粒砂質シルト

第21図　土坑ＳＫ20平面図及び断面図



1．明黄褐色（2.5Y6/8）中粒砂質シルト
　炭化物が少量混じる
2．褐色（10YR4/6）極細粒砂質シルト
　遺物・炭化物混じる
3．黒色（10YR2/1）極細粒砂質シルト
　炭化物が多量に混じる
4．灰白色（2.5Y7/1）シルト　水の影響を強く受ける
5．黄褐色（10YR5/3）粗粒砂質シルト
　底部に炭化物が多量に堆積する

第22図　土坑ＳＫ50・埋甕ＳＸ51平面図及び断面図



1．礫まじり極細粒砂質中粒砂質土　遺物、炭化物少量混じる
2．極細粒砂質中粒砂質土　１層に比べ、炭化物多く混じる

第23図　柱穴ＳＰ62、土坑群ＳＫ58～61・63～74
平面図及び断面図

26の間で確認した土坑である。直径約0.8m、深さ約0.2mを測る。細～極細粒質土(第８図８・９層など)に土師器が重なるように出土している。礎石建物ＳＢ15の整地層(第８図18層)から掘られており、礎石建物ＳＢ02の整地層11層が覆っていることから、礎石建物ＳＢ15に伴う地鎮と考えられる。

土坑ＳＫ50（第22図）　東拡張区で検出した土坑である。直径0.6～0.8m、深さ0.24mを測る。掘形は南北に長い楕円形を呈している。土坑内から常滑３型式並行期の甕が出土している。最下層が水の影響を受けてグライ化していることから、本来は甕が据えられ、貯水機能を有していたものと考えられる。

埋甕ＳＸ51（第22図）　土坑ＳＫ50東側で検出した埋甕である。直径0.71m、深さ0.48mを測る。甕内埋土２、３層に口縁端部、土師器などを包含する。甕の口縁部が内側から出土したことから、整地時に残存していたものを破壊したものと考えられる。埋甕の用途としては、貯水の目的として設置されたものと考えられる。

柱穴ＳＰ62（第23図）　東拡張区で検出した据え付け穴である。平面は隅丸方形を呈している。一辺約0.76mを測る。遺構内には、３石の石材が認められる。石材は0.25m程度の規模で、完全に埋まっている状況であったため、根石の可能性が高い。

土坑群ＳＫ58～61・63～74（第23図）
東拡張区で検出した土坑群である。土坑群はⅡ－s1区の範囲に密集している。

土坑の性格は不明であるが、南にＳＸ51があることや土坑の規模から埋甕の据付穴であった可能性がある。また、周辺の炭化物の理化学分析から鎌倉時代ごろの遺構であると考えられる。

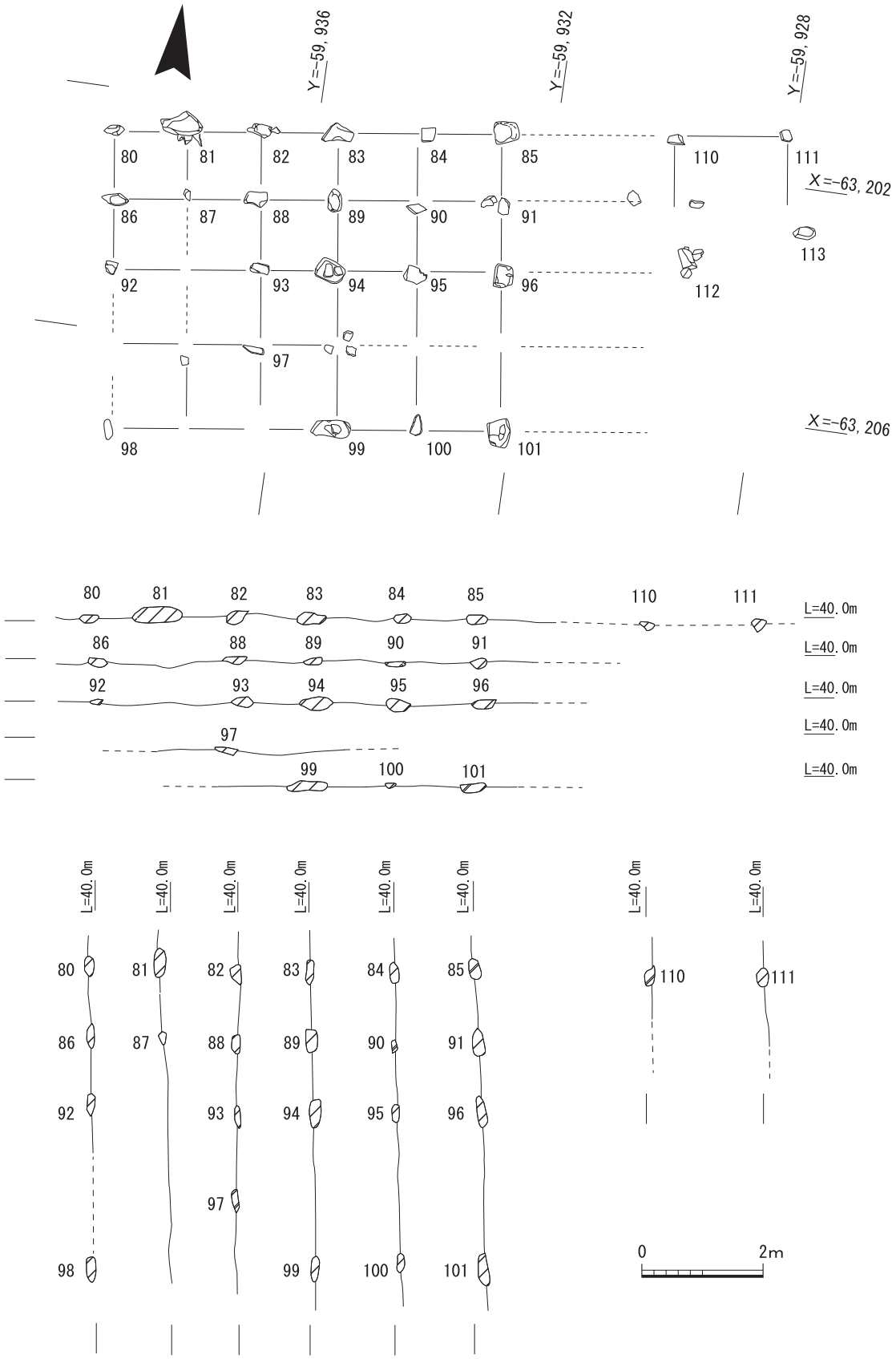
(3)平安時代末～鎌倉時代

礎石建物ＳＢ22（第25図） 礎石建物ＳＢ15の下層で確認した礎石建物である。検出規模は南北4.9m、東西方向11mを測る。建物を構築する礎石は25石確認した。礎石の間は1.2～1.3mを測る。礎石には大小が認められ、礎石と束石を使い分けていた可能性がある。礎石から復元できる柱間は、2.5～2.7mを測り、１間(1.8m)より広くなる。北西に位置する礎石80は建物の北西隅にあたり、外側に位置する石材は、縁部にあたるものと考えらえる。南北方向は柱間２間分確認することができる。建物は南に広がるものと考えられるが、礎石や束石、地業痕跡を確認することはできず、どこまで展開するかは不明である。

溝ＳＤ21（第26・27図） 検出規模は長さ17.4m、幅0.96mを測る。断面ｂ－ｂ'ではほとんど埋土は確認できず、８層を残す程度であった(第27図)。礎石建物ＳＢ22の整地層である12層を掘削するような土層が認められることから礎石建物ＳＢ22の南側の溝であると考えられる。埋土中には遺物や炭が混じり、地山である13層上面に堆積している。シルト層などが確認できないことから、礎石建物ＳＢ22の廃絶時期には水などが滞留している状況ではなく、乾いていたと考えられ



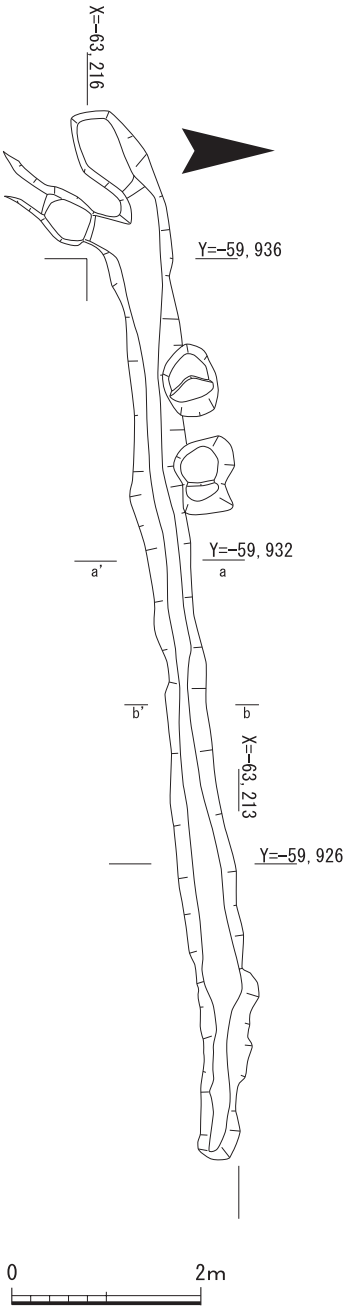
第24図　遺構平面図(平安～鎌倉時代)



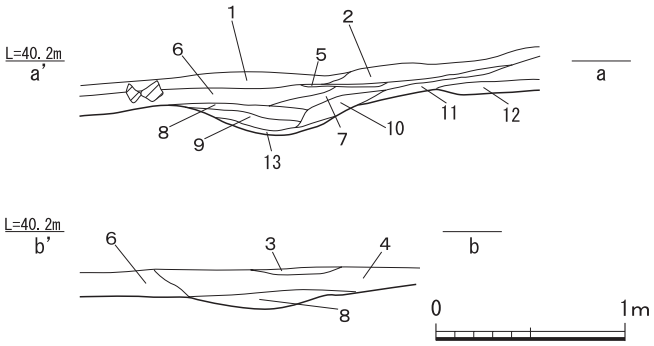
第25図　礎石建物ＳＢ22平面図及び断面図

る。埋没時期は礎石建物ＳＢ22の焼失後の整理時と考えられる。

土坑ＳＫ28（第28図）　礎石建物ＳＢ03南側、炭化物層の下層で確認した土坑である。直径0.4m、深さ0.39mを測る。上層にはシルト質細粒砂が堆積し、その下層に炭を多量に含んだ極細粒砂質シルトが堆積している。糸切の土師器、貿易陶磁器を包含する。検出状況や遺物から礎石建物ＳＢ22が焼失したのちの整理段階に掘削された廃棄土坑と考えられる。

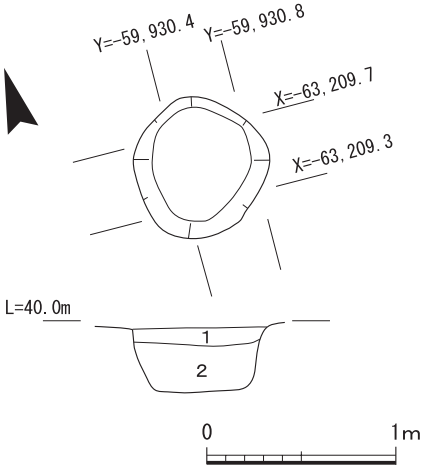


第26図　溝ＳＤ21平面図



1．明褐色（7.5YR5/8）細粒砂質シルト 径５cm大の礫を10%程度混じる
2．にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト質細粒砂質土　炭・土師器片混じる
【鎌倉時代整地層】
3．黄褐色（10YR5/8）シルト質細粒砂質土 礫・炭・土師器片がごく少量混じる
4．暗褐色（10YR3/3）礫質シルト質細粒砂質土　炭・土師器片が10% 混じる
5．黄褐色（2.5YR5/6）シルト質細粒砂質土　炭・土師器片が10% 混じる
6．暗褐色（10YR3/3）細粒砂質シルト　礫・炭・土師器片が10%混じる
7．にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質細粒砂　炭が少量混じる
8．暗褐色（10YR3/4）細粒砂質シルト　礫・炭・土師器片が10%混じる
【ＳＤ21埋土】
9．黄褐色（2.5YR5/3）極細粒砂質シルト　礫・炭・土師器片がごく少量混じる
【ＳＤ21埋土】
10．暗褐色（10YR3/3）中～細粒砂質シルト　土師器片少量混じる【ＳＤ21埋土】
11．褐色（10YR4/6）極細粒砂質土 土師器片少量混じる
12．暗褐色（10YR3/3）シルト質中粒砂質土 【ＳＢ22整地土】
13．にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト質細粒砂質土 径１ｃｍ大の礫
40%混じる【地山】

第27図　溝ＳＤ21断面図



1．褐色（10YR4/6）　シルト質細粒砂質土　整地土
2．暗褐色（10YR3/3）　極細粒砂質シルト
遺物、炭化物多量に混じる

第28図　土坑ＳＫ28平面図及び断面図

６．２トレンチの調査

１トレンチの南に設定した調査区である。調査前の時点で、２トレンチは、２ｍ近く低い地形を呈している。調査の結果、満願寺に伴う遺構は確認できなかった。調査区中央付近の標高35m付近で近世と考えられる溝ＳＤ80を１条、１トレンチとの境で土石流と考えられる痕跡を確認した。溝ＳＤ80は、検出長7.8m、深さ0.24mを測る東西方向の溝である。埋土は中粒砂質土で、地山の土がブロック状に混じる。近世の遺物が出土している。江戸時代の周辺の絵図で２トレンチ周辺は屋敷地として記載されており、同時期の建物に伴う溝と考えられる。

トレンチ北側では土石流の痕跡とともに人頭大の礫を多数確認した。礫を確認した際には礎石などの可能性も考えられたが、建物のような規則性や石材の平坦面が見当たらないことから、土石流により運ばれたものと判断した。また、土石流により移動した土砂の中には中世遺物が包含されていることから、中世以降のものと推定される。



第29図　２トレンチ平面図

７．出 土 遺 物

１）土師器皿分類

今回の発掘調査では、遺物整理箱60箱分の遺物が出土した。土師器皿は約400点ほど実測した結果、成形技法・法量・口縁部の特徴により差異が認められ、それぞれ一定量出土していることから、以下のように分類して遺物報告の整理を行った。

まず、成形技法の違いにより、大きく手づくねによる成形と回転台による成形(底部糸切)に分けられ、それぞれ339点、38点を図示した。これらについては、「手づくね」、「回転糸切」と呼称する。

≪口縁部≫ ナデによる調整を施しており、１段ナデ、２段ナデ、回転ナデに分類することができる。一部の土師器皿には１段ナデによる調整時に沈線上の痕跡が残るものがある。形状が、Ｓ字状をするものとそうでないものに分けられる。これらをもとに区分すると次のようになる。

Ａ類…１段ナデ+Ｓ字状・外反を呈する　**Ｂ類**…１段ナデ+Ｓ字状外反を呈さない

Ｃ類…２段ナデ+Ｓ字状を呈する　**Ｄ類**…２段ナデ+Ｓ字状を呈さない

Ｅ類…沈線状ナデ　**Ｆ類**…回転ナデ　**Ｇ類**…その他

≪口径≫ 径２cm～17cm程度までの幅を持つ。口径散布図からはある程度のまとまりが認められ、以下の５群に分けることが可能である。

１類…７cm以下　**２類**…７～9.5cm　**３類**…9.5～11cm

４類…11～13.5cm　**５類**…13.5cm以上

≪色調≫ 赤系統のものが大多数で、一部白系統のものが少量認められる。赤系統はａ類、白系統はｂ類として区別した。

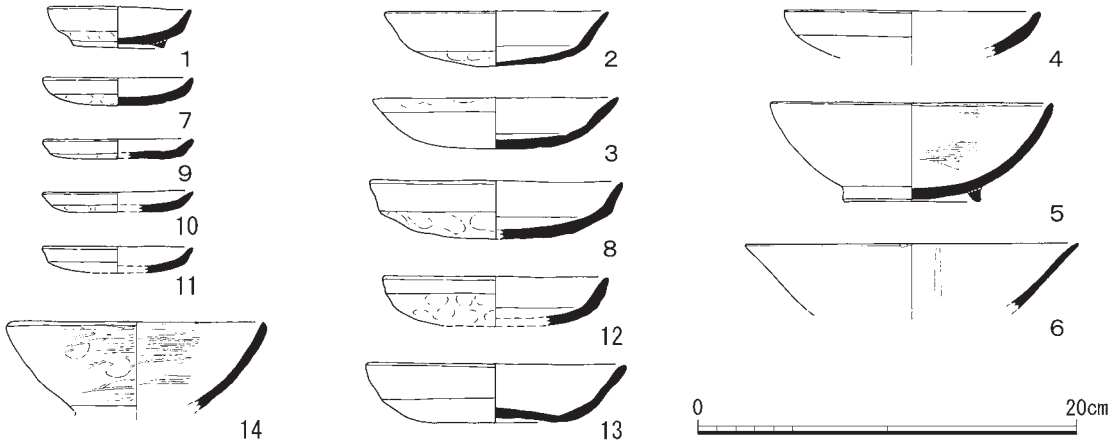
これらの分類を出土した土師器皿に適応し、「手づくねＡ１ａ」･「回転糸切Ｆ２ａ」などと呼称し、報告を行う。これらの分類は多少ではあるが、時期差を示しているものと考えられる。

２）１トレンチ

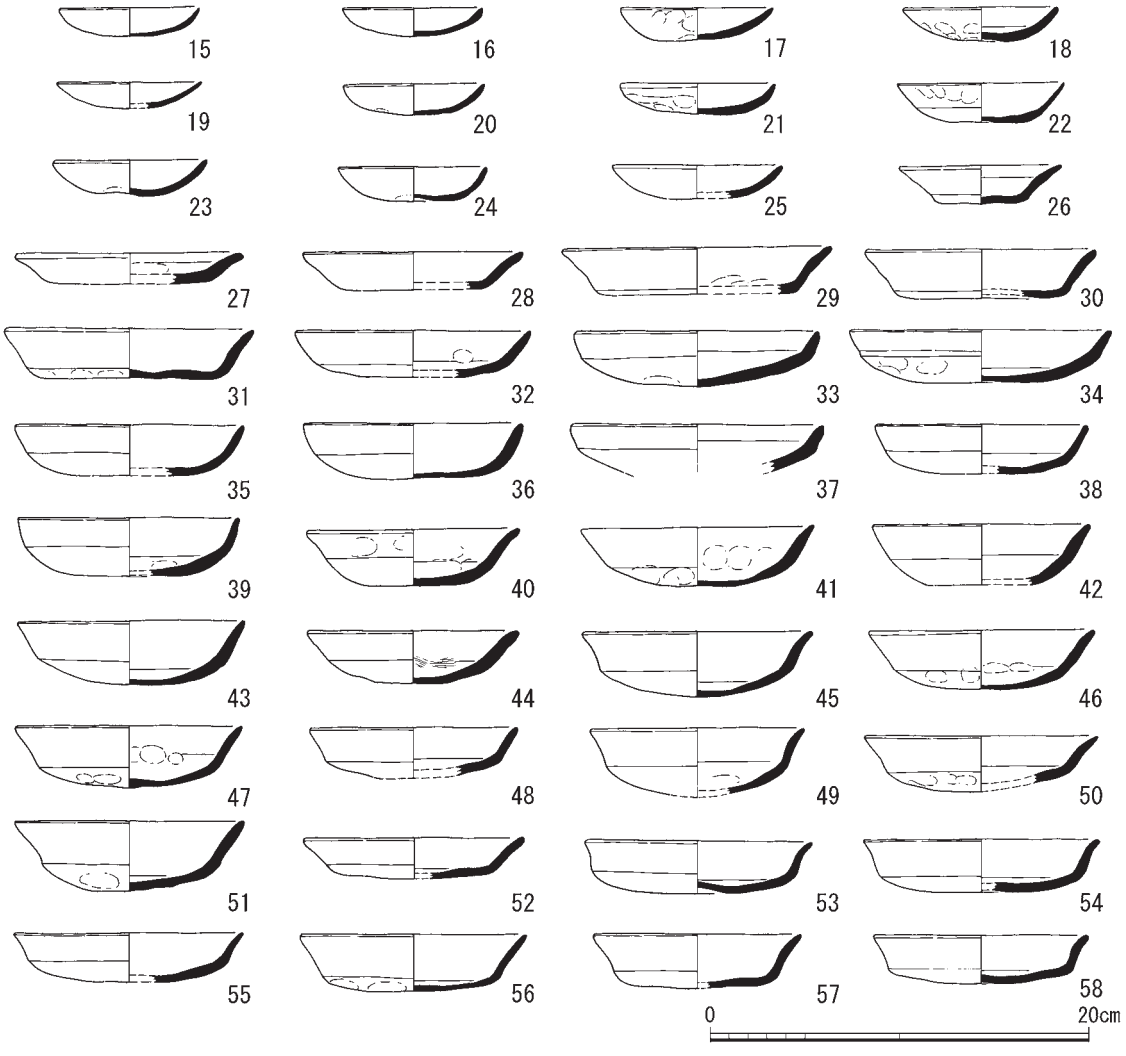
（１）遺構出土遺物

第30図１～３は溝ＳＤ01から出土した。１は瓦器小椀である。断面形が逆三角形の底部を張り付ける。暗文やミガキは認められない。２・３は手づくねＡ４ａ類の土師器皿である。２は灯明皿である。第30図４～６は礎石建物ＳＢ03から出土した。４は手づくねＢ４ａ類の土師器灯明皿である。５は瓦器椀である。底部は逆台形を呈しており、底部直径に比べて、椀自体はかなり大きい。６は白磁輪花椀である。口縁部の輪花の表現、浮文はかなり粗雑である。第30図７～11は土坑ＳＫ27から出土した手づくねの土師器皿である。７・９～11はＢ２ａ類、８はＢ４ａ類である。９は灯明皿であろう。第30図12は手づくねＤ４ａ類の２段ナデ系統の土師器皿である。第30図13は土坑ＳＫ36から出土した、手づくねＢ５ａ類の土師器皿である。第30図14は土坑ＳＫ29から出土した瓦器椀である。内外面ともにミガキ、見込み付近には平行する暗文が施されている。

第31図は土坑ＳＫ20から出土した手づくねの土師器皿群である。23～25はＢ２ａ類である。26

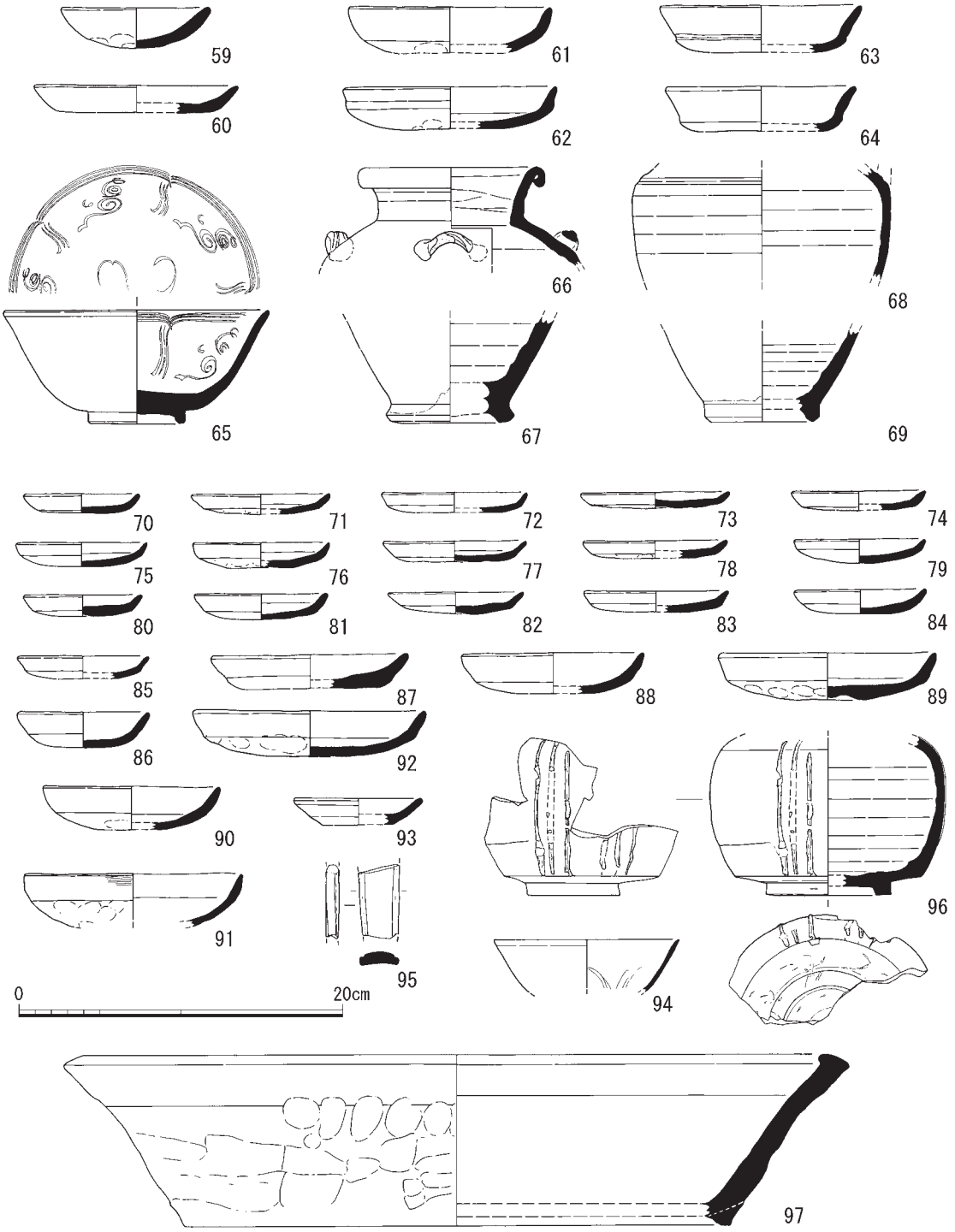


第30図　石組み溝ＳＤ01ほか出土遺物実測図

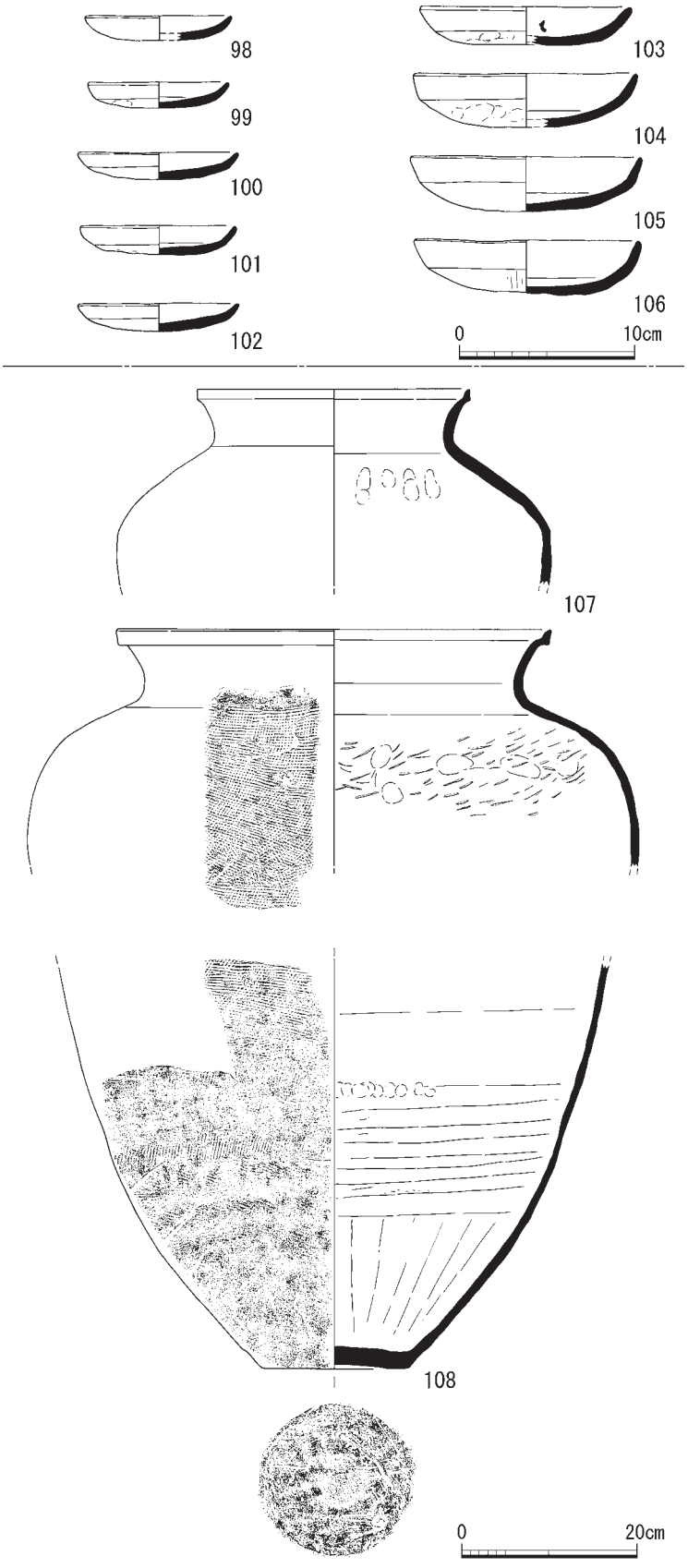


第31図　土坑ＳＫ20出土遺物実測図

～31・57は平底タイプのＡ類である。26は小型でＡ２ａ類、27～31・57はＡ５ａ類である。32・34・37はＢ５ａ類で、１段ナデが強く、未調整部分との境に稜が顕著に認められる。また、やや外反傾向とも見受けられるが、明確ではない。35はＢ４ｂ類である。36・38・39はＢ５ａ類である。53はＡ４ｂ類である。40～52、54～56・58はＡ４ａ類である。35・53の白系統の土師器は、胎土が明確に異なり、意識的に作り分けられている。



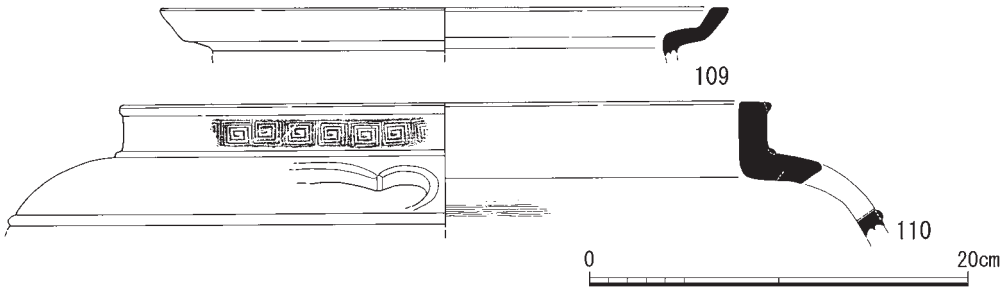
第32図　土坑ＳＫ25・28出土遺物実測図



第33図　埋甕ＳX51出土遺物実測図

第32図59～69は土坑ＳＫ25から出土した。59～64は手づくねの土師器皿で、59はＢ２ａ類、60は平底タイプのＢ４ａ類、61はＡ４ａ類、62はＢ５ａ類、63・64はＥ４ａ類である。63・64はやや外反気味の断面形状だが、Ａ類と比較すると１段ナデ時に沈線状の痕跡が残り、粗雑な印象を受ける。65は龍泉窯系の青磁椀である。内面には飛雲文が施される。口縁端部には輪花はない。太宰府編年Ⅰ-4ａ類で、12世紀中頃から後半のものであろう(注12)。66・67は白磁四耳壺である。66は口縁から肩部、口縁端部は丸く折り曲げる。肩部はなだらかであることから、卵型胴部へと続くと考えられる。67は底部から高台部である。高台外側はケズリを行い、接地面は平坦である。どちらも特徴から山本編年四耳壺Ⅲ－１類、11世紀後半から12世紀のものある(注13)。68は66に比べて肩が張ることや把手剥離痕跡から白磁水注と考えられる。69は68の底部に相当する。白磁四耳壺と並行する時期と考えられる。いずれも福建系の白磁である。

第32図70～97は土坑ＳＫ28から出土した。70～92は手づくねの土師器皿である。70・



第34図　２トレンチ出土遺物実測図

84はＢ２ａ類である。71～83・85は口縁部のナデ調整時にやや外反する傾向が認められることからＡ２ａ類に属す。86・88・90はＢ４ａ類である。87・89・91・92はＢ５ａ類である。Ｓ字状断面のものは混じらない。93は常滑の山皿である。底部は糸切で、内面には火災の影響か、自然釉が泡状に残る。藤澤編年の５型式並行期(13世紀初頭)のものであろう(注14)。94は白磁椀である。直口縁で内面に劃花文が施される。95は白磁水注の把手の一部である。68とは釉薬の色調が異なることから別個体である。把手表側両脇に並行する沈線が認められる。96は、磁州窯黒釉白堆線文壺である。外面に白泥で線文を施し、その後施釉をする。把手がつく可能性もあるが、96には剥離痕は確認できないため、壺として報告する(注15)。马萌萌編年によると第２期、12世紀後半から13世紀初頭のものと考えられる(注16)。97は火鉢である。口縁部は三角形に近く、内面に突出する。底部外面には、脚を張り付ける。作成時に敷いていたと思われるわらなどの圧痕が残る。新田編年Ｃ５類で13世紀中頃に比定される(注17)。他の遺物に比べ、時期が新しいことから混入したものか。

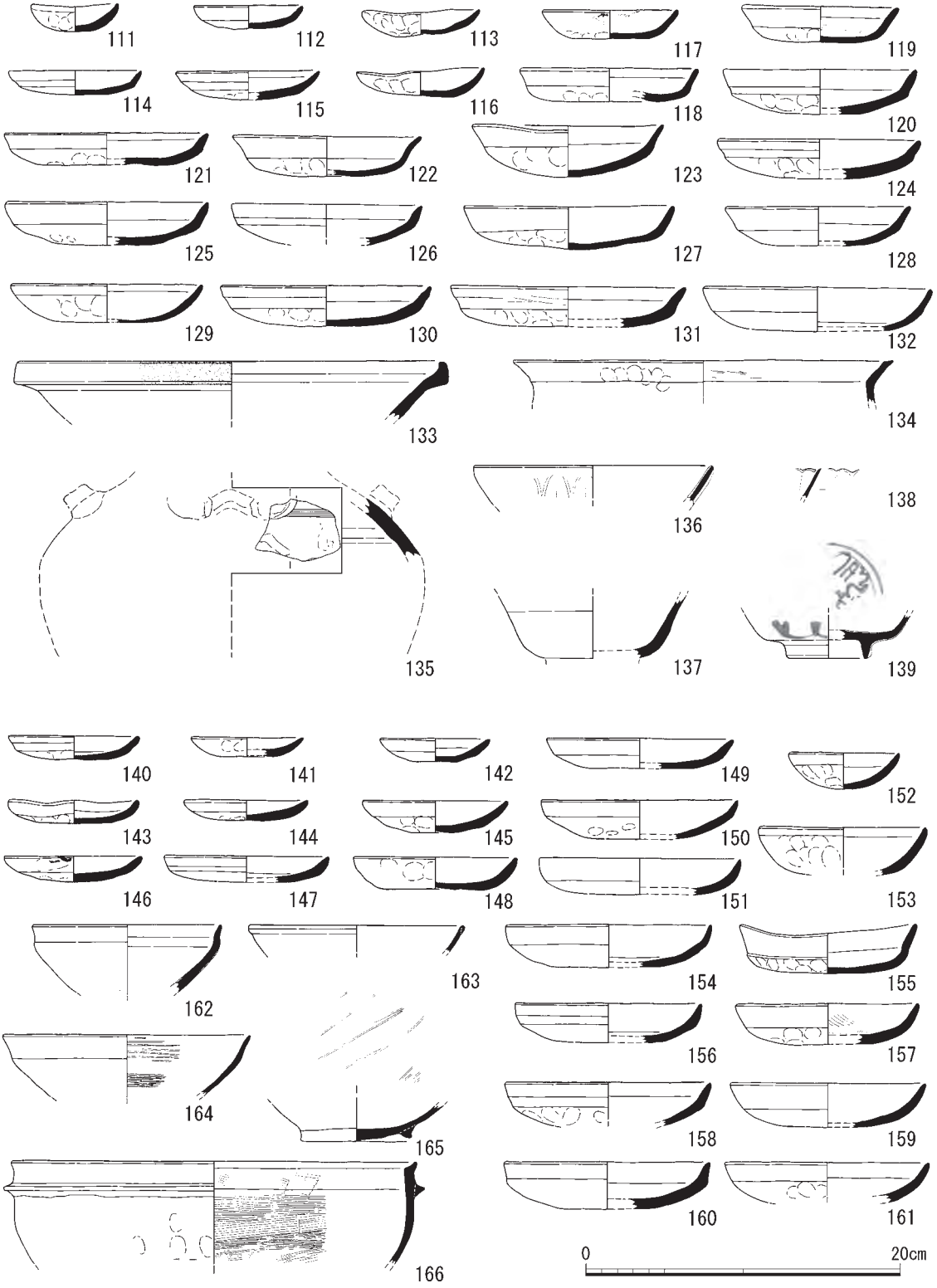
第33図98～108は埋甕ＳＸ51から出土した。98～106は手づくねの土師器皿である。98・100～102はＢ２ａ類、99はＢ２類、103～106はＢ４ａ類である。104は灯明皿である。107は常滑の甕である。口縁端部がＬ字形を呈している。肩部の張り出しが弱いことから、常滑４～５型式の過渡期ごろと考えられる(注18)。108は須恵器甕である。東部山陰系の甕と考えられる。108は埋甕として据えられている状態で出土した。

第34図109･110は２トレンチ掘削中に出土した。109は瓦質土器鍋である。110は奈良火鉢である。いずれも15世紀ごろの遺物である。

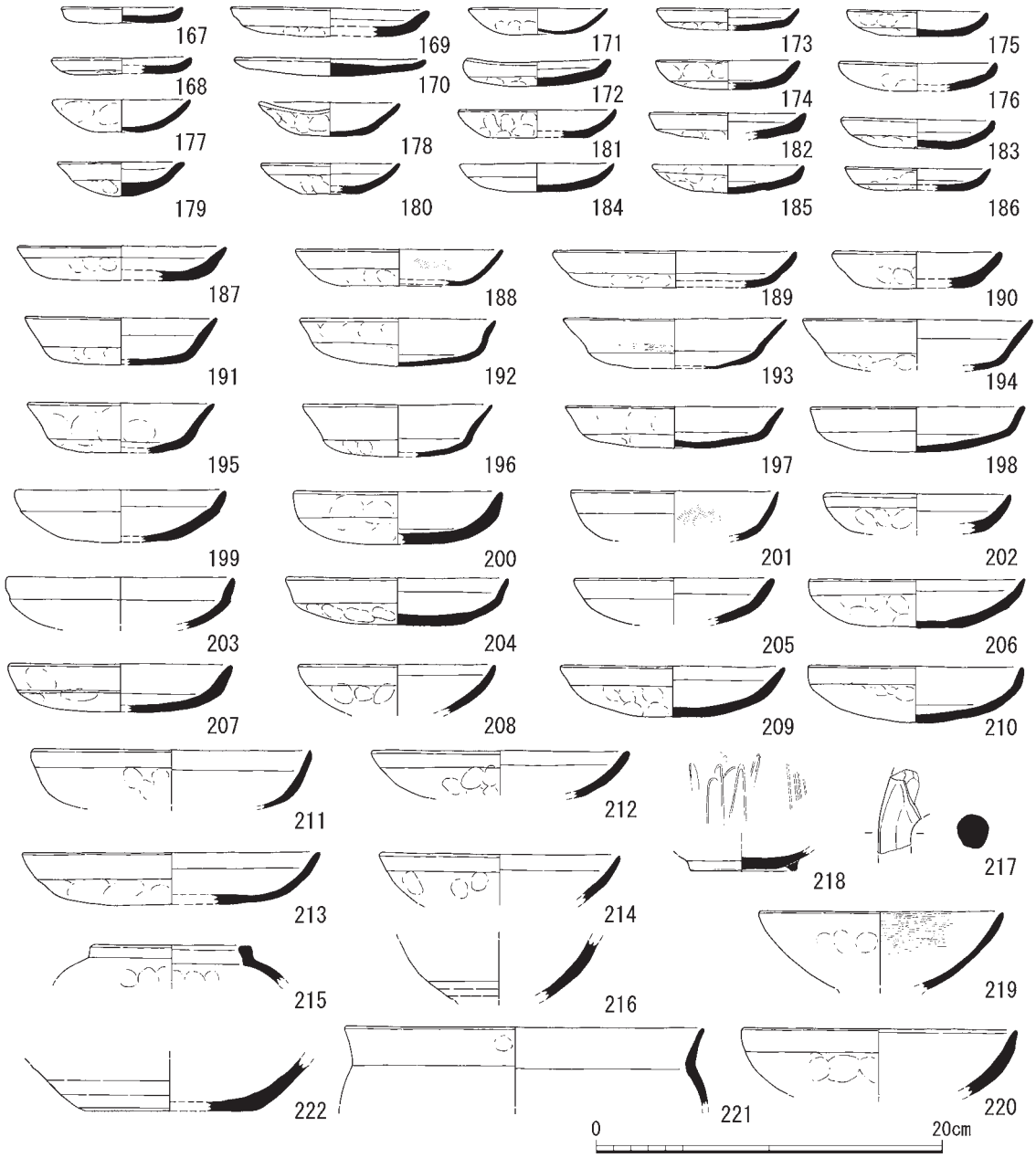
（２）整地層

第35図111～139は11層上層の遺物である。111～132は手づくねの土師器皿である。122・123・128はＡ４a類、111・112はＢ２a類、113・116・117はＢ２a類、118・119・129はＢ３a類、121・125・127はＢ４a類、132はＢ５a類、114・115はＤ２a類、126・130はＣ４a類、131はＣ５a類である。133は東播系須恵器鉢であり、12世紀末から13世紀初頭と考えられる。134は瓦質土器鍋である。135は古瀬戸の四耳壺である。藤澤編年前期様式Ⅲ期（13世紀中頃）のものであろう(注19)。136・137は龍泉窯系の青磁椀である。136は椀Ⅲ類である。138は白磁の輪花小皿である。139は青花椀である。明代の製品と思われる。

第35図140～166は11層出土遺物である。140～161は手づくねの土師器皿で、Ａ類に区分される



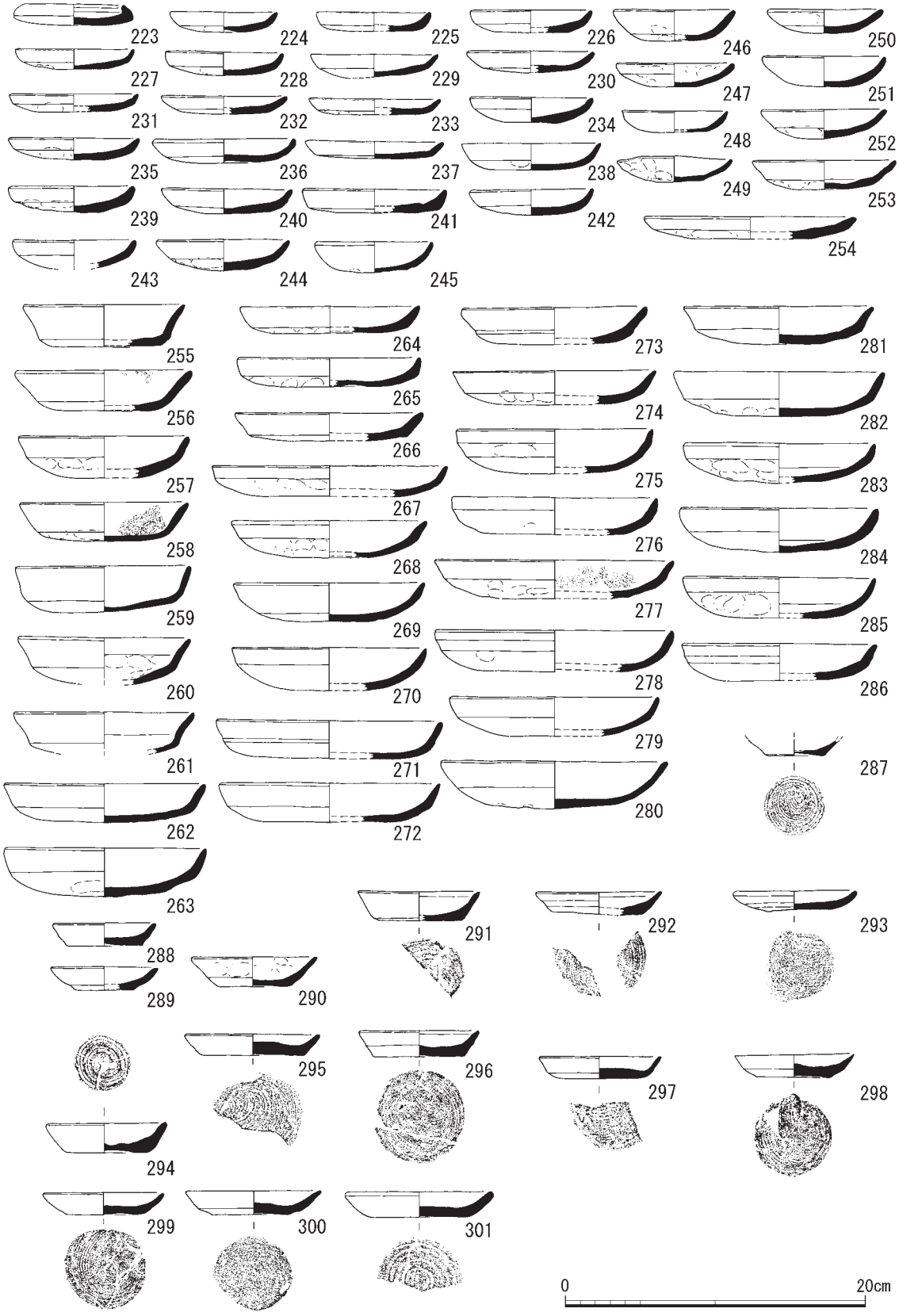
第35図　整地層第11層上層・第11層出土遺物実測図



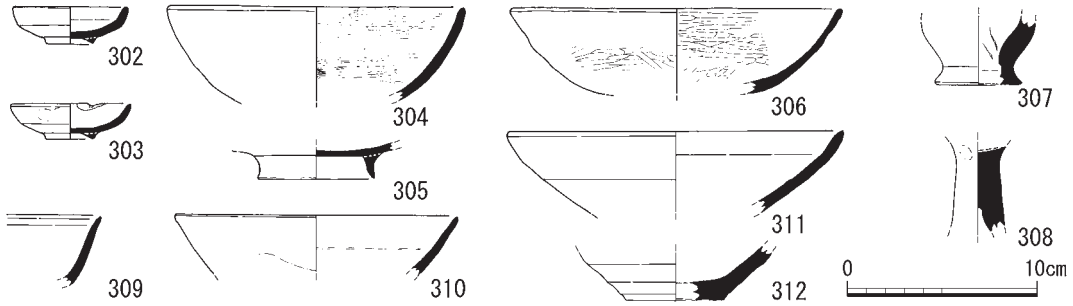
第36図　整地層第18層出土遺物実測図

ものは認められない。140はＤ２a類、141～146はＢ２a類、147はＥ２a類、155はＥ３a類、156・158はＤ４a類である。148・149・153はＢ３a類、150・154・157・159・160・164はＢ４a類、152はＢ１a類である。162は古瀬戸天目茶椀である。163は白磁椀である。椀Ⅱ類である。口縁部形状は玉縁口縁である。164・165は瓦器椀である。164は外面は摩滅している。内面にはミガキ痕跡が薄く認められる。165は底部を丸く収める。高台はやや三角形で外側に踏ん張るような形状を呈する。166は瓦質土器の羽釜である。

第36図は第18層から出土した遺物である。167～214は手づくねの土師器皿である。167・168・171～178・180～186はＢ２ａ類、169はＤ４ａ類、170はＧ４ａ類であり、立ち上がりの低い皿である。179はＡ２ａ類である。187～191は平底タイプのＢ類の土師器皿である。198～206・208～



第37図　整地層第20層出土遺物実測図

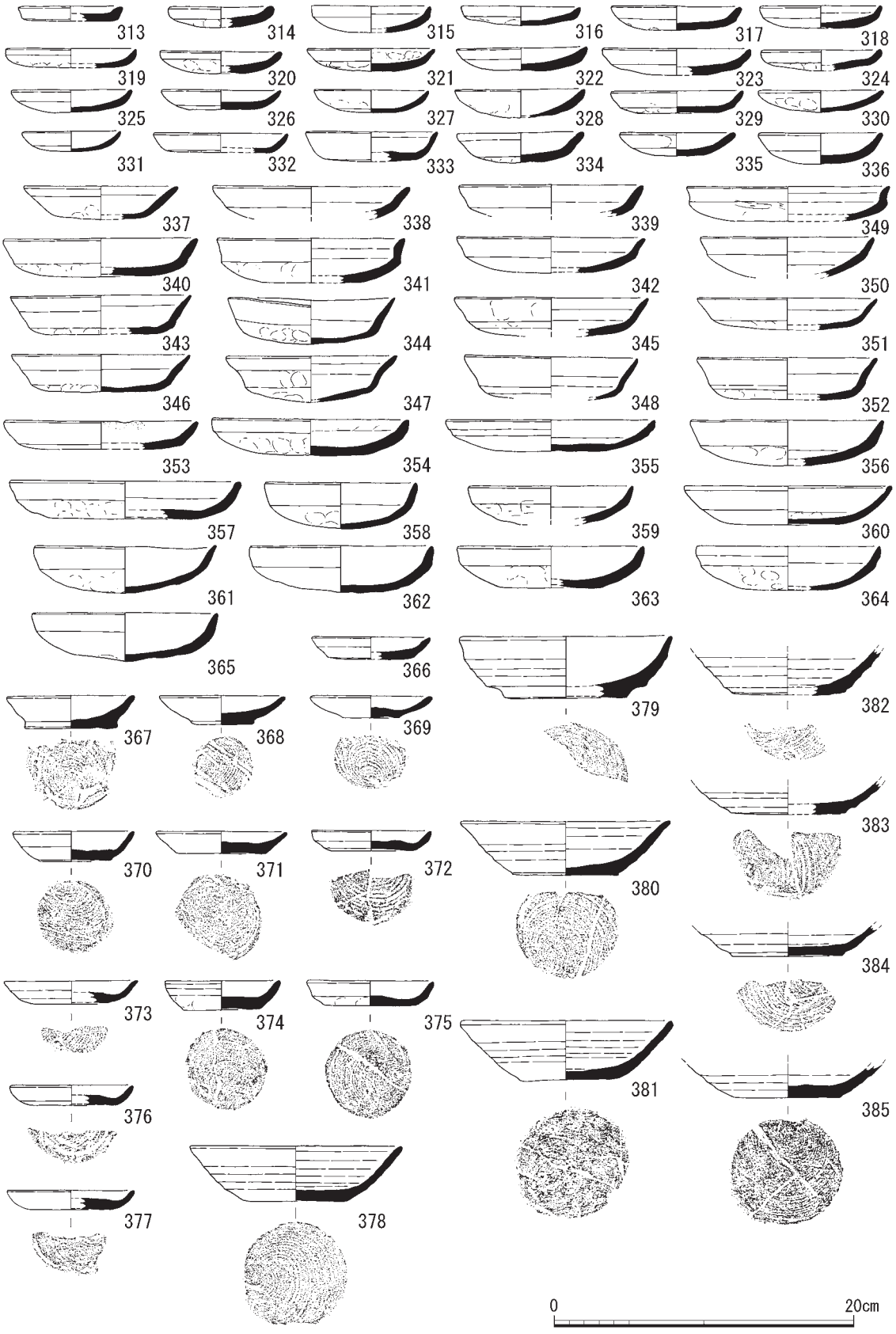


第38図　整地層第20層出土遺物実測図（土師器以外）

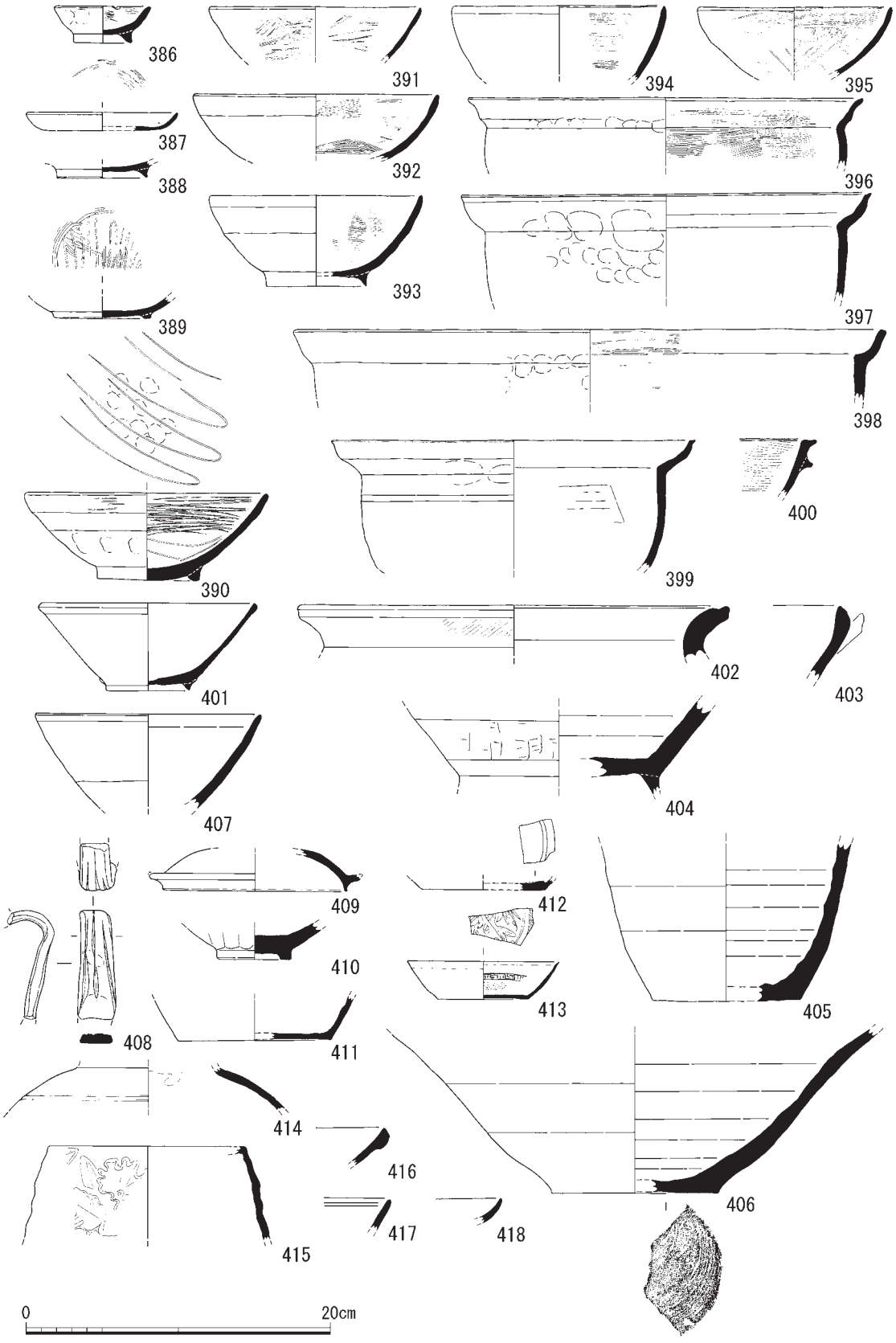
214は丸底タイプの土師器皿である。192～197はＳ字形の断面を呈する土師器皿である。207はＥ類の土師器皿である。189は平底タイプでも口径が14.0cmを測る。190・191はやや外反しているようにも見受けられる。198・203・204・207はナデが強く、稜線や沈線の調整痕跡を残す。215は瓦質土器の壺である。焼成は甘く、土師質にもみえる。口縁端部はナデで仕上げる。217は不明の土製品である。弥生土器の可能性がある。218～220は瓦器椀である。218は高台が逆台形を呈している。219・220はやや内湾するように立ち上がる。221は土師器の甕である。弥生土器の可能性がある。222は東播系須恵器鉢の底部である。

第37図・第38図は第20層から出土した。223はコースター形の土師器皿である。平尾編年５Ａ段階並行期と考えられる。224～263は手づくねの土師器皿である。224～235・237～239・242～245はＢ２a類、236・240・241はＢ３a類、254はＢ５a類である。231～233・235・237・254はナデ上げが弱く、器高が低いタイプの土師器皿である。255は平底タイプのＡ３類、260・261は丸底タイプA類の土師器皿である。平尾編年６Ｂ・C期並行期と考えられる。256～258はＢ３a類、259・264～266・268～270・274・281・283～285はＢ４a類、262・263・267・276・277・279・280・282はＢ５a類、275・278・286・278はＤ４a・５a類の２段ナデの土師器皿である。273はＥ類の在地色の強い土師器である。287～301は回転糸切の土師器小皿である。287・291・296は若干口縁部が長く立ち上がる。第35図の302・303は瓦器の小椀である。両個体には口縁端部の一部に欠損が認められることから六器の可能性がある。304･305は瓦器椀である。305は高台部である。高台は高い。今回出土したその他の瓦器椀の高台とプロポーションが若干異なることから、生産地が異なる可能性がある。306は黒色土器A類である。今回の調査で唯一の黒色土器である。(注20) 307は瓦質土器の華瓶である。308は弥生土器の高杯脚部の可能性がある。309は龍泉窯系青磁椀である。内外面とも無紋であり、太宰府編年椀Ⅰ類に相当するものである。(注21) 310は白磁椀である。口縁部は直口で腰部から下は素地が露出している。311は古瀬戸の平椀の体部、312は古瀬戸の平椀の底部である。高台を削り出し成形する。

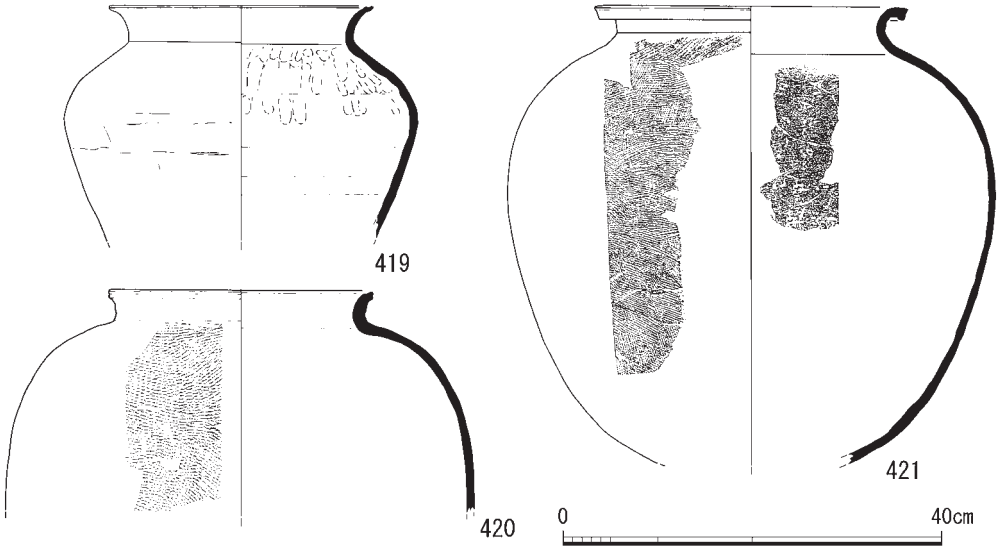
第39図313～385は整地層第21層から出土した。313～365は手づくねの土師器皿で、313～336はＢ２a類である。326・329・335は平底タイプ、333・334・336は器高の高い土師器皿である。337はＧ３a類、338～342・349・350のＧ４a類、356・360～363・365はＢ４a類である。358・359はＢ３類、341・349は１段ナデにより口縁部は直立し、口縁端部は外反する。343～345・348・351・



第39図　整地層第21層出土遺物実測図



第40図　整地層第21層出土遺物実測図(土師器以外) 1

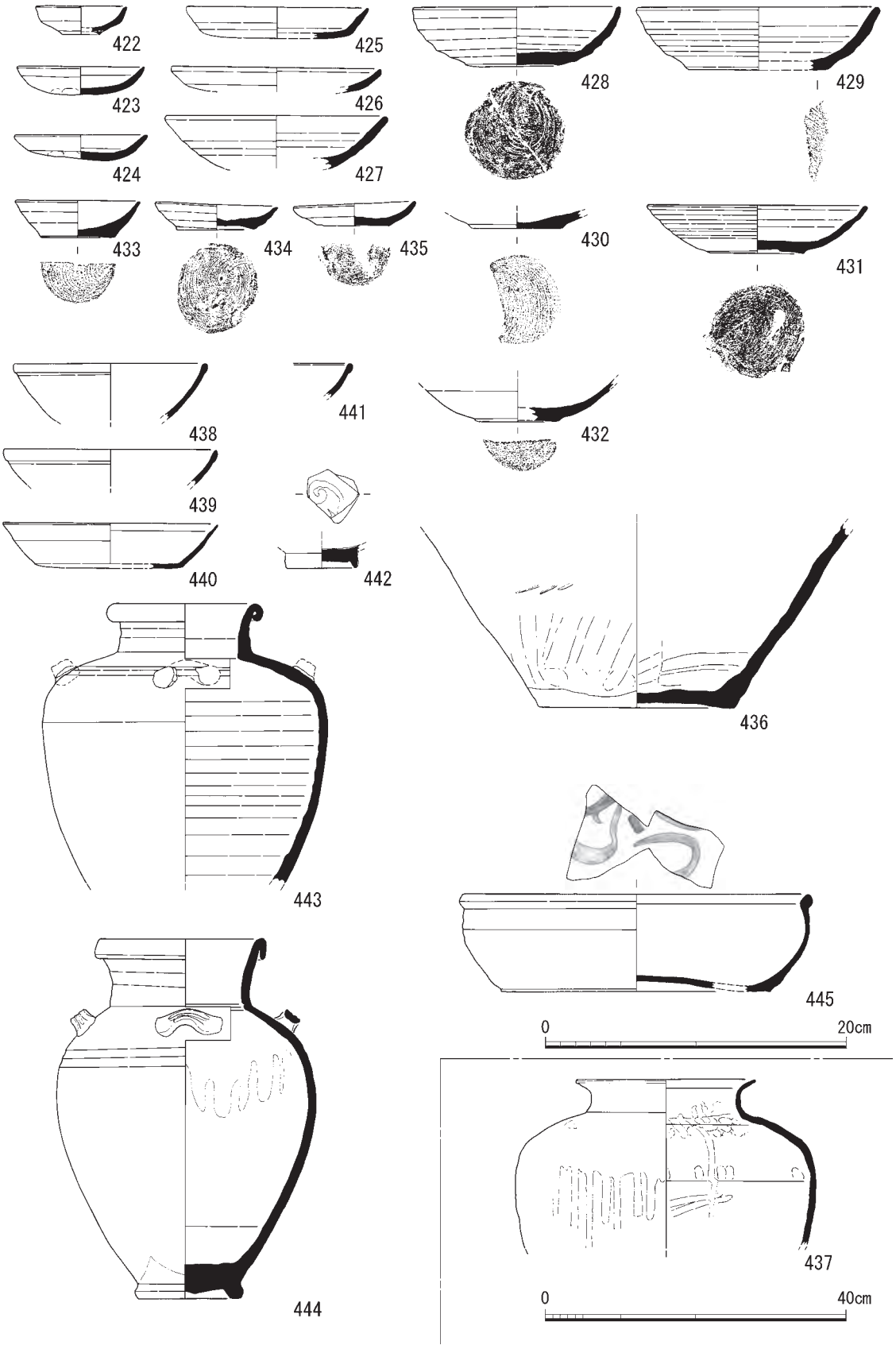


第41図　整地層第21層出土遺物実測図（土師器以外）２

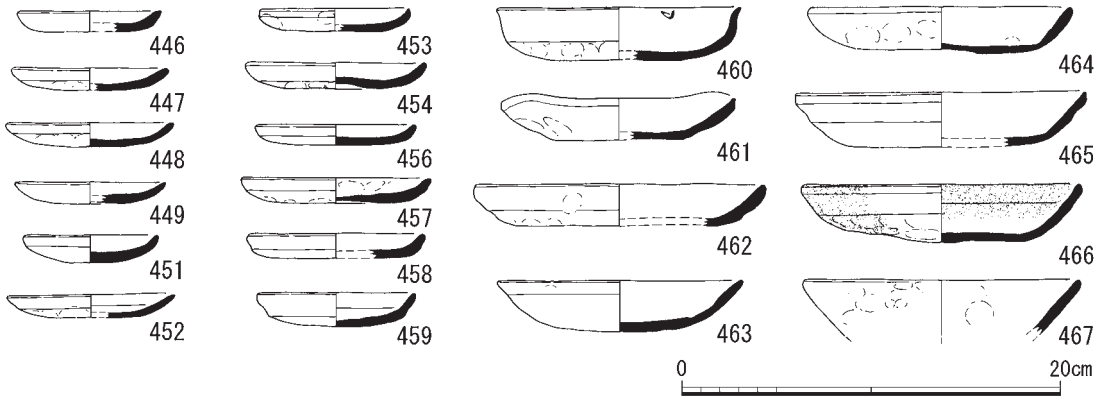
352はＡ４a類である。346・347はＣ４a類である。２段ナデでＳ字状の断面を呈すことから、平尾編年５から６段階への過渡期にあたるものと考えられる(注22)。353～355・357はＢ３～５類に属する土師器皿である。器高の低い一群である。364はＤ４a類の土師器皿である。366～385は回転糸切の土師器皿である。366～377はＦ２a類である。366～368・371・374のような口縁部が直線的に伸びるタイプと370・371のような若干立ち上がるタイプ、369・372～373・375～377のような底部内面に回転ナデ調整時に凹みがつくタイプに細別することができる。378～381はＦ５a類である。382～385は口縁がないため区分できないが、Ｆ５類のものであろう。

第40図386～418・第41図419～421は整地層第21層から出土した土師器以外の器種である。386は瓦器の小椀である。口縁端部の一部に欠損が認められることから302・303と同様に六器の可能性がある。387は瓦器皿である。388～395は瓦器椀である。388は逆三角形、389は逆台形の高台を持つ。390～393・395は口縁部が直線的に立ち上がる。393の高台が細身の逆三角形と呈している。394は口縁部が内湾気味である。396～399は、瓦質土器鍋である。396は口縁端部を外反気味に収める。397・399は口縁端部をつまむように収める。399は口縁端部が「く」の字を呈し、体部は垂直気味である。400は瓦質土器の羽釜である。401は東美濃系山茶椀である。402は須恵器甕の口縁部である。403は東播系須恵器の片口鉢である。404は常滑系鉢底部である。内面に使用痕が認められ、こね鉢と考えられる。405は常滑の壺である。406は常滑の甕である。408～418は貿易陶磁器である。408は白磁水注把手である。409は白磁蓋である。410は龍泉窯系青磁椀Ⅱ類底部である。411は褐釉の壺である。412は青磁皿である。413は越州窯系杯Ⅲ類である。414は越州窯系の褐釉壺である。415は香炉である。416は白磁椀Ⅳ類である。417は龍泉窯系青磁椀Ⅰ類である。418は白磁椀である。419は常滑３型式の甕、420は常滑５型式の甕である(注23)。421は東播系須恵器の甕である。

第42図422～445は炭化物層から出土した遺物である。422は瓦器の小椀である。六器か(注24)。423～

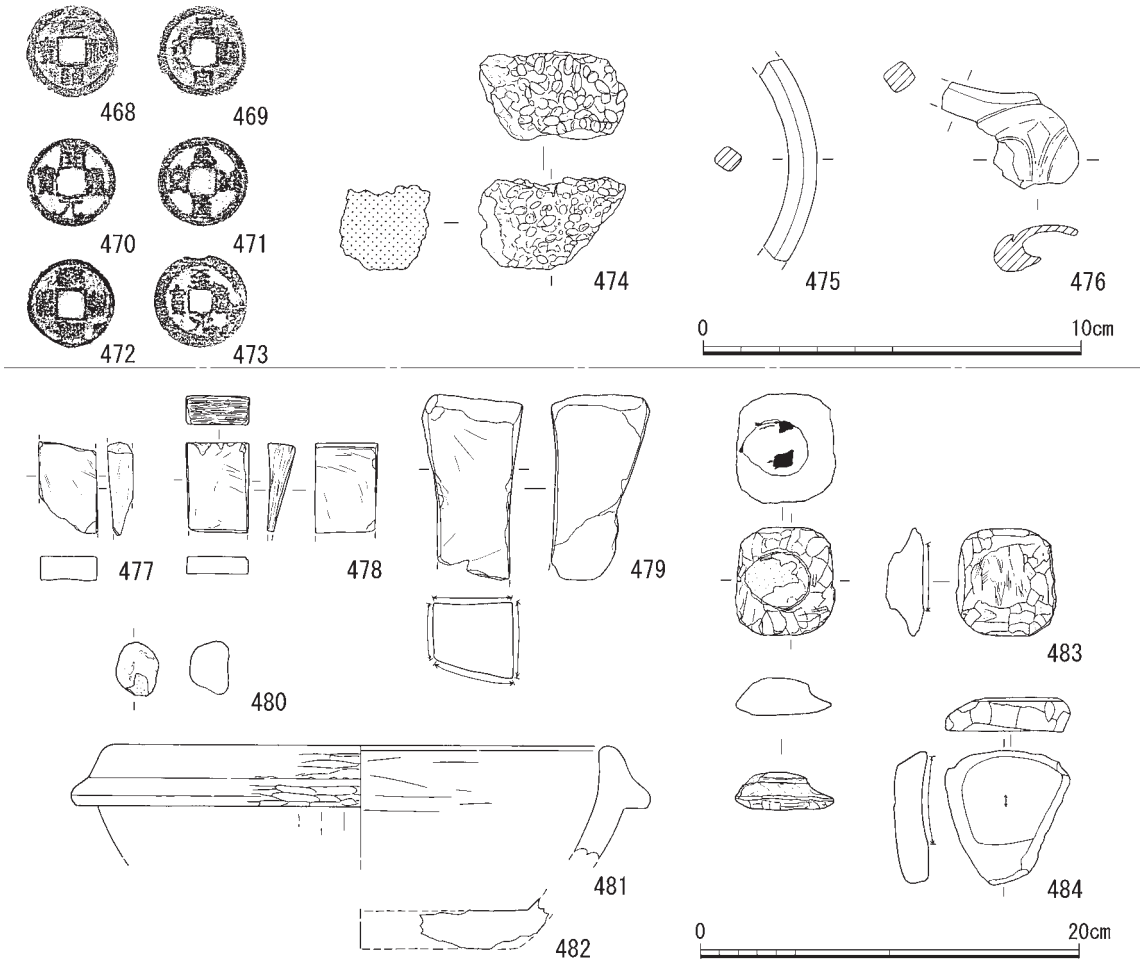


第42図　炭化物層出土遺物実測図



第43図　第44層出土遺物実測図

426は手づくねの土師器皿である。423･424はＢ２a類である。425はＣ４a類、426はＣ５a類である。427～435は回転糸切の土師器皿である。427～430はＦ５a類、435はＦ２a類である。433は東海系山皿である。436は常滑の甕の底部である。437は常滑３型式の甕である。438・439・441は白磁椀Ⅱ類である。440は福建系の青白磁皿である。口禿である。442は青白磁椀である。443・444は白磁四耳壺Ⅲ-１類であろう。445は磁竈窯系黄釉鉄絵花文盤である。



第44図　出土銭貨・炭化米・銅製品・石製品実測図

第43図は第44層から出土した手づくねの土師器皿である。446～453はＢ２a類、454～457はＢ３a類、460・461はＢ４a類、462はＥ５a類、463・464はＢ４a類、465・466はＤ４類である。466は内面が黒色を呈している。467はＧ４a類で、椀のような形状を呈している。450・455は欠番である。

銭貨　468～473は銭貨である。468・471は元祐通寶で、初鋳年は1086年である。469は皇宋通寶で、初鋳年は1038年である。470は開元通寶で、初鋳年は960年である。472は天聖元寶で、初鋳年は1023年である。473は至動元寶で、初鋳年は995年である。これらは南唐から北宋にかけて製造された銭貨である。(注25)

炭化米塊　474はⅡ-r４区の炭化物層から出土した。分析の結果、イネと同定されている。また籾殻を除去した玄米の状態である。放射性炭素年代測定の結果、1217～1266年という年代値が得られた。

銅製品　475は弧を描く銅製品である。断面形状は菱形状を呈している。476は不明銅製品である。銅製仏像や錫杖の一部の可能性がある。

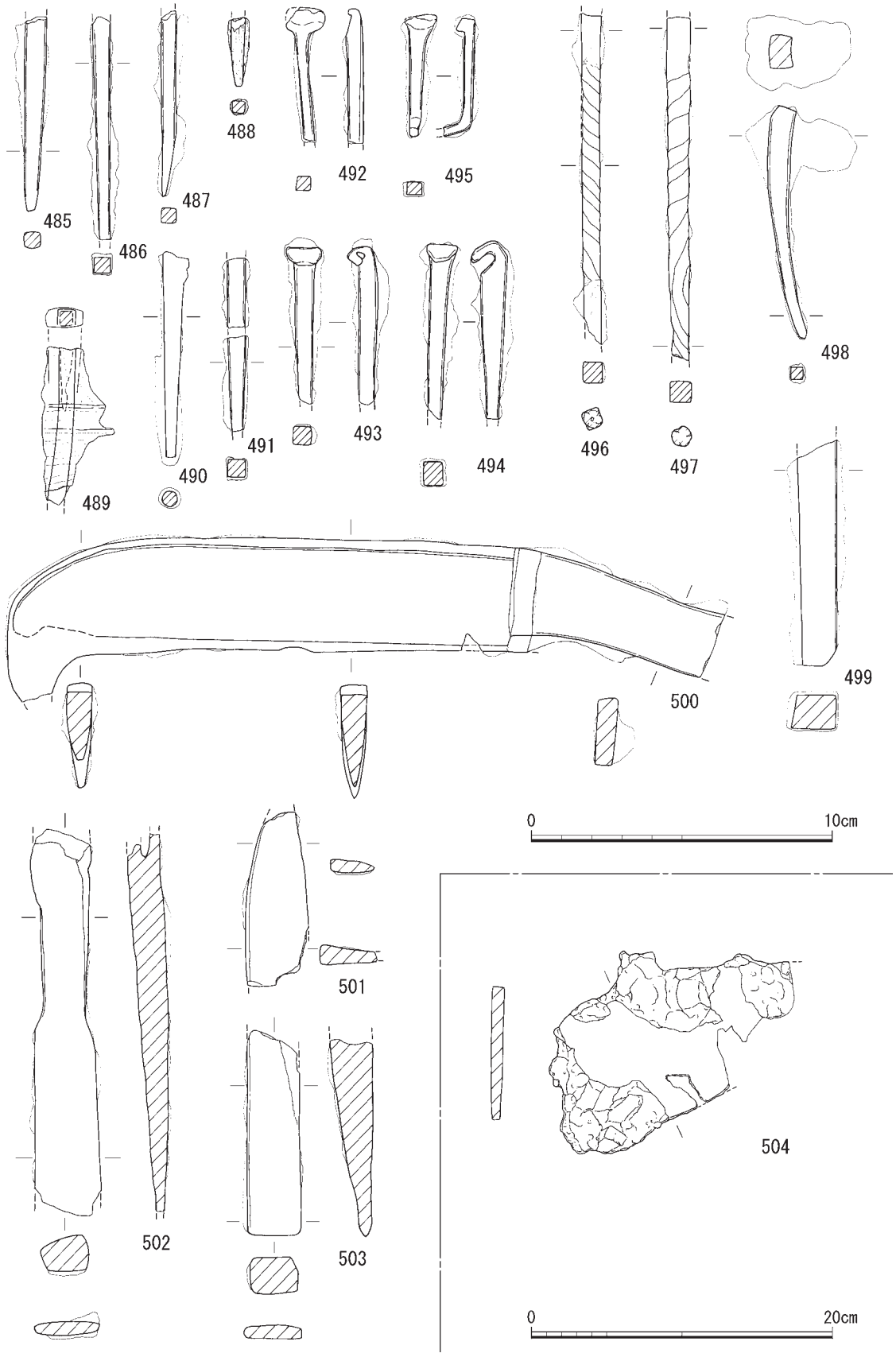
石製品　477～479は砥石である。477･478は同サイズの粘板岩製砥石である。480は軽石である。加工面や使用面は確認できないが、何らかの目的で意図的に持ち込まれたものであろう。483は滑石製の火消し石の可能性がある。再加工品である。一部に漆とみられる膜が認められる。481・482は石鍋の口縁部・底部である。484は石鍋を再加工し、砥石として再利用されている。

鉄製品　485～492・498は鉄釘である。488・489は木質が残存する。466・467は捩じり加工された鉄製品である。鉄鏃頸部の可能性がある。500は鉈であろう。501は鋏と考えられる。502・503は鉋である。504は鍛造の鉄製品である。出土時は鉄鏃と考えられたが、鍛造製の鏃はこれまでに見つかっていないことから、その可能性は低いと考えられる。(注26)

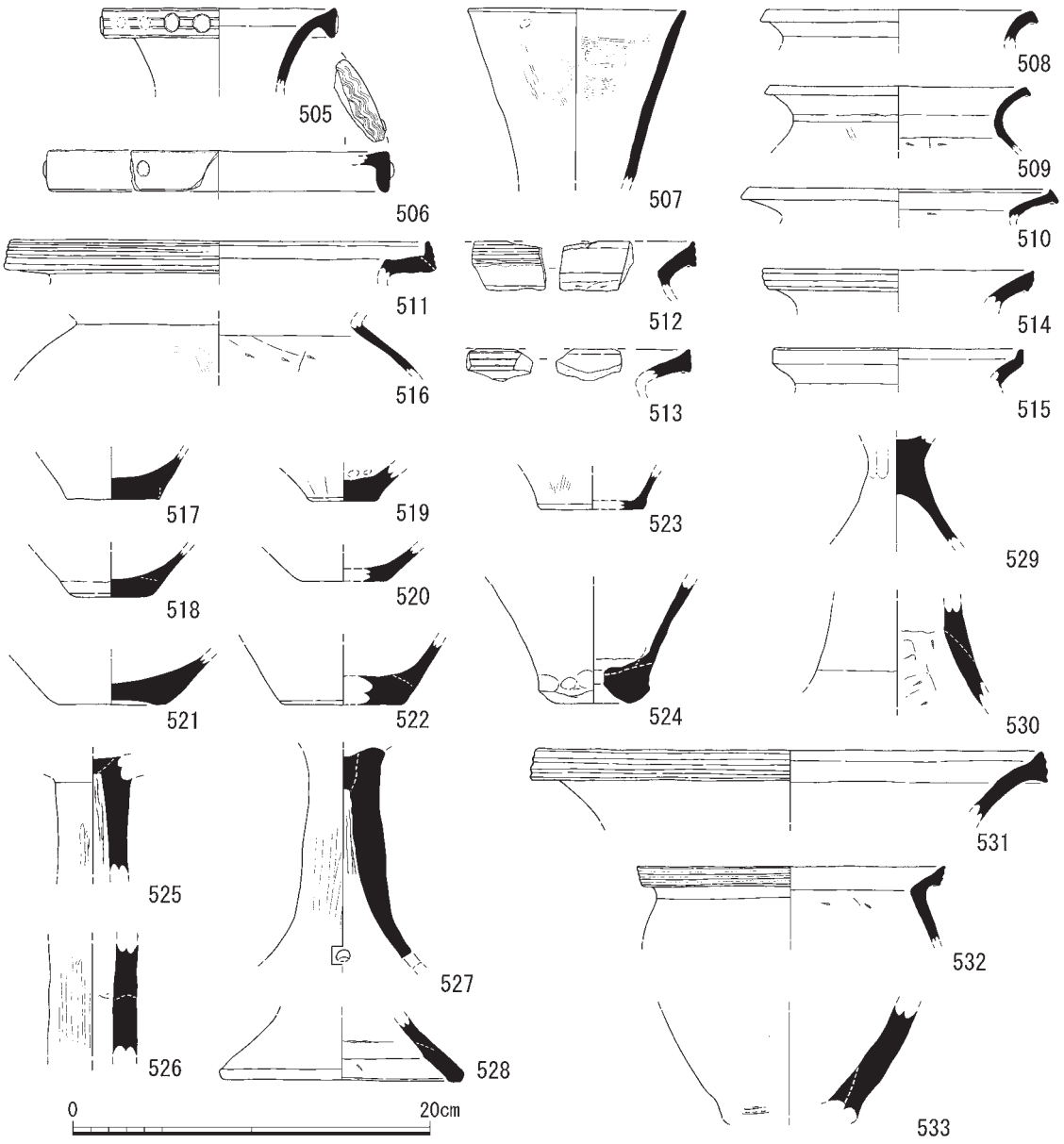
（竹村亮仁）

弥生土器　弥生土器は調査区やその周辺から出土・表採している。遺構に伴うものはなく、すべてが破片資料である。調査中に出土したものは27破片で、器種別にみると壺５点、甕12点、高杯４点、器台１点、有孔鉢１点、台付鉢１点で、ほかに不明体部片５点ある。また、時期は後期中葉(大山式)を中心とし、１点のみ中期にさかのぼる土器がある。(注27) これらの胎土はやや大粒の石英・長石類のほか、チャートを含むものが多く、焼き上がりは赤褐色を呈するものが多い。

505は擬凹線文の上に円形浮文を貼り付ける広口壺で、胎土には石英・長石・シャモット等を多く含む。506は垂下口縁に円形浮文を貼り付けるもので、口縁部内面には波状文が施される。器台である可能性もあるが、壺として図化した。507は水差し、あるいは壺の口縁部である。508から516は甕の口頸部である。508～510は「く」字状口縁を持つ甕であり、端部は面を持つように整形する。511～514は擬凹線文を持つ甕である。上方に拡張するものは511の１点のみであり、他のものは端部を上下に面を持たせるように整形し、２～３条の擬凹線文を施す。満願寺遺跡出土の甕は口縁部形状にかかわらず外面はハケ、内面にはケズリが認められる。517～523は壺、甕類の底部である。なお､523は胎土に極細粒の有色鉱物を多く含み､焼き上がりも白色を呈する等、ほかの土器とはやや異なる。弥生時代中期の混入と考えられる。524は焼成前穿孔を施す有孔鉢



第45図　出土鉄製品実測図



第46図　弥生土器実測図

である。

525～528は高杯脚部である。525、526は大山式に特徴的な柱状脚高杯である。525は内面に顕著に絞り痕を残す。527、528は裾部がスカート状に広がる高杯である。529は粗製の土器で、指頭圧痕を顕著に残す。台付の鉢であろうか。埋甕ＳＸ51から出土している。530は器台の裾部である。

531～533は調査区周辺で採取された弥生土器である。531は擬凹線文を持つ広口壺である。胎土には石英・長石類を多量に含む。532は甕である。533は壺の底部である。

（桐井理揮）

８．遺物と遺構について

１）出土遺物の概要

満願寺跡の遺物は、建物を検出した範囲から遺物コンテナ60箱程度出土している。出土傾向を知るため、出土総点数を数えた。その結果、破片点数で約24,000点の遺物が出土している。それぞれの傾向について確認していく。

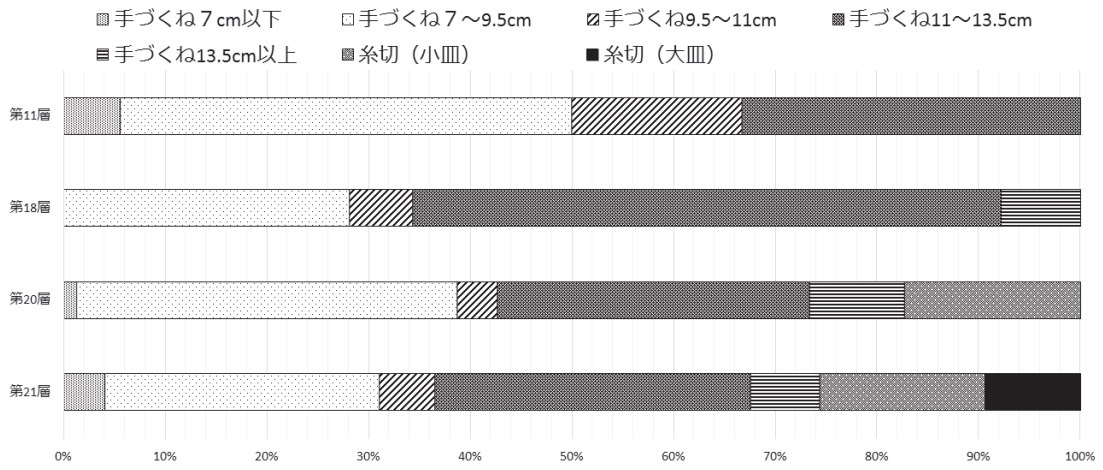
遺物組成は土師器が９割を占め、残りは貿易陶磁器や瓦器などである。うち図示した土師器は377点を数える。図示した土師器皿の手づくねの皿と回転糸切の皿の割合は、整地層別にみると第21層７：３、第20層８：２で、第18層より上では回転糸切の皿が減少する（第47図）。第21層では口径10cmを越える手づくねの皿が少なく、口径14～16cmを測る回転糸切の皿が認められる。その上層である第20層では、回転糸切の大皿は認められない。大型の手づくねの皿が増える傾向もないため、口径14～16cmを測る回転糸切がなくなっていくものと考えられる。

黒色土器は１点確認するのみである。黒色土器A類、内側が黒化しているタイプの破片である。

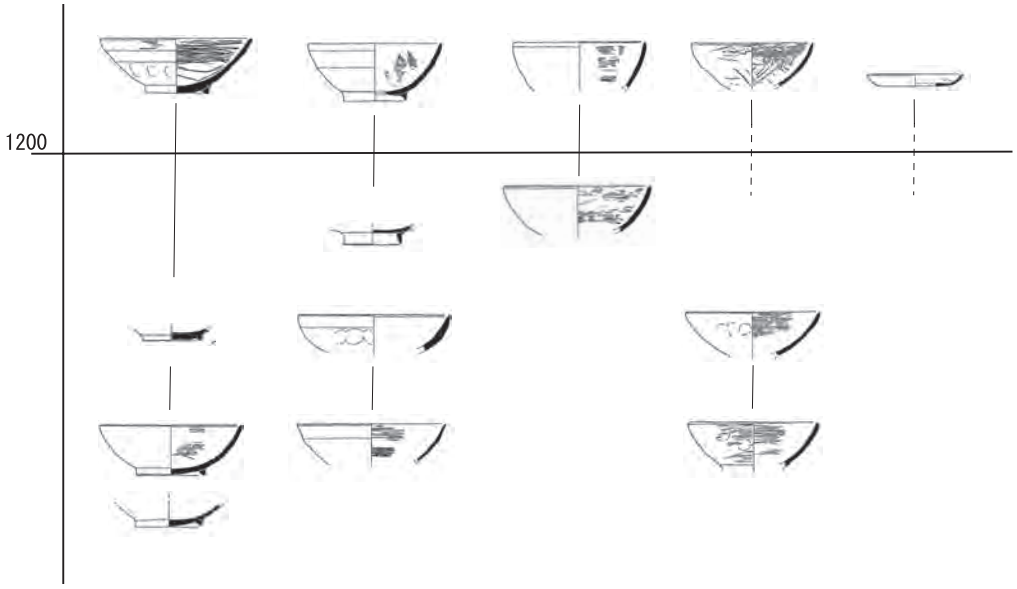
瓦器椀では高台形状、口縁部形状から複数のタイプがあることが判明した（第48図）。なお、今回の調査では楠葉型や大和型と判断できるものはない。

陶器は、東播系の片口鉢や常滑系の山茶椀、甕、古瀬戸の四耳壺や火鉢などが出土している。破片点数では約200点で全体の1/100程度である。時期のわかるものでは東海系の山皿・甕が３～５型式、古瀬戸四耳壺がⅠ～Ⅱ期の製品である。同市大川遺跡では越前や丹波も搬入されているが、満願寺では、積極的に越前、丹波と判断できるものはない。

貿易陶磁器類は福建諸窯、河北省磁州窯の製品が搬入されている。朝鮮陶磁器は認められない。器種では、青磁椀、白磁椀、白磁壺、白磁水注、褐釉盤、黒釉壺などがある。壺類などは最下層の建物に伴うもので、それ以降の建物跡には、椀類が中心である。12世紀前後で搬入される器種に違いが認められることは遺跡の性格を示す資料として考えることができよう。



第47図　整地層別土師器皿の割合



第48図　出土瓦器編年案

２）遺構の時期と機能

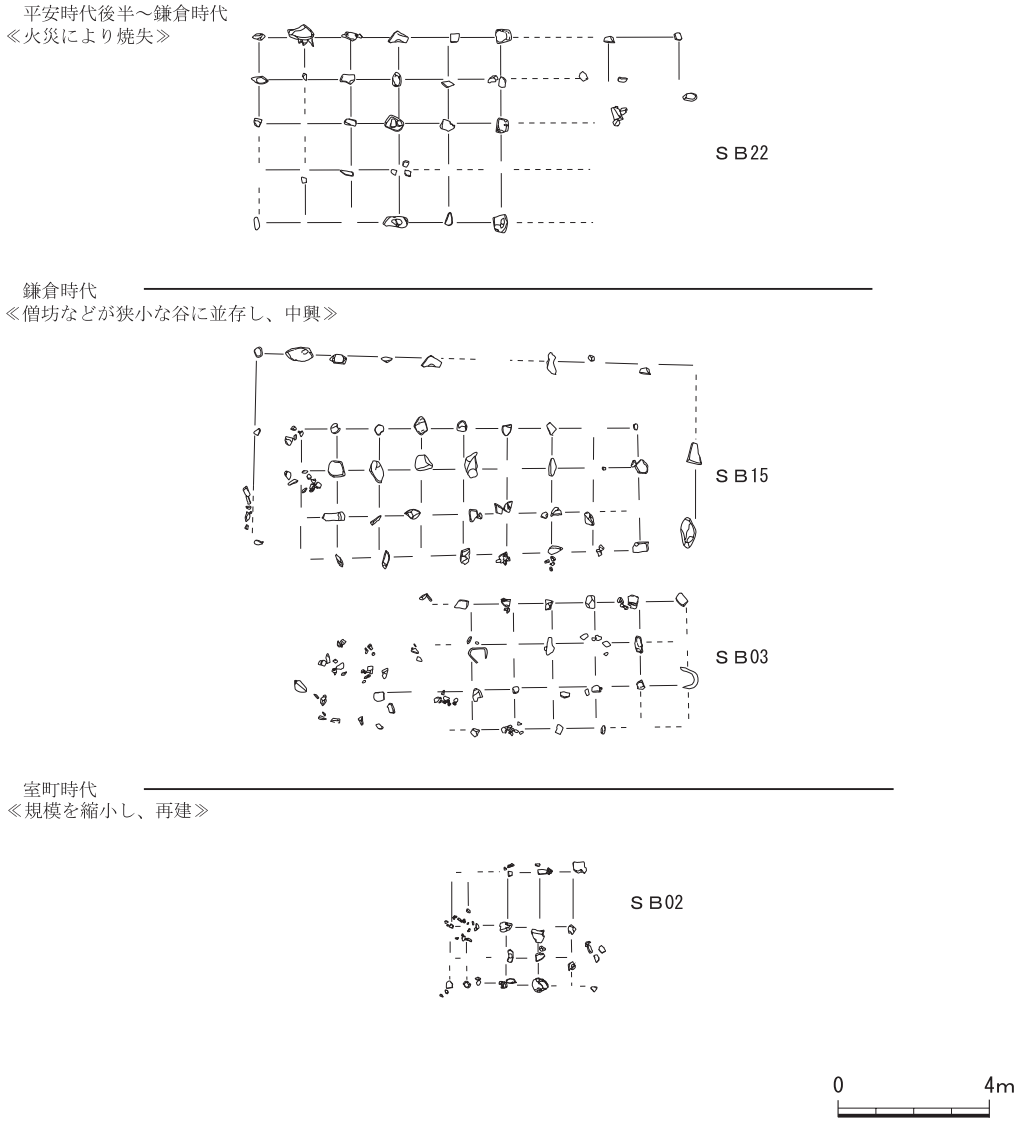
今回の調査では、中世満願寺に伴う建物跡を４棟確認した。第46図に示したように、３期に分類をした。礎石建物については山岸常人氏に所見をいただき、検討を進めた。

（１）建物の時期

礎石建物ＳＢ22は、検出状況から礎石が原位置を保っていると考えられ、柱間寸法概ね４尺が基準の建物である。平面形式は不明である。時期については、山岸氏からは建築史の立場から平安時代まで遡らないと所見をいただいている。一方、礎石建物ＳＢ22の火災後の整理に掘削された廃棄土坑ＳＫ28出土遺物には黒釉壺や土師器などがあり、黒釉壺の製作年代は1160～1320年、白磁四耳壺は11世紀末から12世紀代、土師器の生産年代は平尾編年５B並行期（1140～1170年）と概ね12世紀の年代観を示す。また、礎石建物ＳＢ22を覆う炭化物層から出土する遺物には常滑３型式の甕や磁竈窯系黄釉鉄絵花文盤など12世紀代の遺物が多い。さらに炭化物層から出土した炭化米塊の年代ついては、放射性炭素年代測定により1217～1266年の年代値が示されている。50年の時間幅があることから一概に指摘はできないが、重要な年代値と考えることができる。これらのことから、建物の時期は12世紀後半から13世紀初頭と考えたい。

礎石建物ＳＢ03・15は同時期に隣接して建てられたと考えられる。礎石の並びの傾きがやや異なることや柱間寸法が異なること、検出高の違いから別棟の建物ととらえることができる。埋甕ＳX51外側の炭化物の年代が、1225～1275年を示していることや遺物の年代から13世紀前～中ごろに据えることができる。

礎石建物ＳＢ02は規模が小さくなり、柱間0.9m程度の建物である。出土遺物が少なく、時期の特定が難しいが、第35図、第36図の遺物を見ると13世紀中ごろ以降に比定することができそうである。



第49図　建物変遷図

（２）建物の機能

発掘調査成果と山岸氏の所見を合わせると、礎石建物ＳＢ22・03・15は僧房、ＳＢ02は仏堂の可能性が高い。礎石建物ＳＢ22は谷奥側に礎石が集中しており、全体像は不明である。礎石建物ＳＢ03・15は狭小の谷部に併存し、石組溝ＳＤ01によって区画されている。狭小の谷部に２棟の建物が併存する事例が、時期は新しくなるが、和歌山県根来寺でも確認されている[注28]。出土遺物に六器や華瓶のような土器製仏具と考えられるものが含まれることや貿易陶磁器類についても使用痕が多く認められることから、生活と修行の空間が一体となった僧坊の存在が考えられる。整地層からは食膳具が多く認められることから、生活空間としての性格が強いものと考えられる。

９．ま と め

今回の調査では、満願寺に関係する遺構、遺物を確認することができたことや磁州窯の製品が持ち込まれていることなど、予想以上の成果を得ることができた。最下層の礎石建物ＳＢ22に関しては、満願寺創建以前の可能性がある。満願寺創建は、本尊の墨書(注29)を根拠として、建保６(1218)年とされている。しかし、この年については、本尊の製作年代を示しているだけで、創建年代と必ずしも一致するとは限らない。礎石建物ＳＢ22の火災後の整理に掘削された廃棄土坑ＳＫ28は、出土遺物が12世紀後半から13世紀初頭にまとまりを持つことから、平安時代末から鎌倉時代初頭と考えたい。また、礎石建物ＳＢ22を覆う炭化物層から出土した炭化米塊の年代が２σで1217～1266年を示すことから、それ以前の建物と考えることができる。

以上のことから、1218年以前に満願寺の前身となる寺院が存在し、その後、前身寺院が火災によって焼失し、新たに本尊が寄進され、現在の満願寺に続く寺院が建立された可能性がある。

これらの成果、検討を含め、今回の調査では、一部であるが平安時代末頃から鎌倉時代の寺院の様相を明らかにすることができたといえよう。

（竹村亮仁）

注１　舞鶴市史編さん委員会『舞鶴市史・通史編(上)』1993
注２　清水大吉郎ほか「舞鶴層群の層序:舞鶴地帯の層序と構造(その10)」『地質學雑誌』68 巻 800 号 1962
注３　注１に同じ
注４　『浦入遺跡群』(京都府遺跡調査報告書　第29冊)　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　2001
注５　注１に同じ
注６　「平辰清寄進状案」『東寺百合文書』(京都府立京都学・歴彩館 東寺百合文書WEB)
注７　注１に同じ
注８　記念誌編さん委員会『満願寺創建八百年記念　西紫雲山満願寺　十一面観音菩薩像－八百年の歴史－』(宗)満願寺　2018
注９　岡田健吾「[６] 満願寺跡試掘･確認調査(第１次調査)」『京都府埋蔵文化財調査報告書(平成30年度)』京都府教育委員会　2019
注10　地元自治会保存資料
注11　伊藤晶文「宮城県富谷 丘陵小流域における斜面崩壊発生史」『地形』第25巻第４号　2004
注12　「大宰府条坊跡ＸＶ―陶磁器分類編―」『太宰府市の文化財』第49集　太宰府市教育委員会　2000
注13　山本信夫「2.中世前期の貿易陶磁器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会　1995
注14　同定については大阪市東洋陶磁美術館小林仁氏、調整については京都国立博物館尾野善裕氏のご教示を得た。
注15　田中克子「磁州窯系陶器について」『太宰府天満宮Ⅲ―第３・４次調査―』(『太宰府市の文化財』第26集)太宰府市教育委員会　1995
注16　马萌萌「黑釉凸线纹瓷器初探」『中国国家博物館刊』中国国家博物館　2018
注17　新田和央「畿内系火鉢の初期拡散－王ノ壇遺跡出土火鉢の再検討」『宮城考古学』第19号　2017

注18　中野晴久「9- 2.常滑・渥美」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会　1995

注18　藤澤良祐「9-1.古瀬戸」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会　1995

注20　竹原一彦「丹後における黒色土器について」『京都府埋蔵文化財論集』第１集　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター　1987

注21　注11に同じ

注22　平尾政幸「土師器再考」『洛史』第12号　（公財）京都市埋蔵文化財研究所　2019

注23　注17に同じ

注24　（公財）元興寺文化財研究所佐藤亜聖氏のご教示による

注25　『大おにぎり展　出土資料からみた穀物の歴史』横浜市歴史博物館　2014

注26　関広尚世「鉄磬考～祈りのひびき～」『京都府埋蔵文化財情報』第120号　（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター　2013

注27　高野陽子「擬凹線文土器の様式と編年」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター　2006

注28　五味文彦ほか『中世寺院　暴力と景観』考古学と中世史研究第４巻　高志書院　2007

注29　注８に同じ　（膝裏墨書）「建保６年戊寅９月２日/奉造立周半丈六/中奉籠自長□谷カ□寺カ/奉請十一面観世□音カ/御躰一□/願主丹後国満願寺/院主大法師弁圓/生年六十九□字カ覺王房/自今年七月廿三日午時/摸始同今月今日造立/生立山城国□成カ年/比叡山楞厳院/老年丹州満願寺/□□□惣カ比カ丘カ縁□/法界平等/利益為也」

付編１．放射性炭素年代測定報告

株式会社古環境研究所

１．はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}C）の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌さらには土器付着炭化物などが測定対象となり、約５万年前までの年代測定が可能である（中村,2003）。今回の分析調査では、満願寺跡の発掘調査で出土した遺構の年代に関する情報を得る目的で、放射性炭素年代測定を実施した。

表１　測定試料及び処理

試料番号	出土位置	資料	前処理・調整	測定法
№１	埋め甕 SX51 内	炭化物	酸－アルカリ－酸処理（AAA）	ＡＭＳ
№２	埋め甕 SX51 外	炭化物	酸－アルカリ－酸処理（AAA）	ＡＭＳ
№３	土坑 SP55 内	炭化物	酸－アルカリ－酸処理（AAA）	ＡＭＳ

※ AMS（Accelerator Mass Spectrometry）は加速器質量分析法

２．試料と方法

試料は、埋め甕 SX51 の内部と外部から採取された炭化物、土坑 SP11 の内部から採取された炭化物の計３点である。表１に、測定試料の詳細と前処理・調整法および測定法を示す。

試料の付着物を取り除いた後、酸-アルカリ-酸（AAA:Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と結果表に記載する。

化学処理後の試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO2）を発生させ、真空ラインで二酸化炭素を精製する。精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。グラファイトを内径1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

測定方法は、加速器をベースとした^{14}C-AMS 専用装置を使用し、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）、^{14}C 濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。$\delta^{13}C$ は、試料炭素の^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である。

３．結 果

加速器質量分析法（AMS：Accelerator Mass Spectrometry）によって得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素（^{14}C）年代および暦年代（較正年代）を算出した。表２にこれらの結果を示し、図１に暦年較正結果（較正曲線）を示す。

^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach,1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を結果表に示す。^{14}C年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±1σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（1σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下１桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース（Reimer et al.,2013）を用い、OxCalv4.3較正プログラム（Bronk Ramsey,2009）を使用する。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」・「cal BP」という単位で表される。

表２　測定結果

試料番号	測定№（IAAA-）	δ^{13}C（‰）	暦年較正用年代（年BP）	^{14}C年代（年BP）	暦年代（西暦） 1σ（68.2％確率）	暦年代（西暦） 2σ（95.4％確率）
№1	192186	-23.32 ± 0.44	1543 ± 23	1540 ± 20	432 calAD-490 calAD（46.3%） 532 calAD-557 calAD（21.9%）	427 calAD-570 calAD（95.4%）
№2	192187	-27.58 ± 0.33	779 ± 21	780 ± 20	1225 calAD-1233 calAD（13.9%） 1243 calAD-1269 calAD（54.3%）	1220 calAD-1275 calaD（95.4%）
№3	192188	-29.79 ± 0.44	844 ± 22	840 ± 20	1169 calAD-1220 calAD（68.2%）	1161 calAD-1252 calAD（95.4%）

BP：Before Physics（Present），AD：紀元

４．所 見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果は、以下のとおりである。

埋め甕SX51内部出土の炭化物は、1540±20yrBP（2σの暦年代で427 calAD～570 calAD）、埋め甕SX51外部出土の炭化物は、780±20yrBP（2σの暦年代で1220 calAD～1275 calAD）、土坑SP55内部出土の炭化物は、840±20yrBP（2σの暦年代で1161 calAD～1252 calAD）の年代値であった。

参考文献

Bronk Ramsey, C.,2009,Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), p.337-360.

中村俊夫,2003,放射性炭素年代測定法と暦年代較正．環境考古学マニュアル, 同成社, p.301-322.

Reimer, P.J. et al.,2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), p.1869-1887.

Sakamoto,M.,Imamura,M.,van der Plicht,J.,Mitsutani,T.,Sahara,M.:: Radiocarbon calibration for Japanese wood samples.Radiocarbon,45(1), 81-89,200p.

Stuiver, M. and Polach, H.A.,1977,Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363.

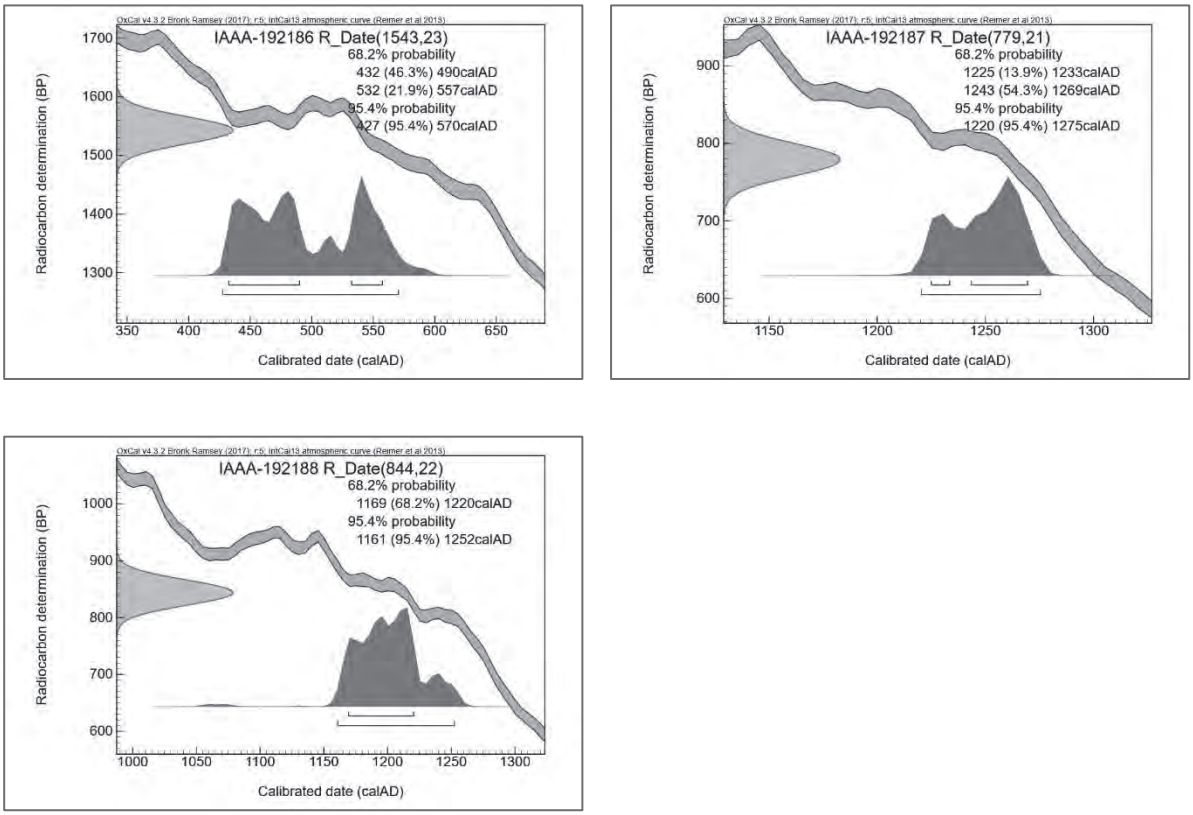


図１　暦年較正図

付編2　満願寺跡出土炭化物の同定および放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本分析調査では、満願寺跡（京都府舞鶴市万願寺地内）の発掘調査で検出された火災時の整理とされる炭化物層を対象として、出土塊状炭化物の種実同定および放射性炭素年代測定を実施し、植物利用および火災時期に関する資料を作成する。

1．試料

試料は、1trⅡ-r4区の炭化物層より出土した塊状炭化物２点である。

2．分析方法

(1)種実同定

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、現生標本等との対照から種実の同定を実施する。分析後は、保存状態が良好な場所を避けた一部（0.10g）を採取し、放射性炭素年代測定に供す（図版1-1a,b）。残試料は容器に戻す。

(2)放射性炭素年代測定

試料表面に付着した不純物等を削り取り、50mg程度に調整する。塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理AAA:Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1.2mol/Lである。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）は光信理化学製作所の自動化装置を用いる。処理後のグラファイト･鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径１mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を用いて、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX-Ⅱ）、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6等）、バックグラウンド試料（IAEA-C1）の測定も行う。

δ^{13}Cは試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。測定

年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver & Polach 1977）。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、その後訂正された半減期（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正のもとになる直線は暦時代がわかっている遺物や年輪（年輪は細胞壁のみなので、形成当時の^{14}C年代を反映している）等を用いて作られている。暦年較正に用いるソフトウエアはOxcal4.4（Bronk,2009）、較正曲線はIntcal20（Reimer et al.,2020）を用いる。なお、年代測定値に関しては、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるのが普通であるが（Stuiver and Polach,1977）、将来的な較正曲線ならびにソフトウエアの更新に伴う再計算ができるようにするため、表には丸めない値（１年単位）も記す。

３．結 果

（１）種実同定

塊状炭化物は、イネ（Oryza sativa L.）の玄米（穎果）・籾（内外穎）に同定され、複数粒が集結した状態であった。なお、炭化米の部位が、果皮の一部や種皮が残る「玄米」であるか、これらを取り除いた「精白米」であるかを厳密に区別することは困難であるため、本分析では可食部を玄米としている。以下、形態的特徴を記す。

・年代測定対象試料（図版１）

塊状炭化物は黒色を呈し、長さ18.67mm、幅12.41mm、厚さ15.74mm、重量1.00g（泥含む）を測る（図版1-1）。塊状炭化物の表面は、長さ18.67mm、幅12.41mmの1面のみ穀粒の形状を留めるが（図版1-1c）、他の面は穀粒が割れた楕円状断面が多数確認され、その一部（0.10g）を年代測定対象とした（図版1-1a,b）。

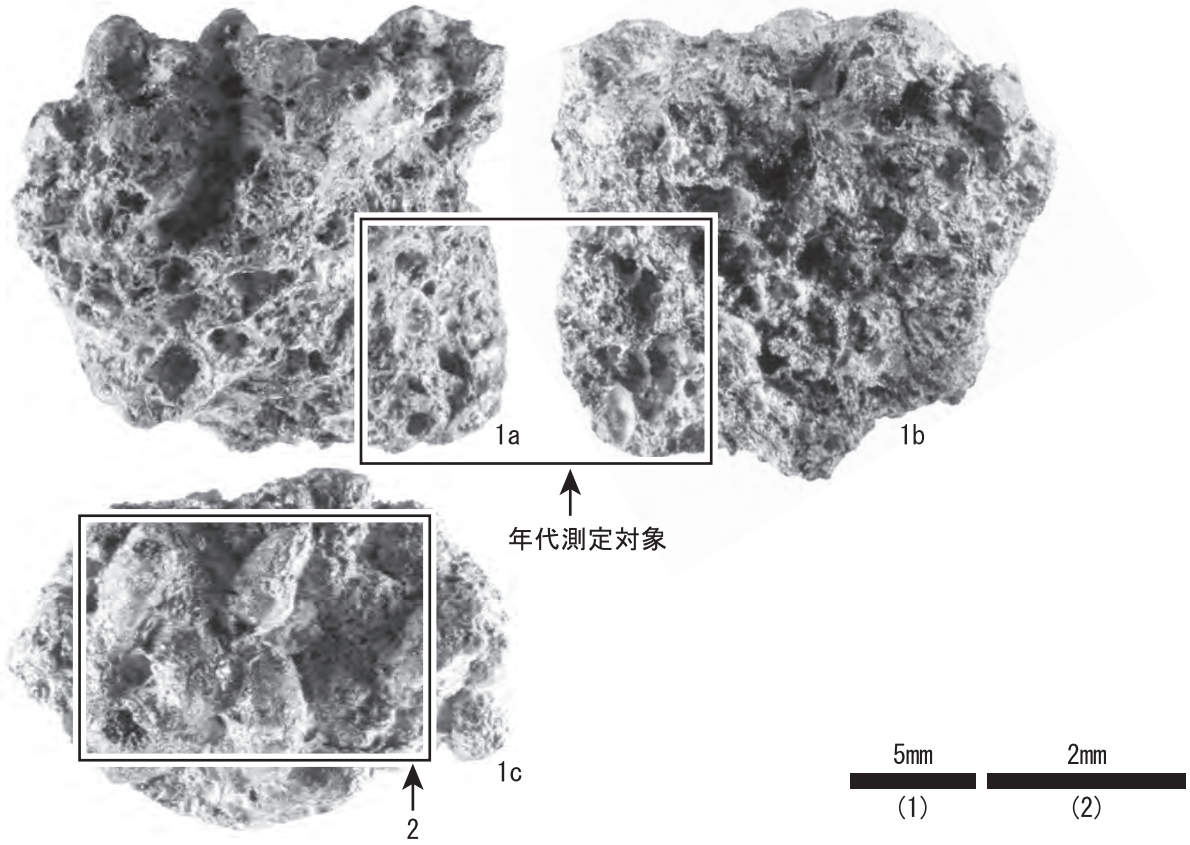
玄米個々の向きは区々で、隣接する別個体と癒着している（図版1-2）。なお、表面や断面にイネの籾やイネ以外の種実、植物片、虫類等の混入は確認されなかった。

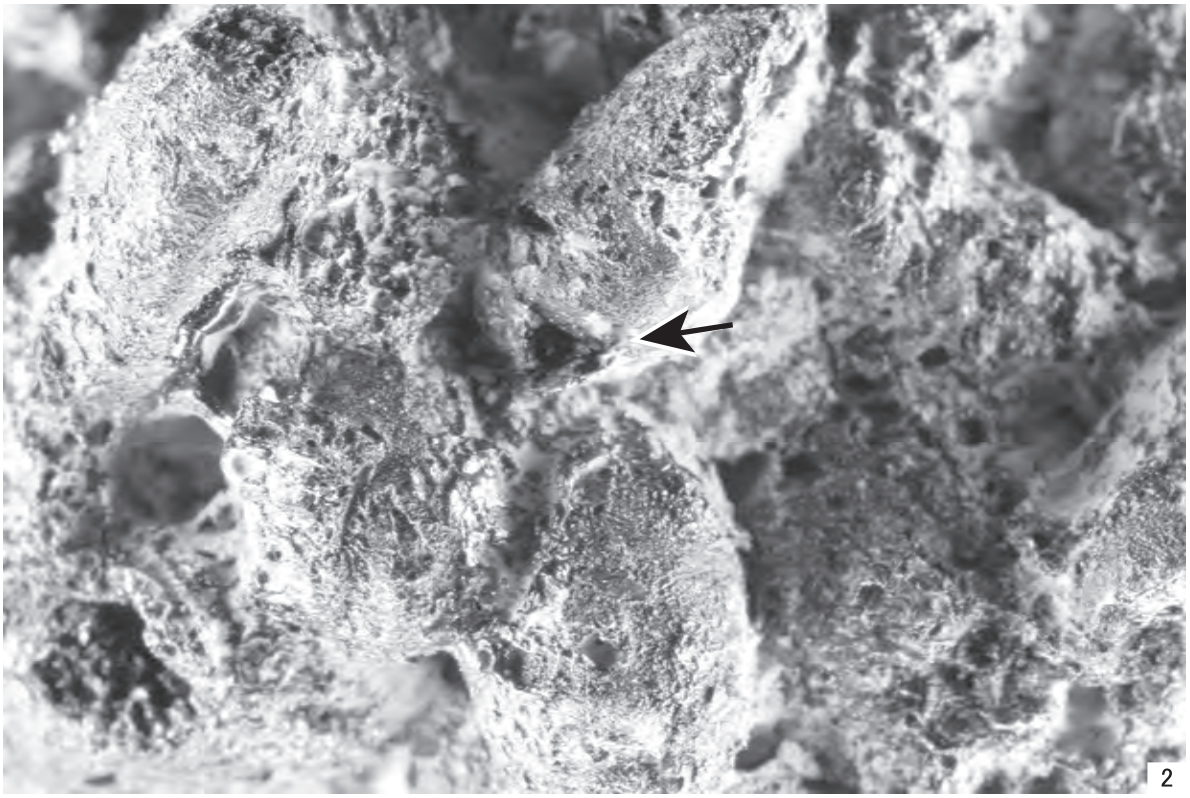
玄米は、長さ4.0～5.5mm、幅2.5～3.5mm、厚さ1.0～2.0mm程度のやや偏平な長楕円体を呈す。保存状態は不良で、表面は焼き膨れや発泡、隣接する別個体と癒着しており、２～３本の縦隆条は殆ど確認されない。ただし、一部の基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部が確認される点を同定根拠とした（図版1-2）。

・年代測定対象外試料（図版２）

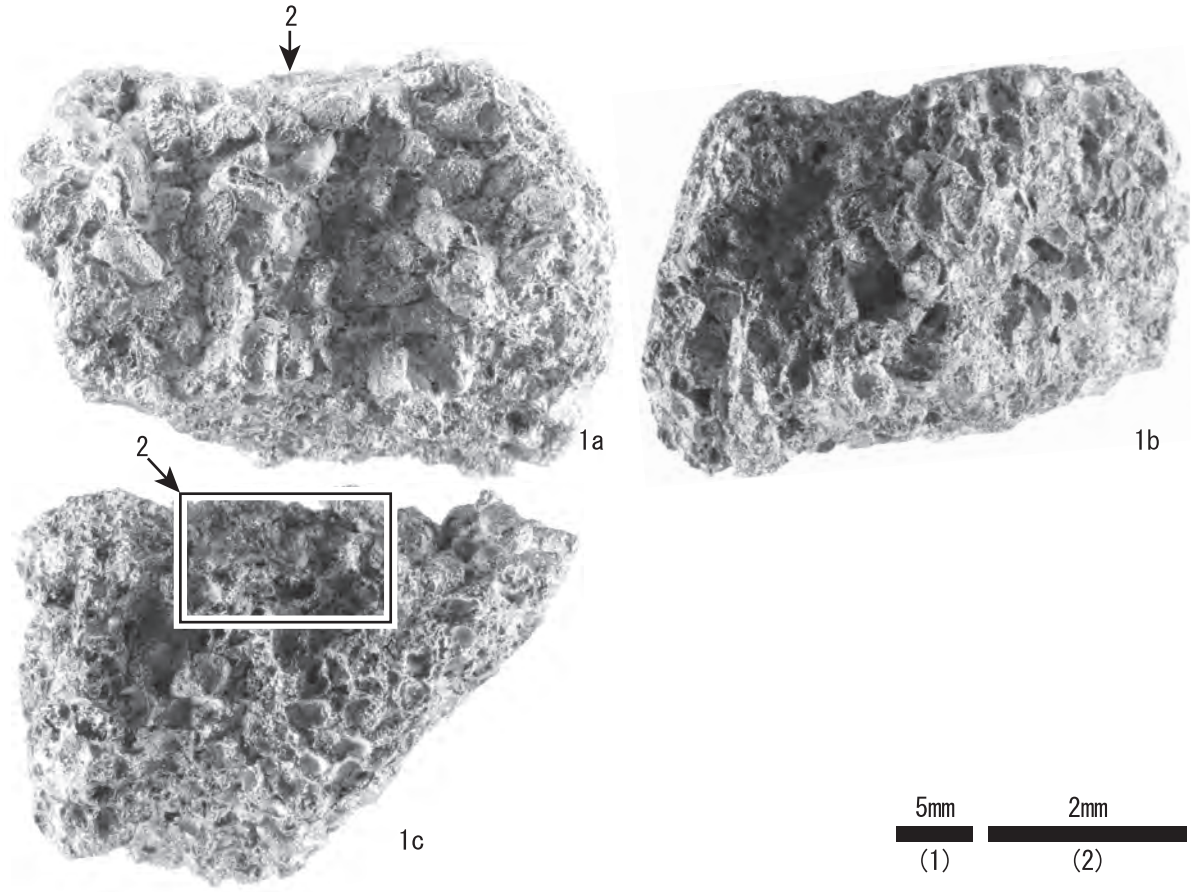
塊状炭化物は黒色を呈し、長さ36.19mm、幅23.34mm、厚さ24.17mm、重量6.53g（泥含む）を測る（図版2-1）。塊状炭化物の表面は、年代測定対象試料と同様に、長さ36.19mm、幅23.34mmの１面のみ穀粒の形状を留める個体が多いが（図版2-1a）、他の面には穀粒が割れた楕円状断面が多数確認される（図版2-1b,c）。玄米個々の向きは区々で、隣接する別個体と癒着している。表面や断面にイネの籾の破片が1個確認された（図版2-2）。イネ以外の種実や植物片、虫類等の混入は確認されなかった。

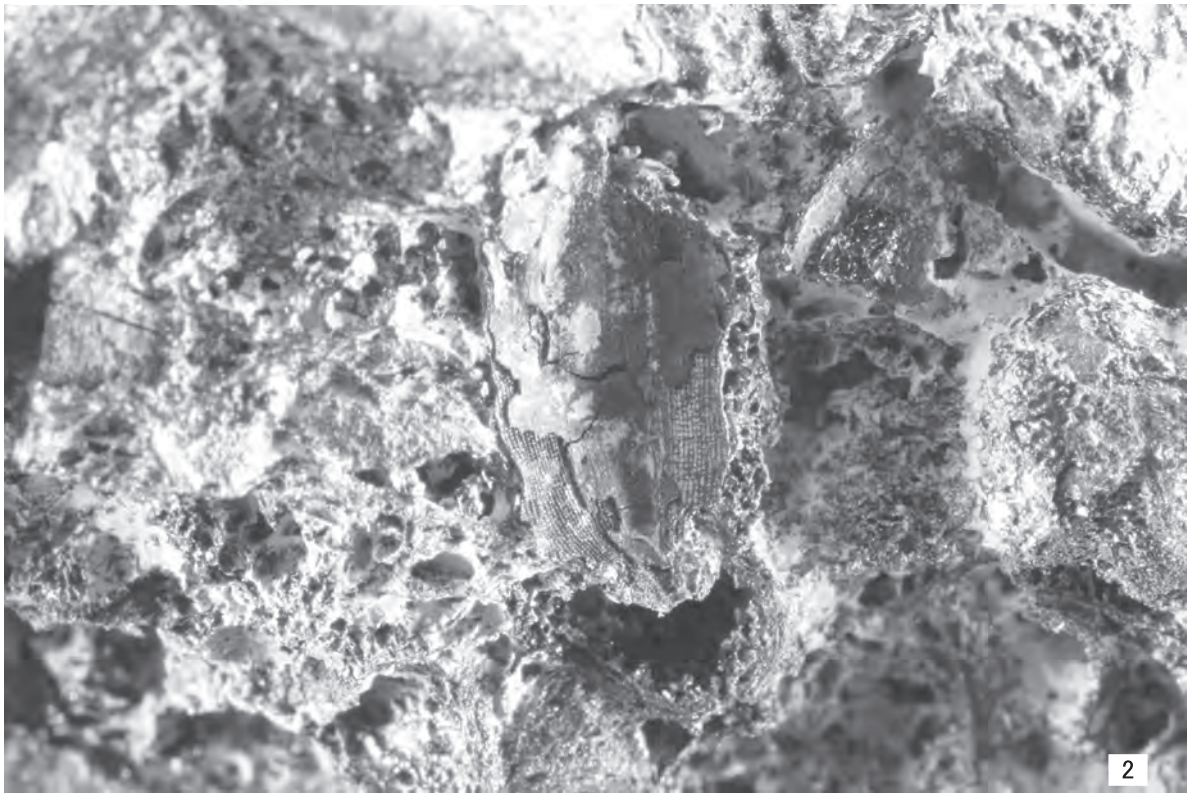
図版1　炭化種実（年代測定対象）





図版2　炭化種実





1. イネ　玄米(塊状)(1trⅡ-r4区　炭化物層)　　2. イネ　籾・玄米(塊状)(1trⅡ-r4区　炭化物層

籾は、完形ならば長さ6.0～7.5mm、幅3.0～4.0mm、厚さ2.0～3.0mm程度のやや偏平な長楕円体を呈す。基部には径1.0mm程度の斜切状円柱形の果実序柄（小穂軸）と１対の護穎を有し、その上に外穎（護穎）と内穎がある。外穎は５脈、内穎は３脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合して稲籾を構成する。果皮は薄く、表面には微細な顆粒状突起が縦列する（図版2-2）。

（２）放射性炭素年代測定

結果を表１、図１、２に示す。炭化物の量は多く、定法での分析処理によって、測定に必要なグラファイトが得られている。同位体補正を行った値は、815±15BPである。

暦年較正を行った暦年代の2σの値は、calAD1217～1266である。

表１　放射性炭素年代測定結果

性状	方法	補正年代（暦年較正用）BP	δ ^{13}C（‰）	暦年較正年代			Code No.
					年代値	確率 %	
イネ炭化米	AAA（1.2M）	815 ± 15（814 ± 16）	-24.77 ± 0.11	σ	cal AD 1223 - cal AD 1233	728 - 717 calBP	23.1	PLD-42100
					cal AD 1239 - cal AD 1260	711 - 690 calBP	45.2	
				2 σ	cal AD 1217 - cal AD 1266	733 - 684 calBP	95.4	

1）年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。
2）BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の 68.2% が入る範囲）を年代値に換算した値。
4）AAA は、酸・アルカリ・酸処理を示す。
5）暦年の計算には、OxCal v4.4 を使用。
6）暦年の計算には 1 桁目まで示した年代値を使用。
7）較正データーセットは、IntCal20 を使用。
8）較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。
9）統計的に真の値が入る確率は、σが 68.2%、2 σが 95.4% である

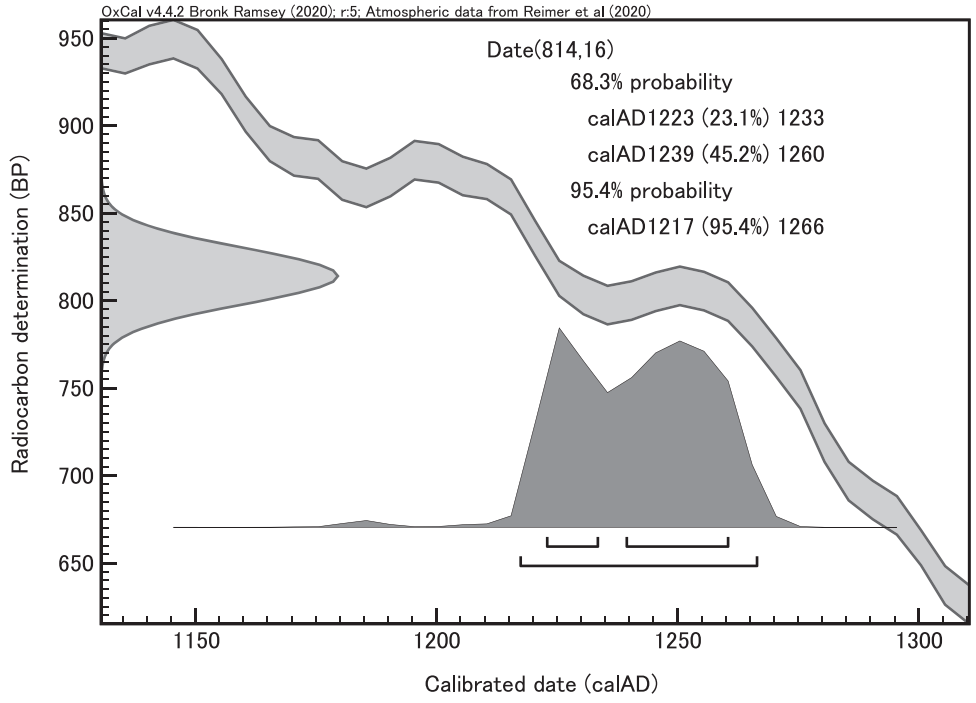
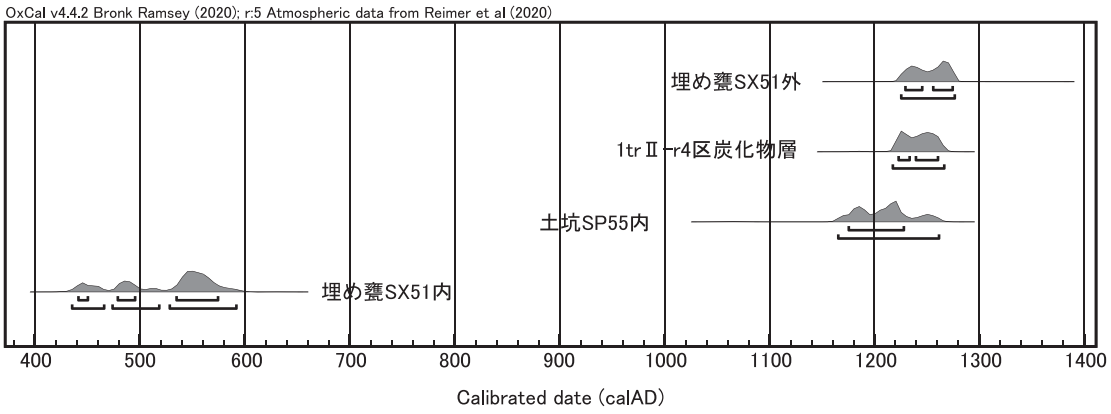


図１　暦年較正結果（１）



注）埋め甕SX51内外・土坑SP55内の3点は、株式会社古環境研究所による測定値を使用した。

図２　暦年較正結果（２）

４．考 察

1trⅡ-r4区の炭化物層より出土した塊状炭化物は、２点ともイネ（炭化米）に同定され、複数粒が集結した「炭化米塊」の状態であった。また、炭化米塊１点の暦年代は、鎌倉時代を示した。

穀類のイネは、満願寺跡周辺で栽培されたか、持ち込まれたかは不明であるが、当時利用された植物質食糧と示唆される。炭化米塊は、１個のみ稲籾片が確認されたが、ほぼ玄米から成り、米以外の種実や植物片､虫類等は認められない。米粒の向きも区々で隣接粒と癒着することから、籾殻を取り去った（籾摺り）後の玄米が多量接した状態で火を受けたとみなされる。また、いずれの米粒も保存状態が不良であり、縦隆条を留めない形状から、米の水分量は比較的高かった可能性がある。さらに、炭化米塊の１面のみが米粒の形状を留め、他の面は割れた炭化米痕が多い状況から、炭化後に他の面が割れて脱落した可能性がある。

上述のような炭化米塊の暦年代が示す範囲の中には、満願寺跡が建立されたと考えられている建保年間（1213～1219年）や、本尊の木造十一面観音菩薩坐像に銘が残された建保６年（1218年）も含まれている。今回の炭化米塊を対象とした放射性炭素年代測定結果は、炭化物層が満願寺跡建立後の火災時の整理とされる発掘調査所見を支持していると考えられ、先に実施された土坑ＳＰ55内や埋め甕ＳＸ51外の年代測定結果とも調和的と言える（図２）。

引用文献

Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon,51,337-360.

Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J. Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S.,2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). Radiocarbon, 62,1-33..

Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.

付表 1　出土土器観察表(土器・陶器)

報告番号	地区名	出土地点	種類	器形	口径(cm)	器高(cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
1	1 トレンチ	Ⅱ－ SD01	瓦器	椀	7.7	2.2	5/12	密	良	内面）灰黄 2.5Y7/2 外面）灰 N5/0	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
2	1 トレンチ	Ⅱ－石組溝 SD01 内	土師器	皿	11.7	2.9	4/12	やや粗	やや軟	浅黄橙 7.5YR8/3	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
3	1 トレンチ	Ⅱ－ p4 SD01	土師器	皿	13.0	2.7	3/12	密	良	内面）浅黄橙 10YR8/3 外面）浅黄橙 7.5YR8/1	内外面ナデ、横ナデ、外面不調整	
4	1 トレンチ	Ⅱ－ r8 SB03	土師器	皿	13.4	(2.3)	1/12	密	良	灰白 10YR8/2	内外面ナデ、横ナデ	白
5	1 トレンチ	Ⅱ－ r8 SB03	瓦器	椀	14.8	5.3	6/12	密	良	灰 N6/0	内面圏線ミガキ	
7	1 トレンチ	Ⅱ SX27	土師器	皿	7.7	1.5	2/12	密	良	灰褐 5YR ５・２	内外面ナデ、横ナデ	
8	1 トレンチ	Ⅱ SX27	土師器	皿	13.3	3.1	6/12	密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、外面不調整、ユビオサエ	
9	1 トレンチ	Ⅱ－ q3 SK29	土師器	皿	7.9	1.15	3/12	やや粗	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ナデ、横ナデ	
10	1 トレンチ	Ⅱ－ q3 SK29	土師器	皿	7.9	1.1	2/12	やや粗	良	浅黄橙 7.5YR8/3	内外面ナデ、横ナデ	
11	1 トレンチ	Ⅱ－ q3 SK29	土師器	皿	7.8	(1.4)	4/12	やや粗	良	浅黄橙 7.5YR8/3	内外面ナデ、横ナデ、外面不調整	
12	1 トレンチ	Ⅱ－ q3 SK29	土師器	皿	11.8	(2.6)	2/12	やや粗	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
13	1 トレンチ	Ⅱ－ r4 SK36	土師器	皿	14.6	3.2	7/12	密	良	灰白 7.5YR8/1 と褐灰 7.5YR5/1	内外面ナデ、横ナデ	
14	1 トレンチ	Ⅱ－ o1 SX52	瓦器	椀	13.4	(4.7)	1/12 以下	密	良	灰 N6/0	内面圏線ミガキ、外面ミガキ、ユビオサエ、	
15	1 トレンチ	Ⅱ－ p1	土師器	皿	7.4	1.5	2/12	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/4、灰白 10YR8/2	内外面ナデ	
16	1 トレンチ	Ⅱ－ q2 SK20	土師器	皿	7.3	1.55	6/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内面摩滅、外面ナデ	
17	1 トレンチ	Ⅱ－ q2 SK20	土師器	皿	8.0	1.8	完形	密	良	浅黄橙 10YR8/3	内面ナデ、外面ナデ、不調整、ユビオサエ	
18	1 トレンチ	Ⅱ－ q2 SK20	土師器	皿	8.0	1.8	9/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
19	1 トレンチ	Ⅱ－ p1 東側断割内－ 8	土師器	皿	12.0	(2.7)	3/12	密	良好	にぶい橙色 7.5YR6/4	内外面ナデ、外面ユビオサエ	
20	1 トレンチ	Ⅱ－ q2 SK20	土師器	皿	7.4	1.65	6/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/6	内面ナデ、外面ナデ、不調整、ユビオサエ	
21	1 トレンチ	Ⅱ－ p2 東側断割内－ 9	土師器	皿	8.1	1.7	ほぼ完形	密	良好	橙色 5YR7/6	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
22	1 トレンチ	Ⅱ－ q2 SK20	土師器	皿	8.6	2.1	ほぼ完形	密	良	浅黄橙 7.5YR8/3	内面摩滅、外面ナデ、不調整、内外面ユビオサエ	
23	1 トレンチ	Ⅱ－ q2 SK20	土師器	皿	8.0	1.9	完形	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ナデ、外面ユビオサエ	
24	1 トレンチ	Ⅱ－ q2 SK20	土師器	皿	7.8	1.8	ほぼ完形	密	良	浅黄橙 7.5YR8/3	内外面ナデ、外面ユビオサエ	
25	1 トレンチ	Ⅱ－ q2 SK20	土師器	皿	9.0	1.7	3/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ナデ、外面不調整	
26	1 トレンチ	Ⅱ－ p1 東側断割内－ 9	土師器	皿	(8.6)	(2.05)	1/12	密	良好	橙 5YR7/6	内外面ナデ、横ナデ、ユビオサエ	
27	1 トレンチ	Ⅱ－ p1 SK20	土師器	皿	11.8	1.65	3/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面摩滅、内面ユビオサエ	
28	1 トレンチ	Ⅱ－ q2 SK20	土師器	皿	11.5	2.0	3/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/3	内外面摩滅、外面横ナデ	
29	1 トレンチ	Ⅱ－ q2 SK20	土師器	皿	14.0	2,45	2/12	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	内外面横ナデ、内面ユビオサエ、外面不調整	
30	1 トレンチ	Ⅱ－ q2 SK20	土師器	皿	12.0	2.6	2/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/3 ~8/4	内面ナデ、横ナデ、ユビオサエ、外面摩滅	
31	1 トレンチ	Ⅱ－ q2 SK20	土師器	皿	13.0	2.7	2/12	密	良	浅黄橙 10YR8/3	内外面ナデ、横ナデ、外面不調整、ユビオサエ	

報告番号	地区名	出土地点	種類	器形	口径(cm)	器高(cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
32	1トレンチ	Ⅱ－q2 SK20	土師器	皿	12.2	2.5	2/12	密	良	灰白 7.5YR8/2~浅黄橙 7.5YR8/4	内外面横ナデ、ナデ、ユビオサエ	
33	1トレンチ	Ⅱ－q2 SK20	土師器	皿	12.8	2.95	9/12	密	良	橙色 7.5YR7/6	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
34	1トレンチ	Ⅱ－q2 SK20	土師器	皿	13.6	2.8	3/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
35	1トレンチ	Ⅱ－p1 東側断割内－8	土師器	皿	12.0	2.7	3/12	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/6	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	白
36	1トレンチ	Ⅱ－q2 SK20	土師器	皿	11.4	3.0	完形	密	良	灰白 10YR8/2	内面不定方向ナデ、横ナデ、外面横ナデ、不調整	
37	1トレンチ	Ⅱ－q2 SK20	土師器	皿	13.2	(2.5)	3/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内面摩滅、外面横ナデ、ユビオサエ	
38	1トレンチ	Ⅱ－q1 SK20	土師器	皿	11.0	2.6	4/12	密	良	浅黄橙 10YR8/3	内外面ナデ、横ナデ	
39	1トレンチ	Ⅱ－q2 SK20	土師器	皿	11.6	3.1	5/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/6	内面横ナデ、外面横ナデ不定方向ナデ	
40	1トレンチ	Ⅱ－q1 SK20	土師器	皿	11.0	3.0	3/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	底部板状圧痕
41	1トレンチ	Ⅱ－q2 SK20	土師器	皿	12.2	3.2	11/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面横ナデ	
42	1トレンチ	Ⅱ－q2 SK20	土師器	皿	11.4	3.2	3/12	密	良	浅黄橙 10YR8/3	内外面横ナデ	
43	1トレンチ	Ⅱ－q2 SK20	土師器	皿	11.9	3.35	6/12	密	良	浅黄橙 10YR8/3	内外面不定方向ナデ、横ナデ	
44	1トレンチ	Ⅱ－q1 SK20	土師器	皿	11.0	2.8	3/12	密	良	浅黄橙 10YR8/3	内面不定方向ナデ、横ナデ、外面横ナデ	
45	1トレンチ	Ⅱ－q2 SK20	土師器	皿	12.0	3.45	ほぼ完形	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ナデ、横ナデ、外面横不定方向ナデ	
46	1トレンチ	Ⅱ－q2 SK20	土師器	皿	11.8	3.1	11/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ナデ、横ナデ、ユビオサエ、外面不調整	
47	1トレンチ	Ⅱ－q2 SK20	土師器	皿	11.9	3.3	6/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ナデ、横ナデ、ユビオサエ、外面不調整	
48	1トレンチ	Ⅱ－q2 SK20	土師器	皿	10.8	(2.6)	4/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ナデ、横ナデ	
49	1トレンチ	Ⅱ－q2 SK20	土師器	皿	11.2	(3.5)	3/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ナデ、横ナデ	
50	1トレンチ	Ⅱ－q2 SK20	土師器	皿	12.3	2.95	8/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内面横ナデ、外面不定方向ナデ、ユビオサエ	
51	1トレンチ	Ⅱ－q2 SK20	土師器	皿	12	3.7	11/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/3	内外面ナデ、横ナデ、外面不調整、ユビオサエ	
52	1トレンチ	Ⅱ－p1 東側断割内－7	土師器	皿	11.6	2.2	3/12	密	良好	橙色 7.5YR7/6	内外面ナデ、横ナデ、ユビオサエ	
53	1トレンチ	Ⅱ－q2 SK20	土師器	皿	11.9	2.9	10/12	密	良	灰白 10YR8/2	内外面横ナデ	白
54	1トレンチ	Ⅱ－q2 SK20	土師器	皿	12.4	2.8	3/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面横ナデ	
55	1トレンチ	Ⅱ－q2 SK20	土師器	皿	12.0	2.6	2/12	密	良	灰白 10YR8/2	内外面摩滅	
56	1トレンチ	Ⅱ－q1 SK20	土師器	皿	11.9	3.1	ほぼ完形	密	良	浅黄橙 7.5YR8/6	内外面ナデ、横ナデ、ユビオサエ	
57	1トレンチ	Ⅱ－p1 東側断割内－9	土師器	皿	10.9	2.9	4/12	密	良好	橙 5YR7/6	内外面ナデ、横ナデ、ユビオサエ	
58	1トレンチ	Ⅱ－q2 SK20	土師器	皿	11.2	2.6	4/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面不定方向ナデ、横ナデ	
59	1トレンチ	Ⅱ－q4 SX24,25	土師器	皿	9.0	2.55	3/12	密	良	灰白 10YR8/2	外面ユビオサエ	
60	1トレンチ	Ⅱ－q4 SX24,25	土師器	皿	12.4	1.7	3/12	密	良	橙色 7.5YR7/6	内外面摩滅	底部板状圧痕
61	1トレンチ	Ⅱ－q4 SX24,25	土師器	皿	12.4	(2.8)	3/12	密	良	橙 5YR7/6	内面横ナデ、外面ユビオサエ	

報告番号	地区名	出土地点	種類	器形	口径(cm)	器高(cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
62	1 トレンチ	Ⅱ－ q4 SX24,25	土師器	Ⅲ	13.0	2.6	3/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ナデ、横ナデ、外面不調整、ユビオサエ	
63	1 トレンチ	Ⅱ－ q4 SX24,25	土師器	Ⅲ	12.4	2.9	4/12	密	良	橙 5YR7/6	内外面横ナデ、外面不調整、沈線	
64	1 トレンチ	Ⅱ－ q4 SX24,25	土師器	Ⅲ	11.6	2.8	5/12	密	良	橙 5YR7/8	内外面横ナデ	
70	1 トレンチ	Ⅱ－ r SK28	土師器	Ⅲ	7.0	1.2	4/12	密	良	浅黄橙 10YR8/3	内外面ナデ、横ナデ	
71	1 トレンチ	Ⅱ－ r SK28	土師器	Ⅲ	8.4	(1.25)	3/12	粗	良	灰白 7.5YR8/2	内外面ナデ、横ナデ	
72	1 トレンチ	Ⅱ－ r SK28	土師器	Ⅲ	8.9	1.25	3/12	密	良	灰白 10YR8/2	内外面ナデ、横ナデ	白
73	1 トレンチ	Ⅱ－ r SK28	土師器	Ⅲ	9.2	1.0	3/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/6	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
74	1 トレンチ	Ⅱ－ r SK28	土師器	Ⅲ	8.2	1.2	5/12	密	良	浅黄橙 10YR8/4	内面摩滅、外面横ナデ、不調整	
75	1 トレンチ	Ⅱ－ r SK28	土師器	Ⅲ	8.0	1.5	5/12	密	良	浅黄橙 10YR8/3	内外面横ナデ	
76	1 トレンチ	Ⅱ－ r SK28	土師器	Ⅲ	8.4	1.55	6/12	やや粗	良	浅黄橙 7.5YR8/3	内外面ナデ、横ナデ	
77	1 トレンチ	Ⅱ－ r SK28	土師器	Ⅲ	8.7	1.3	6/12	粗	良	浅黄橙 7.5YR8/3	内外面ナデ、横ナデ、外面不調整	
78	1 トレンチ	Ⅱ－ r SK28	土師器	Ⅲ	8.8	1.1	－	密	良	浅黄橙 10YR8/3	内外面ナデ、横ナデ、外面不調整、ユビオサエ	
79	1 トレンチ	Ⅱ－ r SK28	土師器	Ⅲ	8.0	1.45	32.5/12	密	良	浅黄橙 10YR8/3	内外面横ナデ、摩滅	
80	1 トレンチ	Ⅱ－ r SK28	土師器	Ⅲ	7.2	1.3	3/12	密	良	浅黄橙 10YR8/3	内外面横ナデ、摩滅	
81	1 トレンチ	Ⅱ－ r SK28	土師器	Ⅲ	8.2	1.6	ほぼ完形	密	良	浅黄橙 10YR8/4	内外面横ナデ、摩滅	
82	1 トレンチ	Ⅱ－ r SK28	土師器	Ⅲ	8.4	1.35	7/12	密	良	浅黄橙 10YR8/4	内外面横ナデ、摩滅	
83	1 トレンチ	Ⅱ－ r SK28	土師器	Ⅲ	8.8	1.35	4/12	密	良	灰白 10YR8/2	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ、摩滅、	
84	1 トレンチ	Ⅱ－ r SK28	土師器	Ⅲ	8.0	1.5	1/12	密	良	浅黄橙 10YR8/3	内外面横ナデ、摩滅	
85	1 トレンチ	Ⅱ－ r SK28	土師器	Ⅲ	8.0	1.4	5/12	密	良	灰白 2.5Y8/2	内外面横ナデ、摩滅	
86	1 トレンチ	Ⅱ－ r SK28	土師器	Ⅲ	8.0	2.2	3/12	密	良	橙 5YR7/6	内外面ナデ、横ナデ	
87	1 トレンチ	Ⅱ－ r SK28	土師器	Ⅲ	12.0	2.1	3/12	密	良	浅黄橙 10YR8/4	内外面摩滅	
88	1 トレンチ	Ⅱ－ r SK28	土師器	Ⅲ	11.0	2.5	1/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面横ナデ、摩滅	
89	1 トレンチ	Ⅱ－ r SK28	土師器	Ⅲ	13.3	2.9	3/12	粗	良	浅黄橙 10YR8/4	内外面ナデ、横ナデ、外面不調整、ユビオサエ	
90	1 トレンチ	Ⅱ－ r SK28	土師器	Ⅲ	10.8	2.45	2/12	やや粗	良	灰黄 2.5Y8/2	内外面ナデ、横ナデ	
91	1 トレンチ	Ⅱ－ r SK28	土師器	Ⅲ	13.3	3.4	2/12	やや粗	良	浅黄橙 10YR8/3	内外面ナデ、横ナデ	
92	1 トレンチ	Ⅱ－ r SK28	土師器	Ⅲ	14.3	2.85	7/12	やや粗	良	灰白 7.5YR8/2	内外面ナデ、横ナデ、外面不調整、ユビオサエ	
93	1 トレンチ	Ⅱ－ r SK28	陶器	山皿	7.8	1.7	6/12	密	良好	外）灰白 10YR7/1 内）灰オリーブ 7.5Y6/2		常滑系
97	1 トレンチ	Ⅱ－ r SK28	土師器	火鉢	45.0	10.6	4/12	やや粗	良好	浅黄橙 7.5YR7/6	内外面回転ナデ、回転横ナデ、ユビオサエ	
98	1 トレンチ	Ⅱ－ p4	土師器	Ⅲ	8.8	1.7	ほぼ完形	密	良	にぶい橙 5 YR7/6	内外面ナデ、横ナデ	
99	1 トレンチ	Ⅱ－ s2 SX51	土師器	Ⅲ	8.0	1.5	6/12	密	良	灰 7.5Y4/1	内面横ナデ、ユビオサエ、外面摩滅	
100	1 トレンチ	Ⅱ－ s2 東側断割内－ 2	土師器	Ⅲ	12.1	3.25	完形	密	良	浅黄 2.5Y8/3	内面不定方向ナデ、横ナデ、外面横ナデ、不調整	

報告番号	地区名	出土地点	種類	器形	口径(cm)	器高(cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
101	1トレンチ	Ⅱ－p4	土師器	皿	8.8	1.7	ほぼ完形	密	良	にぶい橙５YR7/4	内外面ナデ、横ナデ	
102	1トレンチ	SX51	土師器	皿	9.0	1.6	6/12	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、摩滅	
103	1トレンチ	SX51	土師器	皿	12.0	2.2	2/12	密	良好	黄灰 2.5Y4/1	内外面一方向ナデ、横ナデ、外面不調整	
104	1トレンチ	Ⅱ－s2 SX51	土師器	皿	12.8	3.1	6/12	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
105	1トレンチ	Ⅱ－s2 SX51	瓦器	皿	13.2	3.2	9/12	密	良	内）黒褐 10YR3/1 外）褐灰 10YR6/1	内外面ナデ、横ナデ、不調整	
106	1トレンチ	Ⅱ－s2 SX51	土師器	皿	12.8	3.2	完形	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、外面不調整、工具痕	
107	1トレンチ	Ⅱ－s2 SX51	常滑	甕	31.0	22.6	1/12以下	密	堅緻	オリーブ 5Y5/4	回転ナデ、指ナデ	
108	1トレンチ	Ⅱ－s2 SX51	須恵器	甕	49.6	－	12/12	密	堅緻	暗灰 N3/0~ 暗灰 N5/0	ナデ、回転ナデ、タタキ、ハケ	東部山陰系
109	2トレンチ	Ⅱ－t7	瓦質土器	鍋	29.8	(2.4)	1/12	密	良	褐灰 10YR5/1	内外面ナデ、横ナデ	
110	2トレンチ	Ⅱ－t7	瓦質土器	奈良火鉢	34.0以上	(6.55)	2/12	密	良	褐灰 10YR4/1	内面ナデ、横ハケ、横ナデ、外面貼り付け、スタンプ文様	
111	1トレンチ	Ⅱ－r1	土師器	皿	5.5	1.8	3/12	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	内外面ナデ、ユビオサエ	
112	1トレンチ	Ⅱ－r4	土師器	皿	6.8	1.5	1/12	やや粗	良好	褐灰 5YR5/1	内外面ナデ、横ナデ、ユビオサエ	
113	1トレンチ	Ⅱ－r2	土師器	皿	7.6	1.7	完形	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	内外面ナデ、ユビオサエ	
114	1トレンチ	Ⅱ－q3	土師器	皿	8.4	1.6	11/12	密	良	灰白 10YR8/2	内外面ナデ、横ナデ、外面不調整、ユビオサエ	
115	1トレンチ	Ⅱ－r1	土師器	皿	9.0	1.85	3/12	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、ユビオサエ	
116	1トレンチ	Ⅱ－r2	土師器	皿	8.2	1.9	完形	密	良	にぶい黄橙 10YR7/2	内外面ナデ、ユビオサエ	
117	1トレンチ	Ⅱ－r2	土師器	皿	8.6	1.85	6/12	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	煤付着
118	1トレンチ	Ⅱ－r1	土師器	皿	11.3	2.15	2/12	密	良	橙 5YR7/6	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
119	1トレンチ	Ⅱ－r4	土師器	皿	9.9	2.3	2/12	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
120	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	皿	12.2	2.9	4/12	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
121	1トレンチ	Ⅱ－r1	土師器	皿	12.9	2.15	3/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/3	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
122	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	皿	12.0	2.6	3/12	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
123	1トレンチ	Ⅱ－r1	土師器	皿	12.1	3.4	完形	密	良	浅黄橙 10YR8/3	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
124	1トレンチ	Ⅱ－r2	土師器	皿	12.8	2.6	2/12	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
125	1トレンチ	Ⅱ－q3	土師器	皿	12.8	2.8	4/12	やや粗	軟	灰白 10YR8/2	内外面ナデ、横ナデ、外面不調整、ユビオサエ	
126	1トレンチ	Ⅱ－p2	土師器	皿	12.0	2.6	4/12	やや粗	やや軟	灰白 7.5YR8/2	内外面横ナデ	
127	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	皿	13.3	2.95	6/12	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
128	1トレンチ	Ⅱ－r3	土師器	皿	11.6	2.5	1/12	やや密	軟	淡橙色 5YR8/3	内外面摩滅	
129	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	皿	12.6	2.05	2/12	密	良	灰白 10YR8/2	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
130	1トレンチ	Ⅱ平面精査	土師器	皿	13.3	2.05	4/12	密	良	にぶい橙５YR7/6	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
131	1トレンチ	Ⅱ平面精査	土師器	皿	14.9	2.6	2/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
132	1トレンチ	Ⅰ－p25	土師器	皿	14.4	(2.95)	2/12	密	良好	浅黄橙 10YR8/3	内外面ナデ、横ナデ	

報告番号	地区名	出土地点	種類	器形	口径(cm)	器高(cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
133	1トレンチ	Ⅰ－p25	須恵器	鉢	26.8	(3.7)	1/12	密	堅緻	暗青灰 5 B 4/1、灰白 N5/0	内外面回転ナデ、外面ユビオサエ	東播系
134	1トレンチ	Ⅱ－r1	瓦質土器	鍋	24.2	(2.8)	1/12	密	良好	灰黄 2.5Y7/2	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	煤付着
135	1トレンチ	Ⅱ－q2	古瀬戸	四耳壺	－	(3.7)	－	密	良	浅黄 2.5Y7/3	ロクロナデ	
140	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	Ⅲ	8.3	1.55	8/12	密	良好	橙色 7.5YR7/6	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
141	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	Ⅲ	7.1	1.25	3/12	密	良	橙色 7.5YR7/4	内外面ナデ、外面ユビオサエ	
142	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	Ⅲ	7.0	(1.5)	3/12	密	良好	橙色 7.5YR7/6	内外面ナデ、横ナデ	
143	1トレンチ	Ⅱ－r1	土師器	Ⅲ	8.2	1.5	4/12	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
144	1トレンチ	Ⅱ－p	土師器	Ⅲ	7.8	1.35	5/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
145	1トレンチ	Ⅱ－r2	土師器	Ⅲ	9.1	2.1	6/12	密	良	橙色 7.5YR7/6	内面不定方向ナデ、内外面横ナデ、外面ユビオサエ	
146	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	Ⅲ	8.8	1.65	1/12	密	良好	橙色 7.5YR6/6	内外面ナデ、外面ユビオサエ	
147	1トレンチ	Ⅰ－q25	土師器	Ⅲ	8.6	1.3	2/12	密	良好	橙 5YR6/6	内外面ナデ、横ナデ	
148	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	Ⅲ	10.3	2.1	3/12	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	内外面ナデ、外面ユビオサエ	
149	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	Ⅲ	12.0	1.9	3/12	密	良好	橙色 7.5YR7/6	内外面ナデ、横ナデ	
150	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	Ⅲ	12.4	(2.6)	2/12	密	良好	灰白 10YR8/2	内外面横ナデ、ナデ、外面ユビオサエ	
151	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	Ⅲ	12.8	(2.5)	2/12	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/6	内外面ナデ、横ナデ	
152	1トレンチ	Ⅱ－r1	土師器	Ⅲ	6.9	2.35	4/12	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
153	1トレンチ	Ⅱ－r1	土師器	Ⅲ	10.5	3.05	3/12	密	良	橙 5YR7/6	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
154	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	Ⅲ	13.0	(2.8)	2/12	密	良好	浅黄橙 10YR8/3	内外面ナデ、横ナデ	
155	1トレンチ	Ⅱ－r1	土師器	Ⅲ	11.2	2.5	ほぼ完形	密	良	浅黄橙 10YR8/3	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
156	1トレンチ	Ⅰ－p25	土師器	Ⅲ	11.8	(2.5)	3/12	密	良好	橙色 7.5YR7/6	内外面ナデ、横ナデ	
157	1トレンチ	Ⅱ－r1	土師器	Ⅲ	11.5	(2.6)	3/12	密	良	橙色 7.5YR7/6	内面ハケのちナデ、内外面横ナデ、外面ナデ、ユビオサエ	
158	1トレンチ	Ⅱ－r1	土師器	Ⅲ	13.0	(2.75)	3/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/3	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
159	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	Ⅲ	12.4	(2.8)	2/12	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/6	内外面ナデ、横ナデ	
160	1トレンチ	Ⅰ－p25	土師器	Ⅲ	13.0	3.0	3/12	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/6	内外面ナデ、横ナデ	
161	1トレンチ	Ⅱ－r1	土師器	Ⅲ	13.0	(2.55)	2/12	密	良	浅黄橙 10YR8/3	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
162	1トレンチ	Ⅱ－q2	古瀬戸	天目茶碗	12.0	(4.35)	1.5/12	密	良	黒褐 10YR2/2		中期様式Ⅲ期 14 c 前
164	1トレンチ	Ⅱ－r3	瓦器	椀	15.7	(4.0)	2/12	密	やや軟	灰 N4/0	内面圏線ミガキ、外面横ナデ	
165	1トレンチ	Ⅱ－p1	瓦器	椀	底）7.1	(2.4)	底）完存	密	良好	黒 N2/0、灰白 2.5Y8/1	内外面ナデ、見込み暗文	
166	1トレンチ	Ⅱ－p2	瓦質土器	羽釜	25.6	(6.6)	2/12	やや密	良好	内）褐灰 10YR6/1 外）灰白 10YR8/1	内面ハケ、内外面横ナデ、外面ケズリ、ユビオサエ	
167	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	Ⅲ	7.0	0.95	3/12	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
168	1トレンチ	Ⅱ－r1	土師器	Ⅲ	8.0	0.95	2/12	密	良	にぶい橙 5 YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
169	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	Ⅲ	11.4	(1.6)	1/12	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	内外面ナデ、横ナデ	

報告番号	地区名	出土地点	種類	器形	口径(cm)	器高(cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
170	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	Ⅲ	(11.0)	(1.05)	1/12以下	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/3	内外面ナデ、横ナデ	
171	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	Ⅲ	8.0	1.55	4/12	密	良	橙色 7.5YR7/6	内外面ナデ、外面ユビオサエ	
172	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	Ⅲ	8.3	1.6	9/12	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
173	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	Ⅲ	8.2	1.25	3/12	密	良	にぶい橙 2.5YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
174	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	Ⅲ	8.3	1.7	3/12	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	内外面ナデ、横ナデ	
175	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	Ⅲ	8.1	1.5	ほぼ完形	密	良好	浅黄橙 10YR8/3	内外面ナデ、横ナデ	
176	1トレンチ	Ⅱ－r1	土師器	Ⅲ	9.0	1.7	4/12	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
177	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	Ⅲ	7.8	1.9	3/12	密	良好	橙色 7.5YR7/6	内外面ナデ、外面ユビオサエ	
178	1トレンチ	Ⅱ－r1	土師器	Ⅲ	8.1	2.0	5/12	密	良	橙色 7.5YR7/6	内外面ナデ、外面ユビオサエ	
179	1トレンチ	Ⅱ－r1	土師器	Ⅲ	7.2	2.05	3/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
180	1トレンチ	Ⅱ－r1	土師器	Ⅲ	8.0	1.8	6/12	密	良	にぶい橙５YR7/6	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
181	1トレンチ	Ⅱ－r1	土師器	Ⅲ	9.1	1.65	4/12	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	内外面ナデ、外面ユビオサエ	
182	1トレンチ	Ⅱ－q1	瓦器	Ⅲ	9.0	1.5	3/12	密	良	灰白 2.5Y8/1	内外面ナデ、横ナデ	
183	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	Ⅲ	8.8	1.7	5/12	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
184	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	Ⅲ	8.8	1.65	7/12	密	良	橙 5YR7/6	内面一定方向ナデ、内外面横ナデ、外面不調整	
185	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	Ⅲ	8.7	1.65	ほぼ完形	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
186	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	Ⅲ	10.4	1.35	3/12	密	良好	にぶい橙色 7.5YR7/4	内外面ナデ、横ナデ	
187	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	Ⅲ	12.1	2.05	1/12	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
188	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	Ⅲ	12.0	2.1	2/12	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
189	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	Ⅲ	14.0	2.15	2/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ナデ、横ナデ	
190	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	Ⅲ	9.6	2.15	3/12	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	内外面ナデ、外面ユビオサエ	
191	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	Ⅲ	11.0	2.7	3/12	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	内外面ナデ、外面ユビオサエ	
192	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	Ⅲ	11.2	2.8	6/12	密	良	浅黄橙 10YR8/4	内外面ナデ、外面ユビオサエ	
193	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	Ⅲ	12.9	(2.9)	1/12以下	やや密	良	淡橙 5YR8/4	内外面横ナデ	
194	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	Ⅲ	12.4	2.75	6/12	密	良好	橙色 7.5YR7/6	内外面ナデ、横ナデ	
195	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	Ⅲ	10.8	2.9	2/12	密	良好	にぶい橙色 7.5YR7/3	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
196	1トレンチ	Ⅱ－r1	土師器	Ⅲ	11.0	3.05	3/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/6	内外面ナデ、外面ユビオサエ	
197	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	Ⅲ	12.6	2.4	4/12	密	良好	灰白 10YR8/2	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
198	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	Ⅲ	13.3	3.0	2/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/3	内外面ナデ、外面ユビオサエ	
199	1トレンチ	Ⅱ－p2	土師器	Ⅲ	12.0	3.05	2/12	やや密	やや軟	淡橙 5YR8/3	内外ともに摩滅著しく調整不明瞭	
200	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	Ⅲ	12.0	3.05	5/12	密	良好	浅黄橙 10YR8/3	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
201	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	Ⅲ	11.9	2.85	2/12	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	内面ハケ、内外面ナデ	

報告番号	地区名	出土地点	種類	器形	口径(cm)	器高(cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
202	1トレンチ	Ⅱ－r1	土師器	皿	10.7	2.3	4/12	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
203	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	皿	13.0	(3.0)	2/12	やや粗	良	橙 2.5YR6/8	内外面ナデ、やや強めの横ナデ	
204	1トレンチ	Ⅱ－r1	土師器	皿	12.8	2.7	9/12	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
205	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	皿	11.4	2.65	2/12	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/3	内外面ナデ、横ナデ	
206	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	皿	12.4	2.9	11/12	密	良	にぶい橙 5 YR7/4	内外面ナデ、ハケ、横ナデ、ユビオサエ	
207	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	皿	12.9	2.8	2/12	密	良好	橙 7.5YR7/6	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
208	1トレンチ	Ⅱ－p1	瓦器	椀	11.2	(2.8)	1/12	密	良好	暗灰 N3/0	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
209	1トレンチ	Ⅱ－q2	土師器	皿	12.9	2.95	5/12	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
210	1トレンチ	Ⅱ－p3	土師器	皿	12.4	3.3	6/12	密	良好	灰白 10YR8/2	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
211	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	皿	16.0	(3.4)	2/12	密	良	浅黄橙 10YR8/3	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
212	1トレンチ	Ⅱ－r1	土師器	皿	14.8	2.7	2/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
213	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	皿	17.2	(3.0)	1/12	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
214	1トレンチ	Ⅱ－p1	瓦器	椀	13.8	(2.9)	2/12	密	良好	内）灰白 2.5Y8/1 外）暗灰 N3/0	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
215	1トレンチ	Ⅱ－q2	土師器	壺	8.9	(2.25)	3/12	密	良	灰黄褐 10YR6/2	内外面ナデ、外面ユビオサエ	
217	1トレンチ	Ⅱ－r2	土師器	脚か	長 4.9	幅 2.4	厚さ 2.0	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	外面ケズリ	弥生土器か
218	1トレンチ	Ⅱ－p1	瓦器	椀	底）6.3	(1.25)	12/12	密	良好	内）灰白 2.5Y8/1 外）暗灰 N3/0	内外面ナデ、見込み暗文	
219	1トレンチ	Ⅱ－q1	瓦器	椀	14.0	(4.5)	3/12	密	良	暗灰 N3/0	内面圏線ミガキ、外面摩滅	
220	1トレンチ	Ⅱ－p1	瓦器	椀	15.8	(3.85)	1/12	密	良好	内）灰白 2.5Y8/2 外）暗灰 N3/0	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
221	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	甕	21.8	(4.6)	1/12 以下	密	良好	にぶい橙色 7.5YR7/4	内外面ナデ、外面ユビオサエ	
222	1トレンチ	Ⅱ－q1	須恵器	鉢底部	底）10.5	(3.1)	2/12	密	堅緻	褐灰 10YR6/1	内外面回転ナデ、底部ヘラキリ	東播系
223	1トレンチ	Ⅱ－r3	土師器	皿	6.6	1.45	3/12	密	良	浅黄橙 10YR8/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
224	1トレンチ	Ⅱ－r4	土師器	皿	7.1	1.3	5/12	密	良	浅黄橙 10YR8/3	内外面横ナデ、外面ユビオサエ	
225	1トレンチ	Ⅱ－r4	土師器	皿	7.4	1.3	2/12	密	良	灰黄 2.5Y7/2	内外面横ナデ	
226	1トレンチ	Ⅱ－r3	土師器	皿	8.0	1.5	3/12	密	良	浅黄橙 10YR8/4	内外面横ナデ、ナデ	
227	1トレンチ	Ⅱ－r4	土師器	皿	7.8	1.4	7/12	密	良	浅黄橙 10YR8/3	内外面横ナデ、外面ユビオサエ	
228	1トレンチ	Ⅱ－r4	土師器	皿	7.8	1.6	完形	密	良	浅黄橙 10YR8/3	内外面横ナデ	
229	1トレンチ	Ⅱ－r4	土師器	皿	8.4	1.65	6/12	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	内外面ナデ、横ナデ	
230	1トレンチ	Ⅱ－q2	土師器	皿	8.3	1.45	6/12	密	良	橙 7.5YR6/8	摩滅著しく調整不明瞭	
231	1トレンチ	Ⅱ－p3	土師器	皿	8.6	1.2	2/12	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ナデ、横ナデ	
232	1トレンチ	Ⅱ－r4	土師器	皿	8.4	1.2	4/12	密	良	橙 5YR7/6	内外面ナデ、横ナデ	
233	1トレンチ	Ⅱ－p3	土師器	皿	8.8	1.1	2/12	密	良好	にぶい橙色 7.5YR7/4	内外面横ナデ、ナデ	

報告番号	地区名	出土地点	種類	器形	口径(cm)	器高(cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
234	1トレンチ	Ⅱ－q4	土師器	Ⅲ	8.0	1.75	4/12	密	良	褐灰 7.5YR5/1	内外面ナデ、横ナデ	底面板状圧痕
235	1トレンチ	Ⅱ－r3	土師器	Ⅲ	8.65	1.5	完形	密	良	黒褐 2.5Y3/1	内外面横ナデ、外面ユビオサエ	
236	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	Ⅲ	9.25	1.65	10/12	やや密	良好	浅黄橙 7.5YR8/3	内外面ナデ、横ナデ、外面不調整	
237	1トレンチ	Ⅱ－s4	土師器	Ⅲ	9.0	1.2	5/12	密	良	灰白 10YR8/2	内外面横ナデ	
238	1トレンチ	Ⅱ－p2	土師器	Ⅲ	(9.2)	(1.8)	1/12以下	密	良	淡橙 5YR8/4	内外面横ナデ、外面不調整、ユビオサエ	
239	1トレンチ	Ⅱ－r4	土師器	Ⅲ	8.1	1.8	6/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ナデ、横ナデ	
240	1トレンチ	Ⅱ－q2	土師器	Ⅲ	8.6	1.7	完形	密	良好	橙 7.5YR7/6	内外面ナデ、横ナデ	
241	1トレンチ	Ⅱ－r4	土師器	Ⅲ	9.4	1.6	2/12	密	良	橙 7.5YR7/6	内外面横ナデ	
242	1トレンチ	Ⅱ－s2	土師器	Ⅲ	8.1	1.75	完形	密	良	橙 7.5YR7/6	内外面横ナデ	
243	1トレンチ	Ⅱ－p2	土師器	Ⅲ	8.0	(1.9)	3/12	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	内外面横ナデ、ナデ	
244	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	Ⅲ	8.7	2.1	ほぼ完形	密	良	にぶい橙５YR7/4	内外面ナデ、横ナデ	
245	1トレンチ	Ⅱ－r1	土師器	Ⅲ	7.75	2.1	ほぼ完形	密	良	橙 7.5YR7/6	内外面ナデ、外面ユビオサエ	
246	1トレンチ	Ⅱ－s1	土師器	Ⅲ	8.0	2.05	3/12	密	良	にぶい橙５YR7/3	内外面ナデ、外面タタキ痕	
247	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	Ⅲ	7.8	1.6	4/12	密	良	にぶい橙色 7.5YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
248	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	Ⅲ	7.0	1.45	4/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ナデ、外面ユビオサエ	
249	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	Ⅲ	7.55	1.8	完形	やや粗	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ナデ、外面ユビオサエ	
250	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	Ⅲ	7.4	1.6	2/12	密	良	橙 5YR6/6	内外面ナデ、横ナデ、外面ケズリ	
251	1トレンチ	Ⅱ－r2	土師器	Ⅲ	8.0	2.1	完形	密	良	橙 7.5YR7/6	内面ハケ目、外面横ナデ、ナデ	
252	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	Ⅲ	8.3	2.0	ほぼ完形	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ナデ、横ナデ	
253	1トレンチ	Ⅰ－p25	土師器	Ⅲ	9.4	2.0	9/12	密	良	にぶい橙５YR7/4	内外面ナデ、横ナデ	
254	1トレンチ	Ⅱ－r2	土師器	Ⅲ	14.0	1.5	2/12	密	良	浅黄橙 10YR8/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
255	1トレンチ	Ⅱ－p4	土師器	Ⅲ	10.7	2.8	1/12	密	良	橙 7.5YR7/6	内外面横ナデ	
256	1トレンチ	Ⅱ－q2	土師器	Ⅲ	11.7	2.7	1/12	密	良	褐灰 10YR4/1	内外面横ナデ	漆付着
257	1トレンチ	Ⅱ－s4	土師器	Ⅲ	11.2	(2.8)	3/12	密	良	褐灰 10YR4/1	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
258	1トレンチ	Ⅱ－r2	土師器	Ⅲ	11.0	2.6	5/12	やや密	良	浅黄橙 10YR8/3	内外面ナデ、横ナデ、外面不調整、ユビオサエ、	灯明皿、煤付着
259	1トレンチ	Ⅱ－s1	土師器	Ⅲ	11.6	3.1	完形	密	良	橙 7.5YR7/6	内外面横ナデ	
260	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	Ⅲ	11.4	(3.15)	5/12	やや粗	良	橙 5YR6/8	内外面ナデ、横ナデ	
261	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	Ⅲ	11.8	(2.65)	3/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/3	内外面横ナデ、ナデ	
262	1トレンチ	Ⅱ－p2	土師器	Ⅲ	13.2	1.6	6/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面横ナデ	
263	1トレンチ	Ⅱ－p2	土師器	Ⅲ	13.4	3.25	7/12	密	良	にぶい黄橙 10YR7/2	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
264	1トレンチ	Ⅱ－r45	土師器	Ⅲ	11.8	1.8	2/12	密	やや軟	浅黄橙 10YR8/3	内外面ナデ、横ナデ、外面不調整	
265	1トレンチ	Ⅱ－r45	土師器	Ⅲ	11.8	2.0	4/12	密	やや軟	灰白 10YR8/3	内外面摩滅、横ナデ、外面不調整	

報告番号	地区名	出土地点	種類	器形	口径(cm)	器高(cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
266	1 トレンチ	Ⅱ－ s4	土師器	Ⅲ	12.4	1.9	2/12	密	良	黄灰 2.5Y4/1	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
267	1 トレンチ	Ⅱ－ r3	土師器	Ⅲ	15.7	2.05	2/12	やや粗	良	灰白 7.5YR8/2	内外面ナデ、横ナデ	
268	1 トレンチ	Ⅱ－ p1	土師器	Ⅲ	13.0	2.5	4/12	密	やや軟	浅黄橙 10YR8/4	内外面ナデ、横ナデ、外面不調整	
269	1 トレンチ	Ⅱ－ q4	土師器	Ⅲ	12.6	2.6	2/12	密	良	浅黄橙 10YR8/3	内外面横ナデ、ナデ	
270	1 トレンチ	Ⅱ－ r4	土師器	Ⅲ	12.8	2.9	3/12	密	良	浅黄橙 10YR8/3	内外面横ナデ	
271	1 トレンチ	Ⅱ－ r4 SK36	土師器	Ⅲ	14.6	3.2	7/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面横ナデ	
272	1 トレンチ	Ⅱ－ r3 SX	土師器	Ⅲ	14.4	2.6	2/12	密	良	浅黄橙 10YR8/3	内外面横ナデ	
273	1 トレンチ	Ⅱ－ r4	土師器	Ⅲ	12.5	(2.5)	2/12	密	良	浅黄橙 10YR8/4	内外面ナデ、横ナデ	
274	1 トレンチ	Ⅱ－ p4	土師器	Ⅲ	13.4	2.25	2/12	密	良	内）橙 5YR7/6 外）灰白 10YR8/2	内外面ナデ、横ナデ	
275	1 トレンチ	Ⅱ－ q4	土師器	Ⅲ	13.0	3.0	5/12	密	良	浅黄橙 10YR8/3	内外面横ナデ	
276	1 トレンチ	Ⅱ－ p3 11 層	土師器	Ⅲ	13.6	(2.5)	1/12	密	良好	橙 5YR7/6	内外面横ナデ、ナデ	
277	1 トレンチ	Ⅱ－ r3	土師器	Ⅲ	15.8	(2.6)	1/12	密	良	黄灰 2.5Y4/1	内面一定方向ナデ、内外面横ナデ、外面ユビオサエ	煤付着
278	1 トレンチ	Ⅱ－ r3	土師器	Ⅲ	15.8	(2.75)	2/12	やや粗	良	灰白 2.5Y8/1	内外面回転ナデ、外面ナデ	
279	1 トレンチ	Ⅱ－ r4	土師器	Ⅲ	13.8	2.6	2/12	密	良	淡黄 2.5Y8/3	内外面横ナデ	
280	1 トレンチ	Ⅱ－ q2	土師器	Ⅲ	15.0	3.2	11/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面横ナデ	
281	1 トレンチ	Ⅱ－ r4	土師器	Ⅲ	12.4	2.55	1/12	密	良	淡黄 2.5Y8/3	内外面横ナデ	
282	1 トレンチ	Ⅱ－ s4	土師器	Ⅲ	13.8	3.0	3/12	密	良	褐灰 10YR4/1	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
283	1 トレンチ	Ⅱ－ q2	土師器	Ⅲ	12.6	2.75	3/12	やや粗	良	内）褐灰 10YR4/1 外）にぶい褐 7.5YR6/3	内面ハケ目、内外面横ナデ、外面ナデ、ユビオサエ	
284	1 トレンチ	Ⅱ－ r4	土師器	Ⅲ	7.4	1.3	2/12	密	良	灰黄 2.5Y7/2	内外面横ナデ	
285	1 トレンチ	Ⅱ－ r3	土師器	Ⅲ	12.8	2.75	2/12	密	良	浅黄橙 10YR8/4	内面不定方向ナデ、内外面横ナデ、ユビオサエ	
286	1 トレンチ	Ⅱ－ r5	土師器	Ⅲ	14.9	2.55	6/12	密	良	橙 5YR7/6	内外面横ナデ、ナデ	
287	1 トレンチ	Ⅱ－ r4,5	土師器	Ⅲ	4.1	(1.1)	－	やや粗	良	灰白 5YR7/1	内外面回転ナデ、回転糸切	
288	1 トレンチ	Ⅱ－ q2	土師器	Ⅲ	6.8	1.5	2/12	密	良	明褐灰 7.5YR7/2	内外面摩滅	回転糸切
289	1 トレンチ	Ⅱ－ p4	土師器	Ⅲ	7.0	2.05	3/12	密	良	浅黄橙 7.5YR7/6	内外面摩滅	回転糸切
290	1 トレンチ	Ⅰ－ p25	土師器	Ⅲ	8.3	2.0	8/12	やや粗	良	橙 5YR7/8	内外面回転ナデ、ユビオサエ、外面ナデ、回転糸切	
291	1 トレンチ	Ⅱ－ o2	土師器	Ⅲ	8.0	2.3	6/12	密	良	橙 7.5YR6/8	内外面回転ナデ、外面ナデ、回転糸切	
292	1 トレンチ	Ⅱ－ r2	土師器	Ⅲ	8.3	1.6	9/12	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	内外面回転ナデ、回転糸切	
293	1 トレンチ	Ⅱ－ q1	土師器	Ⅲ	7.95	1.4	11/12	やや粗	良	にぶい赤褐 5YR5/3	内外面回転ナデ、回転糸切	
294	1 トレンチ	Ⅱ－ p2	土師器	Ⅲ	7.9	1.65	11/12	やや粗	やや軟	橙 5YR7/8	内外面回転ナデ、回転糸切	
295	1 トレンチ	Ⅱ－ q1	土師器	Ⅲ	8.9	1.4	2/12	やや粗	良	橙 5YR6/6	内面回転ナデ、内外面回転横ナデ、回転糸切	
296	1 トレンチ	Ⅱ－ p1	土師器	Ⅲ	7.9	1.75	底）11/12 強	やや粗	良好	橙 5YR7/6	内面回転ナデ、内外面回転横ナデ、回転糸切	

報告番号	地区名	出土地点	種類	器形	口径(cm)	器高(cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
297	西トレンチ北側	平面精査	土師器	皿	8.0	1.5	4/12	密	良	橙 7.5YR7/6	回転ナデ、回転糸切	
298	1トレンチ	Ⅱ－o2	土師器	皿	8.0	2.05	ほぼ完形	密	良	橙 7.5YR7/6	内面回転ナデ、回転横ナデ、外面摩滅、底部回転糸切	
299	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	皿	7.9	1.45	9/12	やや粗	良好	赤橙 10 R 6/6	内外面回転ナデ、回転糸切	
300	1トレンチ	Ⅱ－q2	土師器	皿	8.9	1.6	10/12	密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面回転ナデ、回転横ナデ、回転糸切	
301	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	皿	9.6	1.7	5/12	密	良	浅黄 2.5Y7/3	内面回転横ナデ、外面摩滅、回転糸切	
302	1トレンチ	Ⅱ－q4	瓦器	小椀	6.0	2.0	2/12	密	良	内）にぶい黄橙 10YR7/3 外）灰 5Y4/1	内外面ナデ、横ナデ	六器
303	1トレンチ	Ⅱ－q2	瓦器	小椀	6.4	2.6	7/12	密	良	淡黄 2.5Y8/3	内面回転ナデ、外面ナデ、ユビオサエ	六器
304	1トレンチ	Ⅱ－q1	瓦器	椀	15.4	(5.0)	3/12	密	やや軟	暗灰 N3/0	内面ミガキ、外面横ナデ	
305	1トレンチ	Ⅱ－p2	瓦器	椀	底）6.0	(1.5)	底）6/12	密	良	灰 N4/0	内外面摩滅	
306	1トレンチ	Ⅱ－q2	黒色土器	椀	17.4	(4.5)	1.5/12	密	良	内）黒 N5/0 外）にぶい黄橙 10YR7/5	内外面ヘラミガキ	
307	1トレンチ	Ⅱ－r4	瓦質土器	華瓶	底）4.4	(3.3)	底）3/12	密	良	褐灰 10YR5/1	内面シボリ、外面ナデ、横ナデ	
308	1トレンチ	Ⅱ－r3	土師器	脚	基部）2.3	(4.5)		密	良	灰褐 7.5YR5/2	内面シボリ、外面ユビオサエ	弥生土器か
311	1トレンチ	Ⅱ－p2	古瀬戸	椀	17.7	(4.3)	1/12	密	良	素地）灰黄 2.5Y7/2 釉薬）にぶい黄 2.5Y6/4		
312	1トレンチ	Ⅱ－r2	古瀬戸	椀	5.2	(3.0)	3/12	密	良	素地）灰黄 2.5Y7/2 釉薬）にぶい黄 2.5Y6/4		
313	1トレンチ	Ⅱ－r4	土師器	皿	6.8	1.0	4/12	密	良	内）黒褐 2.5Y3/1 外）淡黄 2.5Y8/3	内外面横ナデ	
314	1トレンチ	Ⅱ－q2	土師器	皿	6.9	1.4	3/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/3	内外面横ナデ、外面ユビオサエ	
315	1トレンチ	Ⅱ－p2	土師器	皿	10.8	(2.6)	2/12	密	良	灰白 7.5YR8/2	内外面横ナデ、外面ケズリ痕	
316	1トレンチ	Ⅱ－p2	土師器	皿	7.8	1.3	3/12	やや密	良好	明褐灰 7.5YR5/1	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
317	1トレンチ	Ⅱ－q2	土師器	皿	8.6	1.6	6/12	密	良	にぶい橙 5YR6/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
318	1トレンチ	Ⅱ－r4	土師器	皿	8.0	1.5	5/12	密	良	黄灰 2.5Y4/1	内外面横ナデ	
319	1トレンチ	Ⅰ－q 25	土師器	皿	8.6	(1.3)	2/12	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/4、橙 2.5YR7/6	内外面ナデ、横ナデ	
320	1トレンチ	Ⅱ－q2	土師器	皿	8.0	1.5	3/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
321	1トレンチ	Ⅱ－s4	土師器	皿	8.4	1.5	5/12	やや粗	良	内）にぶい黄橙 10YR7/3 外）黒褐 2.5Y3/1	内外面ナデ、横ナデ、ユビオサエ	
322	1トレンチ	Ⅱ－q2	土師器	皿	8.7	1.6	7/12	密	良	橙 5YR6/6	内外面横ナデ	
323	1トレンチ	Ⅱ－r3	土師器	皿	9.8	1.8	3/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ナデ、横ナデ	
324	1トレンチ	Ⅱ－q2	土師器	皿	7.9	1.4	3/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
325	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	皿	8.0	1.5	10/12	密	良	橙 5YR7/6	内外面ナデ、横ナデ	
326	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	皿	7.8	1.3	3/12	密	良	灰白 10YR8/2	内外面ナデ、横ナデ、外面不調整	
327	1トレンチ	Ⅱ－r2	土師器	皿	7.6	1.5	5/12	やや粗	良	にぶい黄橙 10YR7/3~褐灰 10YR5/1	内外面ナデ、横ナデ、外面不調整	
328	1トレンチ	Ⅱ－q2	土師器	皿	8.6	1.9	ほぼ完形	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内面不定方向ナデ、ユビオサエ、ケズリ	
329	1トレンチ	Ⅱ－s4	土師器	皿	8.7	1.5	6/12	密	良	褐灰 7.5YR5/1~にぶい橙 7.5YR7/3	内面ナデ、内外面横ナデ、外面不調整、ユビオサエ	
330	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	皿	8.3	1.5	4/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/3	内外面ナデ、ユビオサエ	

報告番号	地区名	出土地点	種類	器形	口径(cm)	器高(cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
331	1トレンチ	Ⅱ－p2	土師器	Ⅲ	6.5	1.35	3/12	やや粗	やや軟	淡橙 5YR8/4	内外面ナデ、横ナデ	
332	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	Ⅲ	8.9	1.3	4/12	密	良	灰白 10YR8/2	内外面ナデ、横ナデ	
333	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	Ⅲ	8.7	2.0	2/12	やや粗	良	灰白 10YR8/2	内外面ナデ、横ナデ、外面不調整	
334	1トレンチ	Ⅰ－q25	土師器	Ⅲ	8.4	2.0	4/12	密	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面ナデ、横ナデ	
335	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	Ⅲ	7.4	1.6	2/12	密	良	橙 5YR6/6	内外面ナデ、横ナデ	
336	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	Ⅲ	8.2	2.15	7/12	密	良	橙 7.5YR7/6	内外面ナデ、横ナデ	
337	1トレンチ	Ⅱ－q2	土師器	Ⅲ	10.3	2.25	2/12	密	良	灰白 10YR8/2	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
338	1トレンチ	Ⅱ－r3	土師器	Ⅲ	13.0	(2.1)	2/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面横ナデ	
339	1トレンチ	Ⅱ－r4	土師器	Ⅲ	12.2	(2.0)	2/12	密	良	黄灰 2.5Y5/1	内外面横ナデ	
340	1トレンチ	Ⅱ－r3	土師器	Ⅲ	12.8	2.55	5/12	密	良	浅黄橙 10YR8/4	内外面摩滅	
341	1トレンチ	Ⅱ－q3	土師器	Ⅲ	12.4	3.0	6/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面回転横ナデ、外面不調整、ユビオサエ	
342	1トレンチ	Ⅱ－p2	土師器	Ⅲ	12.4	2.35	2/12	やや粗	やや軟	橙 5YR7/6	内外面横ナデ	
343	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	Ⅲ	12.1	2.6	2/12	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	内外面ナデ、横ナデ	
344	1トレンチ	Ⅱ－q2	土師器	Ⅲ	11.1	3.15	10/12	密	良	黄橙 10YR8/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
345	1トレンチ	Ⅱ－p2	土師器	Ⅲ	12.8	(2.6)	3/12	やや密	良好	淡橙 5YR8/4	内面一方向ナデ、内外面横ナデ	
346	1トレンチ	Ⅱ－q2	土師器	Ⅲ	11.8	2.5	4/12	密	良	橙 7.5YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、ユビオサエ	
347	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	Ⅲ	11.3	3.1	4/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ナデ、横ナデ、ユビオサエ	
348	1トレンチ	Ⅱ－p2	土師器	Ⅲ	11.4	(2.8)	2/12	密	良	灰白 7.5YR8/2	内外面横ナデ	
349	1トレンチ	Ⅱ－p2	土師器	Ⅲ	13.4	(2.3)	2/12	やや密	良	橙 7.5YR7/6	内外面横ナデ	
350	1トレンチ	Ⅱ－p2	土師器	Ⅲ	11.5	(2.65)	2/12	やや粗	やや軟	橙 5YR7/6	内外面横ナデ	
351	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	Ⅲ	12.0	(2.1)	4/12	密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
352	1トレンチ	Ⅱ－r1	土師器	Ⅲ	12.0	2.8	2/12	密	良	橙 7.5YR6/6	内外面回転横ナデ、外面不調整、ユビオサエ	
353	1トレンチ	Ⅱ－r3	土師器	Ⅲ	12.8	1.9	1/12	密	良	淡黄 2.5Y8/3	内外面横ナデ	
354	1トレンチ	Ⅱ－q2	土師器	Ⅲ	13.0	2.45	6/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/3	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
355	1トレンチ	Ⅱ－p2	土師器	Ⅲ	14.0	2.1	3/12	やや密	良	橙 5YR6/8	内外面摩滅	
356	1トレンチ	Ⅱ－r3	土師器	Ⅲ	12.8	3.0	3/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/3	内外面ナデ、横ナデ、外面不調整、ユビオサエ	
357	1トレンチ	Ⅱ－q2	土師器	Ⅲ	15.2	2.55	4/12	やや粗	良	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
358	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	Ⅲ	10.0	3.1	4/12	密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
359	1トレンチ	Ⅱ－p2	土師器	Ⅲ	10.8	(2.6)	2/12	密	良	灰白 7.5YR8/2	内外面ナデ、横ナデ	
360	1トレンチ	Ⅰ－q25	土師器	Ⅲ	13.8	2.6	4/12	密	良	外）浅黄橙 7.5YR8/4 内）にぶい橙 7.5YR7/4	内外面ナデ、横ナデ	
361	1トレンチ	Ⅱ－p2	土師器	Ⅲ	12.1	3.2	6/12	密	良	浅黄 2.5Y8/3	内面不定方向ナデ、内外面横ナデ、外面不調整	

報告番号	地区名	出土地点	種類	器形	口径(cm)	器高(cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
362	1トレンチ	Ⅱ－q3	土師器	皿	12.1	3.1	完形	密	良	浅黄橙 7.5YR8/3	内外面横ナデ	
363	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	皿	12.4	2.8	3/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/3	内面一方向ナデ、内外面回転横ナデ、外面不調整、ユビオサエ	
364	1トレンチ	Ⅱ－p2	土師器	皿	12.1	2.95	2/12	やや粗	やや軟	灰白 7.5YR8/2	内外面横ナデ	
365	1トレンチ	Ⅱ－q 3	土師器	皿	12.2	3.25	完形	密	良	灰白 2.5Y8/2	内外面横ナデ	
366	1トレンチ	Ⅱ－r1	土師器	皿	8.0	1.5	4/12	密	やや軟	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面回転ナデ、底部回転糸切	
367	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	皿	8.4	2.2	6/12	密	良	橙 5YR6/8	内外面回転ナデ、底部回転糸切	
368	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	皿	8.3	1.9	6/12	密	良	橙 5YR6/8	内外面回転ナデ、底部回転糸切	
369	1トレンチ	Ⅱ－q2	土師器	皿	7.8	1.5	4/12	やや粗	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面回転ナデ、底部回転糸切	
370	1トレンチ	Ⅱ－q2	土師器	皿	8.2	2.0	5/12	やや粗	良	橙 5YR7/6	内外面回転ナデ、底部回転糸切	
371	1トレンチ	Ⅱ－q4	土師器	皿	8.6	1.5	2/12	やや粗	良	橙 5YR6/6	内外面回転ナデ、底部回転糸切	
372	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	皿	7.9	1.35	1/12	やや粗	良	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面回転ナデ、底部回転糸切	
373	1トレンチ	Ⅱ－q2	土師器	皿	8.9	1.55	1/12	やや粗	良	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面回転ナデ、底部回転糸切	
374	1トレンチ	Ⅱ－o2	土師器	皿	7.6	2.0	11/12	やや粗	良	橙 7.5YR6/6	内外面回転ナデ、底部回転糸切	
375	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	皿	8.4	1.7	1/12以下	やや粗	良	にぶい橙 5YR7/4	内外面回転ナデ、底部回転糸切	
376	1トレンチ	Ⅱ－q2	土師器	皿	8.15	1.35	3/12	やや粗	良	浅黄橙 7.5YR8/3	内外面回転ナデ、底部回転糸切	
377	1トレンチ	Ⅱ－q2	土師器	皿	8.4	1.3	1/12以下	やや粗	良	橙 7.5YR7/6	内外面回転ナデ、底部回転糸切	
378	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	皿	14.0	3.7	2/12	やや粗	良	灰白 10YR8/2	内外面回転ナデ、底部回転糸切	
379	1トレンチ	Ⅱ－r 2・3	土師器	皿	14.0	4.15	1/12	やや粗	良	橙 7.5YR7/6	内外面回転ナデ、底部回転糸切	
380	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	皿	14.0	3.6	3/12	密	良	橙 7.5YR7/6	内外面回転ナデ、底部回転糸切	
381	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	皿	13.9	4.0	9/12	やや粗	良	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面回転ナデ、底部回転糸切	
382	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	皿	底）7.6	(2.8)	底）3/12	密	良	橙 5YR7/8	内外面回転ナデ、底部回転糸切	
383	1トレンチ	Ⅱ－p2	土師器	皿	底）7.0	(2.2)	底）6/12	やや粗	良	橙 7.5YR7/6	内外面回転ナデ、底部回転糸切	
384	1トレンチ	Ⅱ－q1	土師器	皿	底）7.4	(1.8)	底）4/12	密	良	橙 7.5YR7/6	内外面回転ナデ、底部回転糸切	
385	1トレンチ	Ⅱ－p1	土師器	皿	底）7.1	(2.75)	底）12/12	密	良	橙 7.5YR7/6	内外面回転ナデ、底部回転糸切	
386	1トレンチ	Ⅱ－r4	瓦器	椀	6.2	2.4	完形	密	良	黄灰 2.5Y5/1	内面ミガキ、外面ナデ	六器
387	1トレンチ	西側掘削奥	瓦器	皿	9.8	1.2	1.5/12	密	軟	灰白 5Y8/1	内面ミガキ、外面摩滅	
388	1トレンチ	Ⅱ－r4・5	瓦器	椀	高台）5.85	(1.05)	高台）5/12	やや粗	軟	灰白 2.5Y8/2	内外面摩滅	
389	1トレンチ	Ⅱ－r4・5	瓦器	椀	高台）6.4	(1.5)	高台）6/12	密	良	灰 N5/0	内面ミガキ、外面ナデ	
390	1トレンチ	Ⅱ－p2	瓦器	椀	15.8	5.8	ほぼ完形	やや粗	良	灰 N6/0	内面圏線ミガキ、外面ナデ、ユビオサエ	
391	1トレンチ	西側掘削奥	瓦器	椀	13.8	(3.8)	2/12	密	良	灰白 2.5Y8/1	内外面ミガキ、横ナデ	
392	1トレンチ	Ⅰ－p25	瓦器	椀	16.0	(4.35)	5/12	密	やや軟	灰 5Y5/1	内面圏線ミガキ	
393	1トレンチ	Ⅱ－s3	瓦器	椀	13.8	6.0	2/12	密	良	灰 N3/0	内面圏線ミガキ、外面ナデ	
394	1トレンチ	Ⅱ－s3	瓦器	椀	13.8	(4.9)	1/12	密	良	黄灰 2.5Y5/1	内面圏線ミガキ	

報告番号	地区名	出土地点	種類	器形	口径(cm)	器高(cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
395	1 トレンチ	Ⅱ－ p1	瓦器	椀	12.6	(4.6)	3/12	密	良好	褐灰 10YR4/1	内面圏線ミガキ、外面ミガキ	
396	1 トレンチ	Ⅱ－ r1	瓦質土器	鍋	25.8	(4.6)	2/12	密	良	黄灰 2.5Y4/1	内面ハケ目　外面横ナデ、ナデ、ユビオサエ	
397	1 トレンチ	Ⅱ－ q4	瓦質土器	鍋	26.6	(7.25)	2/12	密	良	灰白 2.5Y8/2	内外面横ナデ、ユビオサエ	
398	1 トレンチ	Ⅱ－ r4・5	瓦質土器	鍋	38.2	(4.75)	1/12 以下	粗	軟	灰白 5Y8/1	内面ミガキ、内外面横ナデ、外面ナデ	
399	1 トレンチ	Ⅱ－ p4	瓦質土器	鍋	23.9	(8.5)	1/12 以下	密	良	内）灰白 2.5Y8/2 外）黄灰 2.5Y4/1	内面ナデ、横ハケ、内外面横ナデ、ユビオサエ	
400	1 トレンチ	Ⅱ－ q2	瓦質土器	鍋	－	(3.8)	1/12 以下	密	良	にぶい黄橙 10YR7/2	内面ハケ目、外面ナデ	
401	1 トレンチ	Ⅱ－ q2	山茶椀	椀	14.0	5.75	1/12	密	良	灰白 5Y7/1	内面ナデ、外面回転ナデ、貼り付け高台、糸切、13c（6 期白土原）	東美濃
402	1 トレンチ	Ⅱ－ p1	須恵器	甕か壺	(2.8)	(3.4)	1/12	密	堅緻	灰 N5/0	内外面回転ナデ	
403	1 トレンチ	Ⅱ－ p1	須恵器	片口鉢	－	(4.9)	1/12 以下	密	堅緻	灰 N6/0	内外面回転ナデ	東播系
404	1 トレンチ	Ⅱ－ p2	常滑	鉢	底）13.0	(6.1)	底）3/12	密	堅緻	灰 N5/0	内外面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、貼り付け高台	
405	1 トレンチ	Ⅱ－ s1	常滑	壺	底）9.7	(10.5)	底）5/12	密	堅緻	灰 N6/0	内外面回転ナデ　底部ヘラキリ後ナデ	
406	1 トレンチ	Ⅱ－ s4	常滑	甕底部	底）11.0	(10.5)	底）3/12	密	やや軟	灰黄 2.5Y7/2	内外面回転ナデ　底部糸切	
407	1 トレンチ	Ⅱ－ r4	古瀬戸	椀	14.8	(6.2)	2/12	密	良	素地）淡黄 2.5Y8/3 釉薬）にぶい黄橙 10YR7/4、灰オリーブ 5Y6/2	回転ヘラケズリ	14c 代
419	1 トレンチ	Ⅱ－ s2	常滑	甕	27.6	(25.0)	1/12 以下	粗	やや軟	灰白 7.5Y7/1	内外面回転ナデ、外面ケズリ、なで上げ	常滑 3 型式
420	1 トレンチ	Ⅱ－ p4	常滑	甕	27.6	(23.4)	1/12 以下	やや粗	良	灰白 N7/0	内外面回転ナデ、外面タタキ	常滑 5 型式
421	1 トレンチ	Ⅱ－ r4	須恵器	甕	(31.4)	(49.5)	1/12 以下	密	良好	灰白 N5/0	内外面回転ナデ、外面タタキ	東播系
422	1 トレンチ	Ⅱ－ s3	土師器	小椀	6.0	1.9	3/12	密	良	浅黄橙 10YR8/4	内外面ナデ、貼り付け高台	
423	1 トレンチ	Ⅱ－ p1	陶器	山皿	8.4	1.9	5/12	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	東海系
424	1 トレンチ	Ⅱ－ p1	土師器	皿	8.8	1.75	6/12	密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	
425	1 トレンチ	Ⅱ－ q3 SK29	土師器	皿	7.9	1.15	3/12	やや粗	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ナデ、横ナデ	
426	1 トレンチ	Ⅱ－ s3	土師器	皿	13.8	(1.65)	1/12	密	良	浅黄橙 10YR8/4	内外面ナデ、横ナデ	
427	1 トレンチ	Ⅱ－ q1	土師器	杯	14.4	(3.55)	9/12	やや粗	良	浅黄橙 10YR8/6	内外面回転ナデ	
428	1 トレンチ	Ⅱ－ p2	土師器	皿	13.6	4.0	完形	やや粗	良好	橙 5YR7/6	内外面回転ナデ、底部回転糸切	
429	1 トレンチ	Ⅱ－ p1	土師器	皿	16.0	4.2	3/12	密	良	橙 5YR7/6	内外面回転ナデ、底部回転糸切	
430	1 トレンチ	Ⅱ－ p1	土師器	皿	底）6.0	1.2	底）8/12	密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面回転ナデ、底部回転糸切	
431	1 トレンチ	Ⅱ－ p1	土師器	皿	14.6	3.2	1/12 以下	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	内外面回転ナデ、底部回転糸切	
432	1 トレンチ	Ⅱ－ q2	土師器	皿	底）5.0	(3.0)	底）3/12	やや粗	良	灰 2.5Y8/1	内外面回転ナデ、底部回転糸切	
433	1 トレンチ	Ⅱ－ p4	山茶椀	皿	8.1	2.45	4/12	やや粗	良	内）にぶい黄橙 10YR6/3 外）灰白 2.5Y7/1	内面自然釉、外面無釉、ユビオサエ	東海系
434	1 トレンチ	Ⅱ－ p1	土師器	皿	8.0	1.9	10/12	やや密	良好	淡橙 5YR8/4	内外面回転ナデ、底部回転糸切	
435	1 トレンチ	Ⅱ－ p4	土師器	皿	8.0	1.65	6/12	やや密	良好	橙 5YR7/6	内外面回転ナデ、底部回転糸切	
436	1 トレンチ	Ⅱ－ r4	須恵器	鉢	底）13.0	(12.3)	底）5/12	密	良好	灰褐 7.5YR6/2~ にぶい褐 7.5YR5/4	内外面工具によるナデ、底部ヘラ切り	2 次焼成

報告番号	地区名	出土地点	種類	器形	口径(cm)	器高(cm)	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
437	1トレンチ	Ⅱ－r4	常滑	甕	(23.6)	(22.9)	1/12以下	やや粗	良	灰白 2.5Y8/1 オリーブ灰 2.5GY6/1	内外面自然釉、ユビオサエ、回転ナデ	
446	1トレンチ	Ⅱ－r4 SX35	土師器	Ⅲ	7.4	1.1	3/12	密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面摩滅	
447	1トレンチ	Ⅱ－r4 SX35	土師器	Ⅲ	8.2	1.2	5/12	密	良	橙 5YR7/6	内外面ナデ、横ナデ、外面不調整、ユビオサエ	
448	1トレンチ	Ⅱ－r4 SX35	土師器	Ⅲ	8.8	1.3	4/12	密	良	橙 5YR7/6	内外面ナデ、横ナデ、ユビオサエ	
449	1トレンチ	Ⅱ－r4 SX35	土師器	Ⅲ	7.8	1.15	3/12	密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面ナデ、横ナデ	
451	1トレンチ	Ⅱ－r4 SX35	土師器	Ⅲ	7.0	1.5	2/12	密	良	橙 5YR7/8	内外面横ナデ	
452	1トレンチ	Ⅱ－r4 SX35	土師器	Ⅲ	8.8	1.2	8/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ナデ、横ナデ、ユビオサエ	
453	1トレンチ	Ⅱ－r4 SX35	土師器	Ⅲ	7.8	1.2	3/12	密	良	淡橙 5YR7/6	内外面ナデ、横ナデ	
454	1トレンチ	Ⅱ－s5 SX35	土師器	Ⅲ	9.3	1.4	3/12	やや粗	良	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、ユビオサエ	
456	1トレンチ	Ⅱ－r4 SX35	土師器	Ⅲ	8.4	1.1	4/12	密	良	灰褐 7.5YR5/2	内外面横ナデ、ユビオサエ	
457	1トレンチ	Ⅱ－r4 SX35	土師器	Ⅲ	9.8	1.35	2/12	密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	内面不定方向ナデ、内外面横ナデ、外面ナデ、ユビオサエ	
458	1トレンチ	Ⅱ－r4 SX35	土師器	Ⅲ	9.2	1.3	3/12	密	良	橙 5YR7/8	内外面摩滅	
459	1トレンチ	Ⅱ－r4 SX35	土師器	Ⅲ	8.1	1.8	3/12	密	良	浅黄橙 7.5YR8/3	内外面ナデ、横ナデ	
460	1トレンチ	Ⅱ－r4 SX35	土師器	Ⅲ	12.8	2.8	3/12	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	内外面ナデ、横ナデ、外面ユビオサエ	灯明皿、煤付着
461	1トレンチ	Ⅱ－r4 SX35	土師器	Ⅲ	12.2	2.5	3/12	密	やや軟	浅黄橙 10YR8/4	内外面ナデ、横ナデ	
462	1トレンチ	Ⅱ－r4 SX35	土師器	Ⅲ	15.2	2.2	2/12	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	内外面ナデ、横ナデ　外面不調整、沈線	
463	1トレンチ	Ⅱ－p4	土師器	Ⅲ	13.0	2.7	2/12	密	良	内）浅黄橙 10YR8/3 外）浅黄橙 7.5YR8/1	内外面ナデ、横ナデ　外面不調整、沈線	
464	1トレンチ	Ⅱ－r4 SX35	土師器	Ⅲ	13.4	2.5	6/12	密	良	内）橙 5YR7/6　外）淡橙 5YR8/4	内外面ナデ、横ナデ	
465	1トレンチ	Ⅱ－s5 SX35	土師器	Ⅲ	15.2	2.9	2/12	やや粗	良	橙 5YR6/6	内外面ナデ、横ナデ　外面不調整	
466	1トレンチ	Ⅱ－r4 SX35	土師器	Ⅲ	14.6	3.1	11/12	やや粗	良	にぶい橙 7.5YR7/3	内外面ナデ、横ナデ　外面不調整、ユビオサエ	
467	1トレンチ	Ⅱ－r4 SX35	土師器	Ⅲ	14.6	(3.0)	2/12	密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面ナデ、ユビオサエ	

付表２　出土土器観察表（貿易陶磁器）

報告番号	地区名	出土地点	種類	器形	法量（cm）			残存率	胎土	色調		備考
					口径	底径	器高			素地	釉薬	
6	1トレンチ	Ⅱ－q3 SB03	白磁	輪花椀	17.6	－	3.6	2/12	密	灰白５Y8/1	灰白５Y8/1	
65	1トレンチ	Ⅱ－q4 SX25	青磁	椀	16.2	－	3.36	6/13	密	灰白 5Y7/1	灰オリーブ 5Y6/2	劃花文、龍泉窯系
66	1トレンチ	Ⅱ－q4 SX24,25	白磁	四耳壷	10.5	－	(6.1)	4/12	密	灰白 2.5Y8/1	灰白 7.5Y7/2	
67	1トレンチ	Ⅱ－q4 SX24,25	白磁	四耳壷	8.0	－	(6.3)	4/12	密	灰白 2.5Y8/1	灰白 10Y8/2	
68	1トレンチ	Ⅱ－r3 SX	白磁	水注	－	－	(7.0)	1/12	密	灰白 5Y7/1	灰オリーブ 5Y6/2	
69	1トレンチ	Ⅱ－q4	白磁	水注	－	6.4	(5.6)	4.5/12	密	灰白 5Y7/1	灰オリーブ 5Y6/2	
94	1トレンチ	Ⅱ－r SK28	白磁	椀	11.4	－	3.3	4/12	密	灰白 2.5GY8/1	灰白 2.5GY8/1	劃花文、景徳鎮
95	1トレンチ	Ⅱ－r SK28	白磁	水注把手	－	－		－	密	白 N9/0	灰白 5Y8/1	たて（4.55）、よこ（2.5）
96	1トレンチ	Ⅱ－r SK28	陶器	壺	－	高台径）7.7	(9.8)	3/12	密	灰白 7.5YR8/2	黒 10YR1.7/1	黒釉白堆線文、磁州窯
136	1トレンチ	平面精査	青磁	椀	15.6	－	(2.5)	2/12	密	オリーブ灰 2.5GY5/1	オリーブ灰 2.5GY5/1	
137	1トレンチ	Ⅱ－q2	青磁	椀	－	－	(4.1)	－	精良	明オリーブ灰 5GY7/1	明オリーブ灰 5GY7/1	龍泉窯
138	1トレンチ	Ⅱ平面精査	白磁	輪花皿	－	－	(2.0)	－	精良	白 N9/0	白 N9/0	龍泉窯
139	1トレンチ	Ⅱ－r1	青花	椀	－	4.9	(2.8)	2.5/12	密	－	内）灰白 5GY8/1 外）明オリーブ灰 2.5GY7/1	福建省
163	1トレンチ	Ⅱ－p3	白磁	椀	－13.6	－	(1.8)	1/12 以下	精良	－	灰 10YR6/1	２類
216	1トレンチ	Ⅰ－p25	陶器	天目茶碗	－	－	(3.35)	－	密	灰白 2.5Y8/2	黒褐 10YR3/1	
309	1トレンチ	Ⅱ－r4	青磁	椀	－	－	(3.7)	1/12	密	灰 7.5Y6/1	オリーブ灰 2.5GY6/1	龍泉窯
310	1トレンチ	Ⅱ－r3	白磁	椀	15.0	－	(2.5)	1/12 以下	密	灰白 2.5Y8/1	灰白 5Y7/2	
408	1トレンチ	Ⅱ－q5	白磁	水注把手	－	－	－	－	密	灰白 5Y8/1	オリーブ黄 5Y6/3	たて（7.2）、よこ（2.55）、厚さ 0.6
409	1トレンチ	Ⅱ－p1	白磁	壺蓋	(12.0)	－	(2.75)	1/12 以下	精良	灰白 5Y8/1	灰白 2.5GY8/1	
410	1トレンチ	Ⅱ－q4	青磁	椀	－	4.6	(2.0)	4/12	密	灰白 7.5YR8/1	灰 10Y6/1	龍泉窯
411	1トレンチ	Ⅱ－o5	褐釉	壺	－	10.0	(3.7)	2.5/12	密	（内面）灰白 2.5Y8/1 （外面）にぶい 7.5YR7/3	－	
412	1トレンチ	Ⅱ－r4	青磁	皿	－	8.0	(0.7)	1/12	精良	灰黄 2.5Y6/2	灰黄 2.5Y6/2	口禿
413	1トレンチ	Ⅱ－q1	白磁	皿	9.8	－	(2.5)	2/12	密	灰白 2.5Y8/2	灰白 5Y8/1	口禿
414	1トレンチ	Ⅱ－p1	褐釉	壺	頸径）9.5	－	(2.7)	1/12	密	灰褐 5YR5/2	灰褐 5YR5/2	越州窯
415	1トレンチ	Ⅱ－r4	陶磁器	香炉	13.0	－	(6.1)	2/12	密	淡黄 2.5Y8/3	白 N9/0	
416	1トレンチ	Ⅱ－q3	白磁	椀	(15.0)	－	(2.45)	1/12 以下	密	灰白 2.5Y8/2	灰白 10Y8/1	
417	1トレンチ	Ⅱ－q2	青磁	椀	(15.0)	－	(2.15)	1/12 以下	密	灰白 7.5Y8/1	オリーブ灰 10Y6/2	
418	1トレンチ	Ⅱ－q2	白磁	椀	(14.0)	－	(1.6)	1/12 以下	密	灰白 7.5Y7/1	灰白 10Y7/2	
438	1トレンチ	Ⅱ－p4	白磁	椀	12.8	－	(3.8)	1/12	密	灰白 2.5Y8/2	浅黄 2.5Y7/3	
439	1トレンチ	西トレンチ北側	白磁	椀	14.0	－	(2.5)	2/12	密	灰白 2.5Y8/1	灰白 5Y7/2	
440	1トレンチ	Ⅱ－s4	青白磁	皿	14.2	－	3.0	1/12	密	灰白 5Y8/1	明緑灰 10GY8/1	景徳鎮
441	1トレンチ	Ⅱ－r4	白磁	小椀	(15.0)	－	(2.35)	1/12 以下	密	灰白 7.5YR871	灰 10Y7/1	
442	1トレンチ	Ⅱ－r4	青白磁	椀	－	4.8	(1.5)	3/12	精良	白 N9/0	明緑灰 7.5GY8/1	
443	1トレンチ	Ⅱ－q5	白磁	四耳壷	9.2	－	(18.7)	1.5/12	密	灰白 2.5Y8/1	灰白 5Y7/2	
444	1トレンチ	Ⅱ－r4	白磁	四耳壷	10.7	－	24.0	9/12	密	灰白 10YR7/1	灰白 5Y7/2	
445	1トレンチ	Ⅱ－q4	鉄絵	盤	23.0	－	6.5	2/12	密	灰白 2.5Y7/1	にぶい黄 2.5Y6/4	福建省

付表３　出土土器観察表（弥生土器）

報告番号	地区名	出土地点	器形	法量（cm）			残存率	胎土	色調	調整
				口径	器高	底径				
505	１トレンチ		壺	13.0	(4.4)	－	3/12	φ 0.5 － 2 ミリ大の石英、長石、チャート（？）、粘板岩を含む	にぶい黄橙 10YR7/3	内外面ナデ、口縁部円形浮文
506	１トレンチ	Ⅱ－ q1	壺	18.8	(2.3)	－	1/12	精良：φ 0.5 大の長石ほかを含む。	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面ナデ、口縁部円形浮文、波状文
507	１トレンチ	Ⅱ－ p1	壺	12.0	(5.5)	－	1/12	φ 0.5 － 2 ミリ大の石英、長石、粘板岩を含む	橙 5YR7/6	内外面ハケ目、横ナデ
508	１トレンチ	Ⅱ－ p1	甕	15.5	(1.9)	－	1/12	φ 0.5 － 2 ミリ大の粘板岩、長石を含む	外）にぶい橙 7.5YR7/4 内）浅黄橙 10YR8/4	内外面摩滅
509	１トレンチ	Ⅱ－ r2・s3	甕	14.9	3.4	－	1/12	φ 3 ミリ大の長石？の角礫を含む	外）橙 5YR7/6 内）橙 5YR6/8	内面ケズリ、内外面ナデ、外面ハケ
510	１トレンチ	Ⅰ－ q25	甕	23.8	(1.6)	－	1/12	φ 0.5 ミリ大の砂粒を含む	橙 5YR6/8	内面ケズリ、内外面ナデ
511	１トレンチ	Ⅱ－ p3	甕	(23.3)	(1.1)	－	1/12	φ 0.5-3 ミリ大の長石もしくは石英の角礫を含む	橙 7.5YR7/6	内外面ナデ、口縁部擬凹線
512	１トレンチ	Ⅰ－ q25	甕	－	(2.7)	－	1/12 以下	φ 0.5-1 ミリ大の長石、石英、雲母を含む	外）にぶい橙 7.5YR7/3 内）橙５YR6/6	内面ケズリ？荒いハケ？口縁部擬凹線
513	１トレンチ	Ⅱ－ r4	甕	－	(1.8)	－	1/12 以下	φ 0.5 ミリ大の砂粒を含む	黄橙 7.5YR7/8	内面ナデ、口縁部擬凹線
514	１トレンチ	Ⅱ－ q1	甕	15.2	(2.2)	－	1/12	φ 0.5-3 ミリ大の石英？、粘板岩を含む	外）橙 5YR7/6 内）浅黄橙 10YR8/4	内外面摩滅、口縁部わずかに擬凹線残る
515	１トレンチ		甕	14.0	(2.1)	－	1.5/12	φ 1-2 ミリ大の白色、灰色、褐色の砂粒を含む	にぶい橙 7.5YR6/4	内外面ナデ、横ナデ
516	１トレンチ	Ⅱ－ r3	甕	－	(3.0)	－	頸）1/12	φ 0.5 ミリ大の砂粒を含む	外）にぶい黄褐 10YR5/3 内）にぶい黄橙 10YR6/4	内外面ナデ、摩滅、外面ハケ
517	１トレンチ	包含層	甕底部	－	(2.6)	5.2	完存	φ 0.5-2 ミリ大の白色粒（石英・長石か）、0.5 ミリ以下の雲母を含む	橙 2.5YR6/6~ にぶい黄橙 10YR7/3~ 黒褐 10YR3/1	内外面摩滅
518	１トレンチ	Ⅱ－ q1	甕底部	－	(2.2)	4.0	3/12	φ 0.5-1 ミリ大の砂粒を多く含む	外）にぶい黄褐 10YR7/3 内）灰白 10YR8/1	内外面摩滅
519	１トレンチ	Ⅱ－ q2	底部	－	(2.0)	3.6	2/12	φ 0.5 － 3 ミリ大の角礫（長石、石英、粘板岩か）を多く含む	外）浅黄橙 10YR8/3 内）褐灰 10YR4/1	内面ナデ、外面タタキか
520	２トレンチ	平面精査	底部	－	(2.0)	5.0	2/12	φ 0.5 － 3 ミリ大の角礫（長石、石英、粘板岩か）を多く含む	黄灰 2.5Y4/1	内外面摩滅
521	１トレンチ	Ⅱ－ q4	底部	－	(2.7)	5.8	1/12	φ 0.5 － 3 ミリ大の角礫（長石、石英、粘板岩か）を多く含む	橙 5YR6/6	内外面摩滅
522	１トレンチ	Ⅰ－ 25	底部	－	(3.6)	6.6	2/12	φ 0.5-1 ミリ大の砂粒を含む	外）橙 7.5YR7/6 内）黒褐 7.5YR4/1	内面ナデ、外面摩滅
523	１トレンチ	Ⅱ－ r3	底部	－	(2.2)	5.8	3/12	精良：φ 0.5 ミリ大の白色砂粒（石英、長石か）ほかを含む	外）黒褐 10YR3/1 内）浅黄橙 10YR8/3	外面ハケ、ナデ
524	１トレンチ	Ⅱ－ p4	底部	－	(6.7)	6.2	3/12	φ 0.5 － 3 ミリ大の白色角礫(長石、石英）を多く含む	橙 5YR7/8~ にぶい黄橙 10YR7/4~ 灰褐 7.5YR4/1	内面剝離　外面摩滅
525	１トレンチ	包含層	高杯脚部	－	(6.6)	－	6/12	精良：φ 0.5 ミリ大の長石、褐色粒（粘板岩か）を含む	浅黄橙 10YR8/3	外面ミガキ、内面シボリ痕残る
526	２トレンチ	平面精査	高杯脚部	－	(6.4)	－	5/12	φ 0.5-1 ミリ大の砂粒（白色、灰色、褐色）を含む	外）橙 7.5YR7/6 内）灰 5Y6/1	外面ミガキ
527	１トレンチ		高杯脚部	－	(12.0)	脚径）4.0	脚部）6/12	精良：φ 0.5 ミリ大の長石、褐色粒（粘板岩か）を含む	にぶい橙 10YR7/4	外面ミガキ
528	１トレンチ	Ⅱ－ q4	高杯脚部	－	(3.6)	－	3/12	φ 0.5 － 3 ミリ大の角礫（長石、石英、粘板岩か）を多く含む	にぶい橙 10YR7/4~ 橙 7.5YR7/6	内面ナデ
529	１トレンチ	Ⅱ－ s2	台付鉢か	－	(6.0)	－		φ 1-4 ミリ大の白色砂粒（長石か）、粘板岩、灰色砂粒を含む	浅黄橙 10YR8/3	内外面摩滅
530	１トレンチ	Ⅰ－ p25	器台か	－	(6.0)	－	3/12	φ 1-3 ミリ大の粘板岩、灰色砂粒及び微細な角閃石を含む	橙 7.5YR7/6	内面ケズリ
531	旧境内		壺	28.2	(4.0)		1/10	φ 0.5-3 ミリ大の長石、石英、粘板岩を含む	橙 7.5YR6/6	内面不明、口縁部擬凹線　外面横ナデ
532	旧境内		甕	17.2	(4.3)		2/12	φ 0.5-2 ミリ大の長石、粘板岩を含む	明赤褐 5YR5/6	内面ケズリ、横ナデ 外面横ナデ　口縁部擬凹線
533	旧境内		壺底部	－	(6.2)	－	3/12	φ 1-3 ミリ大の砂粒(白色、褐色、青灰色）を含む	外）橙 5YR6/6 内）にぶい橙 7.5YR6/4	外面ハケ、タタキ、黒斑

付表４　出土銭貨観察表

報告番号	銭貨名	国名	初鋳年	地区名	出土地点	直径（cm）	重量（g）	備考
468	元祐通寶	北宋	1086	1 トレンチ	Ⅱ－ q1	2.5	2.25	
469	皇宋通寶	北宋	1038	1 トレンチ	Ⅱ－ q1	2.4	2.17	
470	開元通寶	南唐	960	1 トレンチ	Ⅱ－ s4	2.4	2.29	
471	元祐通寶	北宋	1086	1 トレンチ	Ⅱ－ s4	2.4	2.62	
472	天聖元寶	北宋	1023	1 トレンチ	Ⅱ－ r4	2.4	2.41	
473	至道元寶	北宋	995	1 トレンチ	Ⅱ－ r4	2.5	2.8	

付表５　出土金属製品観察表

報告番号	種類	器形	地区名	出土地点	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（g）	備考
475	銅製品	—	1 トレンチ	Ⅱ－ p4	5.35	0.75	0.6	
476	銅製品	—	1 トレンチ	Ⅱ－ o1	2.9	3.6	0.65	
485	鉄製品	釘	1 トレンチ	Ⅰ－ r25	6.5	1.1	0.65	
486	鉄製品	釘	1 トレンチ	Ⅱ－ q2	7.4	0.6	0.55	
487	鉄製品	釘	1 トレンチ	Ⅱ－ q2	6.2	1.1	0.5	
488	鉄製品	釘	1 トレンチ	Ⅱ－ p1	2.3	0.7	0.5	
489	鉄製品	釘	1 トレンチ	Ⅱ－ s2	5.3	1.2	0.6	木質残る
490	鉄製品	鉄鏃	1 トレンチ	Ⅱ－ p2	7.1	—	—	直径）0.8
491	鉄製品	釘	1 トレンチ	Ⅱ－ q2	5.5	0.6	0.6	
492	鉄製品	釘	1 トレンチ	Ⅱ－ p4	4.5	1.3	0.6	
493	鉄製品	釘	1 トレンチ	Ⅰ－ q 25	5.5	1.3	0.65	
494	鉄製品	釘	1 トレンチ	Ⅱ－ s3	5.9	0.6	0.8	
495	鉄製品	釘	1 トレンチ	Ⅱ－ s3	4.0	0.5	0.45	
496	鉄製品	鉄鏃	1 トレンチ	Ⅱ－ q2	11.05	1.1	0.7	
497	鉄製品	鉄鏃	1 トレンチ	Ⅱ－ q2	11.5	1.0	0.65	
498	鉄製品	釘	1 トレンチ	Ⅱ－ q1	7.8	3.6	0.8	
499	鉄製品	釘	1 トレンチ	Ⅱ－ q4	7.5	1.3	1.1	
500	鉄製品	ナタ	1 トレンチ	Ⅱ－ p1	5.6	24.0	0.85	
501	鉄製品	ハサミ	1 トレンチ	Ⅱ－ p1	5.8	2.1	0.55	
502	鉄製品	ノミ	1 トレンチ	Ⅱ－ q2	12.8	2.3	1.15	
503	鉄製品	ノミ	1 トレンチ	Ⅱ－ r4・5	6.8	1.95	1.4	
504	鉄製品	鉄鏨か	1 トレンチ	Ⅱ－ q2	12.1	18.5	0.85	

付表６　出土石製品観察表

報告番号	種類	地区名	出土地点	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	色調	備考
477	砥石	1 トレンチ	Ⅱ－ q1	3.0	4.8	1.25	26.1	にぶい橙 5YR6/4	
478	砥石	1 トレンチ	Ⅱ－ q3	4.7	3.33	1.48	25.0	にぶい橙 5YR7/4	
479	砥石	1 トレンチ	Ⅱ－ q4	9.8	5.3	4.0	285	浅黄橙 10YR8/4	砂岩か
480	軽石	1 トレンチ	Ⅱ－ p1	2.9	1.8	2.1	5.0	にぶい黄橙 10YR7/3	
481	石鍋	1 トレンチ	Ⅱ－ p1	—	—	—	175	黒褐 2.5Y3/1	滑石 口径 26.0
482	石鍋	1 トレンチ	Ⅱ－ q1	—	—	—	355	外）にぶい橙 2.5YR6/3 内）灰白 5YR8/1	滑石
483	火消し石	1 トレンチ	Ⅱ－ r4	5.7	5.2	2.0	75	外）褐灰 5YR4/1 内）褐灰 7.5YR6/1	滑石
484	砥石	1 トレンチ	Ⅱ－ q4	8.1	6.65	1.6	100.0	灰白 7.5YR8/1	石鍋転用、滑石

２．新名神高速道路整備事業関係遺跡
平成27～29・令和元年度発掘調査報告

はじめに

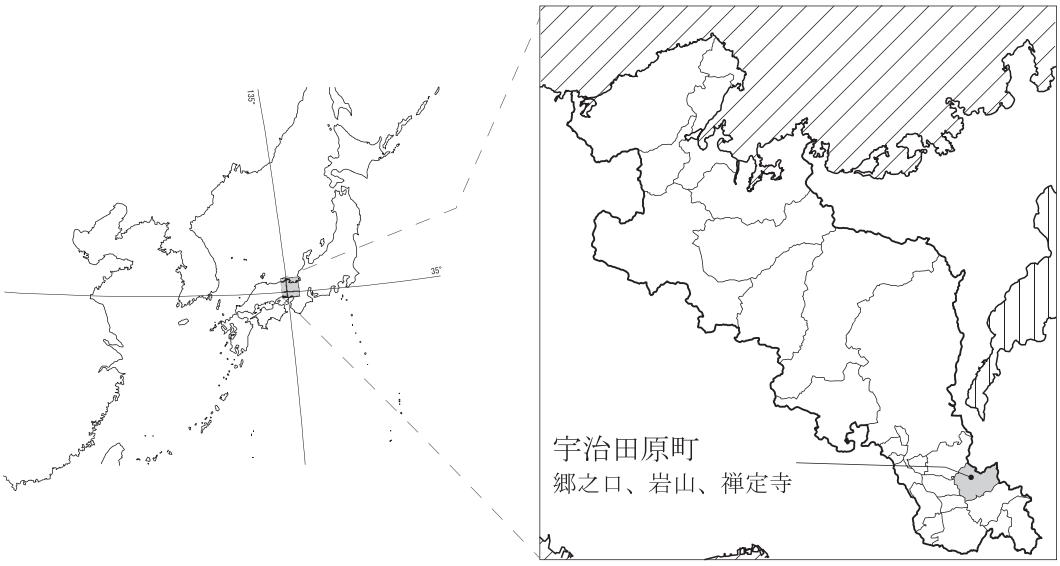
近畿自動車道名古屋神戸線は、国土開発幹線自動車道建設法の法定予定路線に位置づけられる高速自動車国道である。21世紀の新時代にふさわしい道路として、新名神高速道路と呼称されている。京都府域では滋賀県大津市から宇治田原町・城陽市・京田辺市・八幡市を経て大阪府枚方市へと抜ける路線が計画されている。このうち八幡京田辺IC－城陽IC間については、平成29年４月に開通している。宇治田原町内では城陽市・久御山町飛地との境界である郷之口末山付近にインターチェンジが設けられ、禅定寺小坂本付近で滋賀県側へ抜ける経路が予定されている。この間、町中心部である旧役場の北方は大峰山の南に連なる荒木山を貫くトンネル区間である。本書で報告する保安塚、長井野塚は郷之口に所在し、トンネルの西側に位置している。岨田遺跡、砂川古墳はトンネルを東に抜けたすぐの場所である岩山、禅定寺に所在する。奥城土遺跡、禅定寺城跡はさらに北東方向である滋賀県との府県境に近い場所に位置している。

今回、新名神高速道路が建設されるにあたり予定地内に遺跡範囲の一部が含まれることから、京都府教育委員会による現地踏査などを経て、西日本高速道路株式会社と京都府教育委員会と協議がおこなわれ、発掘調査について当調査研究センターが依頼をうけた。なお、予定地内に含まれる岨田古墳については、工事が及ぶことなく保護されることになった。

現地調査にあたっては、地元に御高配を賜るとともに、京都府教育委員会、宇治田原町教育委員会に指導・助言をいただいた。

なお、調査に係る経費は、西日本高速道路株式会社が全額負担した。

（加藤雅士）



第１図　宇治田原町の位置

〔調査体制等〕

＜岨田遺跡第１・２次、砂川古墳第１次＞

現地調査責任者	調　査　課　長		有井広幸(平成27年度)
	調　査　課　長		森　　正(平成28年度)
現地調査担当者	調査課課長補佐兼調査第３係長		岩松　保(平成27・28年度)
	調査課調査第１係	副　主　査	引原茂治(平成27年度)
	同	調　査　員	荒木瀬奈(平成28年度)
	調査課調査第３係	副　主　査	伊野近富(平成27年度)
	同	主　　任	加藤雅士(平成27・28年度)
	同	調　査　員	内藤　京(平成28年度)

調　査　場　所　宇治田原町岩山、禅定寺砂川

現地調査期間　平成27年12月16日～平成28年３月４日(岨田遺跡第１次、砂川遺跡第１次)

平成28年４月26日～平成28年８月10日(岨田遺跡第２次)

調　査　面　積　岨田遺跡第１次、砂川古墳第１次調査：1,500㎡

岨田遺跡第２次：1,500㎡

＜禅定寺城跡遺跡第３次＞

現地調査責任者	調　査　課　長	小池　寛
現地調査担当者	調査課参事調査第３係長事務取扱	岩松　保
	調査課調査第３係　調　査　員	橋本　稔

調　査　場　所　宇治田原町禅定寺小坂本

現地調査期間　平成29年11月９日～平成30年２月27日

調　査　面　積　1,300㎡

＜保安塚第１次＞

現地調査責任者	調　査　課　長	小池　寛
現地調査担当者	調査課調査第２係長	高野陽子
	調査課調査第２係　主任	加藤雅士

調　査　場　所　宇治田原町郷之口宇治山

現地調査期間　平成31年４月16日～令和元年５月28日

調　査　面　積　200㎡

＜長井野塚第１次＞

現地調査責任者	調　査　課　長	小池　寛
現地調査担当者	調査課調査第２係長	高野陽子

調査課調査第２係　主任　　加藤雅士

調 査 場 所　宇治田原町郷之口長井野

現地調査期間　令和元年７月１日～令和元年８月６日

調 査 面 積　300㎡

＜奥城土遺跡第１次＞

現地調査責任者　調　査　課　長　　小池　寛

現地調査担当者　調査課調査第２係長　　高野陽子

調査課調査第２係　主任　　加藤雅士

調 査 場 所　宇治田原町禅定寺奥城土

現地調査期間　令和元年５月22日～令和元年７月23日

調 査 面 積　280㎡

＜整理作業＞

整理作業責任者　調　査　課　長　　小池　寛

整理作業担当者　調査課参事調査第３係長事務取扱　中川和哉

調査課調査第１係　主任　　加藤雅士

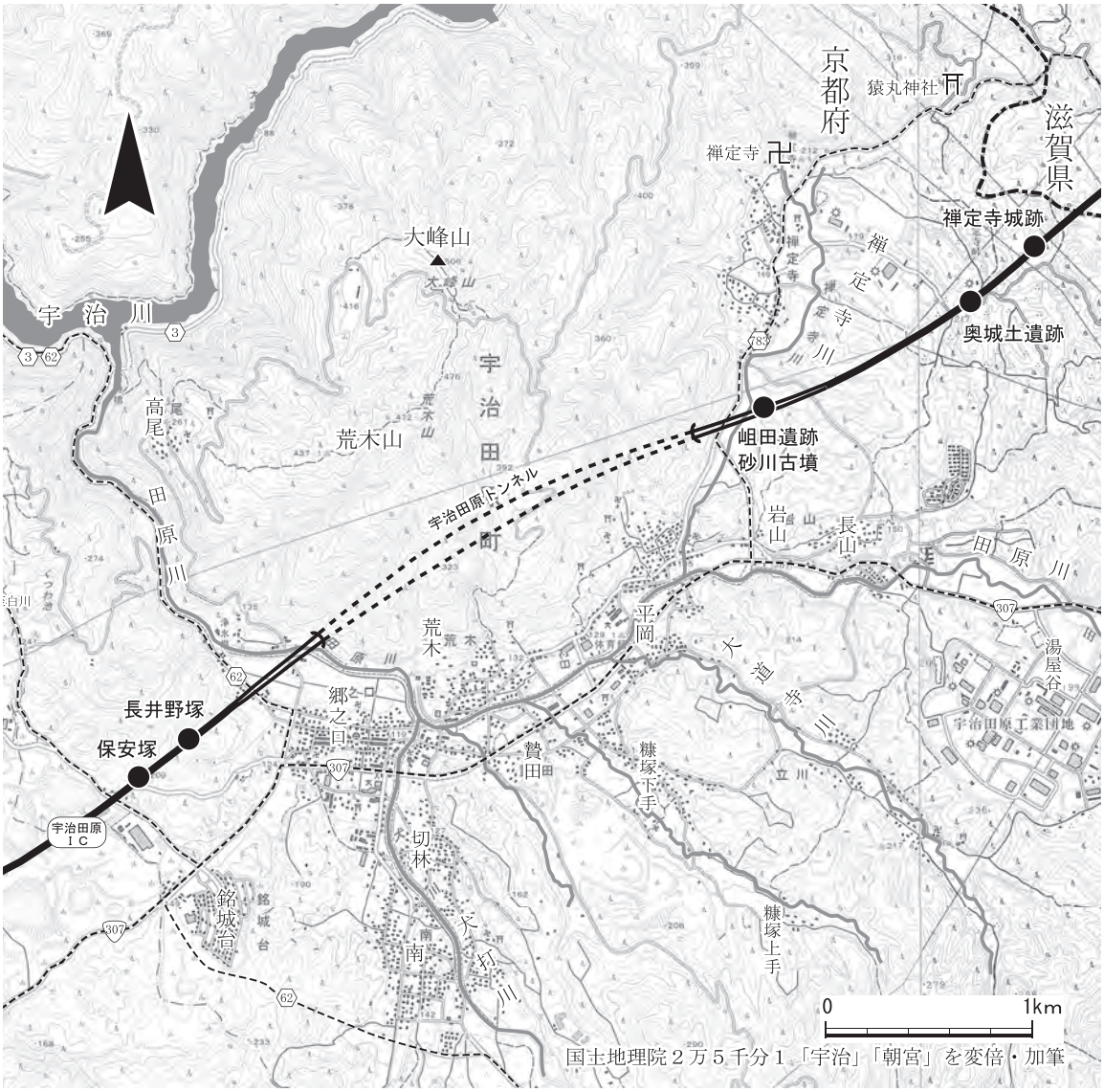
整理作業期間　令和２年４月１日～令和３年３月31日

位 置 と 環 境

1）地理的環境

宇治田原町の概要　宇治田原町は京都府南部の東端の山間部に位置する町である。町域の西は城陽市、井手町および久御山町の飛地と接している。町の北西部には大峰山（506m）があり、その北西を南流する宇治川が宇治市との境となっている。また町の南には鷲峯山（682m）があり[注1]、これが和束町との境界になっている。北および東隣は滋賀県であり、大津市・甲賀市と接している。町の中心部は町域の西端部中央に位置する宇治田原盆地であり、町役場や民家が点在している。宇治田原盆地は大和・山城盆地南部と東国を結ぶ交通の要衝として古代から重要視されてきた。近世では青製煎茶法を開発した永谷宗円を輩出しており、茶の生産は現代でも主要な産業のひとつである。明治22年の市町村制施行時は宇治田原村と田原村の２村に整理されたが、昭和31年に合併して宇治田原町となった。近年では工場誘致が進み、近隣の市町からの通勤者も多い。

宇治田原町と道路　現在、山城盆地から宇治田原盆地へと通じる主な道路には、国道307号、



第２図　新名神高速道路の路線と調査対象遺跡

府道３・62号、宇治市道宇治白川線の３つが挙げられる。まず国道307号は、西は大阪府枚方市から東は滋賀県彦根市へ至る道路で、東海道を迂回する道路として主要幹線の位置を占めている。山城盆地では木津川右岸で奈良街道をほぼ踏襲する府道70号や国道24号と交差したのち青谷川に沿って山地を登り、宇治田原盆地の西の入り口である郷之口に達する。この間の経路は足利健亮氏説の奈良時代の官道「田原道」のルートにほぼ該当する(注2)。

次に府道62号宇治木屋線は宇治橋西詰から宇治川沿いを通る道路である。田原川と宇治川の合流部までは府道３号大津南郷宇治線との重複区間となっており、郷之口で国道307号と接続している。307号より南は犬内川に沿って南下して和束町へと至る。宇治川沿いの道は宇治道と呼ばれ、奥田治作に代表されるように18世紀に入って整備が進んだ。

最後は宇治橋西詰から白川越えで宇治田原盆地へ至る道路である。途中の宇治市折居までは宇治市道宇治白川線であり、銘城台の北で国道307号に接続している。宇治市方面と結ぶバス路線もここを通っている。今回発掘調査を行った保安塚のすぐ南近くを通る道路は遺跡の西約120mでこれに接続している。

宇治田原盆地から東へ通じる道路に目を転じると、主に２つの道がある。ひとつは国道307号であり、宇治田原盆地を東へ横断して滋賀県旧信楽町(現甲賀市)との府県境に至る。現在は国道のバイパスが整備されてルートが異なっているが、明治期の地形図では谷間を縫う経路が確認できる。信楽街道と呼ばれる道を踏襲していると考えられる。

東へ抜けるもうひとつの道路は、岩山付近で国道307号から分岐し、禅定寺川沿いに北東へ延びる府道783号宇治田原大石東線である。府道783号自体は滋賀県大津市大石東までの道路であるが、他の道路を伝って北上すれば瀬田唐橋まで達することができる。田原道のうち宇治田原から滋賀県へ至る道路をほぼ踏襲していると考えられる。ちなみに現在の国道307号は田原川の南側で整備されているが、明治期の地形図では荒木から岩山を経て、長山付近までは田原川の北側である右岸を通過する様子が確認できる。

地形　宇治田原盆地(注3)は、田原川とその水系が作った東西約４kmの長さの谷底平野である。盆地地帯の標高は百数十m台である。田原川は町域中央の湯屋谷付近を発して西流し、郷之口付近で流れを北に変えて宇治川に注いでいる。田原川に対して南側からは、犬打川などの支流が流れ込んでいる。一方の北側からは、北東から禅定寺川が流れ込んでいる。禅定寺川は、滋賀との府県境の禅定寺付近から発し、岩山で田原川に合流する。

宇治田原盆地の東側から南側にかけての一帯、および西側には丘陵地帯が広がっている。前者は標高100～300mの宇治田原丘陵と呼ばれるもので、南から田原川に合流する支流がこの間を流れ、樹枝状の盆地を形作っている。後者は、木津川右岸の平野部と宇治田原盆地の間にある、標高300m未満の丘陵地帯で、宇治丘陵と称されている。

宇治田原盆地と丘陵地の周辺には山地が控えており、宇治田原盆地のすぐ北には標高506mの大峰山がそびえており、喜撰山(宇治市)、音羽山(京都市)へと連なっている。この一連の山地は醍醐山地などと称されている。宇治田原丘陵の南は鷲峰山地、東は信楽山地が広がっている。宇



※脇田浩二・竹内圭史・水野清秀・小松原琢・中野聰志・竹村恵二・田口雄作（2013）５万分の１地質図幅「京都東南部」産業技術総合研究所、地質調査総合センター　をトレース（一部省略）

第３図　地質分類図

治田原丘陵と信楽山地の間については、奥山田山地と鷲峰山地に区分する場合もある。

地質　宇治田原盆地・丘陵を囲繞する山地のうち、醍醐山地・信楽山地は中生代の丹波帯である(注4)。奥山田山地は新生代の綴喜層群である。宇治田原丘陵と宇治丘陵は新生代の大阪層群で構成されている。とくに宇治田原盆地の南から東にかけての地帯は、禅定寺層と長山層が分布している。禅定寺層が長山層の上に乗る関係性であり、禅定寺層は砂礫層、長山層は泥・礫層が主体となっている。加えてそれぞれはチャートも含んでおり、岨田遺跡調査地周辺の露頭でも拳大～人頭大のチャートが確認できた。

盆地部分は沖積層となっており、礫や砂・泥で構成されている。また田原川右岸の荒木や岩山の西部では崖錐堆積物帯がみられる。かつて田原川右岸を通ったと考えられる田原道は、こうした比較的高乾な場所を選択していたと考えられる(注5)。

（加藤雅士）

２）歴史的環境

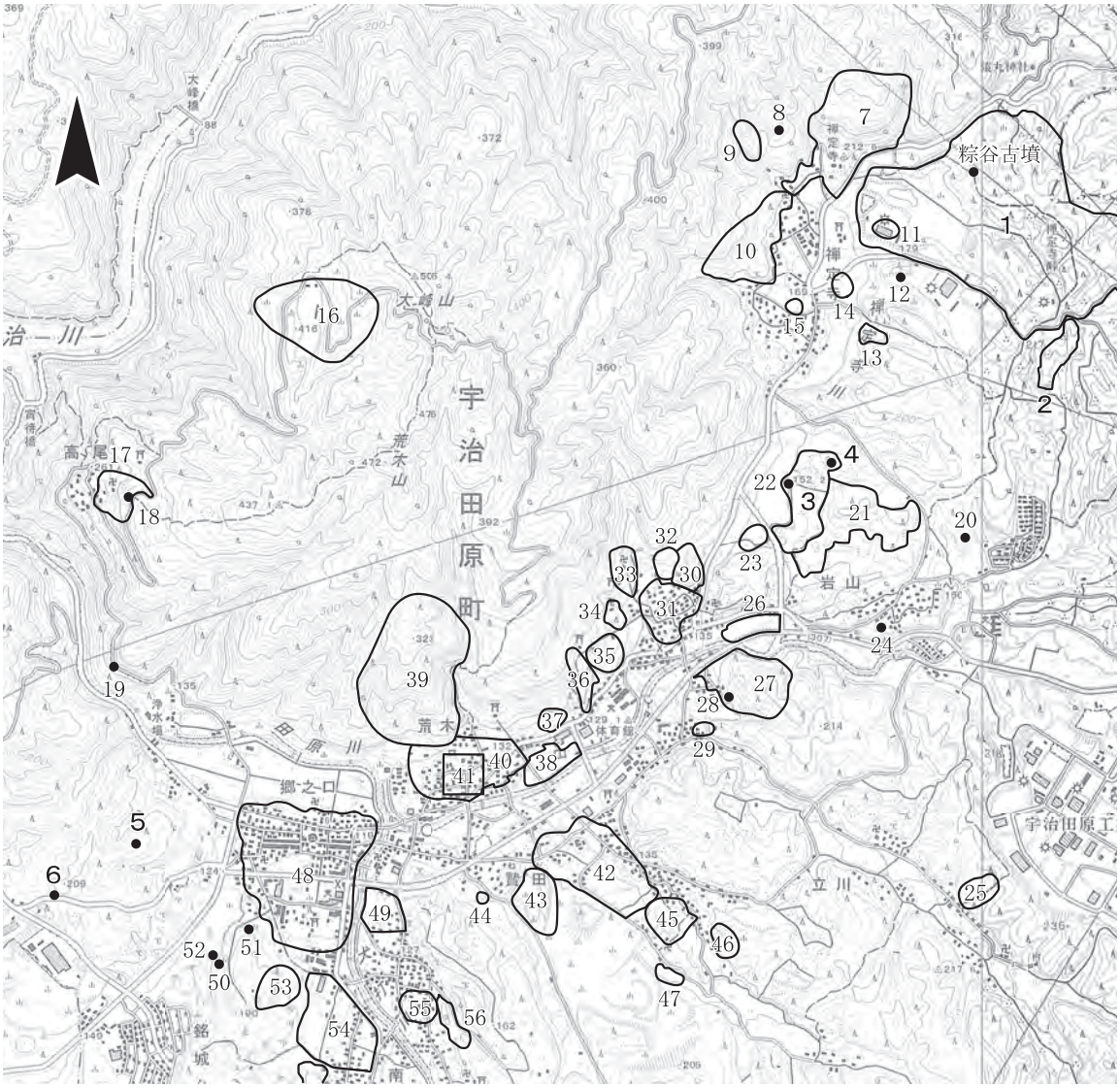
宇治田原町に分布する主要な遺跡について、町教委作成の遺跡地図を参考に概観する(注6)。なお、本文中で紹介する遺跡名の後には、第４図に対応した番号を付している。

縄文時代　宮垣内遺跡で採取された有舌尖頭器は宇治田原町内で最も古い遺物で、縄文時代草創期のものとされている。縄文時代と考えられる石器は岨田遺跡（３）、北垣内遺跡(45)でも発見されている。とくに北垣内遺跡では、狭い範囲でサヌカイト製の石器･破片が多数出土しており、集落の存在が想定されている。石器ではないが、鷲峰山山頂付近では長野県産の可能性がある黒曜石の採取があるとされる(注7)。また、高尾遺跡(17)、沼尻遺跡(38)、堂後遺跡、西海道遺跡(15)でもサヌカイトやチャートの剥片が採取されている。土器は、山龍寺跡(41)においてネガティブな楕円文をもつ押型文が報告されている(注8)。

弥生時代　耕作地に適した平野の少ない山間地であるため、弥生時代の遺跡と思われるものは発見されていないが、老中遺跡(54)から石包丁と考えられるものが出土している。

古墳時代　町内では長らく確実な古墳はなかったが、近年行われた禅定寺城跡の範囲内での発掘調査で墳丘と主体部が報告され(注9)、粽谷古墳と名称されている。遺物としては郷之口遺跡(48)で後期の須恵器横瓶、栗所遺跡や糠塚下手遺跡(42)で須恵器杯身が採取されている。

奈良時代　大和･山城から近江を経て東国へ至る交通路として重要視される田原道が整備され、急速に開発が進んだ。山瀧寺は白鳳期の創建と考えられており、これまでに山田寺式･川原寺式･平城宮式などの瓦が見つかっている。このほか岨田遺跡（３）や岩本城跡(27)で瓦片がみつかっており、何らかの施設が存在した可能性が想定されている。向井古墓(19)は、被葬者が不明であるが、和同開珎や須恵器などが出土している。生産遺跡としては谷出窯跡群(32)と平岡窯跡(29)があり、いずれも８世紀の須恵器窯である。谷出窯跡群で採集された宝珠型のつまみが二段になった仏具とみられる須恵器蓋は、同様のものが平城京等から出土しており、都に供給されていたことがわかる例である。奈良時代の遺跡としては他に、郷之口遺跡(48)、荒木遺跡(40)、老中遺跡



国土地理院２万５千分の１「宇治」「朝宮」を変倍・加筆

0　1km

１．禅定寺城跡
２．奥城土遺跡
３．岨田遺跡
４．砂川古墳
５．長井野塚
６．保安塚
７．禅定寺旧境内
８．経堂山経塚
９．庄地城館跡
10．城山城跡
11．塩谷古墓
12．松尾古墓
13．大谷遺跡
14．下建藤神社遺跡
15．西海道遺跡
16．栢尾塚群
17．高尾遺跡
18．おかめ塚
19．向井古墓
20．隠谷古墓
21．筒井谷城跡
22．岨田古墳
23．墓尾遺跡
24．長山古墳
25．段橋城跡
26．畠田遺跡
27．岩本城跡
28．山下古墓
29．平岡窯跡群
30．後庵遺跡
31．岩本遺跡（旧畠ノ角遺跡）
32．谷出窯跡群
33．巌松院境内遺跡
34．真言院境内遺跡
35．上田遺跡
36．岩本西城跡
37．法泉寺遺跡
38．沼尻遺跡
39．荒木城跡
40．荒木遺跡
41．山瀧寺跡
42．糠塚下手遺跡
43．贄田城跡
44．里遺跡
45．北垣内遺跡
46．野田城跡
47．糠塚城跡
48．郷之口遺跡
49．亥子遺跡
50．南堂山１号墓
51．南堂山２号墓
52．南堂山３号墓
53．地蔵谷城跡
54．老中遺跡
55．岡之藪遺跡
56．脇神城跡

※粽谷古墳は府 GPS 遺跡マップには登録されていない（2021 年２月現在）。

第４図　調査地周辺主要遺跡分布図

(54)、糠塚下手遺跡(42)、岩本遺跡(31)、墓尾遺跡(23)などがある。

平安時代　このころ禅定寺が藤原氏の援助によって建立される。寺領はかなり広大であったと考えられ、宇治田原のほぼ全域はもとより、大津市の一部も寺領に含まれていたとされる。この時期の遺跡に医王教寺、信西入道塚などがある。

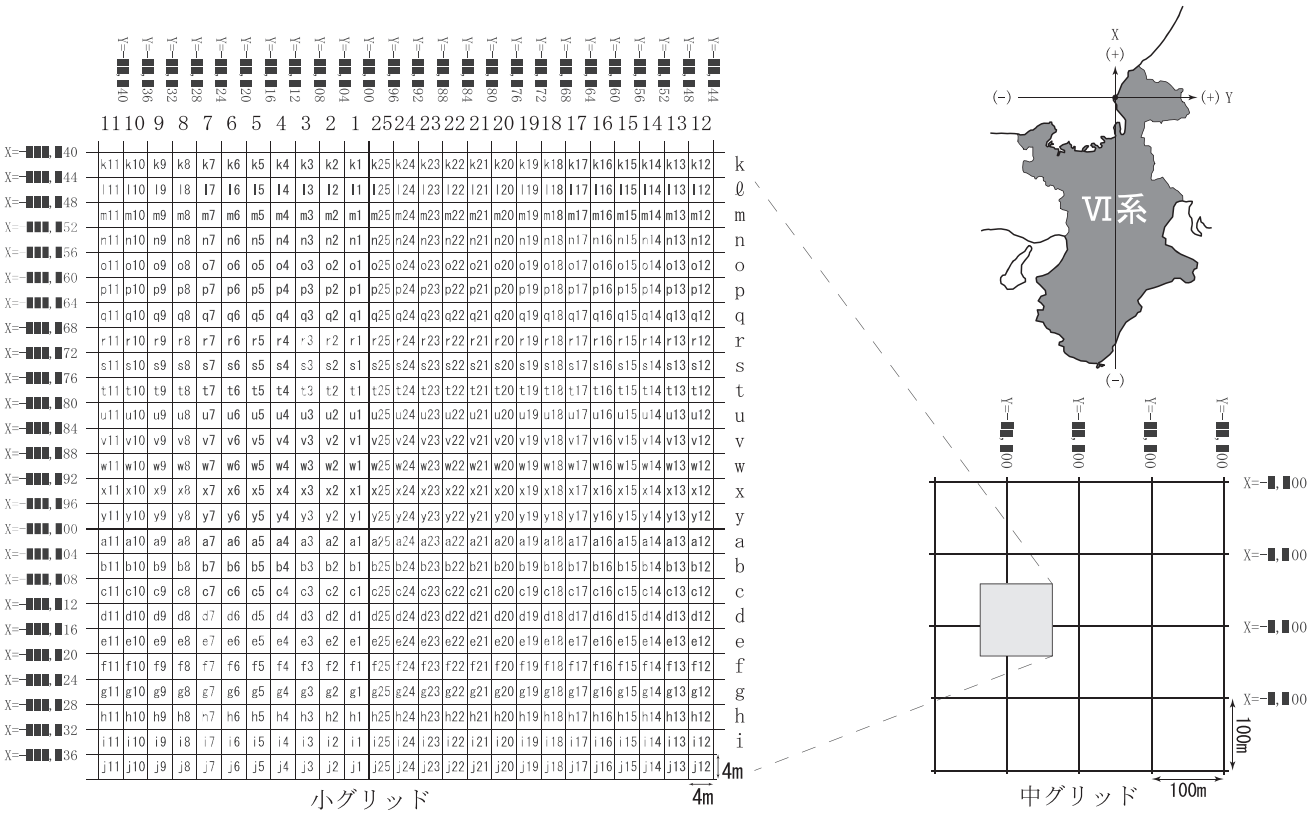
中・近世　田原道は中世以降も重要視され、田原道に沿って城が造られている。木津川右岸から続く山間部ではほとんど見られないが、田原盆地が広がる郷之口から岩山付近にかけては荒木城跡(39)、岩本西城跡(36)、筒井谷城跡(21)、城山城跡(10)、城田城跡、糠塚城跡(47)、脇神城跡(56)など多くの城跡が存在する(注10)。栗所遺跡では13世紀頃の土器とともに、中国製の青磁･白磁、褐釉四耳壺などの輸入陶磁が出土しており、有力者の居館の存在が指摘されている。江戸時代には、多くの寺社が存在し、法泉寺、宝聚寺、中山寺などがあった。また、直谷石灰窯跡群、畑谷石灰窯跡で石灰の生産が行われていた。

（内藤　京）

グリッドの設定

遺物の取り上げに対応するため、平面直角座標系を利用した４ｍのグリッドを設定した。Ｘ、Ｙの座標値のうち、整数値の下二桁が00となる線を基準に100ｍ四方の中グリッドを設定し、これを東西と南北でそれぞれ25等分した。Ⅵ系平面直角座標系は北東角を起点としており、南と西へ向かってＸ、Ｙの絶対値が増加する。この点を考慮して、南北方向は北からａ～ｘ、東西方向は東から１～25として、各グリッドの名称はａ１、ａ２などとする。なお、現実的には100ｍを大きく超える調査区（トレンチ）は存在しない。よって遺物カード等への記入は調査区（トレンチ）名と小グリッド名の表記のみで対応する。

（加藤雅士）



第５図　調査地区割図

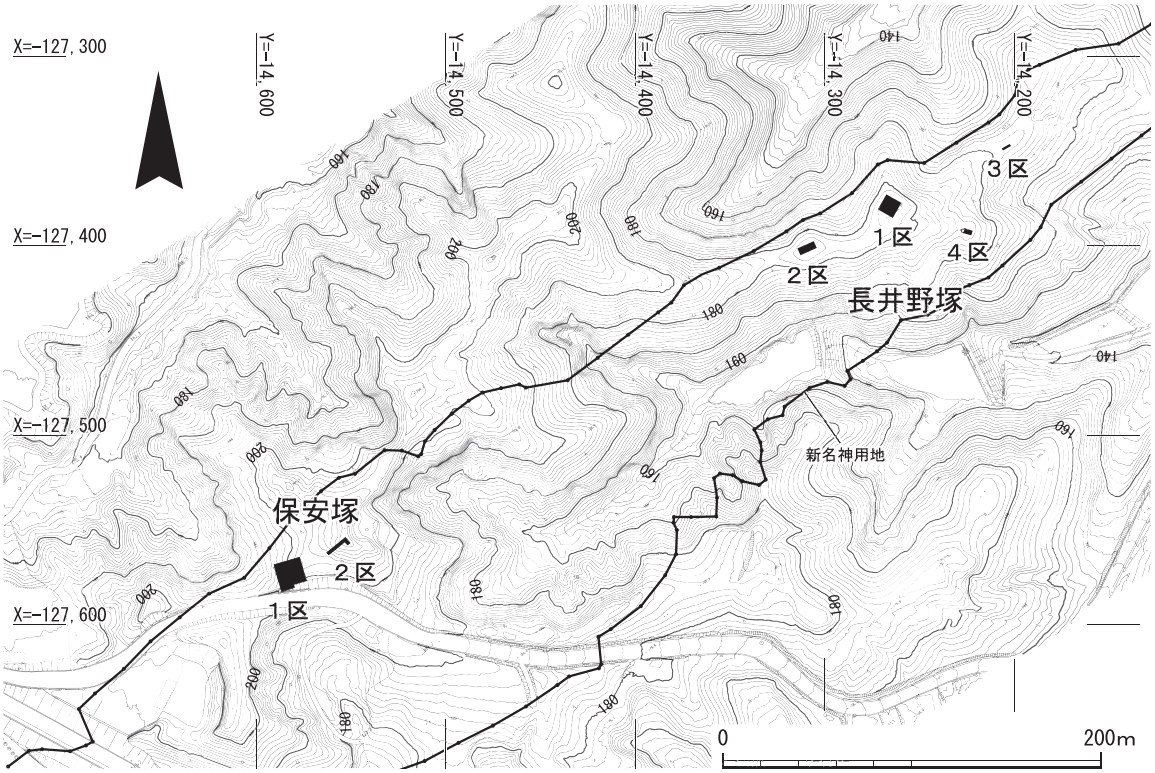
〔1〕 保 安 塚

1．はじめに

保安塚は、郷之口宇治山に所在する。宇治田原盆地の西端部から西へ約800mの山地内の場所で、わずかに隆起する地形があることから塚として遺跡地図に登録されている。調査対象地のすぐ南には東西の道路が横切っている。北側を崖面とする切り通し状の道路で、塚が存在する１区と道路面の比高は２m弱ある。この道路は白川を経て宇治へと続く道路であり、古くからの町の中心部である郷之口へと通じている。中央線がなく幅の狭い道路で、現在は抜け道のような存在となっている。調査地の西約120mの位置には三叉路があり、南へ行くと欽明台付近で国道307号と接続している。幅の広い２車線道路であり、北の宇治方面から来た車はほとんどがこちらを通行し、路線バスの経路ともなっている。この道が国道307号への接続されたのは、1980年代末に行われた整備によってであり(注11)、それまでは宇治と宇治田原はこの道でつながれていた。

調査地は植林地として林業で利用されていた場所であり、調査着手に先立ち、事業者により樹木の伐採が行われた。調査区は２か所に設定した。１区は塚を中心とした調査区である。２区は塚から北東へ約30mの尾根を対象に設定した。当初は調査予定になかった所であるが、宇治田原盆地を西から見通す眺望の良い場所にあることや周辺の地形観察から、古墳等の土地利用を確認するため調査に加えた。

表土の掘削は人力で行い、１区については掘削に先立ちトータルステーションを使用して地形



第６図　保安塚・長井野塚周辺地形測量図

測量を行った。遺物の取り上げは、塚周辺で土師器皿が纏まって出土する傾向を見せたため、全ての遺物の出土位置を座標で記録する方針とし、必要に応じて出土状況図を作成した。調査の終盤には小型無人航空機を使用して撮影、測量を行った。

２．調 査 の 概 要

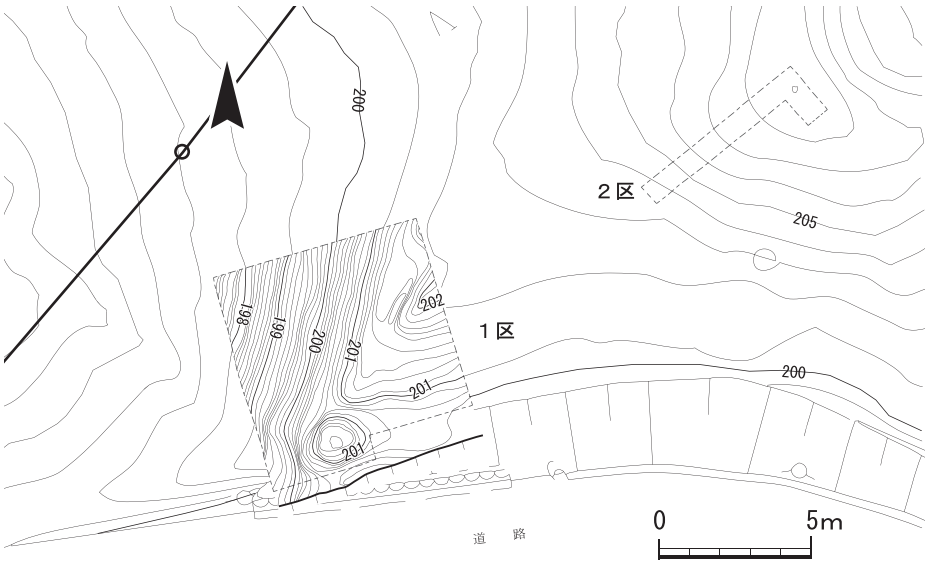
１）１区の調査

塚の部分に設定した調査区で、調査区の大きさは南北13m、東西14mである。１区が位置する場所は西へ広がる谷地形の谷頭にあたり、２区を設定した尾根から谷へと地形が変換する部分でもある。調査区の南東半部はほぼ平坦になっており、北東側にある尾根頂部から尾根線がなだらかに下ってきている。一方、調査区の北西半部は斜度23°程度の谷斜面となっている。調査区の南側は町道が東西に通るため崖になっている。塚が位置するのは、崖の上端ラインと、地形が平坦面から谷へと傾斜変換するラインの交点である。塚の南東側には、東側から小さな谷地形が入り込んでいる。

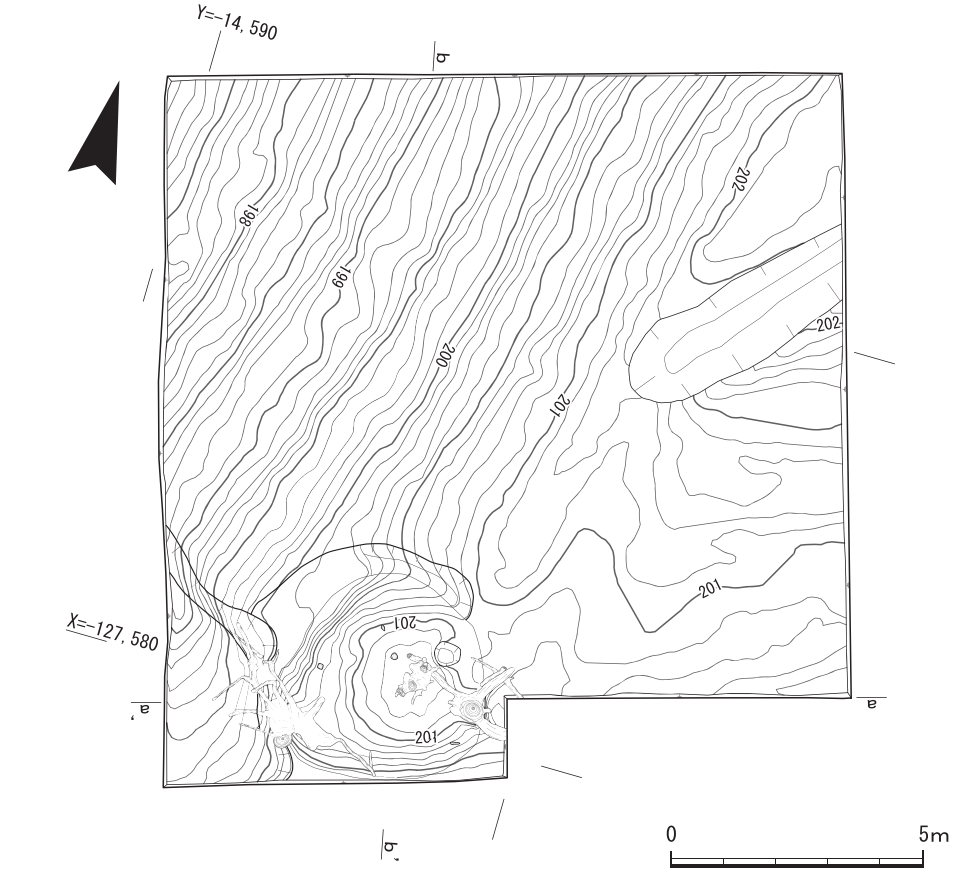
掘削前に観察したところ､塚は歪な円形のマウンド状で径4.5mの大きさであった。塚の高さは、東の平坦面から計測すると0.5m程度であった。周辺に樹木が茂っていることもあってあまり目立たないものであった。同じく樹木が遮っていることにより、調査区の南にある町道からは塚の存在を視認することはできなかった。

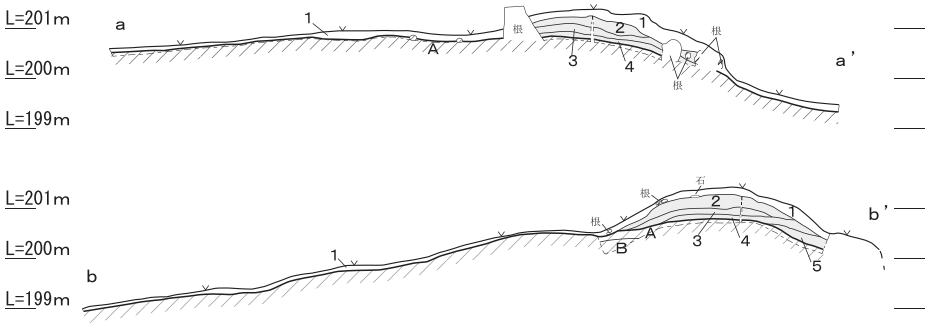
掘削にあたって、塚を中心に十字の畦を設定した。塚の盛土上面まで掘削後、断面を記録して畦の除去を行い、全景写真撮影および測量を実施した。全景撮影後、畦のあった部分際に幅30cmの断割を地山面まで入れ、盛土の断面を記録した。その後、盛土中や塚の下部における遺構の有無を確認する目的で、地山まで面的に掘削を行った。

表土（第１層）は厚さが10cm程度の有機化層であり、塚と塚以外の部分を一連に覆っている。塚以外の部分では、表土を除去するとすぐで地山面を検出し、精査を行ったが遺構は検出されな



第７図　保安塚調査前地形測量図





1．褐灰色（10YR5/1）極細粒砂　有機化し植物根を非常に多く含む＜表土層＞
2．にぶい黄橙色（10YR7/3）粗粒砂混細粒砂　色調がやや暗く弱く有機化する＜塚盛土＞
3．にぶい橙色（7.5YR7/4）粗粒砂混細粒砂　色調が暗く弱く有機化する＜塚盛土＞
4．明黄褐色（10YR7/6）粗粒砂混中粒砂＜塚盛土＞
5．にぶい黄橙色（10YR7/3）細粒砂　色調がやや暗く弱く有機化する＜塚盛土＞
A．黄橙色（10YR8/6）粗粒砂　締まりが強い＜地山＞
B．灰白色（10YR8/2）粗粒砂　締まりが強い＜地山＞

第８図　保安塚１区平面図・土層断面図

かった。

塚は厚さ10cm～28cmの層を５層積み重ねた盛土でつくられている。いずれも地山を由来とする層で地山との判別が難しかったが、地山と比べるとやや色調が暗く、弱く有機化した土であった。塚の南側は、盛土が調査区外まで延びており裾部は完全に確認できなかった。塚上で出土した遺物は、第１層を除去してすぐの盛土上面で検出した。一部の遺物については盛土上面から３～４cmの深さの断割内で出土している。盛土中や盛土の下から遺物は出土していない。よって盛土の各層には時期差がなく、盛土の積み増し等は行われていないと考えられる。すなわち、塚は一時期に構築されたものであると考えられる。

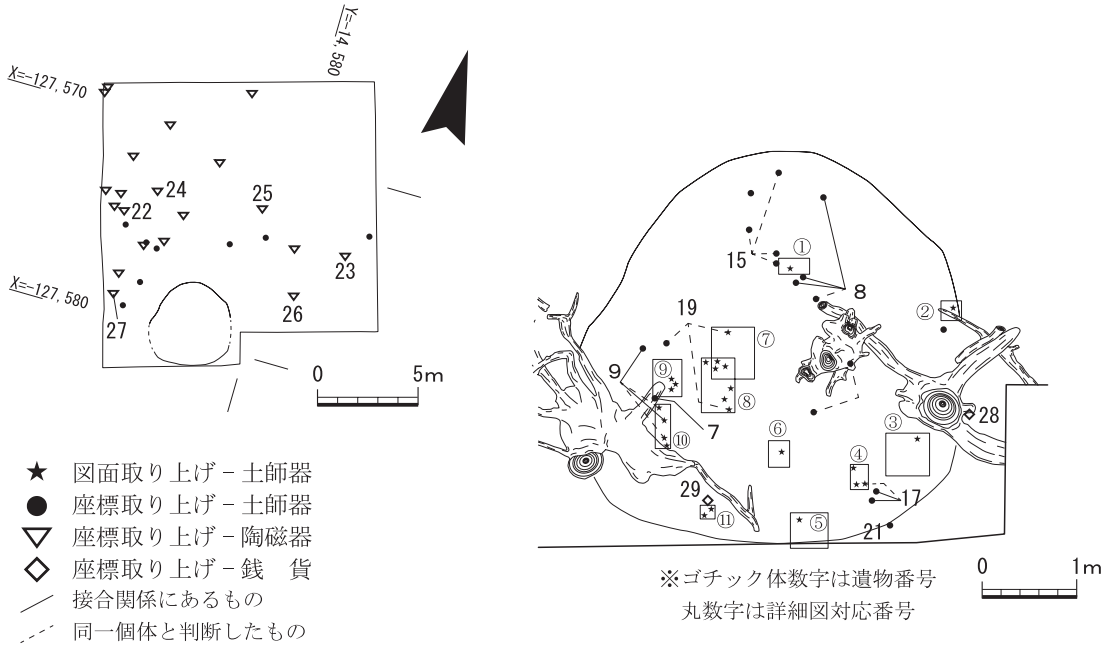
表土を除去した塚の大きさは南北4.3m、東西4.44mで、平面形は歪な円形である。塚の高さは、裾部の地山面から塚盛土の頂部までを計測すると塚の東裾で0.68m、北裾では0.72mである。塚の西側に入り込む小さな谷地形の底から計測すると0.98mとなっており、見る角度によって塚の高さの印象が異なっている。

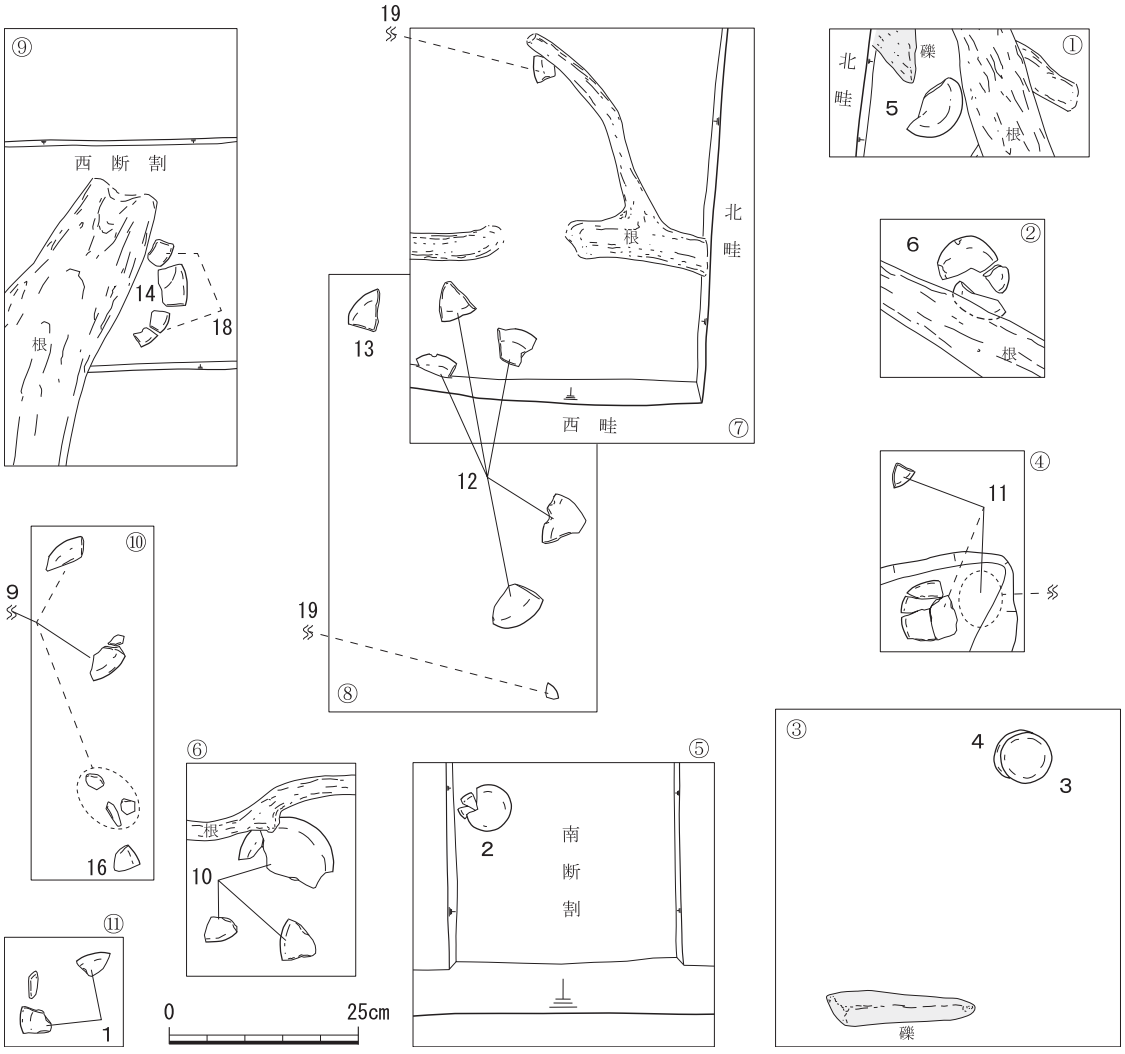
塚上には３本の大きな樹木・切り株が根を張っているほか、朽ちた根の周辺で有機化が進んだ部分があった。これらを除去しながら精査を行ったため、表土除去後の塚の表面は凹凸があるものとなった。しかし塚上面では、土坑等の遺構は検出されなかった。また、拳大の砂岩・チャートの礫を塚上で数点確認したが、人為的に置かれたものかは判断がつかなかった。砂岩やチャートは大阪層群の長池層に含まれるものであり、少なくとも規則的な配置は示していなかった。

塚のすぐ北西側は、幅0.78mのテラス状の平坦な地形が塚を取り巻くようにある。長さは2.28mである。またテラスに続く東側は幅0.54m、深さ0.02cmのわずかに窪む浅い溝状になっており、やはり塚を取り巻くようにある。長さは2.16mである。テラス状の地形は、その北にある谷斜面の地形と比べると明らかに異なり、人為的に地山を削ったものと考えられる。塚の下には旧表土が認められない点から、盛土を行う前に地山面を削って地形を整える作業が行われた可能性がある。またテラス面が存在することで、平坦面と塚の盛り上がりの境が視覚的に強調されている。溝状の部分については埋土がないため、遺構として水が流れた痕跡は認められない。しかし発掘調査中に降った雨を溝が集める状況を確認しており、排水の役割も備えたものであったと考えられる。

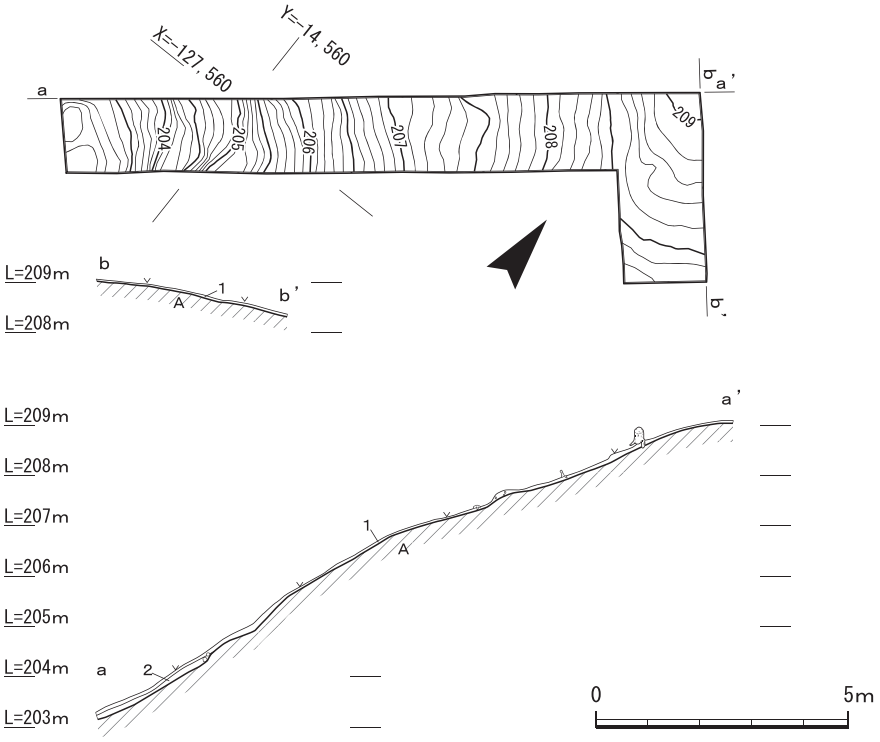
調査の最終盤には、盛土下での遺構の有無を確認するため盛土の掘削を行った。掘削は断面と平面で精査を行いながら慎重に実施したが、遺構・遺物は検出されなかった。また盛土下の地山面においても遺構・遺物は検出されなかった。

遺物は、調査区全体から土師器、陶磁器、銭貨が出土している。これらの出土場所には特徴がある。塚以外の部分では土師器の細片や陶磁器片が、平坦部や斜面部から出土している。一方、塚の部分からは陶磁器は出土していない。また完形やほぼ完形に復原される土師器皿が塚の部分のみから出土している。基本的に土師器皿は表土である第１層を除去した盛土直上から出土している。しかし、２・14・18に関しては断割内で出土しており他よりレベル的に３～４cm低い。後述のとおり18は古い要素をもつ土器であり、頂部から流れた盛土が土器の上に堆積する等、時





第９図　保安塚遺物出土状況図



1．褐灰色（10YR6/6）細粒砂　有機化し植物根を非常に多く含む＜表土層＞
2．黄灰色（2.5Y6/1）中粒砂　色調がやや暗く弱く有機化する＜堆積土層＞
A．淡黄色（2.5Y8/3）粗粒砂混細粒砂　径0.5～1㎝大の礫を多く含む＜地山＞

第10図　保安塚２区平面図・土層断面図

間差を反映している可能性がある。塚上から出土する土師器皿は、基本的には重なることなく単体で出土したものばかりである。唯一、3・4は逆位の２個体が重なった状態で出土している。3・4は胎土の特徴が同一であり、下にある3は灯芯痕跡を有する灯明皿である。上に重なる4は灯芯痕跡を持たないが、大きさと胎土が同じであることから灯明受皿等として使用されたものと考えられる。塚上からは銭貨も２点出土しているが、出土位置はいずれも塚の裾部付近である。土師器皿や銭貨は人為的に塚上に置かれたものと考えられる。

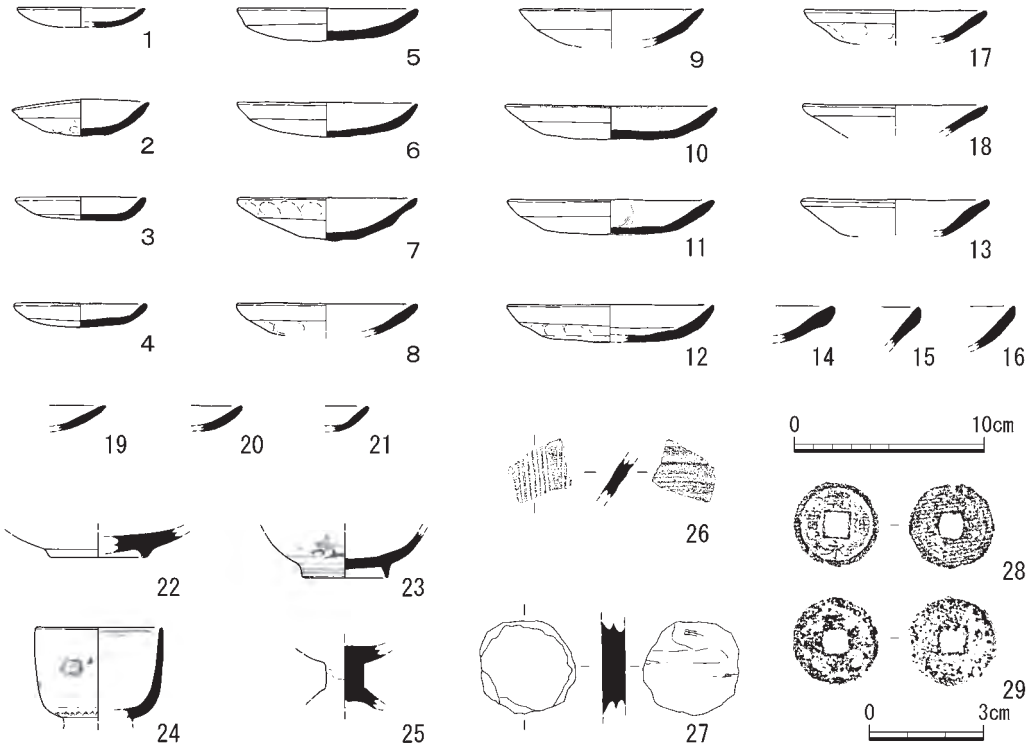
２）２区の調査

尾根頂部から斜面にかけて設定した調査区である。調査区はＬ字で、幅1.5m、長さ12mの大きさである。表土（第１層）は植物根を多く含む腐食土層で、10cm程度の厚さがある。これを除去したところですぐに地山を検出した。

地山面上で精査を行ったが、遺構は検出されなかった。遺物の出土もなかった。

３．出土遺物

全て１区からの出土品である。先にも述べた通り、２区からは遺物は出土していない。１～21、28･29は塚上から出土したものである。土師器皿（１～21）は形態と口径から５つに分類した。なお、土器の口径復原については、口縁長の1/6以上が残存しているものについてのみ行った。(注12)



第11図　保安塚出土遺物実測図

１類（１～４）は、口径が６～７cm台の土師器皿をまとめた。１は今回出土した土師器皿の中で最も口径の小さなもので、口縁部は横ナデ調整か。３・４も口縁部を横ナデ調整するもので、口縁部の横ナデ調整の最後で斜めにナデ抜いている。３は灯明皿として１本の芯が使われた痕跡が口縁端部に残る。３・４に加えて６は色調や混和剤等の胎土の特徴が完全に同じであり、同一の産地のものと考えられる。２は口縁部外面を横ナデ調整しないもので、口縁部が歪んでいる。

２類（５～10）は、口縁端部を丸く仕上げるもので、口径が９・10cm台の一群である。口縁部は横ナデ、底部をナデ調整し、器形は口縁から底部へなだらかに続いている。底部は丸ないし平底であり、内面に圏線等はない。10は口縁端部に灯芯痕跡をもつ。口縁端部の横６cmの範囲で黒色の付着物があり、複数本の灯芯が使用されたと考えられる。小片であるため口径が不明であるもの（19～21）は、１類ないし２類にあてはまるであろう。

３類（11・12）は、口縁立ち上がり部の内面に凹線状の圏線が巡るもので、いずれも口径10cm台後半である。11は今回出土した土師器皿のなかで唯一「２」の字状ナデが施されるものである。立ち上がり部に施されるナデは「２」の字状ナデに連なっており、非常に弱い圏線を呈する。12は器壁が厚く橙色系の色調を呈する。丸い底部と一体となった口縁部をもつ器形のため、底部と口縁部との境が不明瞭であるが、見込み部にははっきりと圏線が巡っている。圏線は幅広で浅い形状である。

４類（13～16）は、口縁部を大きく肥厚させるものである。器壁自体も厚く、胎土は砂味が強い。色調は13～15が橙色系、16は黄橙色系である。13・15は口縁部内面のナデ調整による布等の痕跡が明瞭に残る。(注13)

５類(17・18)は、特徴的な口縁をもつものをまとめた。17は口縁端部の内面に面を持っている個体。口縁部の横ナデで作られた幅５mmほどの面で、面を上方に向けている。18は接合しないが、胎土が同じで出土位置が近いことから３つの破片を同一個体と判断した。口縁端部内面に弱い沈線が巡る個体である。

土師器皿については上記の通り分類したが、胎土の特徴からみると大きく２つに分けることができる。一つは都城から出土する律令期の供膳具とほぼ同じ特徴の褐色系のもの(１・２・７～11・13・16)で、表面は“ヌメ”としている。もう一つは胎土の砂味の強いもの(３・４・６・12・14・15・17・18)である。赤い色調を呈するもの(12・14・15・17)とそれ以外に分けることができ、色調が赤いものは器壁が厚い傾向にある。これらに当てはまらないものとして、混和材をほとんど含まず非常に精良で黄橙色を呈するものが１点(５)ある。

銭貨(28・29)も土師器皿と同じく塚上の表土層直下から出土した。28は寛永通宝である。「寶」の下端部が欠失しており、裏面も完全に摩滅していることから寛永通宝の新古は不明である。非鉄銭である。29は円形方孔の鉄銭である。表面は孔の上下左右に文字が存在するが、全面が錆に覆われているため判読できない。裏面の状況も錆のため不明である。

22～27は１区の塚以外の部分から出土したものである。

22は肥前系とみられる陶器の高台部で、皿の可能性がある。Ⅲ期(1650～1690年代)を中心とする時期のものであろう(注14)。23は肥前産とみられる磁器碗。判読できないが高台内に銘がある。高台の断面形は山形でやや内傾する特徴があり、17世紀後半～18世紀のものと考えられる。24は瀬戸産とみられる染付。底部外面に鋸歯状の文様、体部外面には屋号を示すとみられる２文字がある。うち１文字は「屋」と読める。染付の発色が鮮やかであり明治期のものと考えられる。25は白磁の仏飯具である。脚部内面および外面の下半は無釉である。磁器製の仏飯具でありⅡ-2期(1630～1650年代)以降のものである。26は擂鉢片である。1.5cm幅の中に６単位の櫛歯状工具による擂り目をもち、隣接する単位との間隔は0.7cmと密である。畑中編年３期以降に該当すると考えられ(注15)、17世紀半ば以降の年代が与えられる。27は陶器製の土製円盤である。周囲を打ち欠いて円盤状に仕上げている。

４．ま と め

発掘調査の結果、保安塚は人為的に作られた塚である事が判明した。また塚上からは土師器皿が纏まって出土しており、塚上で何らかの人間活動が行われていたと考えられる。どのような行為が行われ、どのように意義づけられるのだろうか。

１)塚の年代観

最初に土師器皿を基にして、塚の年代を求めてみたい。平安京出土例を中心とした既往の編年案では器形や胎土の特徴などを基に、タイプや系列などでグループ分けが行われている(注16)。こうした分類に今回の出土例を完全にあてはめられない点に課題はあるが、近年の平尾政幸氏の整理にあてはめてみたい(注17)。

まず、土師器皿編年上の特徴的な要素として、３類の土師器皿が有する内面の圏線がある。11はいわゆる京都系の特徴を持つものである。圏線の窪みはわずかなものであり、圏線が鋭くなる前のものである。12は明瞭な圏線であるが、やはり鋭いものではない。これらの特徴は平尾氏案の10Ｃ期～11期の間に位置付けられよう。次に口径が６～７cmである１類は、口縁部を横ナデ調整するものに加えて、口縁部外面を横ナデしないものも含んでいる。またヘソ皿が存在していない点からも、10Ｃ期以降に当てはまると考えられる。２類については、外反しない口縁で端部を丸く仕上げる形態から、10Ｃ～11期の間にあてはまると考えられる。４類は平尾氏の皿Ｓｂに近いものと考えられる。平尾氏の法量分布図によれば、皿Ｓｂは器形の変化に乏しいようであるが、おおよそ９～11期の間にあてはまるであろう。５類は２点のみであるが、口縁形態が他と比べて特徴的なものをまとめた。17は口縁端部の内面に面をもつもので10Ａ・Ｂ期頃、18にみられる口縁端部内面の沈線は９期頃に認められる特徴である。

上記をまとめると､塚上から出土した土師器皿の主体は10Ｃ～11期の間に収まると考えられる。平尾氏は10Ｃ期の始まりを1560年、11期の終わりを1680年と示しており、土師器皿群全体として16世紀後半～17世紀の年代が与えられる。そしてこの年代よりも古相の特徴を持つ土器群が５類となる。土師器皿から得られたこの年代観は、寛永通宝(28)とは調和的(創鋳1636年)である。一方で鉄銭(29)が寛永通宝であった場合、1739年以降となり(注18)、土師器皿群よりも新相である。塚以外から出土した遺物についても陶磁器を中心に17世紀以降の年代であり、塚上の土師器皿と調和的である。

２)塚の性格

中近世の塚の性格を考える際、墓とそれ以外で分け、さらに後者が信仰に伴うものか否かで整理するのが一般的である(注19)。つまり､①墓としての塚､②信仰的な塚､③非信仰的な塚に分類される。

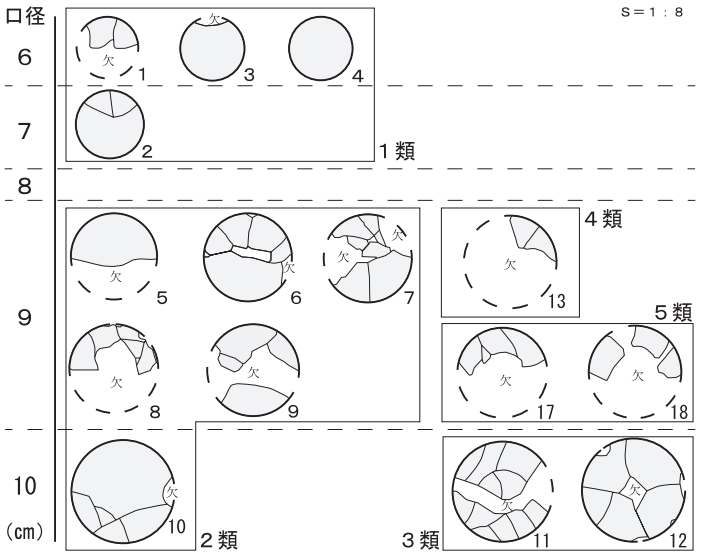
まず、今回の発掘調査では、盛土の上や下において土坑等が検出されなかった。よって塚墓や入定塚など主体部を伴う墓の性格をもつ塚とは考えられない。

信仰的な塚としての検討　次に信仰的な塚としての可能性を検討してみたい。先に述べたように、塚盛土の下では遺構・遺物は検出されなかった。よって塚の築造に先立って地鎮等は行われていない。塚盛土の上においても柱穴等の掘り込みや石による外装等は検出されず、祠等の構造物が存在していたとは考えにくい。これは土師器の出土位置が塚上の全面に広がっている点からも追認できよう。よって先行研究によってある程度塚の性格が定まっている、庚申塚や富士塚といった民間信仰や山岳信仰に伴うものである可能性は低い。その一方で、２点ではあるが塚上から銭貨が出土している点は、塚が一定の信仰の対象として当時認識されていた可能性を生じさせる。銭はそれぞれ単独で出土しており、六文銭などの冥銭ではなく、奉賽銭と考えられる(注20)。では塚上から出土した遺物のうち、圧倒的多数を占める土師器皿はどう位置づけられるであろう。今回塚上から出土した土師器皿は、全体として16世紀後半～17世紀の年代が与えられた。使用痕跡を見ると灯明皿として使われた痕跡を持つものは２点に限られており(注21)、燃灯供養のような夜間の

儀礼とする要素は薄い。土師器皿の口径分布をみると同時代の土師器皿の口径は６～15cm台のものがあるが、今回の土師器皿は11cm以上のものが存在しておらず（第12図）、土師器皿の取り揃えは限定的である。土師器皿の破損・残存率をみると、基本的に破損しているものばかりである。接合してみると完形に復原できるものは限られており、破片が欠失している個体が多い。土師器皿については以上のような特徴が挙げられる。

中世以来の土師器皿には単に食器以上の意味が見出されており、饗宴や供献で使用されている[注22]。饗宴での使用は、武家儀礼のなかで大量に使い捨てされることに特徴がある[注23]。これらと比べると保安塚の土師器皿は大量というわけでもなく、組成においても11cm以上のものを欠くなど、都市や寺院からの大量出土例と同質のものとは捉えられない。土師器皿は基本的に単体で出土していることから、一括で廃棄されたものではなく、散発的なものが累積したと考えられる。この想定は土師器皿の残存率が高くない点とも整合的である。小規模な酒宴などが行われていた可能性は否定できないが、むしろ塚に何らかの意味を見出して土師器皿や銭貨が供えられたものではないかと考える。土師器皿は村落でも日常食器として補助的に使用されることから[注24]、武家儀礼や特定の信仰に基づくものというよりも、一般民衆の素朴な祈りの可能性がある。

非信仰的な塚としての検討　信仰によらない性格をもつ塚として、藩や村の境界に位置する場合がある。当時の山林所有の実態など不明な点はあるが、少なくとも現在の行政境には位置しておらず、また十三塚のように塚が群集する状況にもない。むしろ周辺の交通路との関係が重要であろう。「はじめに」で述べた通り、塚のすぐ南には宇治白川方面へと通じる道路が通っている。便宜的にこの道を白川道と呼んでおこう。元禄国絵図で確認すると（国立公文書館デジタルアーカイブ）、宇治橋方面から白川道を経て宇治田原に至り、禅定寺小坂本方面へと抜ける道が太い朱線で描かれている（第13図）。「白川権現」付近において道が山と谷を越える様子が描かれているが、このような表現は山城国絵図の中では他に見当たらない。白川道が山間の道であることが



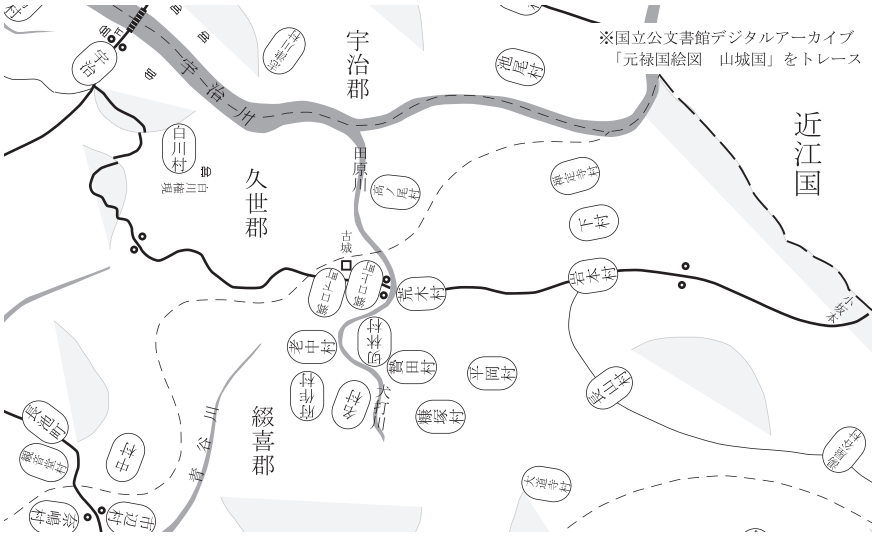
第12図　保安塚出土土師器皿の口径分布と残存率

強調されている。宇治田原内では「岩本村」付近においてこの道から分岐する道も細い朱線で描かれている。「湯屋谷」方面を経る信楽街道である。現在、宇治田原を通る道は他にもあるが、宇治川沿いを通る府道３･62号ルートである宇治道は、天保14(1843)年に改修されている[注25]。また、国道307号ルートは弘化５(1884)年に整備された経路とされるので[注26]、保安塚が面する白川道は東海道の迂回路や東国へと通じる道として重要な位置を占めていたと考えられる。発掘調査では塚周辺を除いては遺物の出土は散漫であり、集落域とは考えられない。よって保安塚は白川道との関係で築かれた可能性がある。

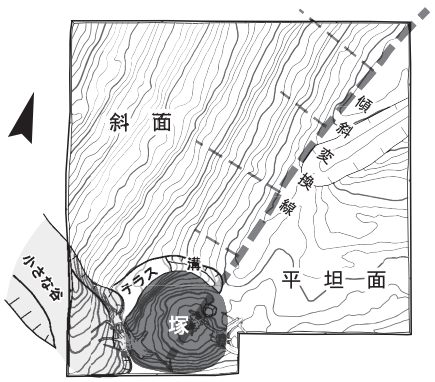
元禄国絵図では田原川・犬内川左岸にある「郷之口上町」の東に一里塚が表現されている。この一里塚の位置から、白川を経て宇治橋西詰の一里塚までの２里分の距離を現在の地図で計測すると約９kmとなる。よって一里塚が正確に3.9km間隔で築かれた訳ではなかったことが分かる。郷之口の一里塚から保安塚までの距離を計測すると、計測位置によって変異があるが約1.6～1.7kmとなる。一里の距離が正確ではないことから、一里の半分程度とすることもできるであろう。中山道の浦和宿と大宮宿の間には、与野半里塚とされた欅があったが[注27]、実際に塚が半里の位置に築かれた例は管見にない。半里塚であるかは別として、仮に当時の白川道から塚が見えていたとすれば道をゆく人にとって保安塚は通行の目印になったであろう。

ところで街道に作られる一里塚には､目印となる樹木が植えられることが多い[注28]。保安塚の場合、塚頂部から東斜面にかけて、ヒノキないしスギと考えられる常緑針葉樹がある[注29]。塚頂部の中央部および塚頂部から西斜面にかけては広葉樹が存在している。西斜面の広葉樹のみ立ち木で、他は調査着手前に原因者側で伐採された切り株である。切り株断面の直径は中央部の広葉樹が約20cm、東斜面の常緑針葉樹が約40cmである。西斜面の広葉樹は、切り株と同じ高さで測ると直径は50cm程度である。樹木の直径からは、いずれの樹齢も100年に満たないものばかりである[注30]。よって塚が機能していた当時には､現在みられる塚上の樹木は存在していなかったと考えられる。

結論　中近世の塚は性格が判明しない場合の方が多いが、とりあえずこれまでの検討を受けて



第13図　国絵図にみる周辺の交通路



第14図　保安塚周辺地形の概略図

仮説を提示しておきたい。実際のところ塚の性格は単純に区分されるものではなく、本来の性格が転じる場合や、複数の意味合いをもつものがあると考えられている(注31)。保安塚についても、本来は白川道との関係がきっかけで構築されたものに対し、次第に意味が見出されたと考える。なぜなら白川道は山間の道であり、宇治方面から来た者にとってもうすぐ宇治田原盆地へ達する事を告げる保安塚は、安堵の気持ちで見る対象であったであろう。逆にこれから宇治田原盆地を発つ者は、保安塚を見てこの先の道のりを思ったであろう。塚を見る人々の心情から、次第に塚に対しても特別な意味が見出され、土師器皿や銭貨が供えられる対象になったのではないか、と考える。

（3）まとめ

今回の発掘調査で判明した事柄を以下にまとめる。

・保安塚は盛土により作られた塚である。
・塚の平面形は歪な円形で、直径4.3～4.44m、高さは0.68～0.98m。
・出土土師器皿から16世紀後半～17世紀の年代が考えられる。また、18世紀までは塚として意識されていたようである。
・盛土の上や下には土坑や構造物等の遺構は伴わない。
・塚上では土師器皿や銭貨が出土している。
・白川道に面した場所に位置している。
・塚の性格として、道との関係で構築されたものが信仰の対象となった可能性がある。

上記の通りであるが、同様の特徴をもつ塚は類例に乏しく、性格付けについては今後も検討が必要である。しかしながら白川道に面した位置にある点は、重要視されるべきであろう。また保安塚が白川と郷之口の間である半里の距離に位置する可能性も指摘したが、この点についても今後の検討課題である。

保安塚は山林内に地形の隆起が認められることから塚として遺跡地図に登録されてきたが、今回実施した発掘調査によって改めて人為的に作られた塚であることが明らかになった。地形隆起と言っても、実際のところよほど注意しなければ見過ごされそうなものであった。樹木や草木が生茂る中ではなおさらである。遺跡踏査における丁寧な地形観察の重要さを再認識させられたとともに、関係者の努力と慧眼についても顧みられるべきであろう。

宇治田原は大和や山城と東国を結ぶ交通路としての性格を古くから帯びており、歴史の舞台として多くの場面に登場してきた。保安塚が造られた近世においても、その重要性は変わらず、交通の要衝としての位置を宇治田原が占めていたことを遺跡が如実に物語っている。

（加藤雅士）

〔2〕長　井　野　塚

1．はじめに

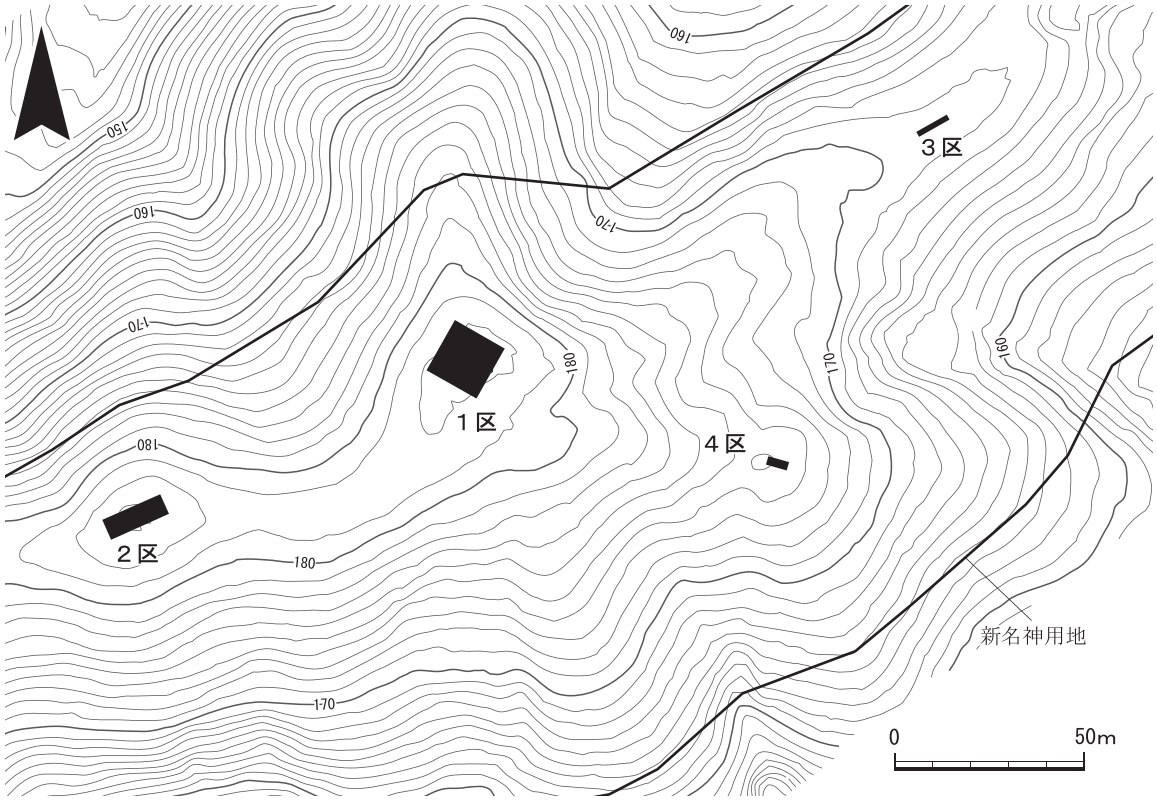
長井野塚は、宇治田原町郷之口長井野に所在し、種別は塚として遺跡地図に登録されている。その位置は、宇治田原盆地西側の山地から盆地に向けて東に延びる尾根上にある。当該の尾根上には二瘤駱駝の背状に東西に連なる２か所の最頂部があり、このうち東側の頂部が塚とされている。盆地の西端からは西へ約200m、保安塚からは北東へ約300mの距離にある。塚とされる場所からは宇治田原盆地を西から一望することができ、非常に眺望の良い位置にある。

調査対象地の周辺は林業で利用されている場所であり、発掘調査に先立って事業者により樹木の伐採が行われた。調査区は塚とされる場所に加え、周辺の平坦地や山地頂部に合計４か所設けた。表土の掘削は人力で行った。

2．調査の概要

1）1区の調査

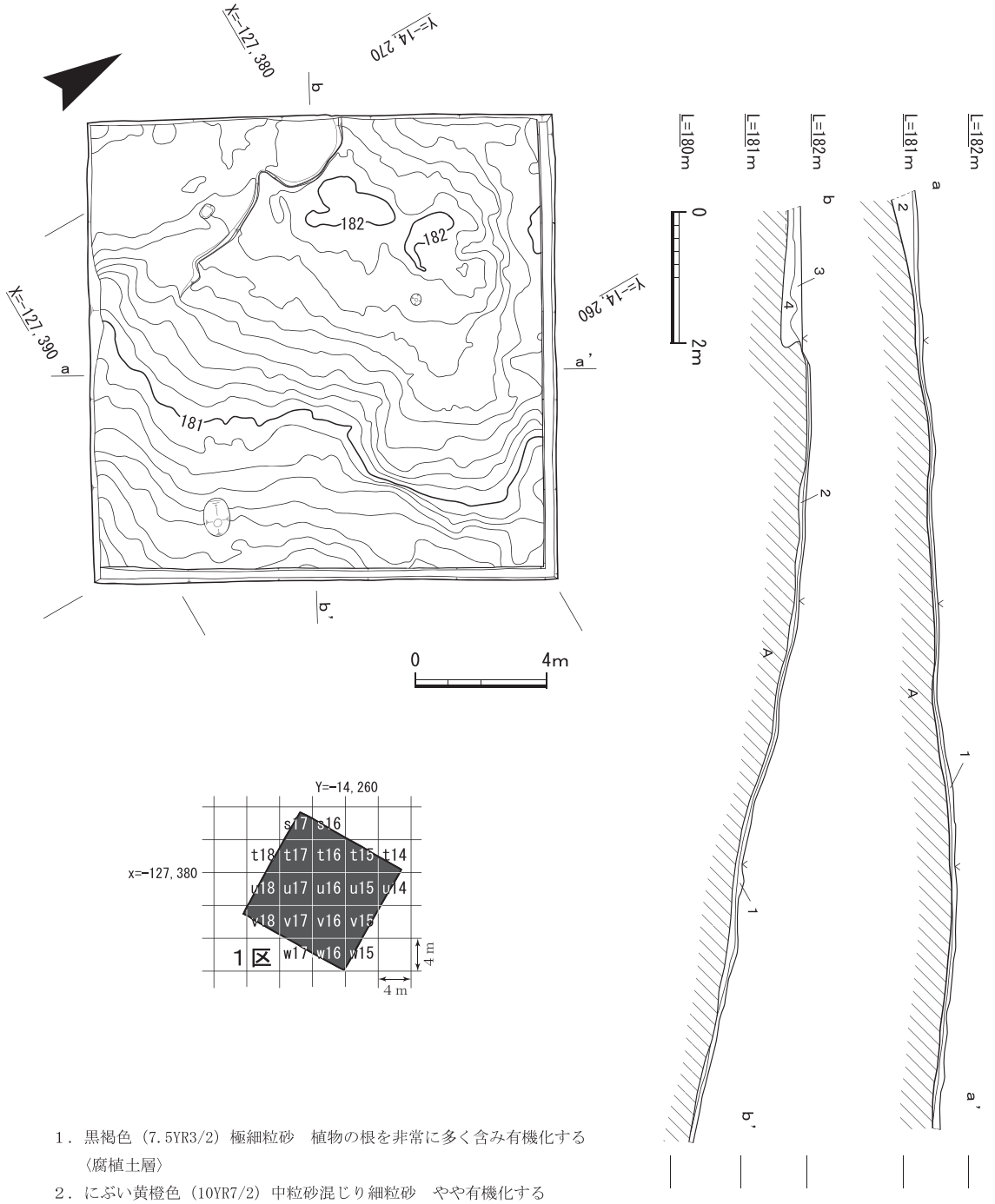
遺跡地図において塚とされている場所に設定した調査区である（第16図）。東側の尾根頂部にあたる場所である。掘削前に地形を観察したところ尾根の頂部は傾斜の緩い平坦地となっており、塚状隆起等の特徴な地形は見当たらなかった。調査区はこの平坦地に、一辺14.2mの大きさの正



第15図　長井野塚調査区配置図

方形で設定した。

表土である腐植土(第１層)を除去したところ、すぐに地山を検出した。地山面上で精査を行ったが、遺構は存在しなかった。調査区の西角部については、地山が40cmの深さで落ち込んでいた。落ち込みの下半部は雨水が流入することにより堆積した層(第４層)があり、上半部(第３層)は人



１．黒褐色（7.5YR3/2）極細粒砂　植物の根を非常に多く含み有機化する〈腐植土層〉
２．にぶい黄橙色（10YR7/2）中粒砂混じり細粒砂　やや有機化する
３．明褐灰色（7.5YR7/2）細粒砂混じり極細粒砂　浅黄橙色（7.5YR8/4）がブロック状に混じる〈人為的に動かされた土か〉
４．灰白色（2.5Y8.2）細粒砂 ラミナ状を呈しており雨水が落ち込みに堆積したもの
A．浅黄橙（10YR8/4）粗粒砂混じり細粒砂＜地山＞

第16図　長井野塚１区平面図・土層断面図

為的に埋められていた。林業に伴う整地と考えられる。遺物は第１・３層中で土師器皿・磁器がごく少量出土した。

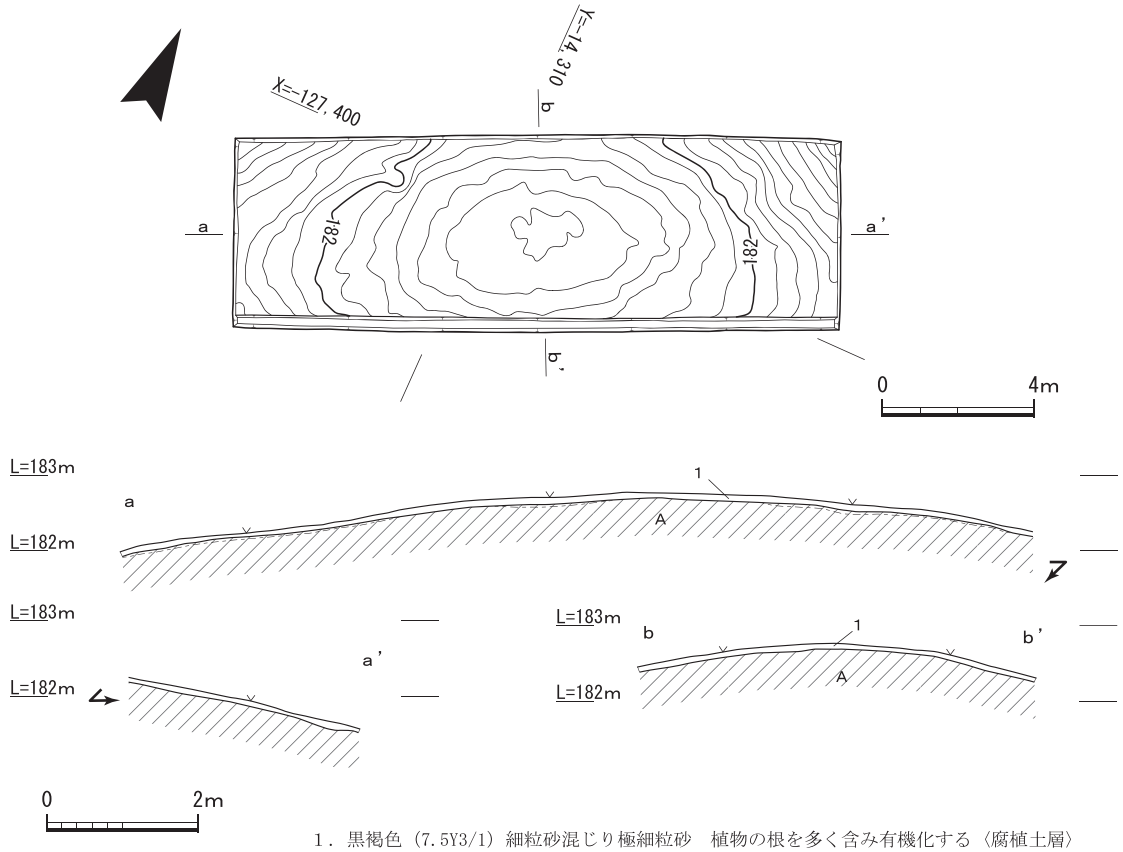
２）２区の調査

西側の尾根頂部に設けた調査区（第17図）で、１区からは南西側に70mの位置にある。調査区の大きさは南北幅５mで、東西の長さは16mである。２区の地形は、楕円形の等高線が同心円状に整然と並ぶもので、掘削前の観察では特徴的な隆起等は見当たらなかった。

表土である腐植土層（第１層）を除去したところ、すぐに地山を検出した。地山面上で精査を行ったが、遺構は存在しなかった。１区で見られたような、人為的な地形改変の様子も認められなかった。本調査区から遺物は出土しなかった。

３）３区の調査

尾根頂部から北東方向へ下る尾根線上に設けた調査区である（第18図上段）。１区からは北東へ120mの位置にある。地形は長さ35m、幅20m程度の広さがある平坦面となっている。この平坦部での土地利用の有無を確認する目的で調査区を設定した。調査区の大きさは東西の長さ８m、南北幅2.5mである。



１．黒褐色（7.5Y3/1）細粒砂混じり極細粒砂　植物の根を多く含み有機化する〈腐植土層〉
Ａ．黄橙色（10YR7/6）径１～２㎝大の礫を非常に多く含む〈地山〉

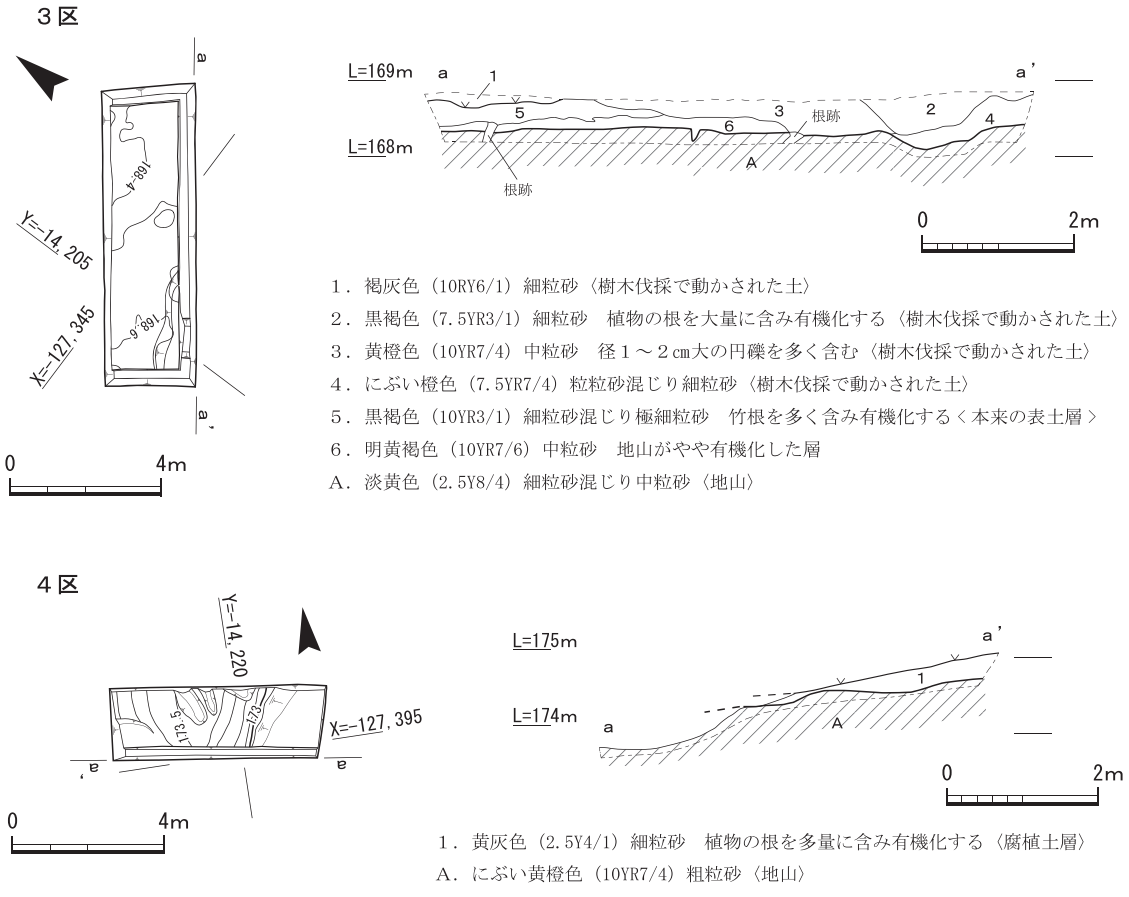
第17図　長井野塚２区平面図・土層断面図

土層は、樹木伐採で使用された重機により若干乱されており、表土(第５層)上に動かされた土(第１層)が乗っていた。また、調査区の一部では表土が失われている部分もあった。表土下の状況は、調査区の南東半では林業に伴う整地と考えられる層(第２～４層)が地山上へ直接に乗っていた。調査区の北西半では、表土である腐食土層が20cmの厚さであり、その下に有機化した層(第６層)があった。地山は、本来の表土下0.4mで検出した。地山面上で精査を行ったが、遺構は見つからなかった。調査区の南東隅では、整地の際に掘られたと考えられる落ち込みを確認した。本調査区から遺物は出土しなかった。

４)４区の調査(第18図下段)

尾根頂部から南東方向に下る尾根線上に設けた調査区である。１区からは南西へ75mの位置にある。当初は調査の予定になかった場所であるが、地形図において標高150mの等高線が直径５m程度の円を描いているため、古墳等の有無を確認するために幅2.0m、長さ6.0mの調査区を設定した。当初文化財調査を予定していなかったため、周辺の地形は樹木伐採時の重機によって乱されていた。古墳等の可能性を考慮して掘削前に周辺の踏査を詳細に行ったが、遺物の散布は認められなかった。

土層は表土である腐食土層(第１層)を除去したところで地山を検出した。調査区の西半部は樹

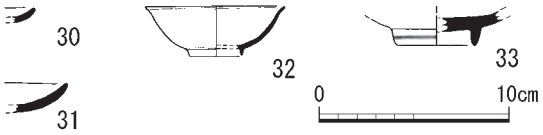


１．褐灰色（10RY6/1）細粒砂〈樹木伐採で動かされた土〉
２．黒褐色（7.5YR3/1）細粒砂　植物の根を大量に含み有機化する〈樹木伐採で動かされた土〉
３．黄橙色（10YR7/4）中粒砂　径１～２㎝大の円礫を多く含む〈樹木伐採で動かされた土〉
４．にぶい橙色（7.5YR7/4）粒粒砂混じり細粒砂〈樹木伐採で動かされた土〉
５．黒褐色（10YR3/1）細粒砂混じり極細粒砂　竹根を多く含み有機化する〈本来の表土層〉
６．明黄褐色（10YR7/6）中粒砂　地山がやや有機化した層
Ａ．淡黄色（2.5Y8/4）細粒砂混じり中粒砂〈地山〉

１．黄灰色（2.5Y4/1）細粒砂　植物の根を多量に含み有機化する〈腐植土層〉
Ａ．にぶい黄橙色（10YR7/4）粗粒砂〈地山〉

第18図　長井野塚３・４区平面図・土層断面図

木伐採時に重機が通行したことで削平されていた。地山面上で精査を行ったが、遺構は存在しなかった。遺物も出土しなかった。



第19図　長井野塚出土遺物実測図

３．出土遺物

すべて１区から出土したもので、30・31は土師器皿である。30は小グリッドu17区の第３層中から、31はt15区の第１層からの出土である。32は磁器製染付小椀で、s15区の第１層中からの出土である。33は磁器製染付の高台部でt15区の第１層からの出土である。

４．まとめ

長井野塚においては４か所の調査区を設けて発掘調査を行ったが、いずれの調査区においても遺構は検出されなかった。遺物についても１区で土師器皿・磁器片が少量出土したのみであり、調査地周辺では遺跡としての兆候が極めて薄いことが分かった。

（加藤雅士）

〔3〕岨田遺跡第1・2次

1．はじめに

岨田遺跡は、宇治田原町北西部を流れる禅定寺川左岸の禅定寺岨田・砂川に所在する。禅定寺川がつくる谷底平野・氾濫平野には、田原道のうち宇治田原から近江へ抜ける部分を踏襲すると考えられる府道783号が通っている。禅定寺川を臨む宇治田原丘陵(注32)西斜面の広い範囲が岨田遺跡として指定されている。種別としては遺物散布地で、これまで縄文時代の石鏃や瓦が採集されているが(注33)、発掘調査は今回が初めてである。

新名神高速道路が予定されている道路用地は、遺跡範囲の北端部を北東から南西にかけて横断している。これは岨田遺跡として遺跡指定されている面積のうち約1／4を占めている。調査地のすぐ北側には、谷底平野から東に入り込む谷地形があり、小河川が西流している。小河川は谷を出た後、南西に流れ、禅定寺川に合流している。谷地形の南側の一部は中位段丘面を形成して



第20図　岨田遺跡調査区配置図

おり、今回の調査対象地は中位段丘面の西下方にある緩斜面地にあたる。地質としては大阪層群の禅定寺層に該当する部分である。

なお、道路用地内には岨田古墳も存在しているが、直接工事が及ばず現状で保存されるため、調査の対象とはならなかった。

２．調 査 の 経 過 と 調 査 区 の 設 定

調査は２か年度にわたって実施した。調査対象地各所の地形に応じて調査区を設定した。表土掘削には重機を使用し、重機掘削後に人力で精査を行った。調査の終盤は小型無人航空機を用いて写真撮影と完掘状況の測量を行った。

第１次調査　調査対象地の北側では、丘陵に対して西から大きな谷が入り込む地形となっている。このため北斜面となっている部分を対象に、平成27年度に第１次調査を行った。調査対象地内には砂川古墳も存在している。調査直前までは植林地として利用されており、ヒノキを中心とする樹林となっていたため、樹木伐採を行った。斜面地での土地利用を確認するため、対象地を広く覆うように１～９区を櫛歯状に設定した。また、第２次調査予定地について、小型無人航空機を用いて地形測量を行った。

第２次調査　平成28年度の調査では、第１次調査の南西側のより広い面積を対象に調査を行った。第２次調査対象地の北半部は、丘陵の西斜面となっている。茶畑として利用されていた場所であり、ここでの土地利用を確認するために10～13・21区を設定した。また同様の条件にある調査対象地の南端部には17区を設定した。

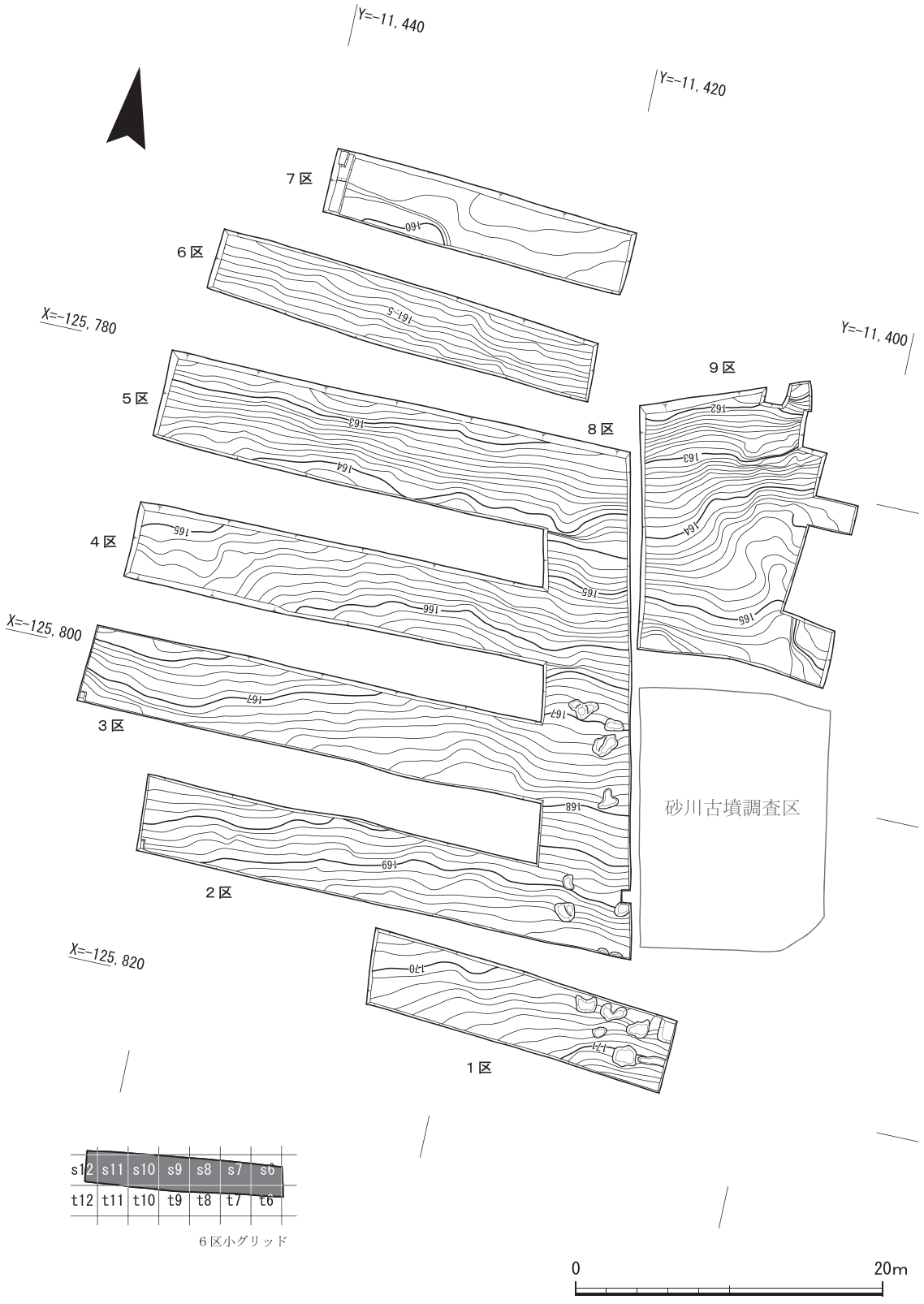
第２次調査対象地の南半部は、岨田古墳が位置する部分から東へ谷が入り込む地形となっている。谷地形の中央は段々畑として利用されていたため、人為的改変が著しいと考えられた。谷地形の奥部は急な斜面で、雑木林となっていた。樹木伐採を行うとともに、14～16区を設定した。谷の出口の部分は水田として利用されており、谷底部に埋没した遺構が存在しないか確認するため、18・19区を設定した。岨田古墳の南側では、発掘調査前に踏査を行ったところ、布目や叩き目をもつ平瓦が散布していた。散布している瓦に関連する遺構の存在が予想されたため、20区を設定して調査を行った。

３．調 査 概 要

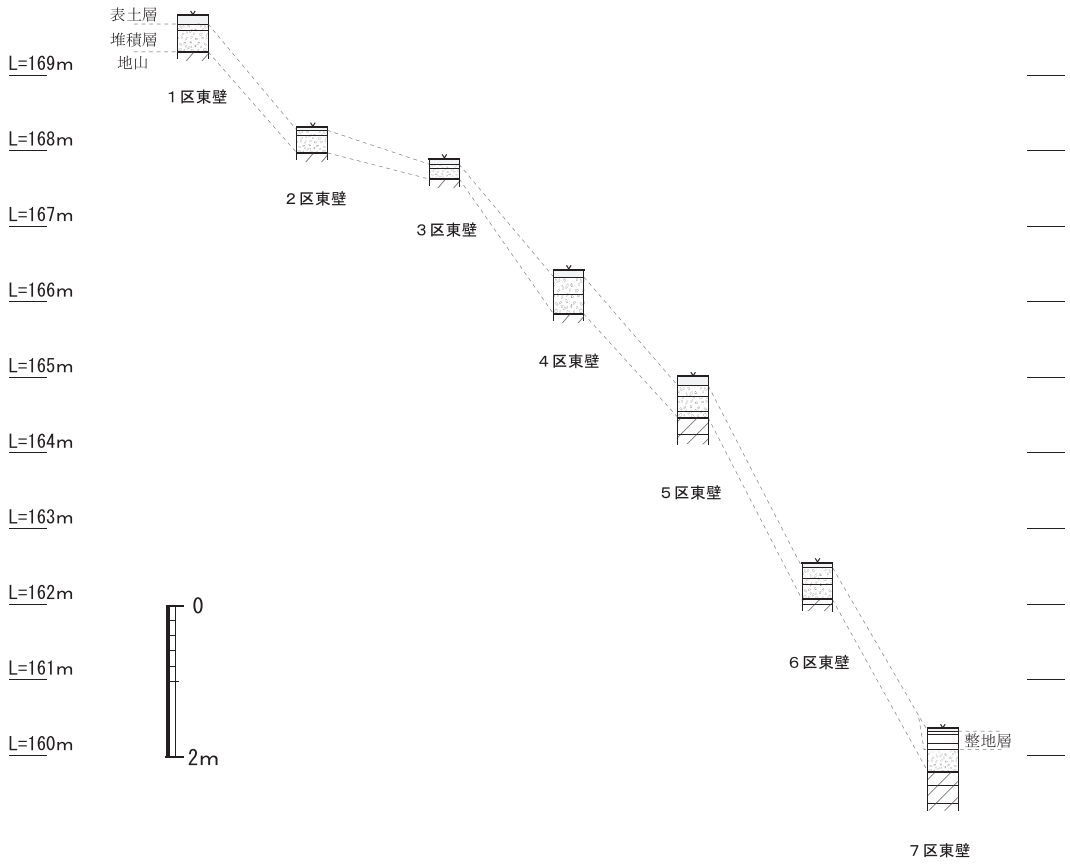
１）丘陵北斜面の調査（１～６・８・９区）

第１次調査で丘陵に対して東から入り込む谷の北斜面を対象とした調査区である。１～６区は幅５ｍで、地形の傾斜に直交した東西方向の調査区である。２～５区の東端を南北に繋いだものが８区で、砂川古墳の北側を面的に調査したのが９区となる。地形は一連の斜面となっており、１区から６区までは約11ｍの比高がある。

土層は表土である腐植土層が厚さ10cm程度であり（第１層）、その下に厚さ10～20cmの有機化した層がある。腐植土層の下には厚さ５～25cmの層が、２・３層重なって存在している。１～



第21図　岨田遺跡１～８区平面図



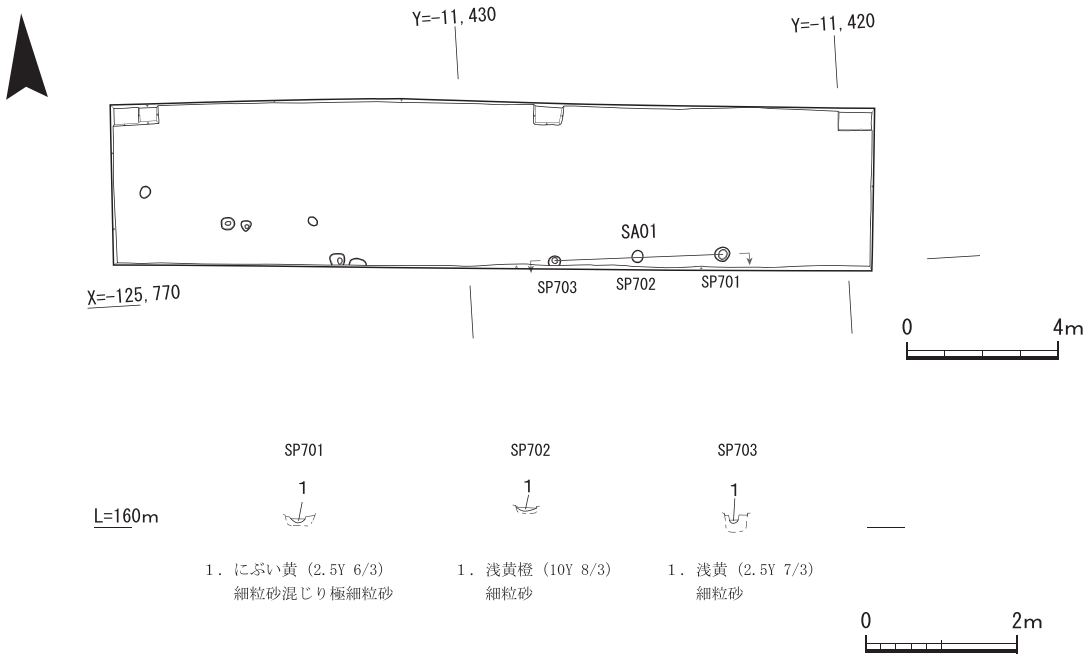
第22図　岨田遺跡土層柱状図

４区では第２・３層、５区では第２～５層、６区では第２～４層が該当する。これらの層は大阪層群由来の土が斜面の傾斜に対して平行に堆積しており、自然の堆積土と判断した。地表面より0.25～0.54mの深さで円礫を多く含む大阪層群を検出し、地山と判断した。地山面上で精査を行ったが遺構は検出されなかった。

遺物は１区と６区で出土した。１区では、小グリッドe5区の堆積土層中から、須恵器片が出土した。器種などは不明である。６区では、s11区の堆積土層中から、無釉の陶器細片が出土した。また重機での表土掘削中に灯明受皿（第36図－34）が出土した。

2）７区の調査

１～６区の北に設置した調査区である。１～６区にかけては一連の傾斜になっているが、７区付近は幅約８mのテラス状の地形がある。調査区の幅は4.5m、東西の長さ20mである。層位は、上から表土（第１層）、やや腐植した層（第２層）がある。その下の第３層は、大阪層群に含まれる粘質土を積んで平坦面を作る整地土層である。層の厚さは約20cmであり、テラス状の地形も人為的に作られたものと考えられる。遺物の出土がないため整地土層の年代は不明であるが、明るい発色をした土壌であるため近現代のものと予想される。第３層より下位には自然堆積層（第４～６層）があり、自然堆積層下で大阪層群を検出し地山と判断した。



第23図　岨田遺跡７区平面・柱穴断面図

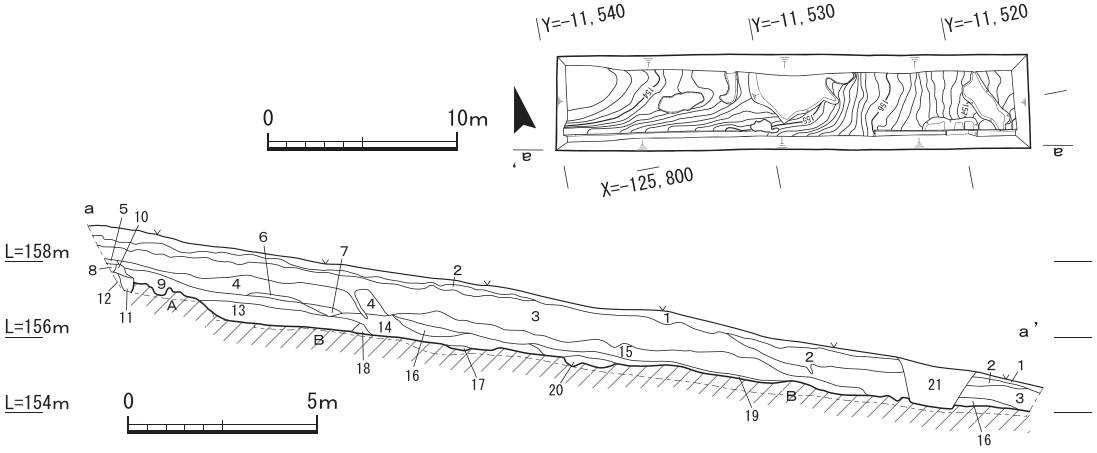
第３層上面と地山面でそれぞれ精査を行った。地山上では遺構は検出されなかったが、第３面上ではピットを９基検出した。平面形は直径0.2～0.4mの円形や隅丸方形である。深さは0.1m程度と浅く、整地層は本来の厚さよりも削平されていると考えられる。断面の層位はＳＰ708を除いて、単純な１層を持つものであった。ＳＰ708の断面は２層からなり、第１層は柱痕跡の可能性がある。柱痕跡とした場合、柱の直径は20cm程度に復原できる。

柵列ＳＡ01　ＳＰ701～703の３つのピットで構成される。間隔は2.26mで等間、埋土も浅黄色で類似している。ピット列の南側は斜面となるため、柵と判断した。人為的につくられたテラス状地形の縁部であり、柱も太くないものが想定できるため、手すりや土留めの可能性が考えられる。遺物の出土はなかった。

３）丘陵西斜面の調査（10～13・17・21区）

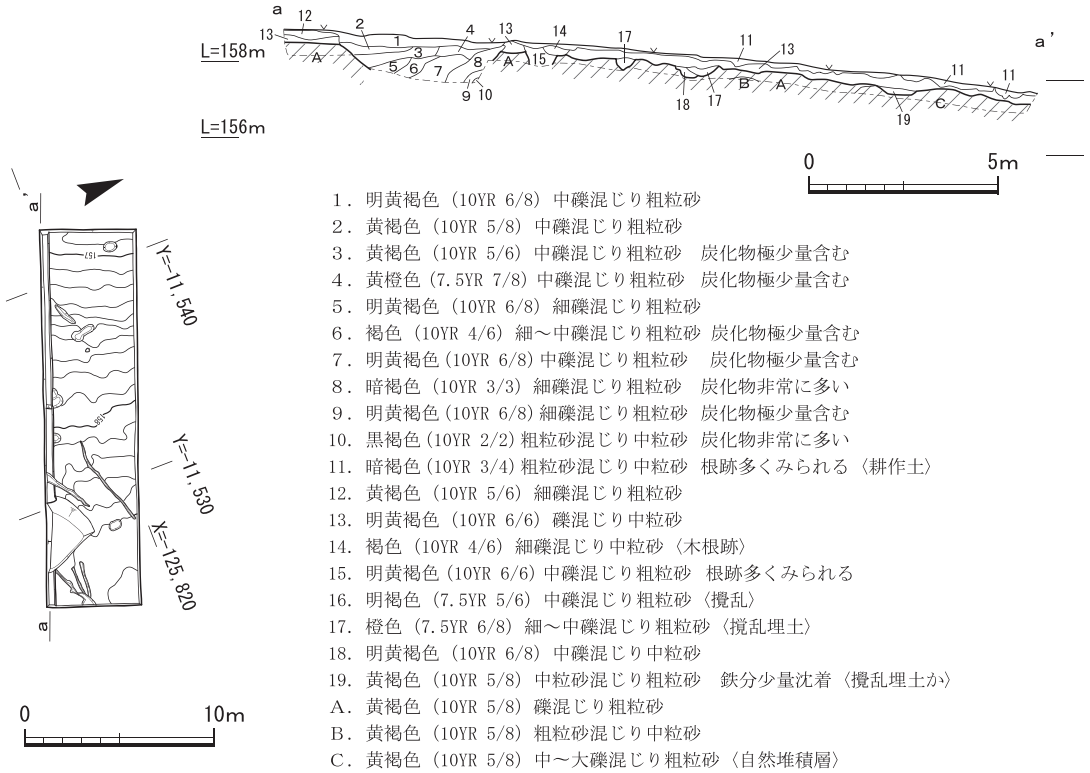
丘陵西斜面にあたり、調査着手前まで茶畑として利用されていた場所である。いずれの調査区でも、表土である腐植土層の下には有機化した茶畑の耕作土層が確認できる。耕作土下では、茶畑の整備にともなって土が動かされている様子が確認できた。

10区　丘陵斜面の西部に設置したトレンチである。地形の傾斜に沿った東西方向に、幅５m、長さ25mの調査区を設定した。腐植土層（第１層）の下には、茶畑の耕作土である有機化した層（第２・３層）がある。第４層より下位は大阪層群由来の土である。地形の傾斜に平行に堆積しているが、締まりが弱い点や南壁の東端付近で乱れ（第８・10・11層）が認められることから、人為的に動かされた層と判断した。人の手が及んでいない地山は、地表下1.85mの深さで検出した。地



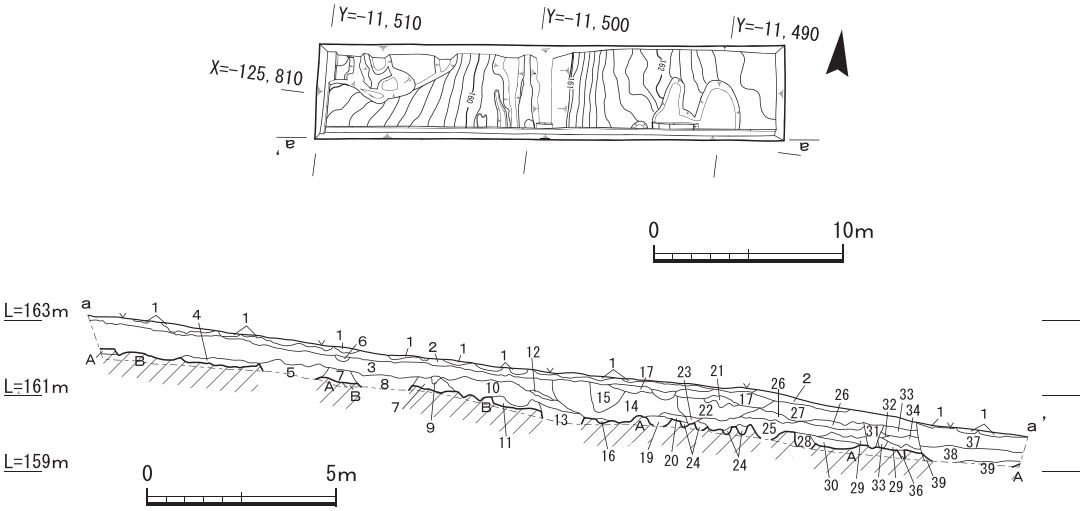
1．2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂〈表土〉
2．にぶい黄橙色（10YR 6/3）細粒砂　有機化する
3．にぶい褐色（7.5YR 5/4）細粒砂　径１～５㎝大の円礫を多く含む
4．灰白色（2.5Y 8/2）中粒砂　径１～４㎝大の円礫非常に多く含む
5．明黄褐色（10YR 7/6）中粒砂
6．橙色（7.5YR 7/6）細粒砂混じり中粒砂
7．黄橙色（10YR 7/8）粗粒砂混じり中粒砂　径２㎝大の円礫多く含む
8．明黄褐色（10YR 7/6）細粒砂
9．黄橙色（10YR 7/8）粗粒砂
10．浅黄橙色（10YR 8/4）シルト
11．淡黄色（2.5Y 8/4）中粒砂混じりシルト
12．灰白色（10YR 8/1）シルト
13．黄橙色（10YR 8/8）中粒砂混じり粗粒砂　径１～３㎝大の円礫を少量含む
14．黄橙色（10YR 8/6）粗粒砂混じり中粒砂
15．にぶい黄橙色（10YR 7/3）細粒砂　径２㎝大の円礫を少量含む
16．にぶい黄色（2.5Y 6/4）粗粒砂
17．浅黄橙色（7.5Y 8/4）シルト混じり粗粒砂
18．浅黄橙色（7.5Y 8/3）シルト粘質
19．淡橙色（5YR 8/4）細粒砂混じりシルト
20．にぶい橙色（7.5YR 7/3）粗粒砂
21．攪乱　トタン製波板などが混入する
A．浅黄橙色（10YR 8/4）中粒砂混じり細粒砂〈地山〉
B．灰白色（7.5YR 8/2）シルト粘質　締まりが非常に強い〈地山〉

第24図　岨田遺跡10区平面・土層断面図



1．明黄褐色（10YR 6/8）中礫混じり粗粒砂
2．黄褐色（10YR 5/8）中礫混じり粗粒砂
3．黄褐色（10YR 5/6）中礫混じり粗粒砂　炭化物極少量含む
4．黄橙色（7.5YR 7/8）中礫混じり粗粒砂　炭化物極少量含む
5．明黄褐色（10YR 6/8）細礫混じり粗粒砂
6．褐色（10YR 4/6）細～中礫混じり粗粒砂 炭化物極少量含む
7．明黄褐色（10YR 6/8）中礫混じり粗粒砂　炭化物極少量含む
8．暗褐色（10YR 3/3）細礫混じり粗粒砂　炭化物非常に多い
9．明黄褐色（10YR 6/8）細礫混じり粗粒砂 炭化物極少量含む
10．黒褐色（10YR 2/2）粗粒砂混じり中粒砂 炭化物非常に多い
11．暗褐色（10YR 3/4）粗粒砂混じり中粒砂 根跡多くみられる〈耕作土〉
12．黄褐色（10YR 5/6）細礫混じり粗粒砂
13．明黄褐色（10YR 6/6）礫混じり中粒砂
14．褐色（10YR 4/6）細礫混じり中粒砂〈木根跡〉
15．明黄褐色（10YR 6/6）中礫混じり粗粒砂 根跡多くみられる
16．明褐色（7.5YR 5/6）中礫混じり粗粒砂〈攪乱〉
17．橙色（7.5YR 6/8）細～中礫混じり粗粒砂〈撹乱埋土〉
18．明黄褐色（10YR 6/8）中礫混じり中粒砂
19．黄褐色（10YR 5/8）中粒砂混じり粗粒砂　鉄分少量沈着〈攪乱埋土か〉
A．黄褐色（10YR 5/8）礫混じり粗粒砂
B．黄褐色（10YR 5/8）粗粒砂混じり中粒砂
C．黄褐色（10YR 5/8）中～大礫混じり粗粒砂〈自然堆積層〉

第25図　岨田遺跡11区平面・土層断面図



１．黒褐色（10YR 2/3）粗粒砂混じり細粒砂〈腐植土層〉
２．オリーブ褐色（2.5Y 4/4）に黄褐色（2.5Y 5/6）がまだらに混じる細粒砂　径２㎜～１㎝の亜角礫が多量に混じり、有機化する
３．明褐色（7.5YR 5/6）粗粒砂混じり細粒砂
　２㎜～１㎝の亜角礫が多量に混じり、やや有機化する
〈耕作に伴い動かされた土〉
４．黄褐色（10YR 5/6）極粗砂
　径0.2～１㎝の亜角礫を多量に含む
５．黄褐色（10YR 5/6）極粗砂
　径0.2～５㎝の円礫を非常に多く含む
６．明黄褐色（10YR 6/6）極粗砂混じり細粒砂
７．黄褐色（10YR 5/6）粗粒砂
　径0.2～１㎝の円礫を多量に含む
８．黄褐色（10YR 5/8）中粒砂
　径0.2～0.5㎝の亜角礫を多量含む
９．褐色（10YR 4/6）細粒砂
　径0.2～0.5㎝の円礫を多量に含む
10．黄褐色（10YR 5/8）極細粒砂
　径0.2～１㎝の円礫を多量に含む
11．明褐色（7.5YR 5/8）粗粒砂
　径0.2～１㎝の亜角礫を多量に含む
12．褐色（7.5YR 4/6）中粒砂
　径0.2～0.7㎝の亜角礫が多量に混じる
13．明褐色（7.5YR 5/8）極細粒砂
　径0.2～２㎝の亜角礫を多量に含む
14．明黄褐色（10YR 6/6）粗粒砂
　径0.2～１㎝の亜角礫を非常に多く含む
15．褐色（7.5YR 4/6）中粒砂混じり細粒砂
　径0.2～１㎝の亜角礫を多量含み、有機化する
〈耕作に伴い掘り込まれた土〉
16．黄褐色（10YR 5/8）中粒砂混じり極細粒砂
　径５㎝程の円礫をごく少量含む
17．明黄褐色（10YR 6/6）極粗砂混じり細粒砂
　径0.2～0.5㎝の亜角礫を多量に含み、有機化する
18．黄褐色（10YR 5/8）粗粒砂混じり細粒砂
　径２～５㎜の亜角礫を多量に含み、有機化する
〈耕作に伴い掘り込まれた土〉
19．明褐色（7.5YR 5/8）中粒砂混じり極細粒砂
20．黄褐色（10YR 5/8）中粒砂混じり細粒砂
21．黄褐色（10YR 5/6）粗粒砂混じり細粒砂
　径0.2～１㎝の円礫を多量に含む
22．明黄褐色（10YR 6/6）中粒砂
　径0.2～５㎝の円礫を多量に含む
23．黄褐色（10YR 5/6）中粒砂混じり細粒砂
　径５㎝程の円礫を多量に含む
24．黄褐色（10YR 5/8）中粒砂混じり極細粒砂
25．黄褐色（10YR 5/8）粗砂混じり中粒砂
　径0.2～１㎝の亜角礫を少量含む
26．明黄褐色（10YR 6/6）粗粒砂
　径0.2～１㎝の円礫を多量に含む
27．黄褐色（10YR 5/6）粗粒砂混じり中粒砂
　径0.2～１㎝亜角礫を多量に含み、有機化する
28．黄褐色（10YR 5/8）中粒砂混じり極細粒砂
29．黄褐色（10YR 5/8）中粒砂混じり極細粒砂
　径0.2～５㎝の角礫を少量混含む。明黄褐色（10YR 7/6）がまだらに混じる
30．黄褐色（10YR 5/8）中粒砂混じり細粒砂
　径0.5～１㎝の亜角礫を少量含む。黄橙色（10YR 7/8）がまだらに混じる
31．明黄褐色（10YR 6/8）粗粒砂
　径0.5～５㎝の亜角礫を非常に多く含む
32．明黄褐色（10YR 6/6）粗粒砂
　径0.2～２㎝程の亜角礫を多く含む
33．明黄褐色（10YR 6/6）粗粒砂混じり中粒砂
　径0.2～１㎝の亜角礫を多量に含む
34．黄褐色（10YR 5/8）粗粒砂混じり細粒砂
　径0.5㎝の亜角礫を少量含む
35．黄褐色（10YR 5/8）中粒砂混じり極細粒砂
　径0.3㎝大の礫を多量に含む
36．明褐色（7.5YR 5/8）中粒砂混じり極細粒砂
37．オリーブ褐色（2.5Y 4/4）細粒砂
　径0.2～２㎝の亜角礫を多量に含む〈撹乱〉
38．礫層　拳大の円礫からなる層〈撹乱〉
39．にぶい黄褐色(10YR 4/3)中粒砂混じり極細粒砂〈撹乱〉
Ａ．明黄褐色（10YR 6/8）に黄褐色（10YR 5/8）がまだらに混じる中粒砂混じり極細粒砂〈地山〉
Ｂ．明黄褐色（2.5Y 9/6）に黄褐色（10YR 5/8）がまだらに混じり、径0.2～１㎝の亜角礫を多量に含む〈地山〉

第26図　岨田遺跡12区平面・土層断面図

山面および第９・16層上面で精査を行ったが、遺構の検出はなかった。遺物の出土もなかった。

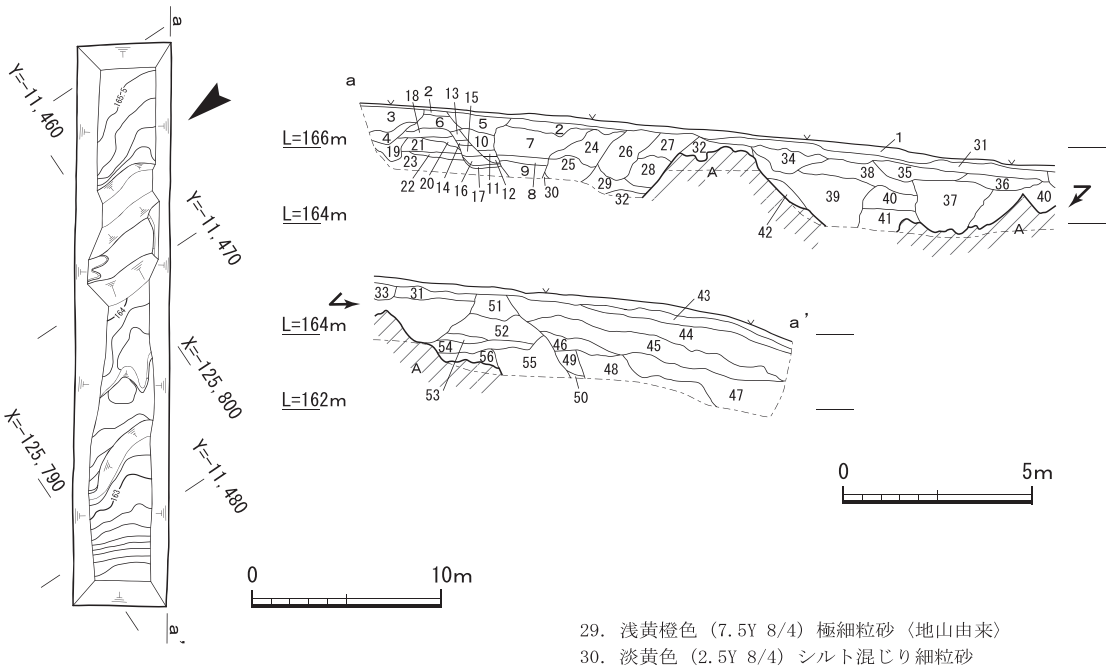
11区　10区の南約20mの場所において設定した、幅５m、長さ20mの南北方向の調査区である。10区とはほぼ平行になっている。層位は腐植土層（第11層）の下に人為的に動かされたと考えられる層（第13層）がある。第13層の下にあるＡ層が地山と判断した層で、上面で精査を行った。調査区の南東部には現代の廃棄土坑（第１～10層）があり、ビニール製の肥料袋などが出土した。この廃棄土坑については深度が１mを超えたので、安全に配慮して完掘していない。その他は、落ち込みや茶樹と考えられる根痕を確認したのみで、遺構は検出されなかった。

遺物は第13層から瓦が４点出土している。それぞれ小グリッドe８・e９・f８・f９区からの出土である。

12区　西斜面地の中央部に設けた調査区である。傾斜に沿った東西方向に、幅５m、長さ30mで設定した。土層は、腐植土層（第１層）の下に有機化した層（第２・３・16・24層など）が最大で80cm程度の厚さで存在しており、耕作土と考えられる。断面観察によると耕作土は、標高の高い方から斜めに下るような特徴が第16・24層などで認められることから、重機などを使用して人為的に動かされたものと考えられる。地山はＡ・Ｂ層であり、この上面で遺構検出を行った。調査区の北東隅は大きく攪乱を受けていた。調査区中央では、南北方向の溝状の落ち込みを検出した。茶畑に伴う暗渠の可能性がある。他に遺構は見つからなかった。遺物は、重機掘削時に染付片が１点出土している。

13区　第２次調査対象地の北東部に位置する調査区である。丘陵の斜面が、北斜面から西斜面に変わるところであり、尾根状の地形となっている。調査区の幅は５mで、長さは24.5mである。南壁の観察によると、土層は腐植土層（第１層）の下から深く掘り込まれたものが切り合っている状況が確認できる。第１層より下の土層はあまり土壌化が進んでいない。掘り込みは最大で幅3.2m、深さ1.4mで激しく切り合っている。重機を使用して地面を掘り返したものと考えられ、各掘り込みは重機のバケットに対応するものと考えられる。土の掘り返しは大まかなものとみられ、掘り込み内に本来の層位が残っている場合がある。南壁の北端部付近にある掘り込みでは、第８層と第16層が同一の層であり、第11・14・25層が同一の層である。これらの掘り込みでは土が攪拌された様子は無いが、第８・９層と第14・16層の上下関係が異なっている場合が認められる。重機で地山を掘り込み、そのままバケットを回転させて土を落とすような行為がされていたと復原できる。土壌化があまり進んでいないことから、比較的最近に行われたと考えられる。地山は均質な極細粒砂層（第33層）であり、重機の掘削が及ばない部分は削り出されるかたちで高く残っている。調査区の東端部付近では、地表面から２m以上掘削しても地山が露出しなかったが、安全面を考慮してそれ以上の掘削を行わなかった。精査は地山上面で行った。バケットの爪痕などを見つけたが、遺構は検出できなかった。遺物は、壁面整形中に小グリッドw20区で陶磁器片が出土している。

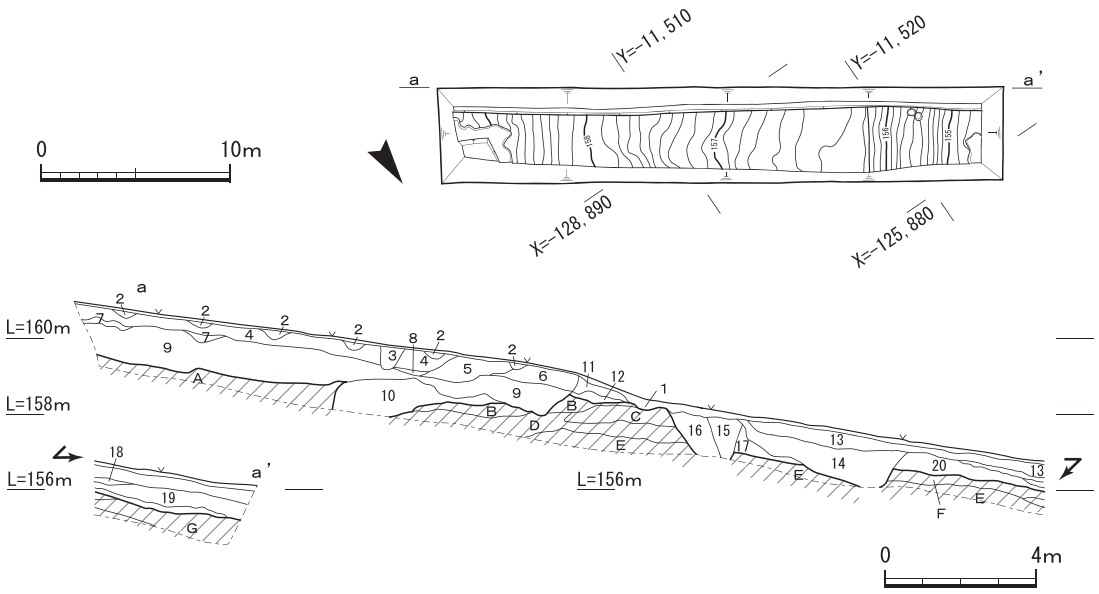
17区　谷地形の南側にある、丘陵斜面に設定した調査区である。傾斜にそって、幅５m、長さ30mの東西方向のトレンチを設定した。南壁での断面観察によると、調査区東端部では地表下



1．2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂〈表土〉
2．にぶい橙色（7.5YR 6/4）中粒砂混じり細粒砂
　有機化する
3．にぶい赤褐色（5YR 5/4）中粒砂
　径１cm大の礫多く含む
4．にぶい褐色（7.5YR 6/3）細粒砂
5．にぶい橙色（7.5YR 6/4）中粒砂混じり細粒砂
　径１～３cm大の円礫多く含む
6．にぶい橙色（7.5YR 7/3）シルト混じり細粒砂
7．にぶい黄橙色（10YR 7/4）中粒砂混じり細粒砂
　径１～４cm大の円礫多く含む
8．浅黄橙色（10YR 8/4）粗粒砂
　径１～３cm大の円礫を多く含む〈地山層の崩落塊か〉
9．浅黄色（2.5Y 7/3）シルト
10．黄橙色（10YR 8/6）粗粒砂混じり中粒砂
11．浅黄色（2.5Y 7/3）シルト〈９層と同じ〉
12．淡黄色（2.5Y 8/3）シルト混じり細粒砂
13．浅黄橙色（10YR 8/4）細粒砂
14．浅黄色（2.5Y 7/3）シルト〈９層と同じ〉
15．浅黄橙色（10YR 8/4）細粒砂
16．浅黄橙色（10YR 8/4）粗粒砂
　径１～３cm大の円礫を多く含む〈８層と同じ〉
17．灰白色（2.5Y 8/2）細粒砂
18．にぶい褐色（7.5YR 6/3）細粒砂混じり中粒砂
　径１～３cm大の円礫を多く含む
19．浅黄橙色（10YR 8/4）細粒砂
20．浅黄色（2.5Y 8/4）中粒砂混じり細粒砂
21．にぶい橙色（7.5YR 7/4）中粒砂混じり粗粒砂
22．浅黄色（2.5Y 7/4）中粒砂
23．にぶい黄褐色（10YR 7/3）粗粒砂
　径１cm大の礫を非常に多く含む
24．にぶい黄色（2.5Y 6/4）細粒砂混じり中粒砂
　径１～５cm大の礫を多く含む。
25．浅黄色（2.5Y 7/3）シルト〈９層と同じ〉
26．にぶい褐色（7.5YR 5/4）粗粒砂径
　１～３cm大の礫を非常に多く含む
27．にぶい橙色（7.5YR 6/4）粗粒砂
　径１cm大の礫を非常に多く含む
28．浅黄色（2.5Y 7/4）中粒砂混じり粗粒砂
　径１cm大の礫を少量含む
29．浅黄橙色（7.5Y 8/4）極細粒砂〈地山由来〉
30．淡黄色（2.5Y 8/4）シルト混じり細粒砂
31．にぶい赤褐色（5YR 5/4）中粒砂混じり細粒砂
　径１cm大の礫を非常に多く含み有機化する
32．にぶい黄橙色（10YR 7/4）細粒砂混じり粗粒砂
　径１～２cm大の礫を多く含む
33．にぶい褐色（7.5YR 5/3）中粒砂
34．浅黄色（10YR 7/3）細粒砂混じり粗粒砂
　径１～３cm大の礫を非常に多く含む
35．にぶい黄橙色（10YR 7/4）均質な極細粒砂
　地山由来で混じり少ない〈天地返しか〉
36．にぶい橙色（5Y 6/3）粗粒砂混じり細粒砂
37．にぶい黄橙色（10YR 7/4）
38．にぶい橙色（7.5YR 6/4）粗粒砂混じり細粒砂
　径１cm大の礫を多く含む
39．浅黄橙色（10YR 8/4）粗粒砂混じりシルト
　径１cm大の礫を多く含む　地山由来
40．浅黄橙色（10YR 8/4）粗粒砂混じりシルト
　径１cm大の礫を少量含む　地山由来
41．黄褐色（2.5Y 5/3）シルト混じり粗粒砂
　径１cm大の礫を非常に多く含む
42．にぶい黄橙色（10YR 6/4）細粒砂混じり粗粒砂
　径１～２cm大の礫を非常に多く含む
43．にぶい褐色（10YR 5/4）細粒砂　有機化する
44．にぶい黄褐色（10YR 5/3）細粒砂
　径１～３cm大の礫を少量含み有機化する
45．にぶい褐色（7.5YR 5/3）細粒砂
　径１～４cm大の礫多く含み有機化する
46．浅黄色（2.5Y 7/3）細粒砂混じり中粒砂
47．灰白色（5Y 8/2）細粒砂混じり中粒砂
　径１～３cm大の礫少量含む
48．明黄褐色（10YR 6/6）細粒砂混じり粗粒砂
49．黄褐色（2.5Y 5/3）中粒砂　径１～３cm大の礫多く含む
50．淡黄色（2.5Y 8/4）中粒砂混じり細粒砂
51．にぶい褐色（7.5YR 5/4）細粒砂
　径１～３cm大の礫多く含み有機化する
52．にぶい橙色（5Y 6/3）細粒砂混じり中粒砂　有機化する
53．にぶい黄橙色（10YR 7/4）細粒砂混じり粗粒砂
54．浅黄色（2.5Y 7/4）極細粒砂
55．にぶい黄色（2.5Y 6/4）粗粒砂混じり細粒砂
56．にぶい黄色（2.5Y 6/4）粗粒砂
　径１～２cm大の礫を多く含む
A．浅黄橙色（10YR 8/3）均質な極細粒砂〈地山〉

第27図　岨田遺跡13区平面・土層断面図

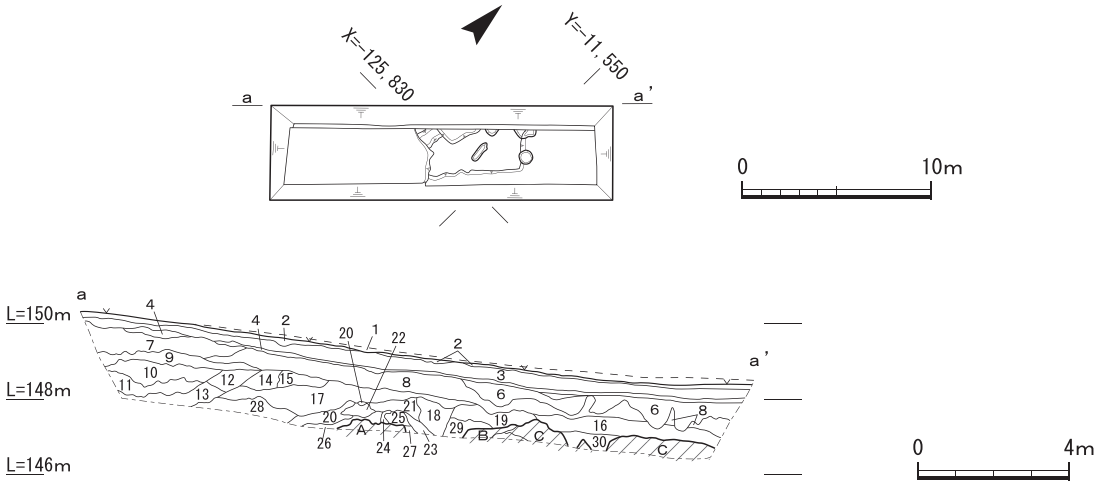
0.4mに旧表土及び旧耕作溝と考えられる腐植土層（第７層）がある。暗渠（第３層）などを整備する際に造成し直したと考えられる（第４層）。第７層の下には、有機化した層である第９層が約１mの厚さであり、その下の層が地山（A・B層）である。A・B層はラミナがみられる層で、大阪層群と考えられる。調査区西半部では、茶畑の造成に伴い土が動かされたと考えられる跡（第15層）や、均されたと考えられる層（第19・20層）がある。平面精査は地山上で行った。北東隅で大きな攪乱を検出したほかは、遺構はなかった。遺物は出土していない。



1．灰黄褐色（10YR 4/2）細粒砂混じり極細粒砂
有機化する〈表土〉
2．黒褐色（10YR 3/1）極細粒砂　有機化する〈耕作溝〉
3．灰黄色（2.5Y 6/2）中粒砂　径１～２㎝大の礫多く含む
〈暗渠用の管埋設堀形〉
4．にぶい黄橙色（10YR 7/3）粗粒砂混じり中粒砂
径２～３㎝大の円礫多く含みやや有機化する
〈旧耕作面を覆う整地土〉
5．淡黄色（2.5Y 8/4）細粒砂　径２㎝大の円礫多く含む
〈整地層〉
6．にぶい褐色（7.5YR 6/3）細粒砂　やや有機化する
〈整地か〉
7．黒褐色（7.5YR 3/1）極細粒砂〈旧表土及び旧耕作溝〉
8．灰黄褐色（10YR 6/2）細粒砂
9．にぶい黄褐色（10YR 5/3）細粒砂　径２～３㎝大の円礫を
多く含みやや有機化する〈旧耕作土〉
10．にぶい褐色（7.5YR 5/3）極細粒砂　径２～３㎝大の円礫
を非常に多く含む　部分的に礫と細粒砂が互層状になる
11．灰白色（2.5Y 8/2）粗粒砂　径１～３㎝大の礫を多く含む
〈整地〉
12．淡黄色（2.5Y 8/4）細粒砂〈整地〉
13．にぶい黄橙色（10YR 7/3）細粒砂　有機化する〈耕作土〉
14．明褐灰色（7.5YR 7/1）シルト混じり細粒砂
径１㎝大の角礫を多く含む〈溝状を人為的に埋めた層〉
15．淡黄色（2.5Y 8/4）細粒砂
16．にぶい褐色（7.5YR 6/3）礫及びにぶい黄橙色（10YR 7/2）
シルトからなる層〈撹乱が掘られる過程で崩落した層か〉
17．浅黄色（2.5Y 7/4）粗粒砂
18．にぶい黄橙色（10YR 6/3）細粒砂
径３㎝大の円礫を少量含み有機化する〈耕作土〉
19．にぶい黄橙色（10YR 7/4）細粒砂
径２～４㎝大の円礫を多く
含み有機化する〈耕作土〉
20．浅黄橙色（10YR 8/4）シルト混じり細粒砂
径１㎝大の礫を少量含む〈地山が乱れた層〉
A．にぶい黄橙色（10YR 7/3）及び明黄褐色（10YR 7/6）細粒
砂混じり極細粒砂　径１㎝大の礫を少量含みラミナを呈す
る〈地山〉
B．橙色（7.5YR 7/6）及びにぶい黄橙色（10YR 7/4）細粒砂
ラミナを呈する
C．灰白色（2.5Y 8/2）礫　径２～４㎝大の円礫からなる層
〈22層に覆われており地山と判断〉
D．淡黄色（2.5Y 8/3）シルト　径１㎝大の礫を少量含みラミ
ナを呈する〈水性堆積の地山〉
E．橙色（7.5YR 6/6）中粒砂　径１～２㎝大の礫を少量含み
ラミナを呈する〈水性堆積の地山〉
F．浅黄橙色（10YR 8/4）シルト　径１㎝大のの円礫を少量含
みラミナを呈する〈水性堆積の地山〉
G．明褐灰色（7.5YR 7/1）比較的均質な細粒砂　ラミナを呈
する〈水性堆積の地山〉

第28図　岨田遺跡17区平面・土層断面図

21区　丘陵西斜面の南西端に位置する調査区である。すぐ南に谷が入り込むため尾根状の地形になっており、この地形にそって北東－南西方向に幅５ｍ、長さ18ｍの調査区を設定した。東壁の観察によると、現地表面下0.4ｍに旧表土層（第４層）があり、その上に造成土（第３層）がおかれている。第４層より下の層は、あまり有機化が進んではいないが、層位が乱れている。第９層では色調がモザイク状を呈するなどしているほか、地山面で重機の爪痕を確認したことから、重機を用いて土が動かされていると考えられる。地山はA・B・C層などであるが、調査区北半部では掘削深度が２ｍを越えても地山が露出しなかったため、安全に配慮してそれ以上は掘削しなかった。平面精査は第10・17・16層などの上面と、地山上で行った。地山上で攪乱を１基検出したが、遺構はみつからなかった。遺物は出土していない。



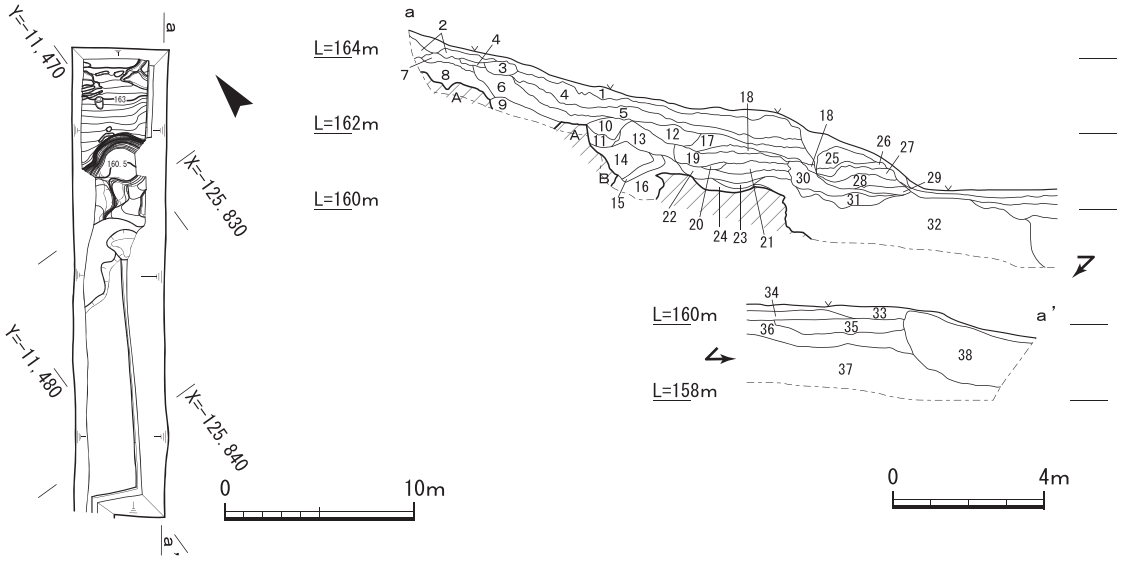
1．浅黄橙色（10YR 8/3）細粒砂〈茶畑廃止時の造成土〉
2．褐灰色（7.5YR 6/1）極細粒砂　有機化する〈表土〉
3．にぶい橙色（5Y 6/4）中粒砂　径１～４㎝大の円礫を多く含む
4．褐灰色（10YR 5/1）細粒砂　有機化する
5．灰黄色（2.5Y 6/2）細粒砂　やや有機化する
6．にぶい褐色（7.5YR 6/3）極細粒砂　径１～２㎝大の礫を多く含む
7．にぶい黄橙色（10YR 7/4）細粒砂混じり中粒砂　径２㎝大の礫を多く含む
8．にぶい黄橙色（10YR 7/3）細粒砂　径２㎝大の礫を多く含みやや有機化する
9．黄色（2.5Y 8/6）粗粒砂　モザイク状を呈する
10．褐灰色（10YR 6/1）中粒砂混じり細粒砂
11．にぶい黄橙色（10YR 6/4）細粒砂混じり粗粒砂
12．浅黄色（2.5Y 7/4）粗粒砂　径１㎝大の礫を多く含む
13．にぶい褐色（7.5YR 5/4）粗粒砂
14．明黄褐色（10YR 7/6）中粒砂混じり細粒砂
15．橙色（7.5YR 7/6）細粒砂
16．浅黄色（2.5Y 7/4）細粒砂　径１㎝大の礫を多く含む
17．橙色（7.5YR 6/6）細粒砂　径１～２㎝大の礫を多く含む
18．明黄褐色（2.5Y 7/6）細粒砂
19．黄橙色（10YR 8/6）細粒砂
20．褐灰色（7.5YR 4/1）細粒砂　層理面に鉄分が沈着する
21．浅黄色（2.5Y 7/3）細粒砂　径３㎝大の礫を非常に多く含む
22．黄橙色（10YR 8/6）細粒砂
23．にぶい黄橙色（10YR 6/3）細粒砂
24．明黄褐色（2.5Y 7/6）細粒砂
25．浅黄色（2.5Y 7/4）細粒砂
26．にぶい黄橙色（10YR 6/4）細粒砂
27．にぶい橙色（7.5YR 6/4）細粒砂
28．にぶい橙色（7.5YR 7/3）シルト混じり細粒砂　径１㎝大の礫を多く含む
29．にぶい黄橙色（10YR 6/4）細粒砂混じり中粒砂
30．浅黄橙色（10YR8/4）中粒砂混じり細粒砂
A．淡黄色（2.5Y 8/4）均質な細粒砂
B．灰白色（7.5YR8/2）シルト　均質で粘質〈地山、大阪層群〉
C．灰白色（2.5Y8/2）粗粒砂混じり中粒砂　径１～３㎝大の礫を多く含む〈地山〉

第29図　岨田遺跡21区平面・土層断面図

4）谷奥部の調査（14～16区）

岨田古墳の北から丘陵側に入り込む谷の東奥部にあたる場所である。周囲の水を集めやすい地形になっており、湿潤な環境にある。とくに16区付近は、雨天時には周囲が泥濘になるような状況であった。

14区　丘陵斜面の縁部から、下の段々畑にかけて設けた調査区である。傾斜に沿った南北に、幅５ｍ、長さ24.7ｍの調査区を設定した。地形は、調査区北端部から南へ13.5m付近までは比高４ｍの急な斜面であるが、それより南はほぼ平坦になっている。調査区の北側１/３の範囲では、地表下約１ｍで地山（A層）を検出している。東壁断面の観察によると、地山は調査区北端から4.8

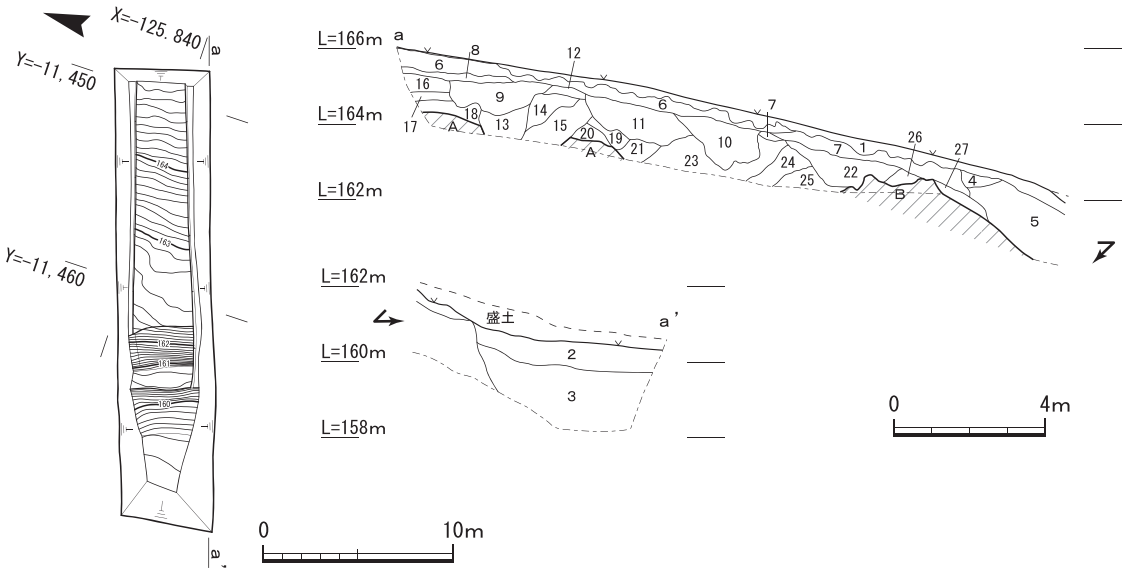


1．褐灰色（7.5YR 6/1）極細粒砂　有機化する〈畑耕作土〉
2．にぶい黄橙色（10YR 7/2）細粒砂　有機化する
3．明黄褐色（10YR 7/6）細粒砂
4．にぶい黄橙色（10YR 7/4）中粒砂混じり細粒砂
　径１～２㎝大の円礫多く含む
5．浅黄色（2.5Y 7/4）細粒砂混じり中粒砂
　径１㎝大の円礫少量含む
6．にぶい黄橙色（10YR 7/3）細粒砂
　径２㎝大の円礫極少量含む
7．橙色（7.5YR 7/6）中粒砂
8．にぶい黄橙色（10YR 6/4）中粒砂
　径１～２㎝大の円礫非常に多く含む
9．明黄褐色（2.5Y 7/6）粗粒砂
　径１～２㎝大の礫非常に多く含む
10．浅黄色（2.5Y 7/3）粗粒砂　径１㎝大の円礫多く含む
11．明黄褐色（2.5Y 7/6）中粒砂　径１㎝大の円礫少量含む
12．にぶい黄橙色（10YR 7/4）中粒砂
　径１～２㎝大の円礫少量含む
13．黄橙色（10YR 8/6）均質な中粒砂
14．黄橙色（10YR 8/6）中粒砂　径１㎝大の円礫少量含む
15．にぶい黄橙色（10YR 6/3）中粒砂
16．浅黄色（10YR 8/4）細粒砂混じり中粒砂
17．黄橙色（10YR 8/6）粗粒砂
18．にぶい橙色（7.5YR 7/4）中粒砂
19．浅黄色（10YR 8/4）粗粒砂　径１～３㎝大の円礫多く含む
20．明黄褐色（10YR 6/6）細粒砂
21．にぶい黄色（2.5Y 6/4）中粒砂
　径１～２㎝大の礫多く含む
22．にぶい黄褐色（10YR 5/4）中粒砂
　径１～４㎝大の円礫・角礫多く含む
23．明黄褐色（10YR 7/6）細粒砂
24．黄橙色（10YR 8/8）細粒砂
25．にぶい黄褐色（10YR 5/3）中粒砂
26．黄褐色（10YR 5/6）細粒砂
27．明黄褐色（10YR 7/6）細粒砂
28．浅黄橙色（10YR 8/3）細粒砂〈18層の地山ブロック層〉
29．黄褐色（2.5Y 5/4）細粒砂
30．にぶい黄褐色（10YR 5/4）中粒砂混じり細粒砂
　径２㎝大の円礫多く含む
31．にぶい橙色（7.5YR 6/4）粗粒砂混じり中粒砂
32．明黄褐色（10YR 7/6）中粒砂
　10層及び18層がモザイク状に混じった層
33．腐植土層〈旧水田の表土層〉
34．灰黄褐色（10YR 6/2）中粒砂混じり細粒砂　有機化する
35．灰白色（10YR 8/2）粗粒砂
36．灰黄色（2.5Y 6/2）粗粒砂　径２㎝大の円礫多く含む
37．灰白色（5Y 7/2）粗粒砂
　径１～３㎝大の円礫と有機物を多く含む
38．灰白色（2.5Y 8/2）粗粒砂　径３㎝大の円礫多く含む
A．黄色（2.5Y 7/8）均質な中粒砂〈地山〉
B．淡橙色（5YR 8/4）均質なシルト
　粘質でしまりが強い〈地山〉

第30図　岨田遺跡14区平面・土層断面図

mと10mのところで階段状に落ち込んでいる。落込みの比高はともに１m以上あり、角度も急なことから人為的に削られたものと考えられる。地山上の土は人為的に造成されたものである。地山の南の段よりも高い方では、大阪層群由来の土で造成されており、層位も比較的複雑な様相を呈している。一方、段よりも低い方では第32層や第37層が1.4m以上の厚さで存在している。どちらも攪拌されたためモザイク状を呈した土である。この上にある第33・34層は有機化した層で水田跡と考えられることから、水田の整備にともなって造成されたと考えられる。

精査は地山上で行ったが、遺構はみつからなかった。なお、調査区の南側２/３の範囲では掘削深度が２mを越えても地山を検出できなかったが、安全に配慮して掘削を行わなかった。遺物は調査区北東隅であるf18区の攪乱から、瓦片、須恵器片が出土している。

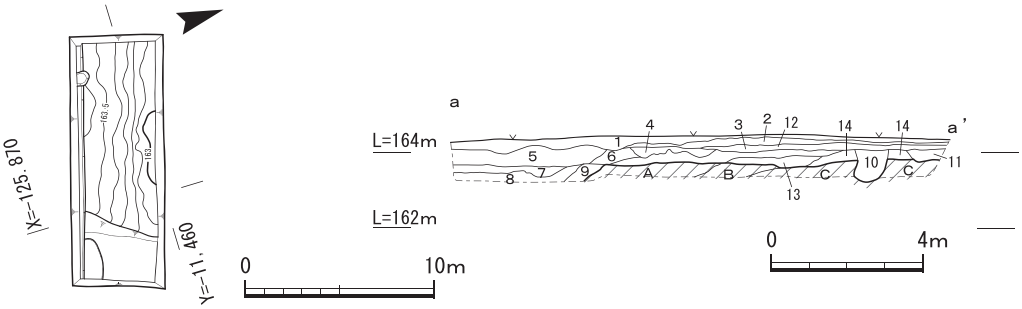


１．褐灰色（7.5YR 6/1）極細粒砂〈表土〉
２．黒褐色（7.5YR 3/1）極細粒砂　有機化する
〈旧水田の耕作土〉
３．灰白色（7.5Y 7/1）細粒砂　還元色を呈する
〈水田造成にともなう層〉
４．灰白色（10YR 8/2）礫
径２～３㎝大の円礫からなる層
５．にぶい黄色（2.5Y 6/4）中粒砂混じり細粒砂
〈水田造成にともなう層〉
６．にぶい黄橙色（10YR 7/3）細粒砂
径１㎝大の円礫少量含みやや有機化する
７．にぶい黄色（2.5Y 6/3）細粒砂
直径２㎝大の礫を少量含みやや有機化する
８．にぶい黄色（2.5Y 6/3）細粒砂　やや有機化する
９．にぶい黄褐色（10YR 5/4）中粒砂混じり細粒砂
径２～４㎝大の礫を非常に多く含む
10．９と同じ
11．にぶい黄色（2.5Y 6/3）細粒砂
直径２～４㎝大の円礫を少量含み有機化する
12．にぶい黄橙色（10YR 7/3）細粒砂
13．浅黄色（2.5Y 7/4）中粒砂
径３㎝大の円礫少量含む
14．黄橙色（10YR 8/6）均質な細粒砂
15．浅黄色（5Y 7/4）中粒砂混じり細粒砂
16．にぶい黄褐色（10YR 5/4）細粒砂　有機化する
17．にぶい黄色（2.5Y 6/4）細粒砂
径２～４㎝大の円礫少量含み有機化する
18．にぶい黄褐色（10YR 5/3）粗粒砂混じり中粒砂
径２㎝大の礫を多く含む
20．黄色（2.5Y 8/6）中粒砂
21．浅黄色（2.5Y 7/4）細粒砂混じり中粒砂
22．にぶい黄橙色（10YR 7/4）細粒砂
23．にぶい黄褐色（10YR 5/3）細粒砂混じり中粒砂
有機化する
24．淡黄色（2.5Y 8/4）中粒砂混じり粗粒砂
25．褐灰色（10YR 6/1）細粒砂
26．明黄褐色（10YR 7/6）細粒砂混じり中粒砂
27．浅黄色（2.5Y 7/4）均質な細粒砂　29層由来の層
28．にぶい黄橙色（10YR 6/4）細粒砂混じり中粒砂
径２㎝大の円礫少量含む
Ａ．にぶい褐色（7.5YR 5/3）中粒砂混じり粗粒砂〈地山〉
Ｂ．淡黄色（2.5Y 8/4）均質な細粒砂〈地山〉

第31図　岨田遺跡15区平面・土層断面図

15区　谷奥部の斜面地で、傾斜に沿って東西に設けた調査区である。トレンチの幅は５ｍで、長さは24.5mである。斜面地であるが、調査区の南東部では傾斜が緩くなっている。南壁での断面の観察によると、調査区の東半部では腐植土層（第１層）と礫混細粒砂層（第６層）が地表面からあわせて35～50cmの厚さである。第６層より下位では落込み状のものが複数切り合っている様子が確認できる。13区と似た状況であり、ここでも重機を用いて土を動かす作業が行われたとみられる。調査区南西部の緩斜面部分では、第５層や第２・３層が1.5mを越える厚さで存在している。第２層は70cm程度の厚みがあるが、有機化していることから水田の耕作土層と考えられる。第３層と第５層は水田にともない造成されたとみられる層で、とくに第３層は還元色を示している。平面精査は地山上（A・B層）で行ったが、遺構はみつからなかった。なお調査区南西部などでは、深度が２ｍを越えても地山が露出しなかったが、安全に配慮してそれ以上の掘削は行わなかった。遺物は出土していない。

16区　第２次調査対象地の南東隅に位置する調査区である。谷奥部の斜面の途中において地形がテラス状になっている部分があり、等高線に沿って幅５m、長さ13mの南北方向のトレンチを設定した。東壁の断面観察では腐植土層（第１層）の下に、整地と考えられる層（第２～４層）が合わせて厚さ30～40cmで存在している。第２～４層は調査区の北端部では確認できず、第５～



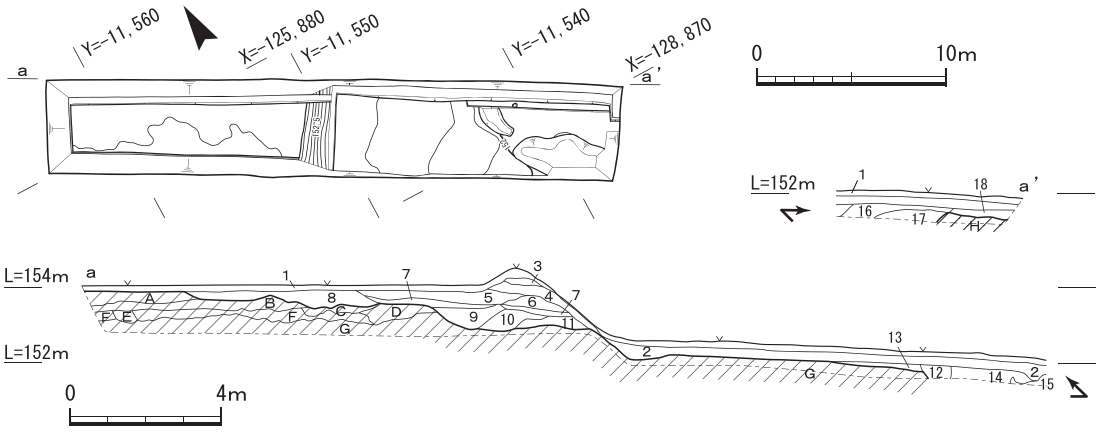
1．黒褐色（10YR3/1）極細粒砂
　落ち葉や根が多く入る〈腐植土〉
2．暗灰黄色（2.5Y 4/2）細粒砂
　有機化する
3．橙色（7.5YR 6/6）極細粒砂
　やや有機化する
4．浅黄橙色（10YR 8/4）細粒砂
　土の色調が明るい〈整地土〉
5．灰白色（2.5Y 8/2）中粒砂混じり細粒砂
　モザイク状を呈する　〈整地土層〉
6．黄色（2.5Y 8/6）細粒砂
　土の色調が明るい〈整地土〉
7．灰黄色（2.5Y 7/2）細粒砂
　ブロック状ににぶい黄橙色（10YR 7/2）が混じる〈整地土〉
8．灰色（5Y 5/1）極細粒砂混じり細粒砂
　有機化する〈木片や根が投棄された層〉
9．にぶい黄橙色（10YR 7/2）細粒砂〈整地土層〉
10．にぶい黄橙色（10YR 7/4）細粒砂
　木の根を多く含む〈撹乱〉
11．浅黄橙色（7.5YR 8/3）中粒砂
　径２cm大の円礫多く含む〈撹乱〉
12．にぶい橙色（7.5YR 6/4）極細粒砂
　やや有機化する
13．にぶい黄橙色（10YR 7/4）極細粒砂
　やや有機化する
14．明黄褐色（10YR 7/6）粗粒砂混じり中粒砂
　径２cm大の円礫多く含む〈17層がやや有機化した層〉
A．にぶい黄橙色（10YR 7/2）極細粒砂混じり細粒砂
　径２～４cm大の円礫を少量含む〈地山〉
B．橙色（7.5YR 7/6）細粒砂混じり粗粒砂
　径２cm大の円礫少量含む〈地山〉
C．黄橙色（10YR 8/8）粗粒砂混じり細粒砂
　径１～４cm大の円礫多く含む〈地山〉

第32図　岨田遺跡16区平面・土層断面図

９層が北側へ落ち込むように堆積している。第２～４層は、ブロックを含みモザイク状を呈する特徴があるため、人為的に動かされた層と考えられる。地山と判断したのはA～C層であるが、谷が深くなる北側に向けてそれぞれが傾斜して重なり合っている。調査区の北端部では地山が急激に落ち込んでおり、この落込みに対応する部分に第７～９層が存在している。A～C層上面も平坦であることから、造成によりテラス状地形を作る際に谷地形を埋めたものが第７～９層と考えられる。精査は第３・５層上面および地山上で行ったが、遺構は検出されなかった。なお、地山が落ち込んでいる調査区北端部では、湧水が激しいため地山を検出することができなかった。遺物は出土しなかった。

５）谷出口の調査（18・19区）

谷の西出口に整備された３枚の水田跡にあたる部分である。公開されている航空写真で確認すると、1987年には調査時と同じ水田の形が確認できるが、1982年の航空写真では水田の形が異なっており、最も東の水田は茶畑として利用されている。

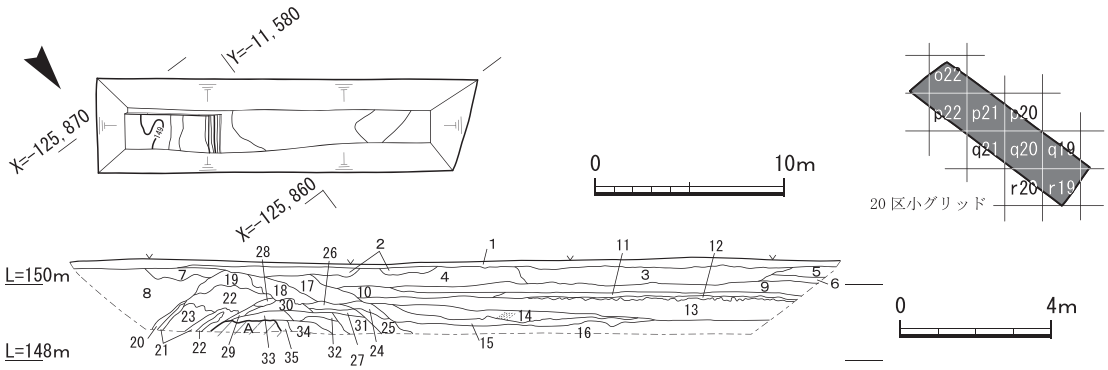


1．水田耕作土
2．黄灰色（2.5Y 4/1）極細粒砂〈水田耕作土〉
3．褐灰色（10YR 4/1）細粒砂
4．にぶい黄橙色（10YR 7/3）細粒砂混じり中粒砂
　径１～２㎝大の礫を多く含む
5．浅黄色（2.5Y 7/3）中粒砂
　径２～５㎝大の礫を非常に多く含む
6．オリーブ黄色（5Y 6/3）中粒砂
7．褐灰色（10YR 4/1）細粒砂〈旧表土〉
8．にぶい褐色（7.5YR 5/3）中粒砂混じり細粒砂
9．にぶい橙色（7.5YR 6/4）細粒砂
10．浅黄色（2.5Y 7/3）中粒砂混じり細粒砂
　径１～３㎝大の礫を多く
　含む
11．灰白色（10YR 8/2）細粒砂
12．灰白色（2.5Y 7/1）シルト〈溝埋土〉
13．明褐灰色（7.5YR 7/1）中粒砂
14．灰白色（10YR 7/1）粗粒砂 径１㎝大の礫を多く含む
　〈動かされた土〉
15．淡黄色（2.5Y 8/4）シルト〈動かされた土〉
16．明褐灰色（7.5YR 7/1）細粒砂
17．灰白色（7.5YR 8/2）シルト混じり細粒砂
　〈23と26層が混じった層〉
18．浅黄橙色（10YR 8/3）細粒砂混じりシルト
A．灰白色（2.5Y 8/2）シルト ラミナ構造を呈する〈地山〉
B．にぶい黄橙色（10YR 7/3）礫
　径0.2～３㎝大の礫からなる層〈地山〉
C．灰白色（2.5Y 8/2）礫 径0.2～１㎝大の礫からなる層〈地山〉
D．浅黄色（2.5Y 8/3）細粒砂混じり中粒砂〈地山〉
E．浅黄色（2.5Y 7/3）礫 径0.2～１㎝大の礫からなる層〈地山〉
F．灰白色（5Y 8/1）シルトやや粘質〈地山〉
G．浅黄橙色（10YR 8/3）礫 径0.2～３㎝大の礫からなる層、
　一部でラミナを呈する〈地山〉
H．浅黄橙色（7.5YR 8/6）シルト〈地山、大阪層群〉

第33図　岨田遺跡18区平面・土層断面図

18区　東の水田から、中央の水田にかけて設けた調査区である。幅５ｍで、長さは30.5mである。南壁断面の観察では水田耕作土(第１・２層)の下には床土が存在していなかった。東の水田にあたる部分においては、水田耕作土下では礫混じりの中粒砂層を検出した。東の水田の部分では、自然堆積と造成で動かされた土の判別が難しかったが、A層でラミナが認められることから、これ以下は自然に堆積したものと判断した。中央の水田にあたる部分では、水田耕作土のすぐ下に地山(G・H層)がある。地山が落ち込んでいる部分に14～17層や溝(第12層)があり、水田で造成された際の土と考えられる。平面の精査は地山と判断した第B・D・G層で行ったが、遺構はみつからなかった。遺物は出土していない。

19区　西の水田に設定した東西方向の調査区で、幅５m、長さ20.5mである。現在の水田が整備される以前の畦畔を新旧２つ確認した。南壁断面の観察によると、新しい畦畔は第19層を頂点とする高まりで、古い畦畔の東側面に覆いかぶさるようにつくられている。この高まりの東側は造成土(第８層)で埋められていることから、東側は削平されている可能性がある。新しい畦畔に



1．褐灰色（10YR 6/1）細粒砂〈水田耕作土〉
2．灰黄色（2.5Y 7/2）細粒砂混じり中粒砂〈造成土〉
3．黄橙色（10YR 8/6）中粒砂〈造成土〉
4．褐灰色（10YR 4/1）中粒砂混じり細粒砂
有機化する〈造成土〉
5．黄灰色（2.5Y 6/1）細粒砂　有機化する
6．灰白色（2.5Y 8/1）細粒砂
7．灰白色（5Y 7/1）粗粒砂〈造成土〉
8．黄橙色（10YR 8/8）粗粒砂混じり細粒砂〈造成土〉
9．褐灰色（10YR 4/1）細粒砂　有機化する
10．黄灰色（2.5Y 5/1）細粒砂　有機化する
11．灰黄色（2.5Y 7/2）細粒砂
12．浅黄色（5Y 7/3）極細粒砂混じり細粒砂
〈荷重痕状の構造を呈する〉
13．黒褐色（10YR 3/1）中粒砂混じり細粒砂　有機化する
14．褐灰色（7.5YR 6/1）極粗砂　いわゆる砂層
〈一部で堆積が西から東へ傾斜しており洪水等の堆積と考えられる〉
15．黄灰色（2.5Y 5/1）細粒砂混じりシルト
木片を少量含み有機化する〈沼状の堆積ないし水田跡か〉
16．灰白色（5Y 7/1）粗粒砂混じり礫
径１～２㎝大の礫からなる層〈洪水による堆積か〉
17．褐灰色（10YR 4/1）中粒砂混じり細粒砂　有機化する
18．黄灰色（2.5Y 5/1）中粒砂混じり細粒砂〈有機化する〉
19．灰白色（2.5Y 8/2）シルト
20．浅黄橙色（7.5YR 8/6）シルト
21．黄灰色（2.5Y 5/1）シルト
木片を非常に多く含み有機化する
22．淡黄色（5Y 8/3）シルト
23．灰色（5Y 6/1）シルト　やや有機化する
24．灰白色（2.5Y 8/1）極細粒砂
25．淡黄色（2.5Y 8/4）細粒砂
26．灰白色（10YR 8/1）極細粒砂
27．淡黄色（5Y 8/3）中粒砂
28．灰白色（5Y 8/2）シルト
29．淡黄色（2.5Y 8/4）シルト
30．浅黄橙色（7.5YR 8/4）シルト
31．灰白色（2.5Y 8/2）粗粒砂混じりシルト
32．浅黄色（2.5Y 7/3）細粒砂混じりシルト
33．淡黄色（5Y 8/3）シルト
34．灰白色（2.5Y 8/1）細粒砂混じりシルト
径１㎝大の礫少量含む
35．灰白色（10YR 8/1）シルト
A．橙色（7.5YR 7/6）シルト〈地山〉

第34図　岨田遺跡19区平面・土層断面図

対応する水田は第９～12層である。第９～11層は有機化しており、耕作土層と考えられる。第11層の下にある第12層には渦状の構造が認められた。これらは1975年～1982年の間の航空写真で確認できる水田に該当すると考えられる。一方の古い畦畔は、第30層の高まりを頂点とするものである。地山（第36層）の高まりの上に土が重ねられる構造で、第24～27・31層がある西側へ補修・拡大が行われていた様子が観察できる。これに対応する水田は第15層と考えられる。第15層は木片を含んだ有機化した層である。新しい水田である第９～12層と古い水田である第15層の間には、第13・14層がある。第13・14層は流水による堆積と考えられ、とくに第14層では西から東へ傾斜するラミナが観察できる。ラミナの形成には禅定寺川の氾濫などが考えられ、第15層の水田が氾濫で埋まってしまった結果、新たな畦畔が整備された可能性がある。

精査は調査区西半の第16層上で行ったが、遺構はみつからなかった。なお、調査区東半部では全面に地山を検出できていないが、掘削深度が２ｍを越えたためそれ以上の掘削は行わなかった。遺物は、南壁の整形中に瓦片が１点出土している。

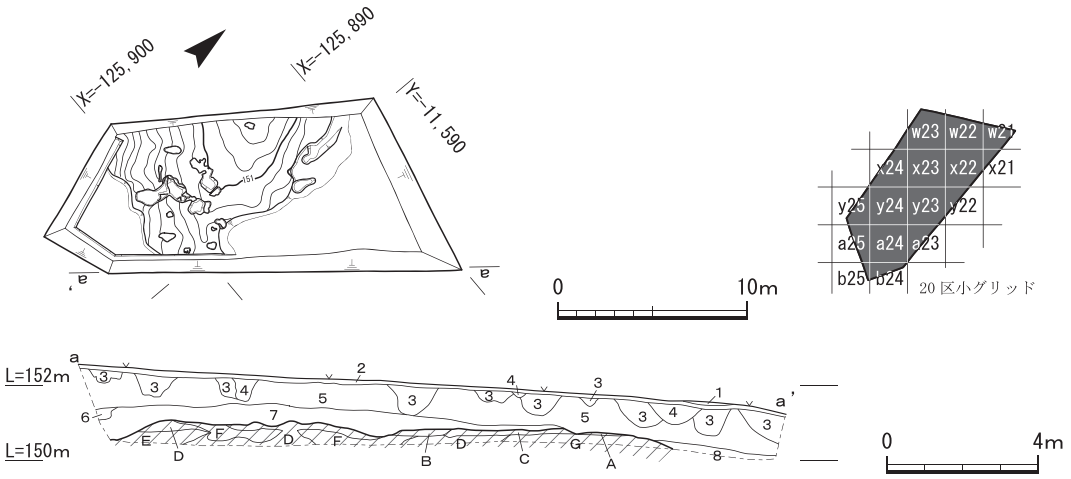
６）20区の調査

岨田古墳の南に位置する調査区である。調査着手前の踏査において布目や叩き目をもつ瓦を十数点表面採集したため、可能な限り広い調査区を設定して面的な調査を行うこととした。調査区の大きさは南北19.5m、東西11ｍである。調査着手前まで茶畑として利用されていたが、道路計画にともなって茶畑を廃止するにあたり整地が行われていた。整地は調査区の北辺と西辺にほぼ対応する部分で行われ、茶畑の耕作土の上に整地土が置かれている。瓦を表面採取した場所は、この整地を行った部分においてである。東壁断面によると土層は、表土（第２層）の下には0.8～１ｍの厚さで茶畑の耕作土（第５層）がある。耕作土下の第７層は、人為的に動かされた層と判断した。調査区の中央部においては地表下１ｍで粘質なシルト層（D層）や極細粒砂～細粒砂（B・C層）の地山を確認した。D層は、地形に対応した舌状の高まりとして存在しており、南西と北東へ向けて低くなっている。第12層の下にあるE・F層やB・C層ではラミナがみられる。平面の精査は第７層上面と地山であるB～D層上面で行った。第12層上面で重機の爪先の痕跡がみつかったが、遺構は検出されなかった。また、岨田古墳に関わる遺構も検出されなかった。

遺物は北東壁の造成土層から瓦片が出土している。また、重機で掘られた攪乱内から須恵器の細片が出土しているのみである。

４．出土遺物

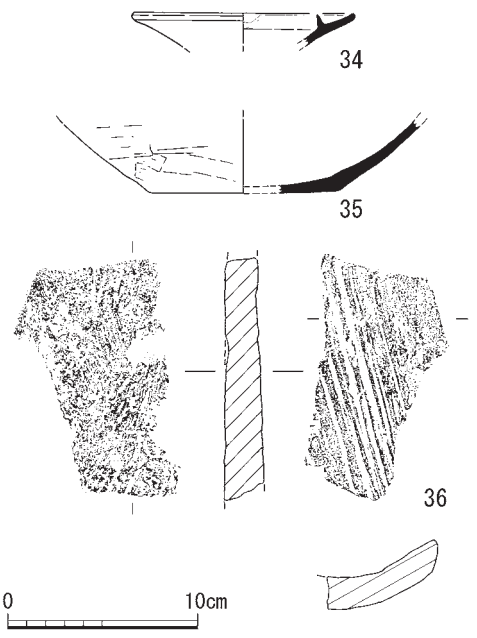
34は、６区の表土を掘削中に出土した施釉陶器の灯明受皿である。一部を切り欠いた受部をもつ。内面は施釉し、外面は露胎である。京信楽系とみられる。35は、14区南半部の造成土を掘削中に出土した。須恵器鉢の底部片である。36は、19区南西壁を清掃中に出土したもので平瓦である。凹面に布目痕と模骨痕が残る。凸面は縄叩き痕をもつ。37～46は、20区からの出土である。37は、攪乱から出土した須恵器の底部片である。底部外面を丁寧にナデ調整しており、杯Aの可



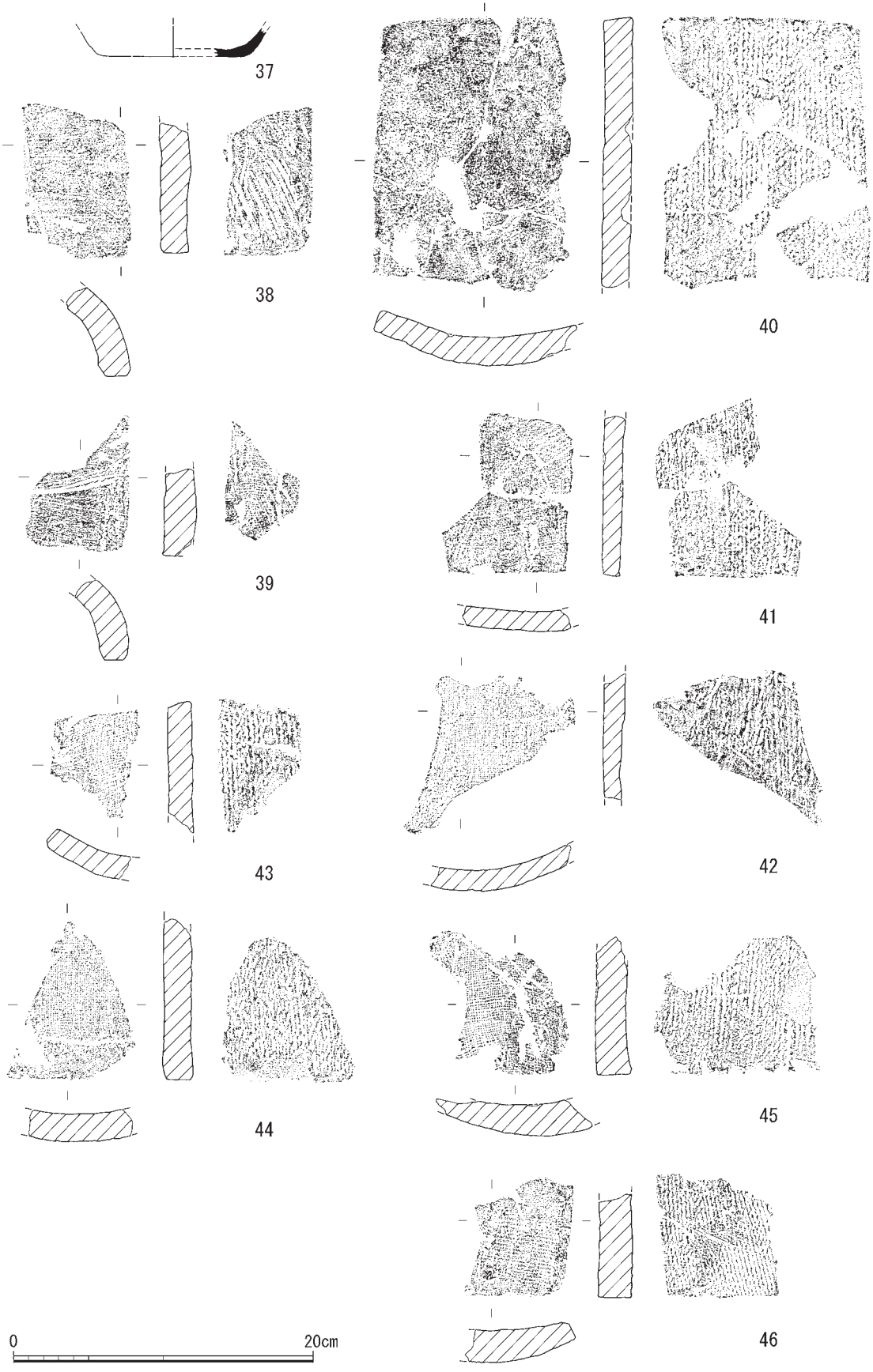
1．黄色（2.5Y 8/6）中粒砂〈整地土〉
2．浅黄橙色（10YR 8/3）細粒砂表土〈整地土〉
3．灰黄褐色（10YR 4/2）細粒砂　有機化する
〈天地返しされた土〉
4．にぶい橙色（7.5YR 6/4）中粒砂混じり細粒砂
やや有機化する〈天地返しされた土〉
5．にぶい褐色（7.5YR 5/3）細粒砂　径２～３㎝大の円礫を
多く含む〈茶畑の耕作土〉
6．にぶい黄橙色（10YR 7/3）中粒砂
7．明褐灰色（7.5YR 7/2）粗粒砂混じり中粒砂
径１～３㎝大の礫非常に多く含む
〈人為的に土を動かした層〉
8．灰黄色（2.5Y 7/2）中粒砂〈整地層〉
A．浅黄橙色（10YR 8/4）シルト〈地山、大阪層群か〉
B．灰黄色（2.5Y 7/2）均質な極細粒砂層
〈流水堆積の地山〉
C．にぶい橙色（5Y 7/3）細粒砂　ラミナを呈する
〈流水堆積の地山〉
D．灰白色（10YR 8/2）粘質なシルト　ラミナを呈する
〈流水堆積の地山〉
E．にぶい黄橙色（10YR 7/2）礫
径0.5～２㎝大の礫からなる層〈流水堆積の地山〉
F．橙色（7.5YR 7/6）礫　径0.5～３㎝大礫からなる層
〈流水堆積の地山〉
G．灰白色（7.5YR 8/1）粘質なシルトしまりが強い
〈地山、大阪層群〉

第35図　岨田遺跡20区平面・土層断面図

能性がある。38・39は、丸瓦である。小グリッドw23区の北壁を清掃中に、茶畑廃止後の整地土層から出土した。色調や胎土の特徴が似ており同一個体の可能性がある。いずれも凸面は横方向のハケ目調整を施しており、凹面に布目痕をもつ。40～46は、平瓦である。凹面には布目痕、凸面には縄叩き痕がある。丸瓦と同じく整地土層から出土したものである。45・46は、発掘調査着手前に表面採集したものである。側縁の調整が確認できるもののうち38・39・43・46は桶巻作りの可能性がある。一方、40は端部が丸く調整されており、一枚作りの可能性がある。



第36図　岨田遺跡出土遺物実測図１



第37図　岨田遺跡出土遺物実測図２

５．ま と め

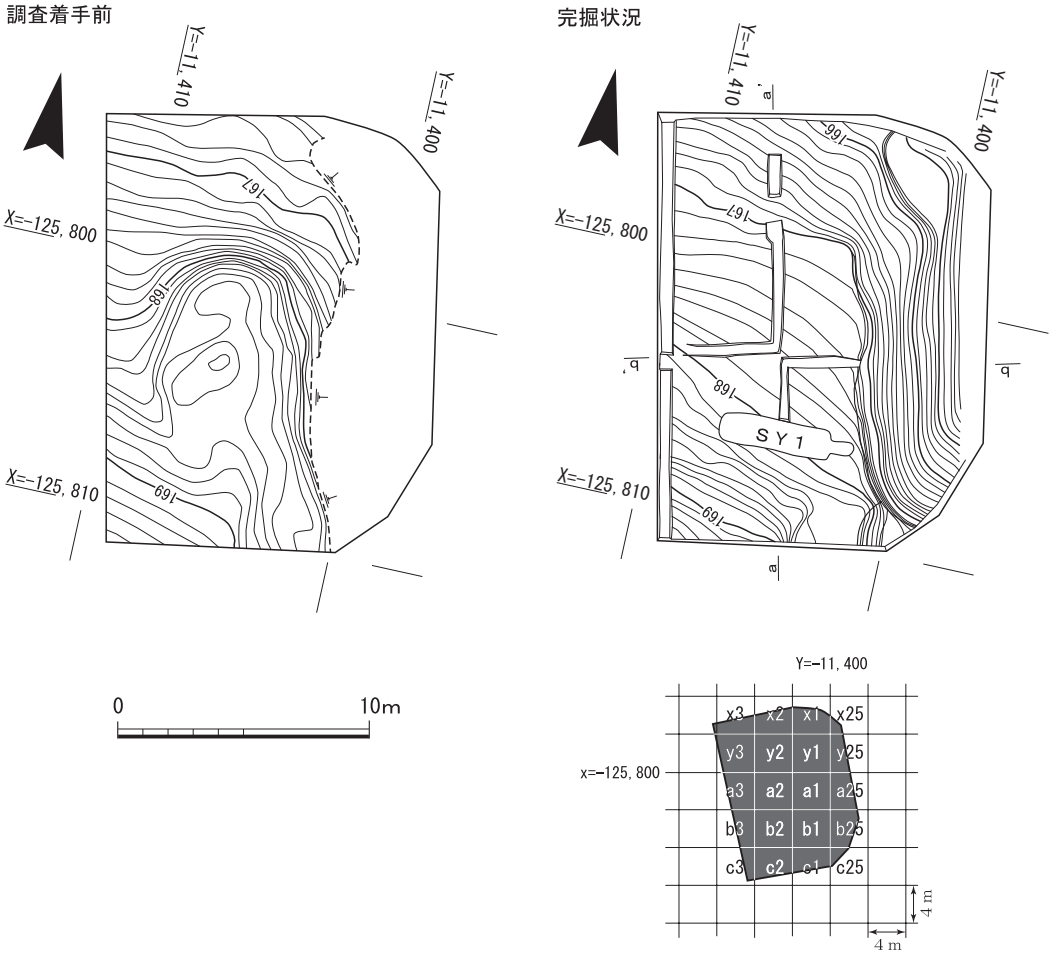
今回、岨田遺跡で初の本格的な調査を行った。遺跡範囲内の北部の広い範囲を調査したが、顕著な遺構は確認できなかった。遺物も20トレンチの瓦を除いては、須恵器の細片が攪乱から数点認められたのみであり、調査対象地付近では遺構・遺物の展開が極めて薄いことが明らかになった。20区では調査着手前の踏査時に瓦が表面採集できたが、これらは現代の造成に伴う整地土のものであることが分かった。整地土には破砕されたレンガ片なども含まれていたことから、他所から運び込まれた土砂で整地がなされたと考えられる。出土・採集された瓦もそこに混入していたと考えられるが、瓦の胎土や色調には複数種類存在しており瓦窯などではなく、消費地の瓦が混入したのであろう。

（加藤雅士）

〔4〕砂　川　古　墳

1．はじめに

砂川古墳は禅定寺砂川に位置する。調査地は南から北へ下る斜面地にあり、斜面から北へ向かって舌状に伸びる地形の高まりがある。これが径７ｍの古墳として登録されている。遺跡の所在地としては岨田遺跡に内包されるかたちとなっている。舌状地形は東西の幅7.0m、南北の長さ8.1ｍで頂部は若干平坦になっている。最高所の標高は168.83ｍであり、頂部の東側と西側は裾部に向かってなだらかに下っている。頂部の南側は斜面に接続しており、北側は傾斜変換点から裾部へ向かって急な斜面となっている。最高所と西側裾部との高低差は0.6m、北側裾部との高低差は1.39ｍである。舌状地形に設定した調査区の東側は平坦地に造成され、コンクリート製の擁壁や排水溝が敷設されている。東裾部はこの造成時に削平され崖状になっており、最高所とは４ｍ以上の比高がある。



第38図　砂川古墳平面図

２．調 査 の 概 要

調査着手前は針葉樹が繁茂する植林地であったので、樹木伐採を行い、掘削前に地形測量を実施した。その後南北17m、東西13mの調査区を設定し、地形に直交するように十字の畦を設けた。この畦によって断面を確認するとともに、数cm下げるごとに平面を精査して遺構の有無を確認しながら掘削を行った。調査の結果、舌状の高まりは近世以降の盛土と判明するとともに、盛土の下から11～13世紀と考えられる炭窯を１基検出した。

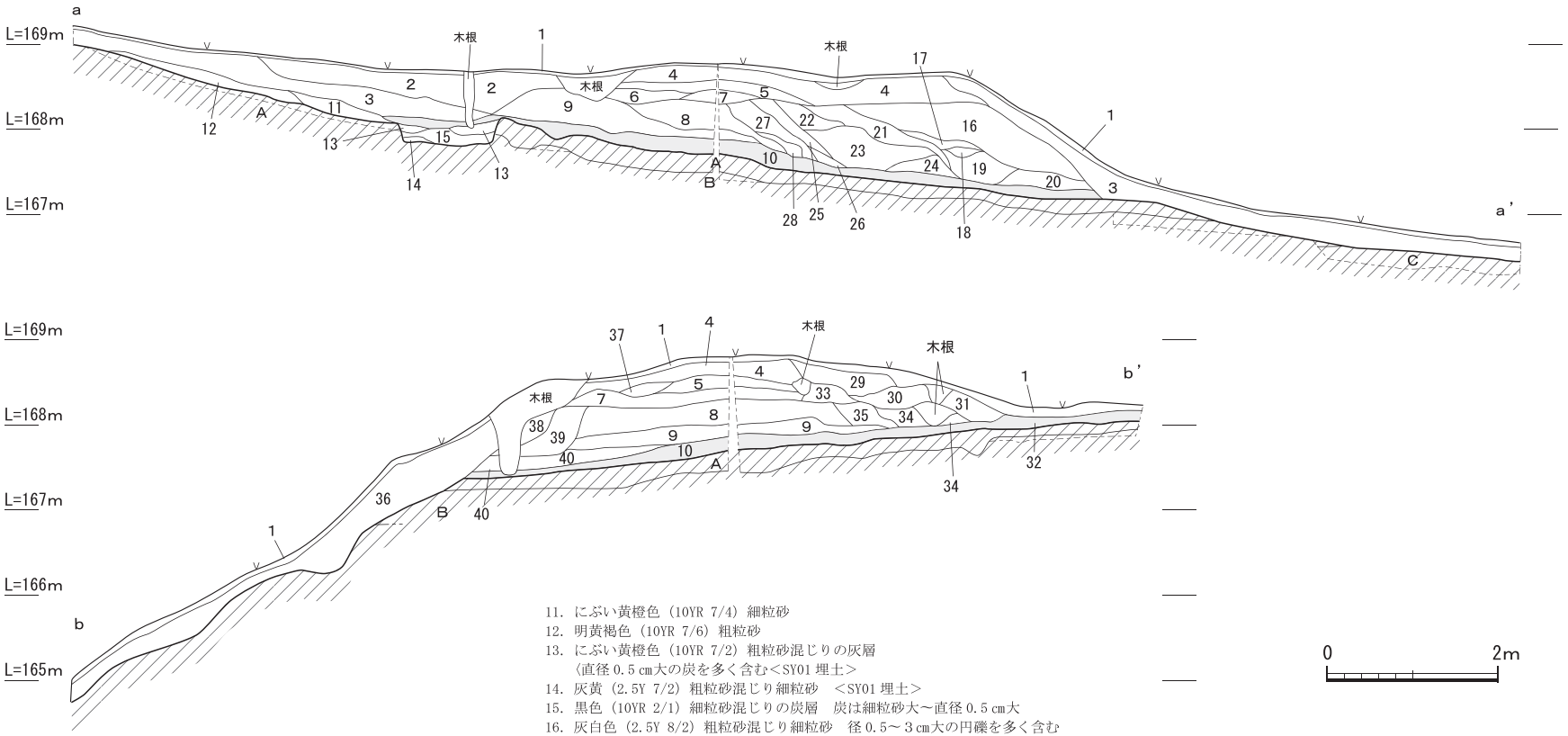
層位　土層を下位から見てみると、地山上に厚さ10～20cmの有機化した旧表土と考えられる層（第10層）がある。舌状地形の高まりはこの旧表土上に形成されるが、地形に沿った水平な堆積をしておらず、人為的に土が盛り上げられたと判断される。第10層中からは17世紀前半の遺物が出土しており、この時期以降に形成された盛土である。また、旧表土は盛土の範囲に収まることから、旧表土は盛土により保存されたものと考えられる。盛土はいずれもやや粘質なシルト～細粒砂であり、地山である大阪層群（禅定寺層）由来である。南北方向の断面観察では、最初に土が置かれるのは斜面から伸びる舌状地形の付け根付近であり、第９・40層が最大40cm厚のマウンド状に土が積まれている。次に第９層の上から北側にかけて第８層が置かれ、さらにその北側に順次第16～28層、最後に第８層上に第４～７層が積まれている。第４～７層は比較的締まりが弱い層で、表土から浸透する雨水などの影響を受けていると考えられる。盛土の性格は不明である。

炭窯ＳＹ１　旧表土下において、炭窯（ＳＹ１）を１基検出した。斜面に対する舌状地形の付け根部分に位置する。地山面から掘り込んで作られており、旧表土である第10層に覆われている。盛土により舌状地形が形成される以前の遺構である。東西方向に主軸があり、炭化室の東側に焚口をもつ。検出長は5.4mであるが、焚口の東端部は削平されていると考えられる。炭化室は隅丸長方の平面形で、上端で計測した長さは4.49m、幅1.2mである。深さは0.24mである。炭化室と焚口の連結部の底面には半球状に窪んだ部分がある。窪みの底と炭化室側の底面の高低差は0.14m高低差である。炭化室の底面はわずかに赤変しており、標高は西側の方が高くなっている。窪みのすぐ西の地点と、炭化室西端部の底面の標高を比較すると、西端部の方が0.3m高くなっている。このことから炭化室の西側には本来、煙道が存在したと考えられる。

焚口は炭化室の東に接続しており、上端で計測した長さは0.91m、幅0.53m、深さは0.38mである。底面の標高は、炭化室との連結部にある窪みと比較すると、焚口の方が0.04m高くなっている。焚口の底面には凹凸があり、北半部はテラス状に僅かに高まっている。底面から東側の上端にかけては、緩やかに高くなっている。

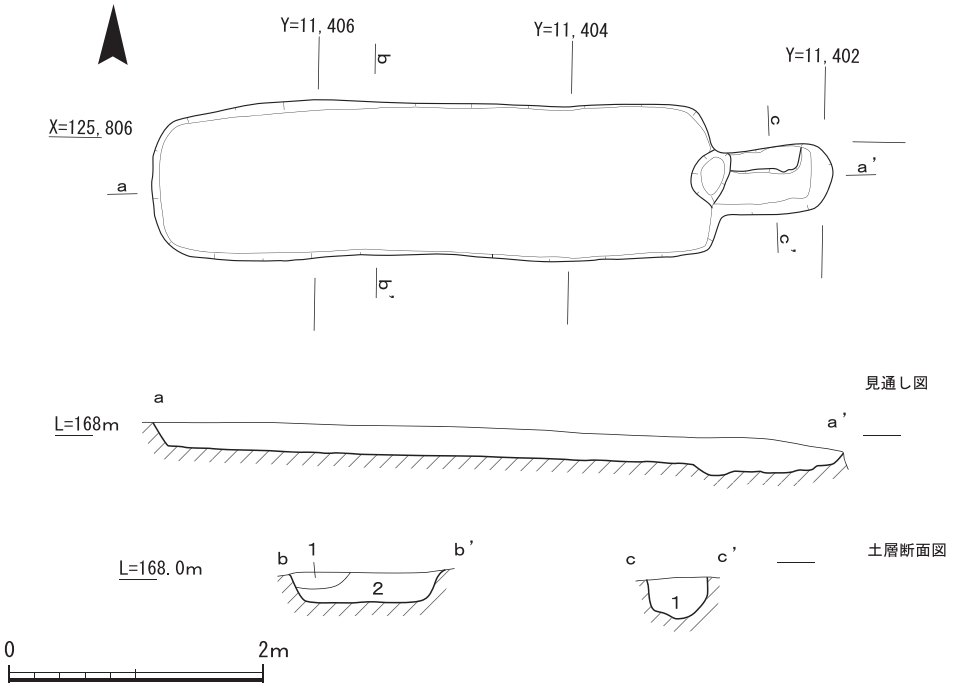
炭化室・焚口ともに、埋土は炭と灰に地山由来の細粒砂が混じっていた。炭は0.5cm大のものが主体であったが、ゴルフボール大のものも少量認められた。樹枝の形状を留めているものもあったことから、燃料や生成された木炭の一部であると考えられる。灰は黄灰色を呈しており、シルト～極細粒砂大の粒径である。埋土から遺物は出土しなかった。炭窯の形状は土窯に分類できるものであり[(注34)]、黒炭を得るためにつくられていたものと考えられる。

炭化室から出土した炭３点について、AMS法による放射性炭素年代測定を行ったところ11～



1．黒褐色（10YR 3/2）極細粒砂　木根を多く含み有機化する＜表土＞
2．浅黄橙色（10YR 8/4）極細粒砂混じりシルト
　径１cm大の円礫ごく少量含む
3．灰黄色（2.5Y 7/2）極細粒砂　有機化する＜堆積土＞
4．橙色（7.5YR 7/6）極細粒砂混じりシルト
　径１～２cm大の円礫少量含む
5．黄橙色（7.5YR 7/8）シルト
6．灰白色（5Y 8/1）シルト 粘質
7．灰白色（10YR 8/2）シル ト粘質
8．黄色（2.5Y 8/6）シルト混じり極細粒砂　モザイク状を呈する
9．灰白色（2.5Y 8/1）シルトと黄橙色（10YR 8/6）
　極細粒砂の混じった層
10．灰黄（2.5Y 6/2）極細粒砂有機化する＜旧表土＞
11．にぶい黄橙色（10YR 7/4）細粒砂
12．明黄褐色（10YR 7/6）粗粒砂
13．にぶい黄橙色（10YR 7/2）粗粒砂混じりの灰層
　〈直径0.5cm大の炭を多く含む＜SY01埋土＞
14．灰黄（2.5Y 7/2）粗粒砂混じり細粒砂　＜SY01埋土＞
15．黒色（10YR 2/1）細粒砂混じりの炭層　炭は細粒砂大～直径0.5cm大
16．灰白色（2.5Y 8/2）粗粒砂混じり細粒砂　径0.5～３cm大の円礫を多く含む
17．黄橙色（10YR 8/8）シルト
18．灰黄色（2.5Y6/2）細粒砂　有機化する
19．明黄褐色（10YR7/6）細粒砂　径２cm大の円礫少量含む
20．明黄褐色（2.5Y7/6）細粒砂
21．にぶい黄橙色（2.5Y 6/3）細粒砂　有機化する
22．明黄褐色（10YR 7/6）シルト混じり細粒砂　径１cm大の円礫を多く含む
23．灰白色（2.5Y 8/2）シルト
24．明黄褐色（10YR 6/6）細粒砂
25．にぶい黄橙色（2.5Y 6/3）細粒砂　やや有機化する
26．淡黄色（2.5Y 8/4）シルト混じり細粒砂＜地山＞
27．にぶい黄橙色（10YR7/3）細粒砂
28．淡黄色（2.5Y 7/3）細粒砂　やや有機化する
29．淡黄色（2.5Y7/3）細粒砂　やや有機化する
30．明黄褐色（10YR 7/6）極細粒砂と灰白色（10YR 7/1）シルトの混じった層
31．灰黄色（2.5Y 7/2）極細粒砂　やや有機化する
32．にぶい黄橙色（10YR 7/2）細粒砂混じり極細粒砂
33．灰黄色（2.5Y 7/2）シルト　径３cm大の円礫ごく少量含むやや粘質
34．黄橙色（10YR 8/8）シルト混じり細粒砂
35．にぶい黄橙色（10YR 7/2）極細粒砂　やや粘質
36．にぶい黄色（2.5Y 6/3）細粒砂　有機化する
37．暗灰黄色（2.5Y 5/2）細粒砂　有機化する
38．淡黄色（2.5Y 8/3）細粒砂 径１cm大の礫多く含む
39．明黄褐色（10YR 7/6）シルト混じり細粒砂
40．にぶい黄褐色（10YR 5/3）細粒砂 有機化する
A浅黄橙色（7.5YR 8/6）細粒砂　しまりやや弱い＜地山＞
B灰白色（7.5YR 8/1）粗粒砂　しまり非常に強い＜地山＞
C橙色（7.5YR 7/6）粗粒砂＜地山＞

第39図　砂川古墳土層断面図

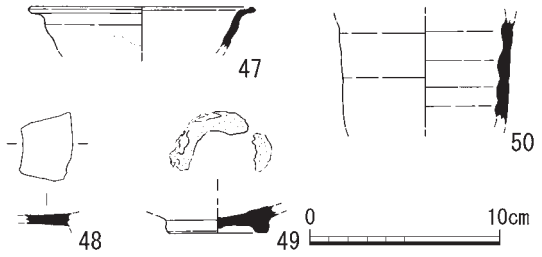


1．にぶい黄橙色（10YR 7/2）細粒砂混じりの灰層
　径0.5㎝大の炭を多く含む
2．黒色（10YR 2/1）細粒砂混じりの炭層　炭は細粒
　砂～0.5㎝大

1．灰黄褐色（10YR 6/2）細粒砂まじりの灰層
　径0.5～２㎝大の炭を少量含む

第40図　砂川古墳　炭窯ＳＹ１平面・断面図

13世紀の年代を得た。また同じく炭化室から出土した炭12点について樹種同定と観察を行ったところ、すべてがコナラ属アカガシ亜属であり、半割やみかん割されている状況が確認された。



第41図　砂川古墳出土遺物実測図

３．出土遺物

47･48は、盛土中から出土したもので、７・８層に相当する部分からの出土である。47は、小グリッドa3区から出土した唐津陶器皿の口縁部である。口縁部が大きく外反する器形で、口縁端部内面に溝状を巡らす溝縁皿である。内外面に施釉されるが、外面の下半は露胎である。48は、y3区から出土した陶器の底部片である。高台付近にあたり、外面は露胎土し削っている。肥前の可能性がある。49は、a2区の旧表土層から出土した唐津陶器皿の高台部である。高台は露胎で削られている。内面には小さな兜巾を有し、外面は竹節高台となっている。内面は施釉されており、輪状の砂目をもつ。47と49は、肥前陶磁編年[(注35)]のⅡ期に該当することから、17世紀前半の年代が与えられる。50は、信楽陶器の壺ないし甕。b1区とc3区の表土層から出土したものが接合した。

４．ま と め

砂川古墳とされていた地形隆起を調査した結果、人工的な盛土であることが確認された。盛土下の旧表土が17世紀前半の年代であることから、近世初頭以降の盛土であることが判明した。盛土の性格は不明である。また同じく盛土下で11～13世紀代の炭窯を検出した。宇治田原町教育委員会が実施した禅定寺城跡の発掘調査では[注36]、炭窯２基、炭窯関連土坑５基が検出されている。これらの時期は特定されていないが、同調査で検出された「炭窯関連土坑３」などは今回の例と形状や規模が非常に似ている。禅定寺城跡では複数の炭窯が主軸を揃えて密集している。今回検出した炭窯ＳＹ１は盛土が存在したために保存されていたと考えられ、他にも炭窯が存在した可能性がある。また、花粉分析を中心とした京都盆地周辺の植生史では、人間活動の影響により古墳時代～平安時代にかけては落葉広葉樹とアカマツの混交林であったが、中世以降にアカマツ林が優勢になるとされている[注37]。しかし、今回、炭窯ＳＹ１から出土した炭の樹種は落葉広葉樹であるアカガシ亜属に限られており、植生の遷移の上では京都盆地周辺とは様相が異なっているようである。調査地が宇治田原町内の中心部から外れている点や、周辺での調査事例が無い点から、この結果を宇治田原町全体に敷衍できるかは慎重でなければならない。しかし、都が置かれた京都盆地やその周辺と人間活動の量を比較すれば、宇治田原町の方が当然ながら低調であると考えられ、植生が異なる理由として予想される。現在の宇治田原町内では茶畑と針葉樹がいたる場所でみられるが、かつては常緑広葉樹の景観が広がっていたのであろう。

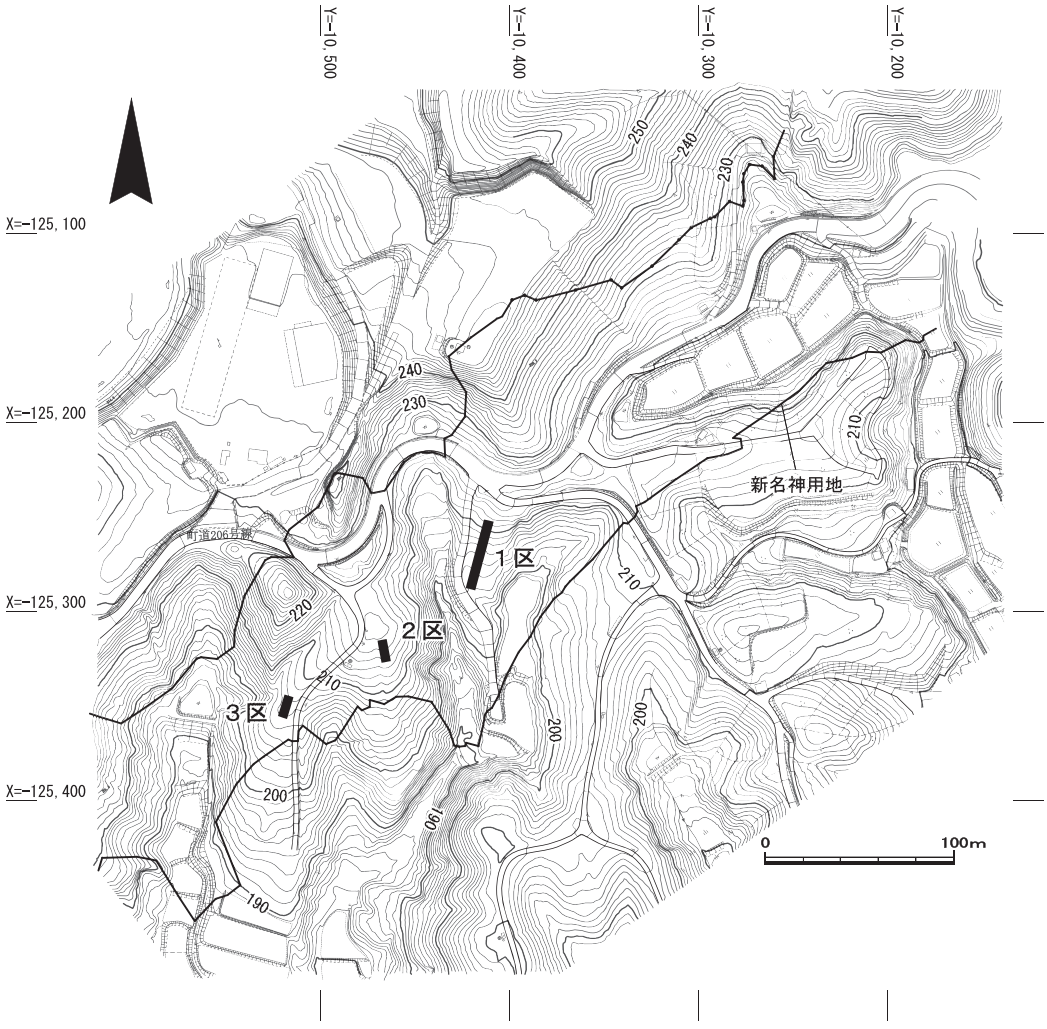
（加藤雅士）

〔5〕奥　城　土　遺　跡

1．はじめに

奥城土遺跡は、宇治田原町の町域中央の北端部付近である、禅定寺奥城土に所在する。遺跡の西方では、南流する禅定寺川の谷底平野に沿って府道783号宇治田原大石東線が走っている。この道路は田原道をほぼ踏襲していると考えられ、府県境を越えて滋賀県の瀬田まで通じている。府道沿いには集落が点在するほか、十一面観音立像などの重要文化財群を擁する禅定寺が所在している。遺跡は禅定寺から南西方向に約１kmの距離の山地内にあり、南北約290m、東西幅約85mの範囲が散布地として登録されている。

調査対象地は遺跡範囲の北半部にあたり、すぐ北側は禅定寺城跡の遺跡範囲にあたる。一帯は山地の南斜面を利用して茶の生産が行われており、茶畑が一面に展開する開けた景観となっている。調査対象地付近では山地に対して南から谷が入り込んでおり、複数の尾根が南北方向に形成されている。調査はこの尾根部を対象として、１～３区の調査区を設けた。表土の掘削には重機



第42図　奥城土遺跡調査区配置図

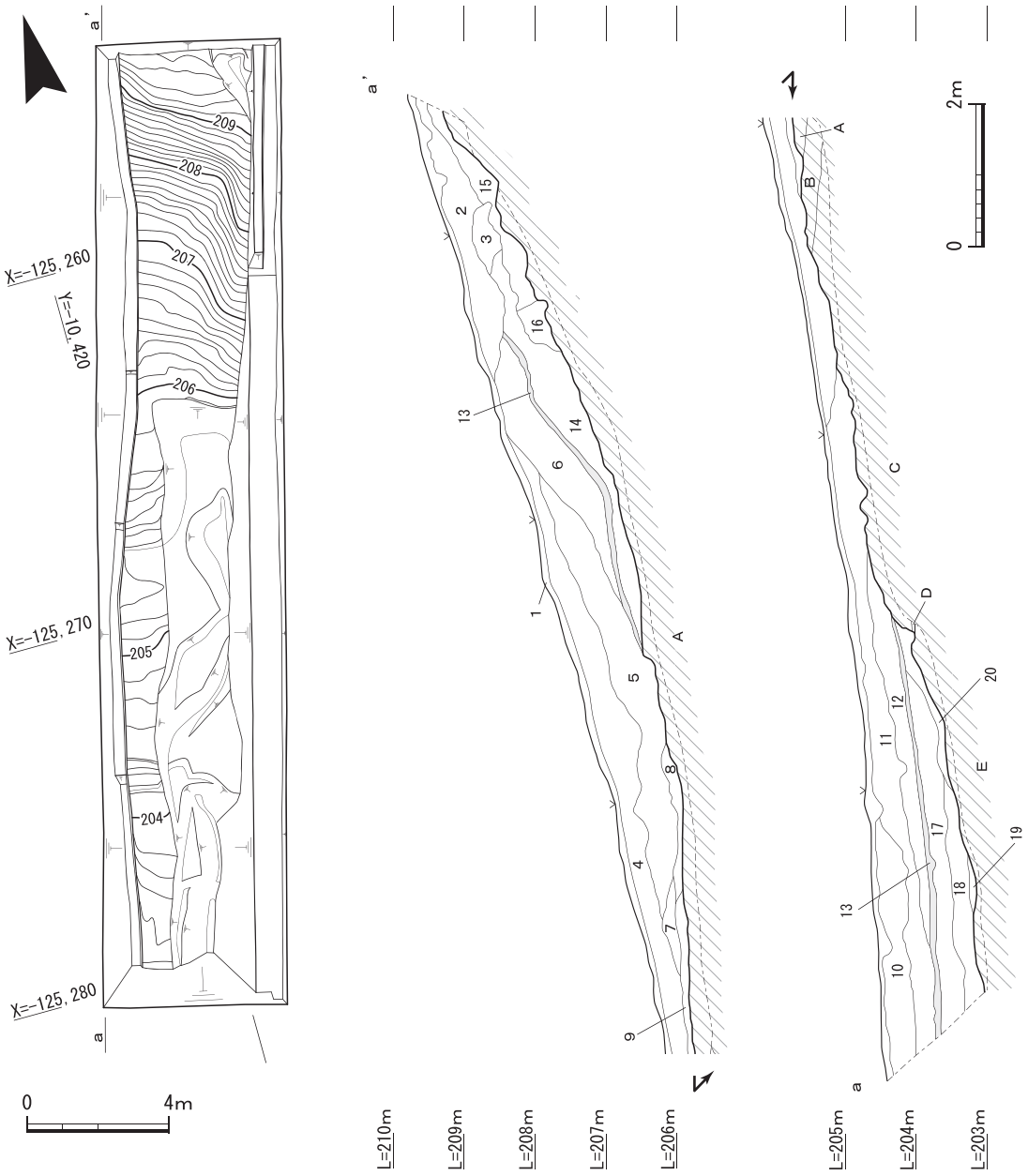
を使用し、途中に複数回人力で精査を行いながら地山付近まで重機で掘削した。その後、人力で精査を行い、遺構の有無を確認した。

２．検 出 遺 構

１）１区の調査

東西を谷に挟まれた南に下る尾根地形上に設けた調査区である（第43図）。調査直前まで茶畑として利用されていた場所である。調査区の長さは南北32m、幅は東西５ｍである。

表土（第１層）は茶畑として利用された際に形成された腐植土であるが、表土下の層（第２・４～５・10・11）は有機化があまり進んでいなかった。表土から地山までの間の層は、地山に由来



第43図　奥城土遺跡１区平面・断面図

１区土層名

１．黒褐色（10YR3/1）細粒砂混じり極細粒砂＜表土の腐食土層＞
２．灰白色（10YR8/2）細粒砂混じりシルト
３．灰黄色（2.5Y7/2）極細粒砂
４．浅黄橙色（10YR8/3）細粒砂混じりシルト　やや有機化する
５．浅黄橙色（7.5YR8/3）細粒砂
６．浅黄橙色（10YR8/4）シルト　淡橙色（5YR8/3）と浅黄橙色（7.5YR8/4）がモザイク状に入る
７．灰白色（10YR7/1）シルト
８．黄灰色（2.5Y6/1）シルト　締りが弱い
９．灰白色（10YR8/2）細粒砂混じりシルト
10．浅黄橙色（7.5YR8/4）細粒砂
11．淡黄色（2.5Y8/3）細粒砂混じりシルト
12．浅黄橙色（10YR8/4）細粒砂混じりシルト　灰白色（10YR8/1）と黄色（2.5Y8/6）がモザイク状に入る
13．褐灰色（10YR6/1）極細粒砂　上層との境に植物根が多く入る＜旧表土＞
14．淡黄色（2.5Y8/3）極細粒砂混じりシルト　やや有機化する
15．黄橙色（10YR8/6）シルト　灰白色（10YR8/6）がモザイク状に入る
16．明褐灰色（7.5YR7/1）シルト
17．灰黄色（2.5Y7/2）極細粒砂　比較的均質で砂味が強くやや有機化する
18．にぶい黄橙色（10YR7/2）極細粒砂　比較的均質で砂味が強い
19．浅黄橙色（10YR8/4）細粒砂
20．明褐灰色（7.5YR7/1）細粒砂混じり極細粒砂
Ａ．灰白色（2.5Y7/1）極細粒砂
Ｂ．にぶい黄橙色（10YR7/2）極細粒砂に浅黄橙色（7.5YR8/6）がラミナ状に入る
Ｃ．灰色（5Y6/1）極細粒砂　締りが非常に強い
Ｄ．灰白色（N8/0）細粒砂　締りが非常に強い
Ｅ．灰白色（5YR8/1）シルト混じり細粒砂　締りが非常に強く砂味が強い

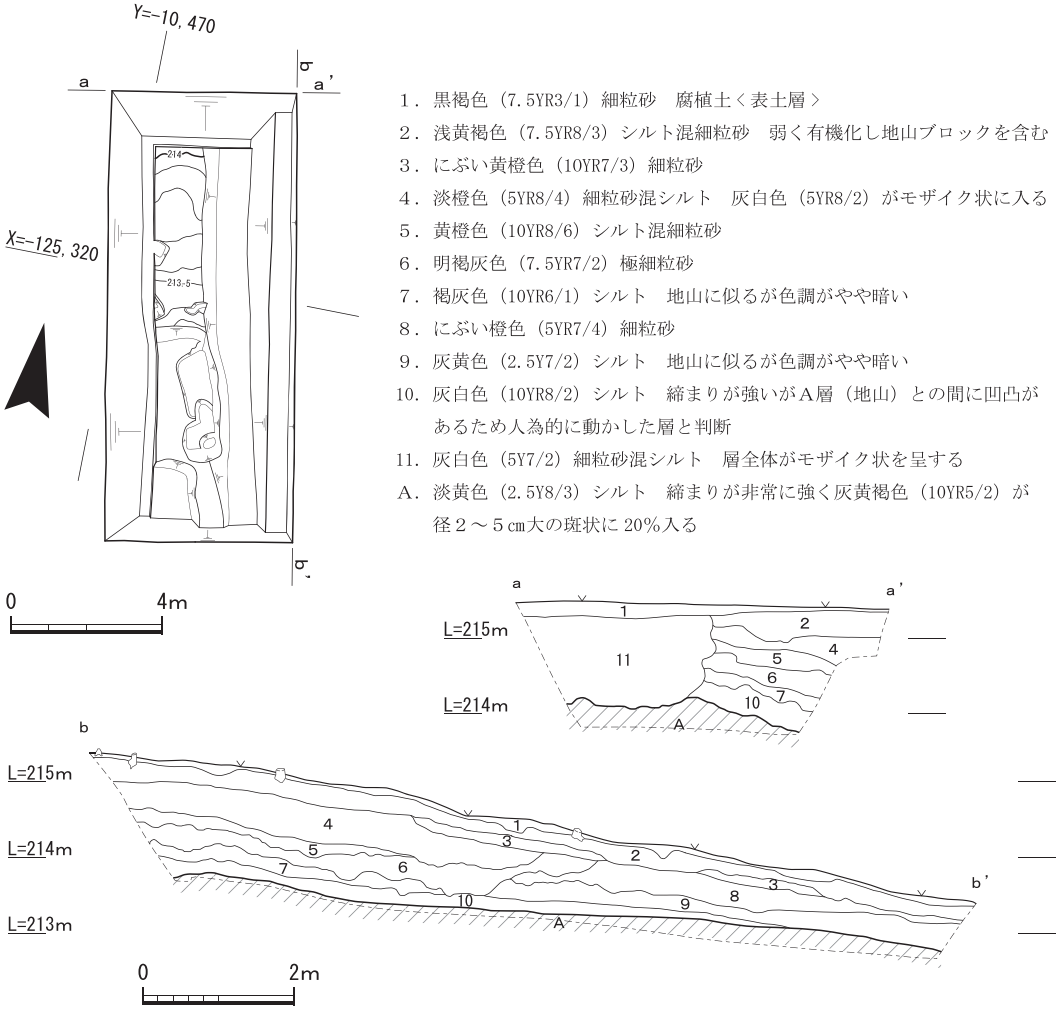
する土が人為的に動かされたもので、混ざった土がモザイク状の構造を示す様子（第６・12層）などが観察された。茶畑の造成時に動かされたものと考えられる。第13層は旧表土と考えられる厚さ10cm程度の層で、植物根が多く入っている。階段状になる部分があることや、旧表土が地山に接している部分があることから、地山面を造成して段々畑が作られた段階があったと考えられる。その後、旧表土上に土を重ね入れて現在の茶畑が作られたと考えられる。

地山は地表下0.6～1.4ｍの深さで検出した。地山面で精査を行ったが遺構は認められなかった。調査区の南東部は深さ１ｍ程度の攪乱を受けていた。遺物は出土しなかった。

２）２区の調査

１区の西にある尾根の平坦部から南斜面にかけて設定した調査区である（第44図）。調査着手前までは茶畑として利用されていた場所である。調査区の長さは南北12m、東西幅は５ｍである。

表土（第１層）下は地山由来の層が20～40cm程度の厚さで重なっており、モザイク状の構造が観察できることなどから、茶畑の造成に伴って人為的に動かされた土と判断できる。北壁の観察では、谷側に向かって東に下る地形に対して、第２・４～７・10層を入れることにより平坦な地形に造成している様子が認められる。これらの層の西側は、第11層により大きく切られている。第11層は締りが弱く、第２・４～７・10層と比べて明るい発色でモザイク状の構造も顕著であるため、両者には時間差が存在すると考えられる。つまり第２・４～７・10層の造成後、一定期間を空けて土壌改良のため土が混ぜ返されて第11層が形成されたと考えられる。



1．黒褐色（7.5YR3/1）細粒砂　腐植土＜表土層＞
2．浅黄褐色（7.5YR8/3）シルト混細粒砂　弱く有機化し地山ブロックを含む
3．にぶい黄橙色（10YR7/3）細粒砂
4．淡橙色（5YR8/4）細粒砂混シルト　灰白色（5YR8/2）がモザイク状に入る
5．黄橙色（10YR8/6）シルト混細粒砂
6．明褐灰色（7.5YR7/2）極細粒砂
7．褐灰色（10YR6/1）シルト　地山に似るが色調がやや暗い
8．にぶい橙色（5YR7/4）細粒砂
9．灰黄色（2.5Y7/2）シルト　地山に似るが色調がやや暗い
10．灰白色（10YR8/2）シルト　締まりが強いがA層（地山）との間に凹凸があるため人為的に動かした層と判断
11．灰白色（5Y7/2）細粒砂混シルト　層全体がモザイク状を呈する
A．淡黄色（2.5Y8/3）シルト　締まりが非常に強く灰黄褐色（10YR5/2）が径２～５㎝大の斑状に20%入る

第44図　奥城土遺跡２区平面・断面図

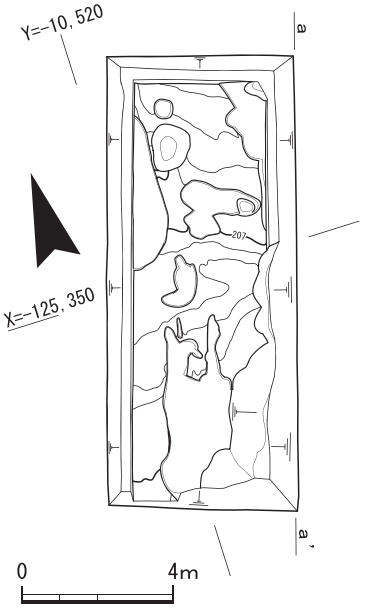
地山は地表下0.7～1.5mで検出した。地山面で精査を行ったが、遺構は検出されなかった。遺物も出土しなかった。

３）３区の調査

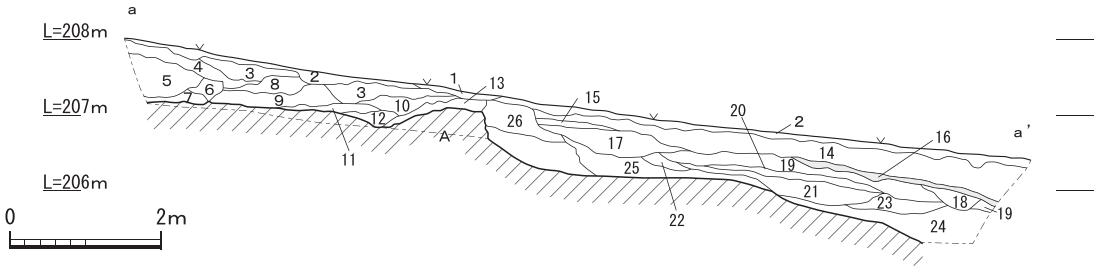
南に下がる尾根上に設けた調査区で、２区の南西に位置する（第45図）。調査前までは茶畑として利用されていた場所である。調査区の長さは南北12m、東西幅５mである。

表土（第１層）下の土層は、全て人為的に動かされたと判断される土である。東壁の観察では、調査区の南半は地形の傾斜に沿って厚さ20～50cm程度の層が存在しているのに対し、調査区の北半は複雑な層の在り方をしている。地山面では土坑状の攪乱や重機の爪先の痕跡が確認された。茶畑に伴う土壌改良のため、重機を使用して土が混ぜ返されたと考えられる。第16層は厚さ10cm程度の有機化が進んだ層である。旧表土と判断されることから、畑の造成は少なくとも２時期が存在すると考えられる。

地山は表土下0.3～1.0mで検出した。地山面で精査を行った結果、土坑状の攪乱を複数検出したのみで、遺構は存在しなかった。遺物も出土しなかった。



1．灰白色（7.5YR8/2）シルト
2．黒褐色（10YR3/1）極細粒砂　腐植土〈表土層〉
3．にぶい黄橙色（10YR7/3）細粒砂混極細粒砂　弱く有機化する
4．浅黄橙色（7.5YR8/3）細粒砂混シルト
5．にぶい橙色（7.5YR7/4）シルト
6．灰白色（5YR8/2）シルト
7．橙色（5YR7/6）シルト
8．灰白色（5YR8/2）シルト
9・橙色（7.5YR7/6）シルト
10．灰白色（10YR8/2）シルト
11．明褐色（7.5YR7/2）シルト
12．橙色（7.5YR6/6）シルト
13．黄橙色（10YR8/6）シルト
14．灰白色（7.5YR8/2）細粒砂混シルト
15．明褐灰色（7.5YR7/2）細粒砂混シルト
16．褐灰色（10YR5/1）細粒砂混極細粒砂　有機化する〈旧表土層〉
17．にぶい黄橙色（10YR/3）極細粒砂　弱く有機化する
18．にぶい橙色（7.5YR7/3）極細粒砂
19．にぶい黄橙色（10YR7/4）極細粒砂　弱く有機化する
20．灰白色（10YR8/2）シルト
21．灰白色（2.5Y8/2）細粒砂混シルト
22．にぶい黄橙色（10YR/4）極細粒砂　弱く有機化する
23．にぶい黄色（2.5Y6/3）極細粒砂　弱く有機化する
24．にぶい黄橙色（10YR6/3）極細粒砂　弱く有機化する
25．灰黄色（2.5Y7/2）シルト　弱く有機化する
26．淡黄色（2.5Y8/3）シルト
27．浅黄色（2.5Y/4）シルト
A．灰白色（2.5Y8/2）シルト　浅黄橙色（10YR8/4）および明褐灰色（7.5YR 7/1）がモザイク状に入る〈地山層〉



第45図　奥城土遺跡３区平面・断面図

３．ま と め

奥城土遺跡での今回の発掘調査では遺構・遺物は検出されなかった。土層の観察では、地山を掘り込んで茶畑が造成されている様子を確認した。層中に旧表土が存在している事から現在の茶畑を含めて少なくとも２時期の茶畑が造成されており、１区では段々畑から斜面の畑に変更していると推測された。２・３区では土壌改良のために土を混ぜ返す、いわゆる天地返しの状況を確認することができた。造成や天地返しの時期については、ゴミ等の出土が一切なかったため不明である。

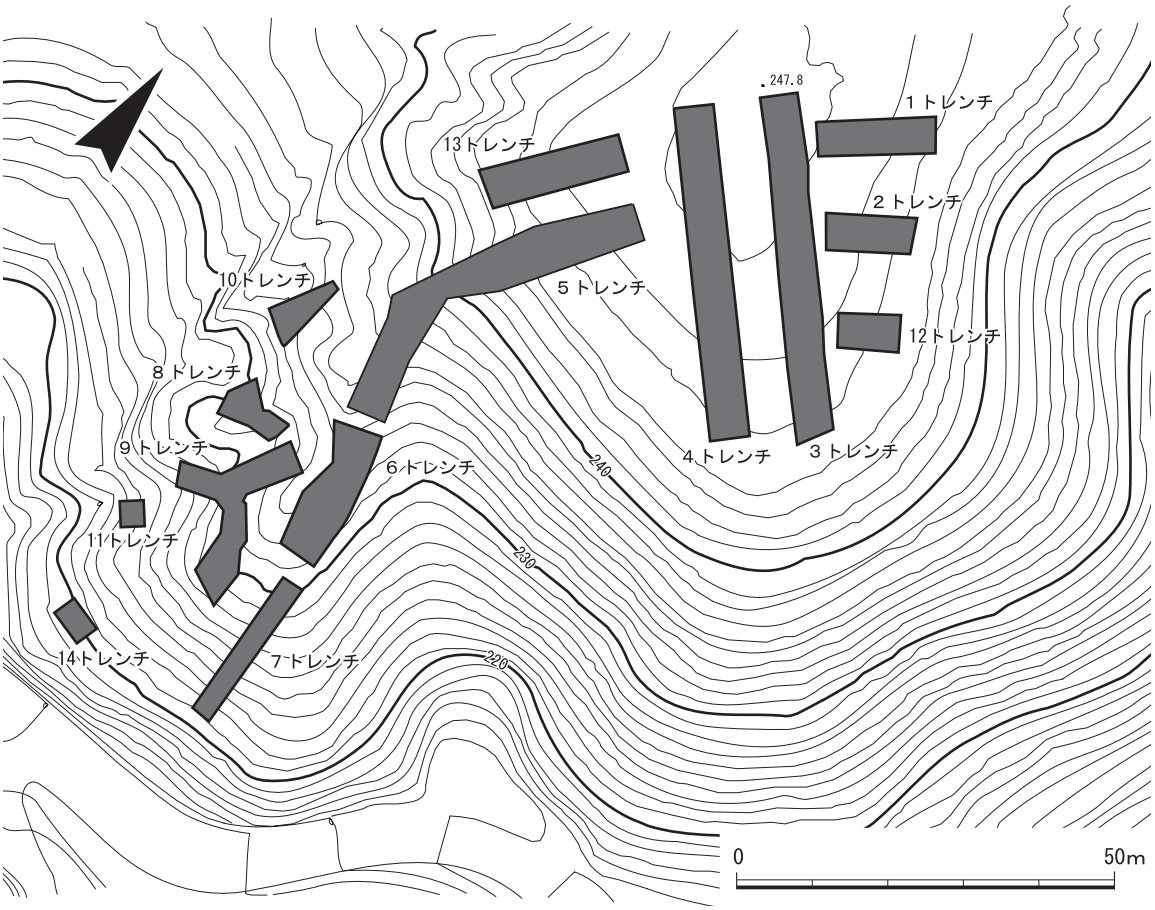
（加藤雅士）

〔6〕禅 定 寺 城 跡 第 3 次

1．は じ め に

禅定寺城跡は、宇治田原町北東部の滋賀県境に近い場所に位置している。遺跡周辺は宇治田原丘陵と信楽山地、ないし宇治田原丘陵と奥山田山地の境となる場所である。地形区分としては遺跡範囲の西半が宇治田原丘陵、東半が山地に該当する。地質としては、大阪層群の禅定寺層・長山層、丹波帯が広がる部分である。遺跡範囲は府道783号の東に面した位置にあるが、今回の調査対象地は、府道783号から禅定寺付近で東に分岐し、禅定寺峠へと延びる道に近い位置である。

禅定寺城跡は、周辺に口城土、奥城土の小字名があり、丘陵上の平坦な地形があることなどから山城跡と考えられていた。しかし京都府教育委員会が2009年から行った中世城館調査では、人工的な切岸は存在せず、丘陵上の平坦面も自然地形であると判断されている(注38)。唯一、平坦面の東側にある段差についてのみ人工的に加工した可能性が指摘されているが、小規模であるため切岸とは判断できないとされている。



第46図　禅定寺城跡調査区配置図

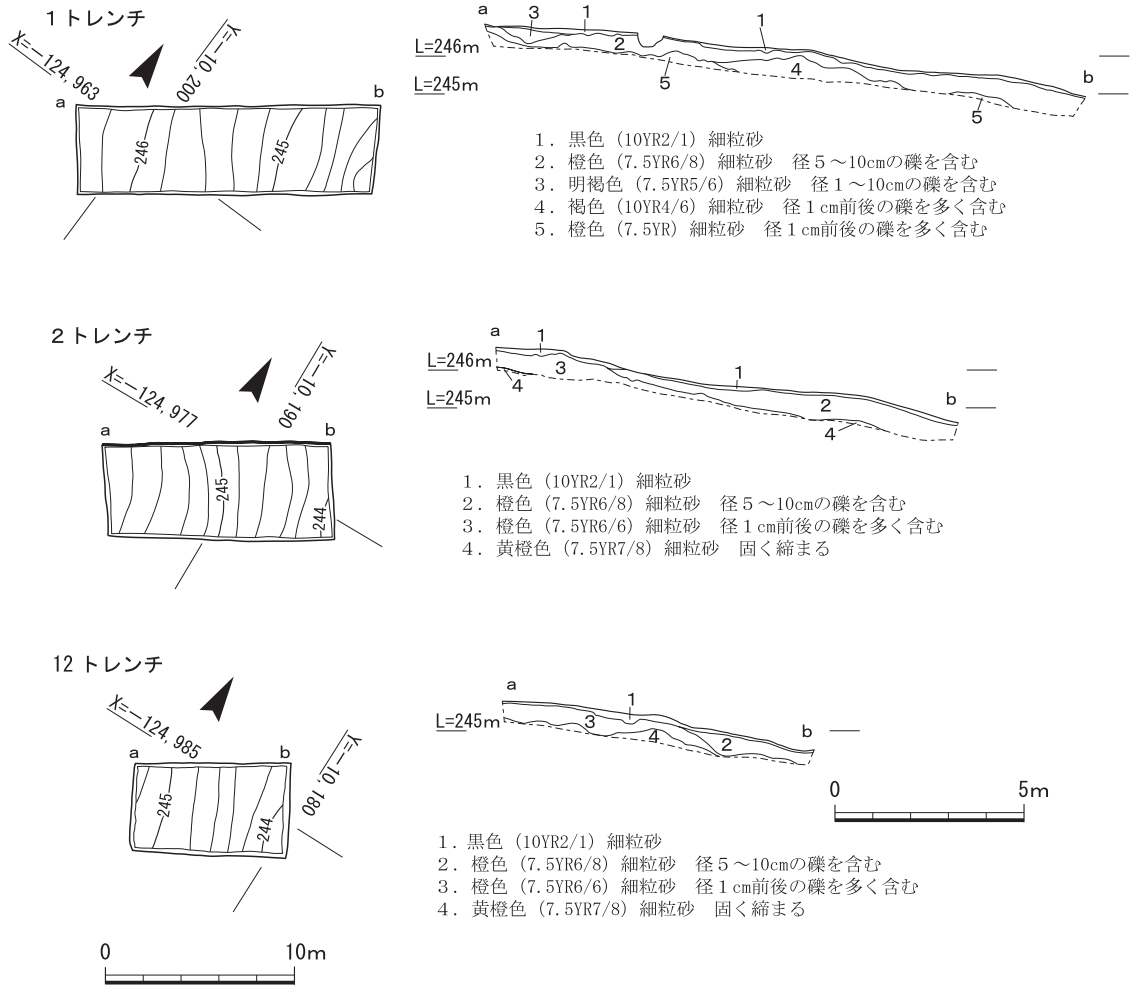
２．調 査 の 概 要

調査地は宇治田原町の北東部に延びる丘陵上に位置する。東側の浅い谷によって北東側の丘陵から切断された地形となっている。禅定寺城跡は南北・東西約1kmの広がりをもち、今回は新名神高速道路にかかる東西約120m、南北約100mの範囲を調査した。丘陵頂部の標高は約248mを測り、この平坦面から標高約220mの裾付近まで14か所のトレンチを設定した。

１トレンチ　平坦面北東の緩斜面に幅５m、長さ16mのトレンチを設定した。表土下には橙色細粒砂・明褐色細粒砂・褐色細粒砂が堆積している。地表下0.5～0.6mにおいて東北方向に緩傾斜する橙色細粒砂の地山面を確認した。円礫が混じる。遺構・遺物は検出できなかった。上記の層は土壌化した大阪層群層と推定される。

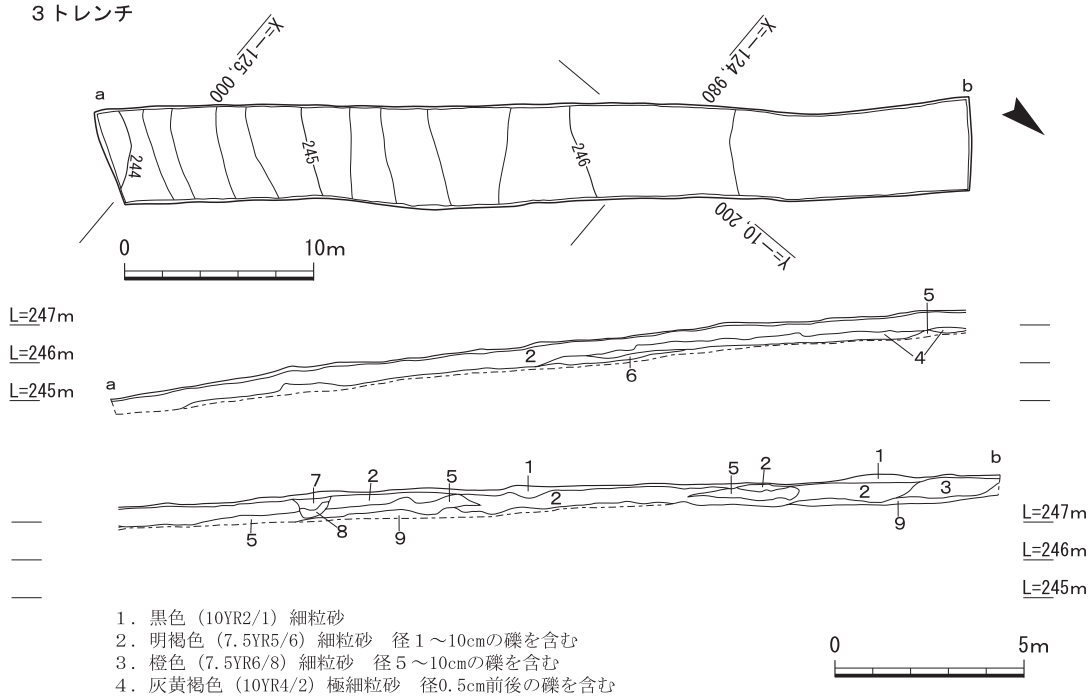
２トレンチ　１トレンチに並行して南東側５mの緩斜面に幅５m、長さ12mのトレンチを設定した。表土は黒色細粒砂であり、その下には橙色細粒砂が堆積する。地表下0.4～0.7mにおいて東北方向に緩傾斜する黄橙色細粒砂の地山面を確認した。遺構・遺物は検出できなかった。上記の層は土壌化した大阪層群層と推定される。

３トレンチ　１・２・12トレンチの0.5～１m南西側に南東方向に幅５m、長さ46mのトレン



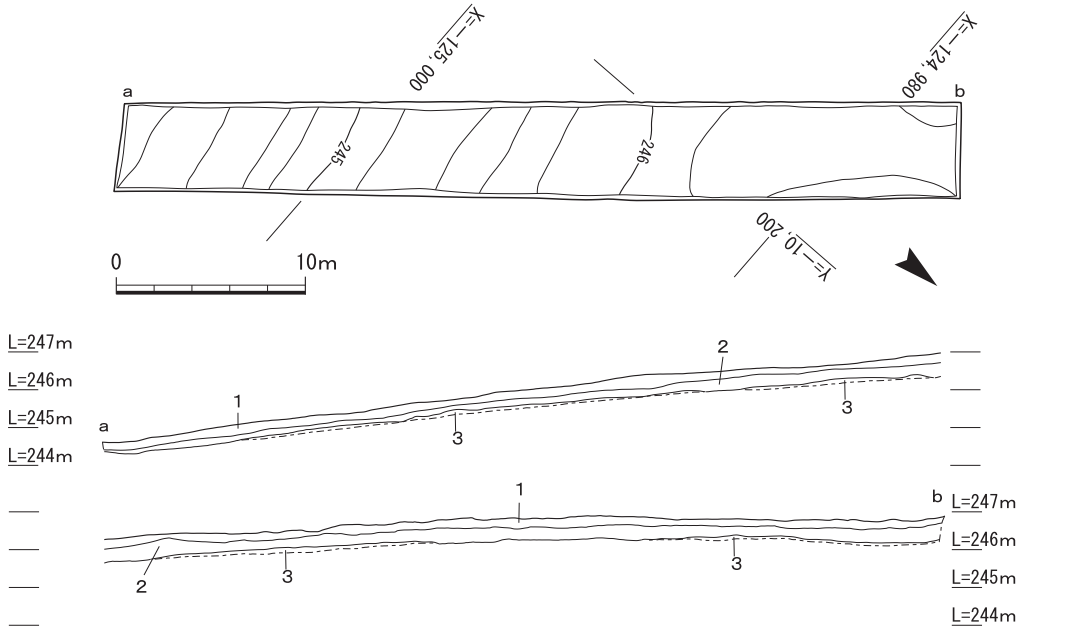
第47図　禅定寺城跡１・２・12トレンチ平面・土層断面図

３トレンチ



1．黒色（10YR2/1）細粒砂
2．明褐色（7.5YR5/6）細粒砂　径１～10cmの礫を含む
3．橙色（7.5YR6/8）細粒砂　径５～10cmの礫を含む
4．灰黄褐色（10YR4/2）極細粒砂　径0.5cm前後の礫を含む
5．灰褐色（7.5YR4/2）砂礫土　径４cm前後の礫が密にまとまる
6．にぶい褐色（7.5YR5/4）砂礫土　径３～10cm前後の礫が密にまとまる
7．褐色（10YR4/6）極細粒砂（10YR4/6）極細粒砂　径１～３cmの礫を含む
8．にぶい黄褐色（10YR4/3）極細粒砂　炭粒、焼土塊を含む
9．にぶい赤褐色（5YR4/4）細粒砂　径５～15cmの礫を含む

４トレンチ



1．褐色（7.5YR4/4）細粒砂　径５～10cmの礫を多く含む
2．褐色（7.5YR4/6）細粒砂　径３～10cmの礫を含む
3．赤褐色（５YR4/8）細粒砂　径１cm前後の礫を多く含み固く締まる

第48図　禅定寺城跡３・４トレンチ平面・土層断面図

チを設定した。表土下には礫を含む明褐色細粒砂や灰褐色礫土などが堆積している。平坦面中央に位置し地表下0.5～0.8mにおいて平坦な地山面が東南部で緩く傾斜するのを確認した。トレンチ中央付近で、北壁断面において表土直下から掘り込まれた幅0.8m、深さ0.6mの土坑を検出した。埋土下層に焼土片･炭粒を包含するが、遺物もなく周辺で営まれてい焚き火等の痕跡と推測する。それ以外の遺構・遺物は検出できなかった。

４トレンチ　３トレンチに平行して南西側に約７ｍ離れて設定した。表土である第１層とその下の第２層は、ともに褐色細粒砂である。平坦面中央に位置し地表下0.6～0.8mにおいて、赤褐色細粒砂が平坦な地山面として東南部で緩く傾斜するのを確認した。遺構・遺物は検出できなかった。

５トレンチ　４トレンチ南西側、約３ｍ離れて南に伸びる尾根筋上に、幅５～７ｍ、長さ54mの「く」の字状に屈曲したトレンチを設定した。表土は黒褐色細粒砂で、その下に褐色細粒砂・明褐色細粒砂などが堆積する。地表下0.2～1.2mにおいて南方向に傾斜する明赤褐色細粒砂土の地山面を確認した。遺構・遺物は検出できなかった。

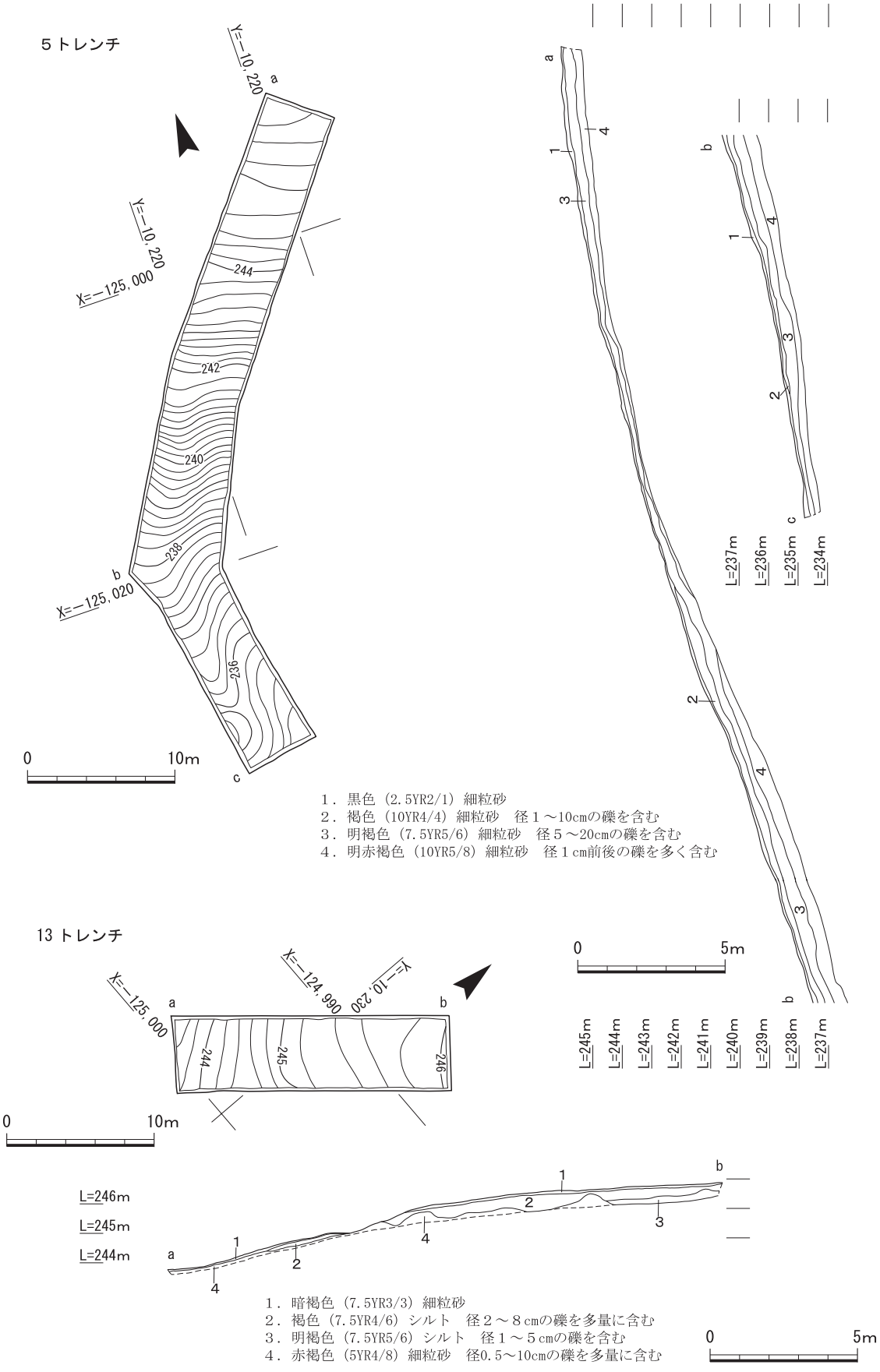
６トレンチ　５トレンチの南側約３ｍに位置する。尾根筋中央部で若干の平坦面があり、郭の存在を想定して、幅５～６ｍ、長さ19mのトレンチを設定した。標高231.2～234.4mにおいて尾根筋中央にあたるやや平坦な部分を調査した。表土は黒赤褐色極細砂土で、その下に明褐色極細砂土・明赤褐色極細砂土の堆積を確認した。南側の高まりに、表土直下で若干の焼土痕跡が認められた。遺物もなく時期・性格等は不明である。その他に遺構・遺物は検出できなかった。

７トレンチ　６トレンチの南側約５ｍに位置する。幅３ｍ、長さ17mのトレンチを設定し、尾根筋下方にあたる斜面部分を調査した。表土は黒褐色細粒砂で、その下で地山と判断した明褐色細粒砂を確認した。地山上で精査を行ったが、遺構・遺物は検出できなかった。

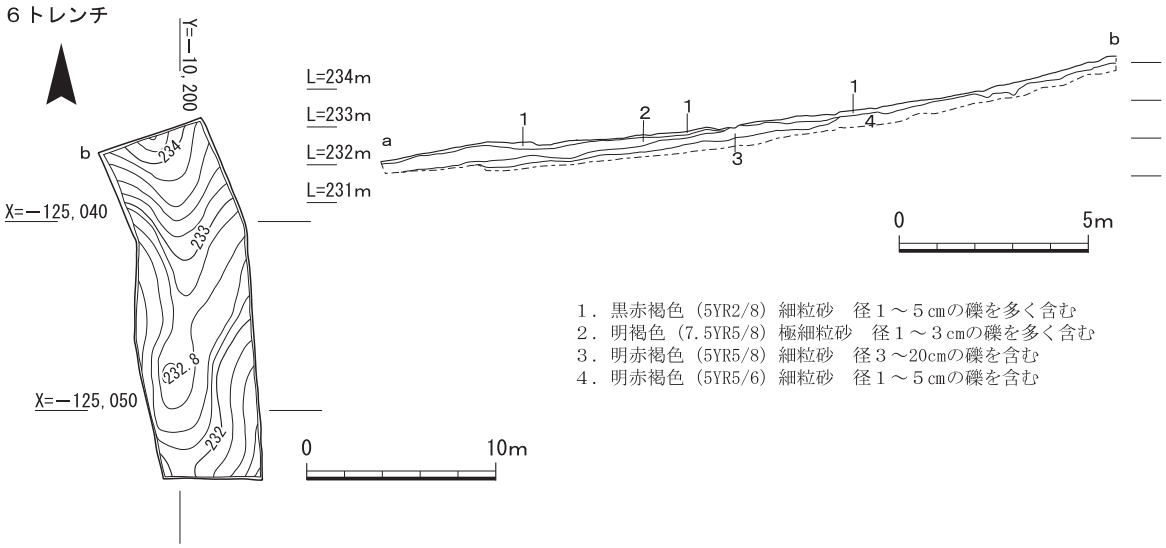
８トレンチ　６トレンチの北側から直角に西に約５ｍに位置する。幅３～７ｍ、長さ９mの西側がやや広がるトレンチを設定した。尾根筋に直角に平坦な窪地があり、郭の存在を想定して調査した。標高228.1～231.8mにおいて、表土である黒色細粒砂土の下に赤褐色細粒砂土、橙色細粒砂土が斜面と平行して堆積するのを確認した。遺構・遺物は検出できなかった。西端部で石塊が露頭するため、断ち割りを入れた結果、地山内に面をもって石塊群が続くのを確認した。

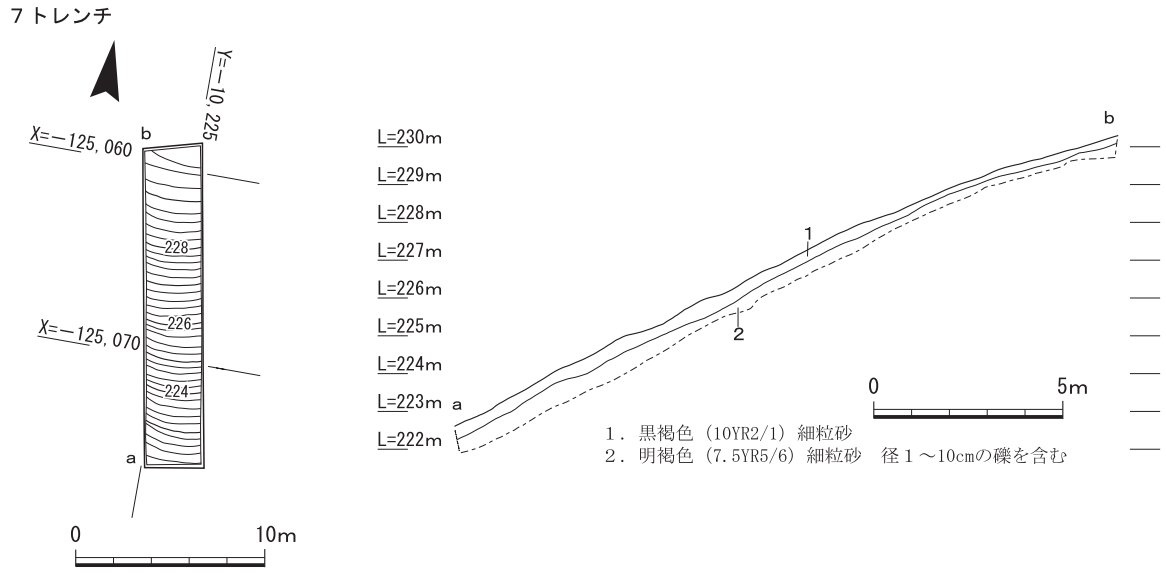
９トレンチ　６トレンチの南西側の窪地および、それに続く谷に「Ｙ」字形のトレンチ設定した。６トレンチからは直角に西に約５ｍに位置する。トレンチの規模は幅３～５m、全長35mに及び、標高223.8～229.1mにおいて地山と判断した赤褐色細粒砂土を確認した。調査区中央部の谷状地形の部分において、水平に連なる石塊群が認められた。山城に敷設された石垣も想定して、地山を断ち割って調査した。その結果、地山層に面的に広がる石塊群が地表面に露頭したものであることを確認した。また、平坦面が傾斜を変換する付近では南北方向に谷を塞ぐ位置で石積を検出した。石積は石塊群とほぼ等しい高さに位置していたために一連のものと想定していたが、石塊群が自然のものと判明した段階で石積も山城とは無関係であると判断した。

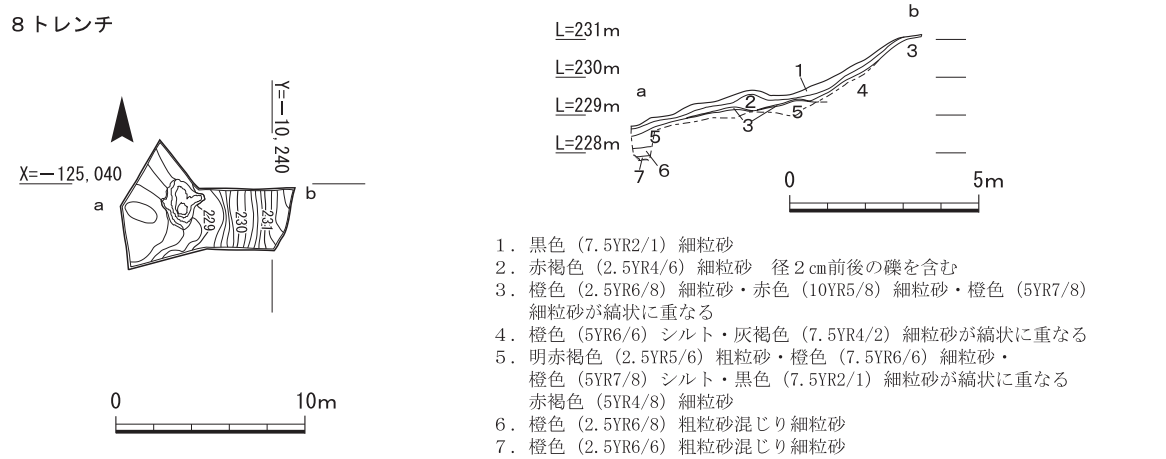
石積は長さ2.4m、幅0.8m、高さ1.0mの規模を測る。「Ｖ」字形に谷を下段一辺0.3～0.5m、中



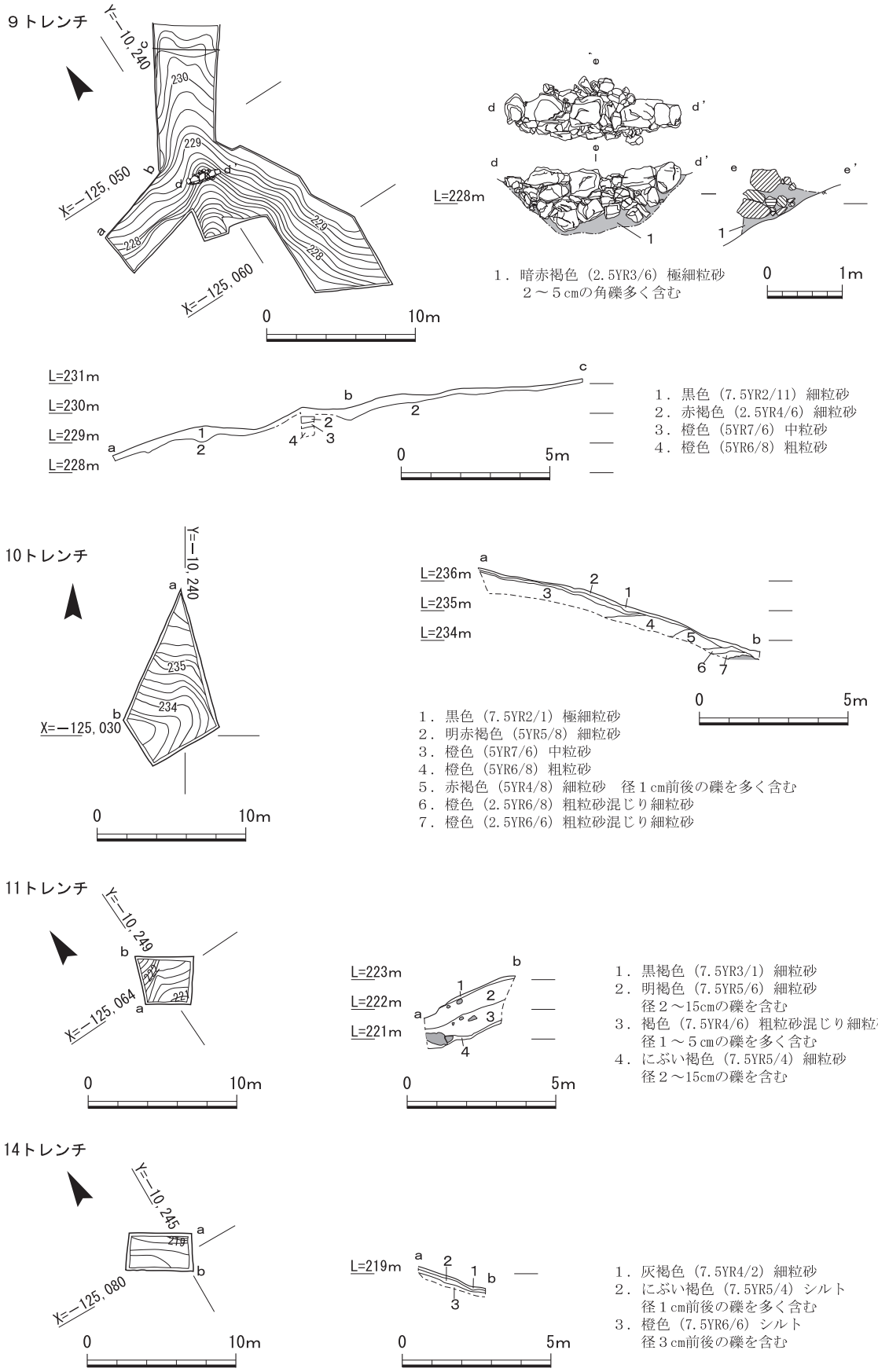
第49図　禅定寺城跡５・13トレンチ平面・土層断面図







第50図　禅定寺城跡６～８トレンチ平面・土層断面図



第51図　禅定寺城跡9～11・14トレンチ平面・土層断面図

段0.2～0.4m、上段0.4～0.7mの石塊で積み上げられていた。遺物がなく時期は不明であるが、治山・治水目的の比較的新しいものと考える。石積以外に遺構・遺物は検出できなかった。

10トレンチ　５トレンチ南側より約３m西側に位置する。尾根筋中央西側に若干の窪地があり郭の存在を想定して調査した。幅５m、最大長10mの歪形のトレンチを地形の形状に合わせて設定した。地表下0.3mにおいて地山と判断した赤褐色細粒砂土の堆積を確認した。遺構・遺物は検出できなかった。

11トレンチ　９トレンチより約７m南西方向に位置する。９トレンチ設定した谷地形の下方にあたる。９トレンチの石積で見られたような石塊が表土上で認められたため、幅３m、長さ４mのトレンチを設定した。地表下0.4～0.8mにおいて上層から明褐色極細砂土、褐色極細砂土、にぶい褐色細粒砂土の堆積を確認した。いずれも直径0.2～0.3mの石塊を含み、谷上部からの流入土である。遺構・遺物は検出できなかった。

12トレンチ　頂部平坦面の２トレンチに平行して約８m南北方向にトレンチを設定した。平坦面縁辺で傾斜が変わる部分である。トレンチの規模は幅５m、長さ８mである。地表下0.4～0.8mにおいて黒色極細砂、橙色細粒砂の堆積を確認した。地山と判断した黄橙色細粒砂上で精査を行ったが、遺構・遺物は検出できなかった。

13トレンチ　４トレンチ北端部から南西方向に約７mに位置する。幅５m、長さ19mのトレンチを設定した。地表下0.2～0.6mにおいて暗褐色細粒砂土、褐色シルト、明褐色シルト、地山と判断した赤褐色細粒砂土を確認した。頂部平坦面の南西端にあたり、斜面に向かって傾斜が変わる部分である。遺構・遺物は検出できなかった。

14トレンチ　９トレンチの東南端より南西に約16mに位置する。丘陵端部のテラス面において、郭の存在を想定して調査した。幅３m、長さ５mのトレンチを設定した。地表下0.3～0.4mにおいて、灰褐色極細砂、にぶい褐色シルトを確認した。地山と判断した橙色シルト上で精査を行ったが、遺構・遺物は検出できなかった。

３．ま と め

丘陵頂部の平坦面での建物跡や竪堀、郭等の有無を確認するため、頂部の平坦面や谷部分・小テラス面にトレンチを設定し、遺構・遺物の検出に努めた。14か所にわたるトレンチ調査を実施したが、遺構や遺物の検出は認められなかった。また、石積を検出したが、共伴する遺物も無く時期は不明である。それ以外に遺構は検出できず、調査トレンチ全域において出土遺物は全く無かった。以上のことから、今回の調査対象地は、山城の範囲に含まれているものの、遺構・遺物はきわめて希薄な場所に相当するものと言える。　（橋本　稔）

注１　国土地理院５万分１地形図「奈良」記載の標高

注２　足利健亮　大明堂　1985

注３　『土地分類基本調査　京都東北部・京都東南部・水口』滋賀県・京都府　1982

注４　脇田浩二・竹内圭史・水野清秀・小松原琢・中野聰志・竹内恵二・田中雄作『京都東南部地域の地質』（地域地質研究報告５万分の１地質図幅）（独）産業総合研究所地質調査総合センター　2013。なお『宇治田原町史』ではこれらを古生代に位置づけている。

注５　重岡卓「田原道をめぐる二つの地域」『賀県文化財保護協会紀要』第９号　1996

注６　波部　健『宇治田原町遺跡地図　町内遺跡詳細分布調査報告書』（京都府宇治田原町埋蔵文化財調査報告書第１集）　宇治田原町教育委員会　1999

注７　波部　健「Ⅴ．出土遺物　２．土器類」『山龍寺跡発掘調査報告書』（京都府宇治田原町埋蔵文化財調査報告書　第２集）　宇治田原町教育委員会　2006

注８　『宇治田原町史』第１巻　宇治田原町史編纂委員会　1980

注９　塚本　吏・伊野近富『禅定寺城跡（付．粽谷古墳）発掘調査報告書』（京都府宇治田原町埋蔵文化財調査報告書第３集）　宇治田原町教育委員会　2017

注10　『京都府中世城館跡調査報告書』第３冊　京都府教育委員会　2014

注11　白川道の国道307号への接続を過去の航空写真で確認すると、1987年撮影のものでは確認できないが、1990年撮影の航空写真では確認できる。

注12　深澤直樹「山田寺下層の土器について」『山田寺発掘調査報告』奈良文化財研究所学報第63冊　奈良文化財研究所　2002

注13　東洋一「木野・幡枝のカワラケ（土師器皿）製作技法の復元的研究」『洛史　研究紀要』第11号（京都市埋蔵文化財研究所設立40周年記念号）　京都市埋蔵文化財研究所　2017

注14　肥前系陶磁器については以下を参考にした。
大橋康二「九州陶磁概論」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会　2000
盛　峰雄「陶器の編年　碗・皿」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会　2000
野上建紀「磁器の編年（色絵以外）　碗・小杯・皿・紅皿・紅猪口」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会　2000
川副麻理子「磁器の編年（色絵以外）仏飯具・水滴・人形・灯火具・緒締玉・戸車」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会　2000
『古伊万里の見方』（シリーズ２成形）　佐賀県立九州陶磁文化館　2005

注15　畑中英二『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版　2003

注16　伊野（1995）、中井（2011）など。
伊野近富「土師器皿」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社　1995
中井淳二「第十章　「規範」としての京都産土師器―分類･編年･製作技術―」『日本中世土師器の研究』中央公論美術出版　2011

注17　平尾政幸「土師器再考」『洛史　研究紀要』第12号　京都市埋蔵文化財研究所2019年

注18　鈴木公雄『銭の考古学』歴史文化ライブラリー140　吉川弘文館　2002

注19　兼康（1985）、野村（1986・1987）、平野（1987）、古泉（2003）など。
兼康保明「要約―塚をめぐる諸問題」『柏木北山塚』水口町文化財調査報告書第２冊　水口町教育委員会　1985
野村幸希「塚」『日本歴史考古学を学ぶ（中）』有斐閣　1986

野村幸希「中近世塚の調査・研究の現状」『月刊考古学ジャーナル』№274(特集　考古学よりみた塚)　ニューサイエンス社　1987
平野榮次「塚の信仰」『月刊考古学ジャーナル』№274(特集　考古学よりみた塚)　ニューサイエンス社　1987
古泉　弘「塚」『日本考古学事典』三省堂　2003

注20　塚の盛土中から銭貨が出土した例として、滋賀県草津市の田白古墳では盛土中から寛永通宝が出土しており、奉賽銭と判断されている(小宮1992)。盛土の下からの出土例としては千葉県市原市域の例があり、大量に出土していることから地鎮と判断されている(牧野2011など)。また千葉県香取市下小野塚群では、詳細な出土位置は不明であるが銭貨が出土したことなどから信仰の塚とされている(香取市2017)。

小宮猛幸「田白古墳(へそ塚)の発掘調査について」『滋賀県文化財だより』№171　(財)滋賀県文化財保護協会　1992
牧野光隆『市原市平野馬頭塚』(市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第20集)　2011
香取市「下小野塚群　発掘された中近世の塚(香取遺産№134)」『広報かとり』№270(平成29年９月号)　2017

注21　奈良県斑鳩町の鹿塚は発掘調査の結果、近世の信仰塚と結論づけられている。その根拠は土人形の出土とともに、灯明皿や燭台の比率が高い点が挙げられている(平田2011)。

平田政彦「鹿塚(02－１次)調査」『斑鳩町内遺跡発掘調査概報　平成14(2002)年度』(斑鳩町文化財調査報告第９集)　斑鳩町教育委員会　2011

注22　鈴木康之「中世土器の象徴性―「かりそめ」の器としてのかわらけ」『日本考古学』第14号　日本考古学会　2002

注23　藤原(1988)など。

藤原良章「中世の食器・考－<かわらけ>ノート」『列島の文化史』５　日本エディタースクール出版部　1988

注24　吉岡康　「〝カワラケ〟小考」『国立歴史民俗博物館研究報告』第74集　1997(「〝カワラケ〟論の周辺」『岩波講座　日本通史』８)

注25　「江戸時代　交通路」『宇治田原町史』第一巻　宇治田原町教育委員会　1980
赤田光男・豊田元彦・西山　克「信楽街道」『京都府の地名』平凡社　1981

注26　乾　幸次「古道とその歴史的景観」『南山城の歴史的景観』古今書院　1987

注27　この欅は昭和34年に天然記念物として浦和市に文化財指定されたが、昭和42年に指定解除され、後に伐採された。

注28　児玉幸多『宿場と街道―五街道入門』東京美術　1986
注29　林　将之『樹皮ハンドブック』文一総合出版　2006
注30　渡辺新一郎『巨樹と樹齢－立ち木を測って年輪を知る樹齢推定法』新風舎　1999
注31　橋口定志「塚」『図説　江戸時代研究事典』江戸遺跡研究会　柏書房　2001
注32　国土交通省５万分の１土地分類基本調査「京都東南部」
注33　波部　健『宇治田原町遺跡地図　町内遺跡詳細分布調査報告書』(京都府宇治田原町埋蔵文化財調査報告書第１集)　宇治田原町教育委員会　1999
注34　村田文夫「発掘調査された炭焼窯の基礎的研究」『物質文化』55　物質文化研究会　1991

注35　注14大橋2000、盛2000。

注36　注９に同じ

注37　佐々木尚子・高原光・湯本貴和「堆積物中の花粉組成からみた京都盆地周辺における「里山」林の成立過程」『地球環境』16-2　国際環境研究協会　2011

注38　中居和志「禅定寺跡」『京都府中世城館跡調査報告書』第３冊山城編１　京都府教育委員会　2014

付編１．岨田遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
伊藤　茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹
小林紘一・Zaur Lomtatidze・小林克也

１．はじめに

京都府宇治田原町に位置する岨田遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料について樹種同定も行っている（樹種同定の項参照）。

２．試料と方法

試料は、炭窯の西半から出土した炭化材1点（試料No.1-1：PLD-32681）、東半から出土した炭化材２点（試料No.2-1：PLD-32682、試料No.2-2：PLD-32683）の、計３点である。いずれも樹種はコナラ属アカガシ亜属で、最終形成年輪が残っていた。発掘調査所見では、炭窯の時期は絞り込めていない。測定試料の情報、調製データは表１のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

表１　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-32681	遺構：炭窯 位置：西半 試料 No.1-1	種類：炭化材（コナラ属アカガシ亜属） 試料の性状：最終形成年輪 器種：炭製品 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-32682	遺構：炭窯 位置：東半 試料 No.2-1	種類：炭化材（コナラ属アカガシ亜属） 試料の性状：最終形成年輪 器種：炭製品 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-32683	遺構：炭窯 位置：東半 試料 No.2-2	種類：炭化材（コナラ属アカガシ亜属） 試料の性状：最終形成年輪 器種：炭製品 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

３．結果

表２に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代、暦年較正結果を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて

暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い（^{14}Cの半減

表２　放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

測定番号	δ ^{13}C（‰）	暦年較正用年代（yrBP ± 1 σ）	^{14}C 年代（yrBP ± 1 σ）	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
PLD-32681 試料 No.1-1 炭窯西半	-24.47 ± 0.16	906 ± 18	905 ± 20	1049-1085 cal AD（43.0%） 1124-1137 cal AD（11.8%） 1150-1162 cal AD（13.4%）	1040-1109 cal AD（54.7%） 1116-1185 cal AD（40.7%）
PLD-32682 試料 No.2-1 炭窯東半	-26.38 ± 0.17	897 ± 18	895 ± 20	1050-1084 cal AD（38.7%） 1125-1136 cal AD（ 8.4%） 1151-1169 cal AD（21.1%）	1044-1098 cal AD（44.9%） 1119-1207 cal AD（50.5%）
PLD-32683 試料 No.2-2 炭窯東半	-25.90 ± 0.28	910 ± 21	910 ± 20	1047-1090 cal AD（41.6%） 1122-1139 cal AD（14.7%） 1148-1162 cal AD（11.8%）	1036-1184 cal AD（95.4%）

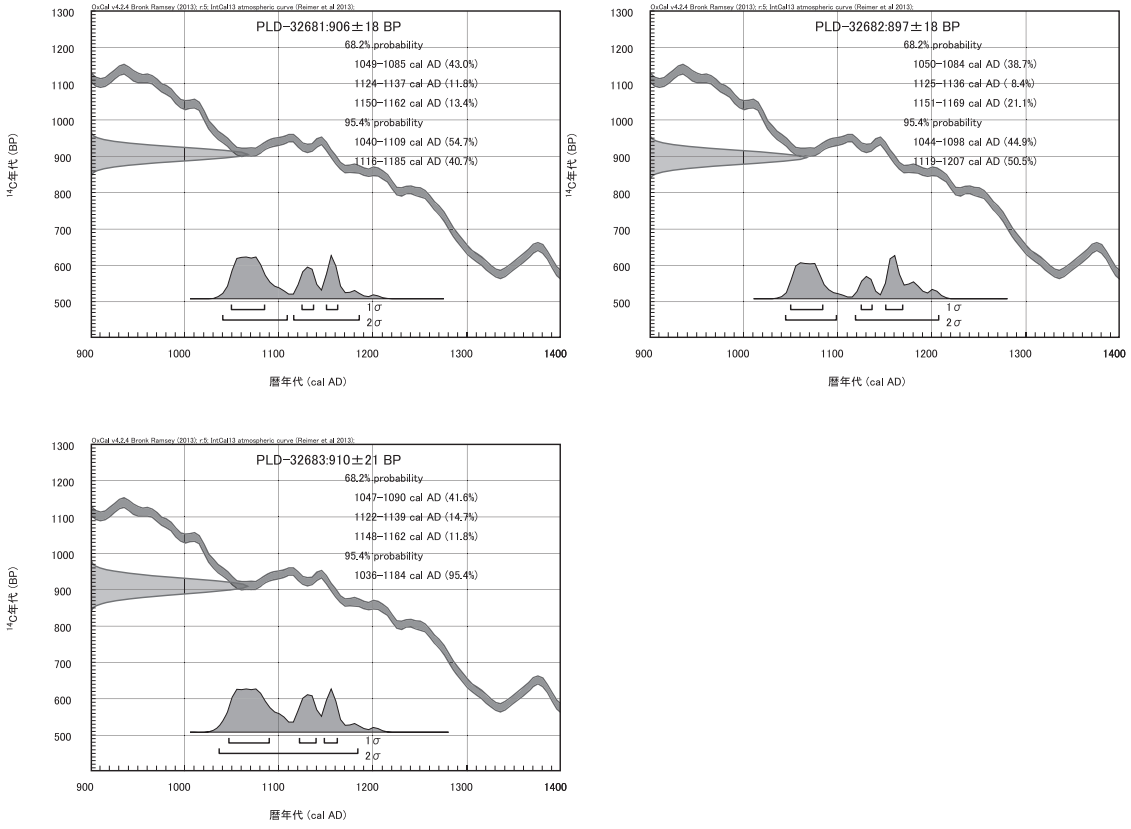


図１　暦年校正結果

期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.2（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

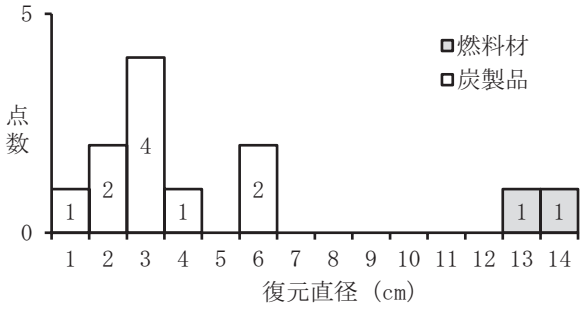


図１　復元直径分布

４．考 察

以下、2σ暦年代範囲（確率95.4%）に着目して結果を整理する。

炭窯西半の試料No.1-1（PLD-32681）は1040-1109 cal AD（54.7%）および1116-1185 cal AD（40.7%）、炭窯東半の試料No.2-2（PLD-32863）は1036-1184 cal AD（95.4%）で、ともに11世紀前半～12世紀後半の暦年代を示した。これは、平安時代中期～後期に相当する。また、炭窯東半の試料No.2-1（PLD-32862）は1044-1098 cal AD（44.9%）および1119-1207 cal AD（50.5%）で、11世紀中頃～13世紀初頭の暦年代を示した。これは、平安時代中期～鎌倉時代に相当する。なお、いずれの試料も最終形成年輪が残っており、測定結果は試料の枯死もしくは伐採年代を示す。

参考文献

Bronk Ramsey, C.（2009）Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51（1）, 337-360.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C年代」：3-20，日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.（2013）IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55（4）, 1869-1887.

付編２．岨田遺跡出土炭化材の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

１．はじめに

京都府宇治田原町の岨田遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行なった。

２．試料と方法

試料は、炭窯から採取された炭化材３袋である。西半の炭化材の袋から５点、東半の炭化材の袋から５点、焚口の炭化材の袋から２点を抽出し、計12点について同定を行った。試料の時期については、西半から１点、東半から２点の放射性炭素年代測定を行った結果、平安時代中頃～鎌倉時代におさまる暦年代を示した。

各試料について、復元直径と残存半径、残存年輪数の計測を行なった。復元直径は、１cm刻みの同心円に試料の最外部または年輪のカーブを沿わせ，復元を行なった。残存半径は試料に残存する半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を数えた。

樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製　JSM-5900LV）にて検鏡および写真撮影を行なった。

３．結果

同定の結果、試料はすべて広葉樹のコナラ属アカガシ亜属（以下、アカガシ亜属と呼ぶ）であった。年輪の計測では、残存半径1.0cm内に９年輪の試料No.2-1のように年輪がやや詰まった試料もみられたが、多くの試料は残存半径2.0cm内に５年輪の試料No.2-5のように年輪幅が比較的広かった。同定結果を表１に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科　図版1　1a-1c（No.1-1）、2a-2c（No.2-1）、3a-3c（No.2-2）

厚壁で丸い大型の道管が、放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬かつ強靭で、耐水性があり、切削加工は困難である。

4．考 察

炭窯の炭化材試料12点は、いずれもアカガシ亜属であった。炭窯の焼成室の西半および東半から出土した炭化材は、製炭を行なった際の製品と考えられ、焚口から出土した炭化材は燃料材と考えられる。アカガシ亜属はとても堅硬な樹種で、火持ちが良く、薪炭材に適した樹種である（伊東ほか，2011）。薪炭材に適した樹種が選択的に利用されたと考えられる。

試料12点の復元直径の分布をみると、炭製品とみられる10点はすべて復元直径６cm以内で、燃料材は復元直径13cmおよび14cmである（図１）。いずれも同じアカガシ亜属であるが、小径木を炭製品に、大径木を燃料材に利用していた可能性がある。

また、燃料材で半割の試料は直径１～1.5cmで、みかん割り状の試料は1.5～3.0cmである。直径の大きい燃料材も、みかん割り状である。焼成中または焼成後に割れた可能性もあるが、炭製品も燃料材も、材の直径に合わせた割り方で大きさを揃えて使用されていた可能性がある。

引用・参考文献

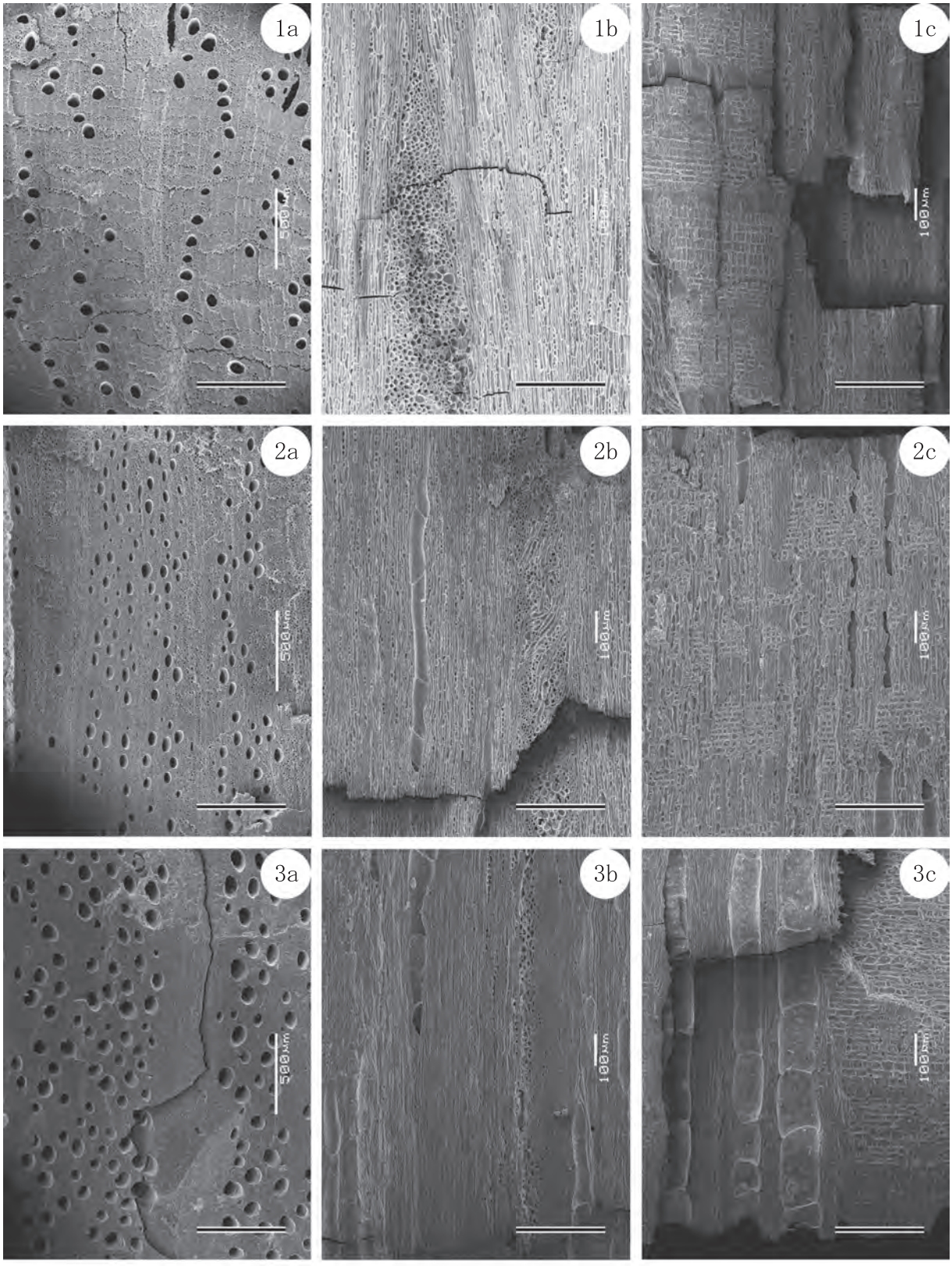
平井信二（1996）木の大百科－解説編－．642p，朝倉書房.

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌，238p，海青社.

伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学―出土木製品用材データベース―．449p，海青社.

表１　岨田遺跡出土炭化材の樹種同定結果

試料 No.	遺構	部位	種類	樹種	木取り	残存半径（cm）	残存年輪数	復元直径（cm）	年代測定番号
1-1	炭窯	西半	炭製品	コナラ属アカガシ亜属	みかん割り	1.5	9	3.0	PLD-32681
1-2	炭窯	西半	炭製品	コナラ属アカガシ亜属	半割	0.5	3	1.0	
1-3	炭窯	西半	炭製品	コナラ属アカガシ亜属	半割	1.5	5	3.0	
1-4	炭窯	西半	炭製品	コナラ属アカガシ亜属	みかん割り	1.5	5	3.0	
1-5	炭窯	西半	炭製品	コナラ属アカガシ亜属	みかん割り	1.5	5	3.0	
2-1	炭窯	東半	炭製品	コナラ属アカガシ亜属	半割	1.0	9	2.0	PLD-32682
2-2	炭窯	東半	炭製品	コナラ属アカガシ亜属	みかん割り	3.0	10	6.0	PLD-32683
2-3	炭窯	東半	炭製品	コナラ属アカガシ亜属	みかん割り	1.9	7	6.0	
2-4	炭窯	東半	炭製品	コナラ属アカガシ亜属	半割	1.0	3	2.0	
2-5	炭窯	東半	炭製品	コナラ属アカガシ亜属	みかん割り	2.0	5	4.0	
3-1	炭窯	焚口	燃料材	コナラ属アカガシ亜属	みかん割り	4.5	15	14.0	
3-2	炭窯	焚口	燃料材	コナラ属アカガシ亜属	みかん割り	5.4	23	13.0	



図版1　岨田遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c.コナラ属アカガシ亜属(No.1-1)、2a-2c.コナラ属アカガシ亜属(No.2-1)、3a-3c.コナラ属アカガシ亜属(No.2-2)

a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

付表　出土土器観察表

保安塚

報告番号	調査区	小グリッド	種類	器形	口径	器高	底径	残存率	素地	釉薬	備考
1	1 区	—	土師器	皿	6.5	1.1	—	4/12	にぶい黄橙（10YR7/4）	—	
2	1 区	—	土師器	皿	6.9 ～ 7.5	1.8	—	完形	橙（7.5YR7/6）	—	
3	1 区	—	土師器	皿	6.7	1.2	—	完形	にぶい黄橙（10YR7/4）	—	
4	1 区	—	土師器	皿	6.8	1.3	—	1/12	にぶい黄橙（10YR7/3）	—	灯芯痕あり
5	1 区	—	土師器	皿	9.1	1.8	—	6/12	黄橙（10YR8/6）	—	胎土非常に精良
6	1 区	—	土師器	皿	9.3	1.9	—	10/12	にぶい黄橙（10YR7/4）	—	
7	1 区	—	土師器	皿	9.3	2.4	—	8/12	橙（7.5YR6/6）	—	
8	1 区	—	土師器	皿	9.4	(1.8)	—	6/12	橙（7.5YR6/6）	—	
9	1 区	—	土師器	皿	9.7	(2.0)	—	7/12	にぶい褐（7.5YR5/3）	—	
10	1 区	—	土師器	皿	10.9	1.8	—	11/12	橙（5YR6/6）	—	
11	1 区	—	土師器	皿	10.6	1.9	—	9/12	橙（7.5YR6/6）	—	内面に凹線、２の字ナデ
12	1 区	—	土師器	皿	10.9	2.0	—	11/12	橙（5 Y R 7/6）	—	内面に凹線
13	1 区	—	土師器	皿	9.8	(1.9)	—	3/12	橙（7.5YR7/6）	—	内面圏線
14	1 区	—	土師器	皿	—	(2.0)	—	2/12	橙（7.5YR7/6）	—	
15	1 区	—	土師器	皿	—	—	—	1/12	橙（5YR6/6）	—	
16	1 区	—	土師器	皿	—	—	—	0.5/12	にぶい黄橙（10YR7/4）	—	
17	1 区	—	土師器	皿	9.5	(1.8)	—	5/12	橙（5YR6/6）	—	
18	1 区	—	土師器	皿	—	(1.5)	—	5/12	にぶい黄橙（10YR7/4）	—	内面弱い圏線
19	1 区	—	土師器	皿	—	(1.4)	—	2/12	橙（7.5YR6/6）	—	
20	1 区	—	土師器	皿	—	—	—	0.5/12	橙（7.5YR6/6）	—	
21	1 区	—	土師器	皿	—	—	—	1/12	明黄褐（10YR7/6）	—	
22	1 区	—	磁器	皿か		(1.5)	5.1	3/12	灰黄褐（10YR6/2）	灰黄褐（10YR6/2）	肥前系、高台内に銘
23	1 区	—	磁器	椀	—	(2.5)	(4.4)	2/12	白 N（9/0）	白 N（9/0）	
24	1 区	—	磁器	猪口	6.6	(5.5)	—	4/12	白 N（9/0）	白（N9/0）	瀬戸、銘「□屋」
25	1 区	—	白磁	仏飯具	—	(3.4)	—	—	白 N（9/0）	明緑灰（7.5GY8/1）	
26	1 区	—	陶器	擂鉢	—	—	—	—	にぶい黄橙（10YR7/4）	暗赤褐（7.5R3/3）	信楽
27	1 区	—	陶器	甕類・土製円盤	—	—	—	—	灰黄褐（10YR6/2）	にぶい赤褐（5YR3/3）	
28	1 区	—	寛永通宝	—	—	—	—	—	—	—	
29	1 区	—	銭貨	—	—	—	—	—	—	—	鉄銭

長井野塚

報告番号	調査区	小グリッド	種類	器形	口径	器高	底径	残存率	素地	釉薬	備考
30	1 区	u17	土師器	皿	—	0.8	—	1/12	橙（5YR7/8）	—	
31	1 区	t15	土師器	皿	—	(1.6)	—	0.5/12	橙（7.5YR7/6）	—	
32	1 区	s15	磁器	碗	—	2.6	—	1/12	白 N（9/0）	白 N（9/0）	
33	1 区	t15	磁器	碗か	—	(1.8)	4.0	—	灰白（5Y8/1）	灰白（5Y8/1）	

岨田遺跡

報告番号	調査区	小グリッド	種類	器形	口径	器高	底径	残存率	素地	釉薬	備考
34	6 区	—	陶器	灯明受皿	11.6	(1.8)	—	3/12	浅黄（2.5Y7/4）	灰白（2.5Y8/2）	
35	14 区	—	須恵器	鉢	—	(3.6)	(9.6)	—	灰白（2.5Y7/1）	—	
36	19 区	—	瓦	丸瓦	—	—	—	—	灰白（5Y8/1）	—	凹面：布目・模骨、凸面：縄目
37	20 区	t20	須恵器	杯 A	—	(1.6)	(9.8)	—	灰白（10YR7/1）	—	
38	20 区	w23	瓦	丸瓦	—	—	—	—	灰（7.5Y5/1）	—	凹面：布目、凸面：ハケ目
39	20 区	w23	瓦	丸瓦	—	—	—	—	にぶい黄橙（10YR7/3）	—	凹面：布目、凸面：ハケ目
40	20 区	x23	瓦	平瓦	—	—	—	—	浅黄橙（10YR8/3）	—	凹面：布目、凸面：縄目
41	20 区	w23	瓦	平瓦	—	—	—	—	褐灰（10YR6/1）	—	凹面：布目、凸面：縄目
42	20 区	w23	瓦	平瓦	—	—	—	—	灰白（10YR7/1）	—	凹面：布目、凸面：縄目
43	20 区	w21・22	瓦	平瓦	—	—	—	—	浅黄橙（10YR8/3）	—	凹面：布目、凸面：縄目
44	20 区	x23・24	瓦	平瓦	—	—	—	—	浅黄橙（10YR8/3）	—	凹面：布目、凸面：縄目
45	20 区	表採	瓦	平瓦	—	—	—	—	にぶい橙（7.5YR7/3）	—	凹面：布目、凸面：縄目
46	20 区	表採	瓦	平瓦	—	—	—	—	褐灰（10YR6/1）	—	凹面：布目、凸面：縄目

砂川古墳

報告番号	調査区	小グリッド	種類	器形	口径	器高	底径	残存率	素地	釉薬	備考
47	—	a3	陶器	皿	—	(2.6)	—	1/12 以下	にぶい黄橙（10YR7/4）	オリーブ灰（2.5GY6/1）	唐津
48	—	y3	陶器	不明	—	(0.6)	—	—	灰白（5Y7/2）	にぶい黄（2.5Y6/3）	肥前か
49	—	a2	陶器	皿	—	(1.6)	5.2	—	にぶい黄橙（10YR7/3）	緑灰（7.5GY6/1）	唐津
50	—	b1・c3	陶器	壺か甕	—	(5.2)	—	—	浅黄（2.5Y7/3）	にぶい橙（7.5YR6/4）	信楽

図　　版

図版第１　満願寺跡第２次



(1) 1 トレンチ全景(南から)



(2) 1 トレンチ遺構集中箇所全景(北東から)

図版第２　満願寺跡第２次



(1) １トレンチ礎石建物ＳＢ02全景(南から)



(2) １トレンチ礎石建物ＳＢ02復元全景(南から)

図版第３　満願寺跡第２次



(1) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石１（南から）



(2) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石２（南から）



(3) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石３（南から）



(4) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石４（南から）



(5) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石５（南から）



(6) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石６（南から）



(7) １トレンチ礎石建物ＳＢ02根石（南から）



(8) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石９（南から）

図版第４　満願寺跡第２次



(1) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石10(南から)



(2) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石11(南から)



(3) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石13(南から)



(4) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石14(南から)



(5) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石15・16(南から)



(6) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石17(南から)



(7) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石18(南から)



(8) １トレンチ礎石建物ＳＢ02土師器出土状況(南東から)

図版第５　満願寺跡第２次



(1) １トレンチ素掘り溝ＳＤ13全景
（南西から）



(2) １トレンチ鉄製品出土状況
（南から）



(3) １トレンチ礎石建物古銭
出土状況（北西から）



(1) １トレンチ礎石建物ＳＢ15全景(南から)



(2) １トレンチ礎石建物ＳＢ15復元全景(南から)


(1) 1トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石115(南から)


(2) 1トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石116(南から)


(3) 1トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石119(南から)


(4) 1トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石23(北から)


(5) 1トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石24(西から)


(6) 1トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石25(北から)


(7) 1トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石26(北から)


(8) 1トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石27(南から)


(1) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石28(南から)


(2) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石29(南から)


(3) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石30(南から)


(4) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石31(南から)


(5) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石32(南から)


(6) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石33(南から)


(7) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石35(南から)


(8) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石36(南から)


(1) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石37(南から)


(2) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石38(南から)


(3) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石39(南から)


(4) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石40(南から)


(5) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石42(南から)


(6) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石43(南から)


(7) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石44(南から)


(8) １トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石45(南から)


(1) 1 トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石46(南から)


(2) 1 トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石47(南から)


(3) 1 トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石48(南から)


(4) 1 トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石51(南から)


(5) 1 トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石52(南から)


(6) 1 トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石124(南から)


(7) 1 トレンチ礎石建物ＳＢ02礎石125(南から)



(1) 1 トレンチ石組み溝 S D01全景(東から)



(2) 1 トレンチ石組み溝 S D01全景(南西から)

図版第 12　満願寺跡第２次



(1) １トレンチ石組み溝ＳＤ01
検出状況(西から)



(2) １トレンチ石組み溝ＳＤ01
土層断面(西から)



(3) １トレンチ石組み溝ＳＤ01
遺物出土状況(南東から)

図版第 13　満願寺跡第２次



(1) 1 トレンチ東拡張区石組み溝
ＳＤ01全景（南西から）



(2) 1トレンチ西拡張区石組み溝
ＳＤ01完掘状況（東から）



(3) 1トレンチ東拡張区土坑群
完掘状況（南西から）



(1) １トレンチ礎石建物ＳＢ02全景(南東から)



(2) １トレンチ礎石建物ＳＢ02復元全景(南から)


(1) 1 トレンチ礎石建物ＳＢ03礎石57(南から)

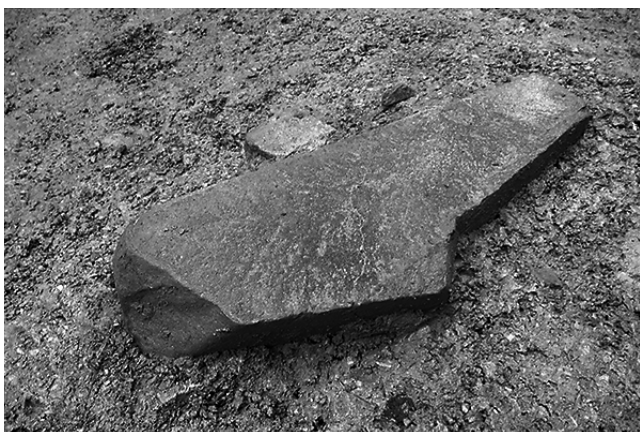

(2) 1 トレンチ礎石建物ＳＢ03礎石58(南から)


(3) 1 トレンチ礎石建物ＳＢ03礎石59(南から)


(4) 1 トレンチ礎石建物ＳＢ03礎石60(南から)


(5) 1 トレンチ礎石建物ＳＢ03礎石61(南から)


(6) 1 トレンチ礎石建物ＳＢ03礎石75(南から)


(7) 1 トレンチ礎石建物ＳＢ03礎石62(南東から)


(8) 1 トレンチ礎石建物ＳＢ03根石(南西から)


(1) 1 トレンチ礎石建物ＳＢ03礎石63(南から)


(2) 1 トレンチ礎石建物ＳＢ03礎石65(北から)


(3) 1 トレンチ礎石建物ＳＢ03礎石66(南から)


(4) 1 トレンチ礎石建物ＳＢ03礎石67(南から)


(5) 1 トレンチ礎石建物ＳＢ03礎石68(南から)


(6) 1 トレンチ礎石建物ＳＢ03礎石69(南から)


(7) 1 トレンチ炭化物層検出状況(南東から)


(8) 1 トレンチ炭化物層土層断面(西から)



(1) １トレンチ土坑ＳＫ20
遺物出土状況(南から)



(2) １トレンチ土坑ＳＫ28
完掘状況(北東から)



(3) １トレンチ瓦器椀出土状況
(南から)



(1) １トレンチ礎石建物ＳＢ22全景(南から)



(2) １トレンチ溝ＳＤ21全景(南東から)


(1) 1トレンチ礎石建物ＳＢ22礎石80・81(南から)


(2) 1トレンチ礎石建物ＳＢ22礎石83(南から)


(3) 1トレンチ礎石建物ＳＢ22礎石84・85(南から)


(4) 1トレンチ礎石建物ＳＢ22礎石94(西から)


(5) 1トレンチ礎石建物ＳＢ22礎石96(南から)


(6) 1トレンチ礎石建物ＳＢ22礎石99(南から)


(7) 1トレンチ礎石建物ＳＢ22礎石100(南から)



(1) 1 トレンチ溝ＳＤ21
土層断面(東から)



(2) 1 トレンチ土坑ＳＫ50・埋甕
ＳＸ51遺物出土状況(南から)



(3) 1 トレンチ土坑ＳＫ50
遺物出土状況(南から)



(1) １トレンチ埋甕ＳＸ51
土層断面(南から)



(2) １トレンチ埋甕ＳＸ51
内容遺物除去状況(南から)



(3) １トレンチ埋甕ＳＸ51
埋甕除去状況(南から)

図版第 22　満願寺跡第 2 次



(1) 1 トレンチ土層断面 1
（西から）



(2) 1 トレンチ土層断面 2
（北西から）



(3) 1 トレンチ土層断面 3
（南西から）



(1) 1 トレンチ土層断面 4 (西から)



(2) 1 トレンチ土層断面 5 (北から)

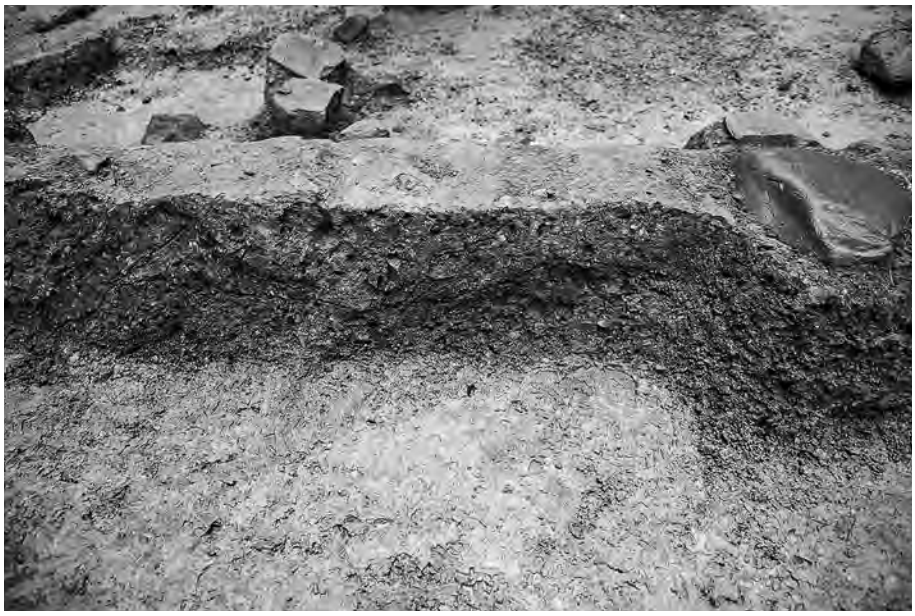


(3) 1 トレンチ内南北土層断面 1
(南から)

図版第 24　満願寺跡第２次



(1) １トレンチ内南北土層断面２（南から）



(2) １トレンチ内東西土層断面１（南から）



(3) １トレンチ内東西土層断面２（南から）

図版第 25　満願寺跡第 2 次



(1) 1 トレンチ内東西土層断面 3
（南から）



(2) 1 トレンチ東拡張区内
東西土層断面（南から）



(3) 1 トレンチ西拡張区内
東西土層断面（南から）

図版第 26　満願寺跡第 2 次

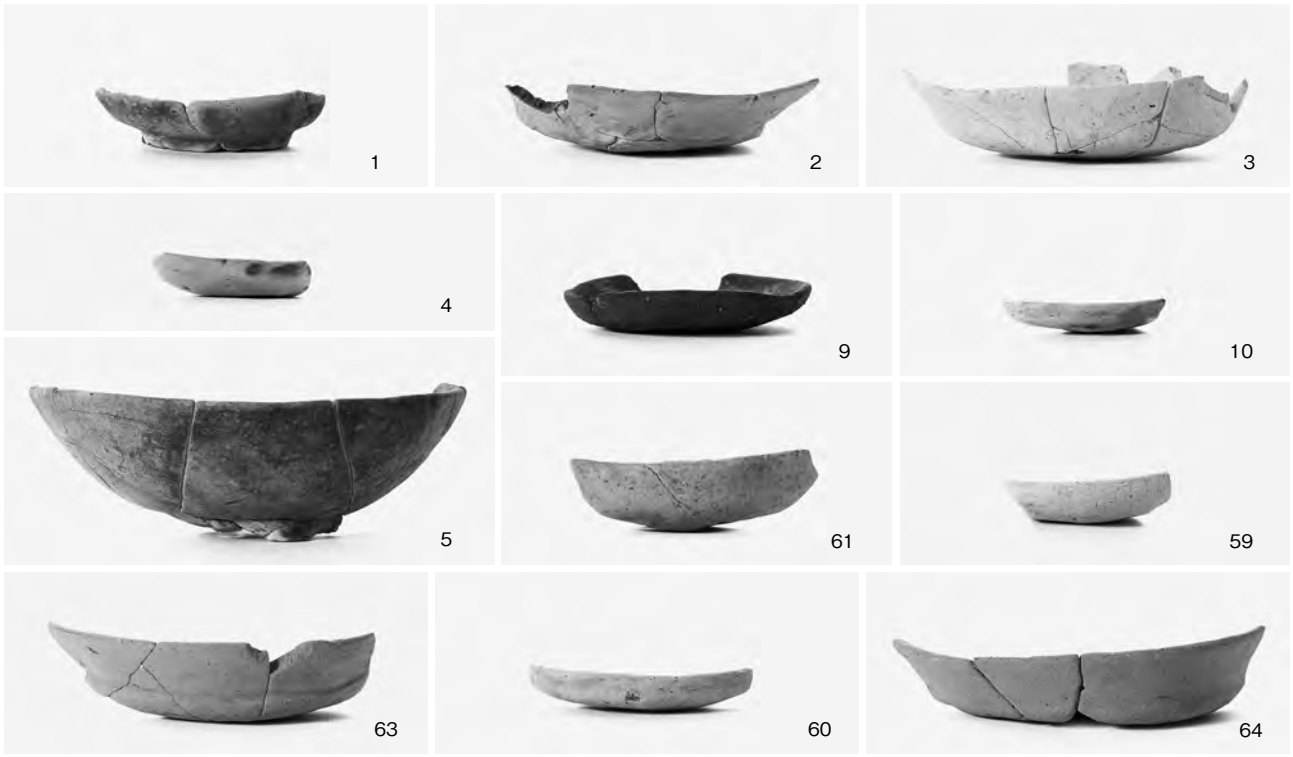


(1) 1 トレンチ東西拡張区全景(南西から)

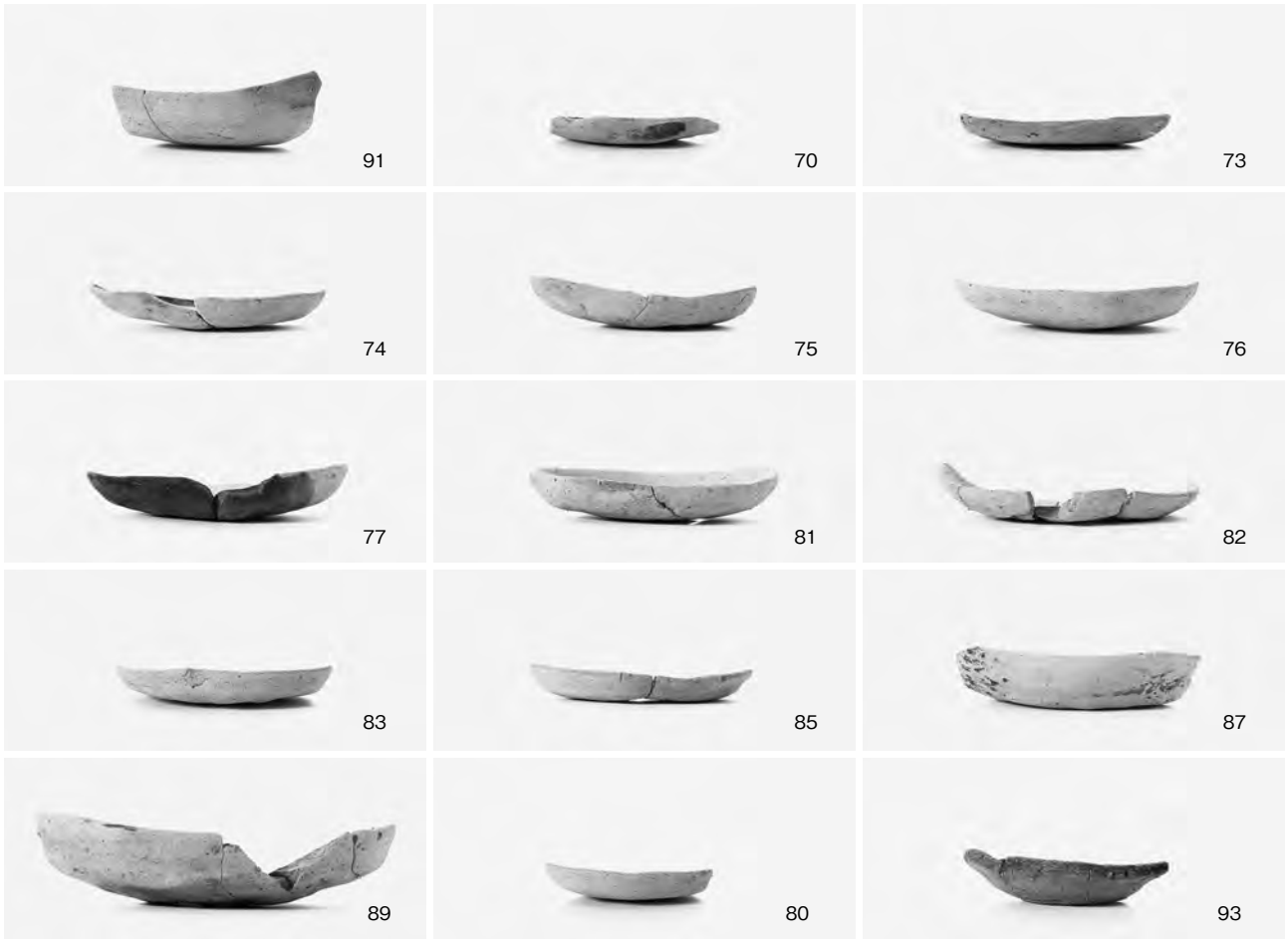


(2) 2 トレンチ全景(北西から)

図版第 27　満願寺跡第 2 次



(1)溝ＳＤ01・礎石建物ＳＢ03・土坑ＳＫ24・25出土遺物



(2)土坑ＳＫ21出土遺物

図版第 28　満願寺跡第 2 次



97



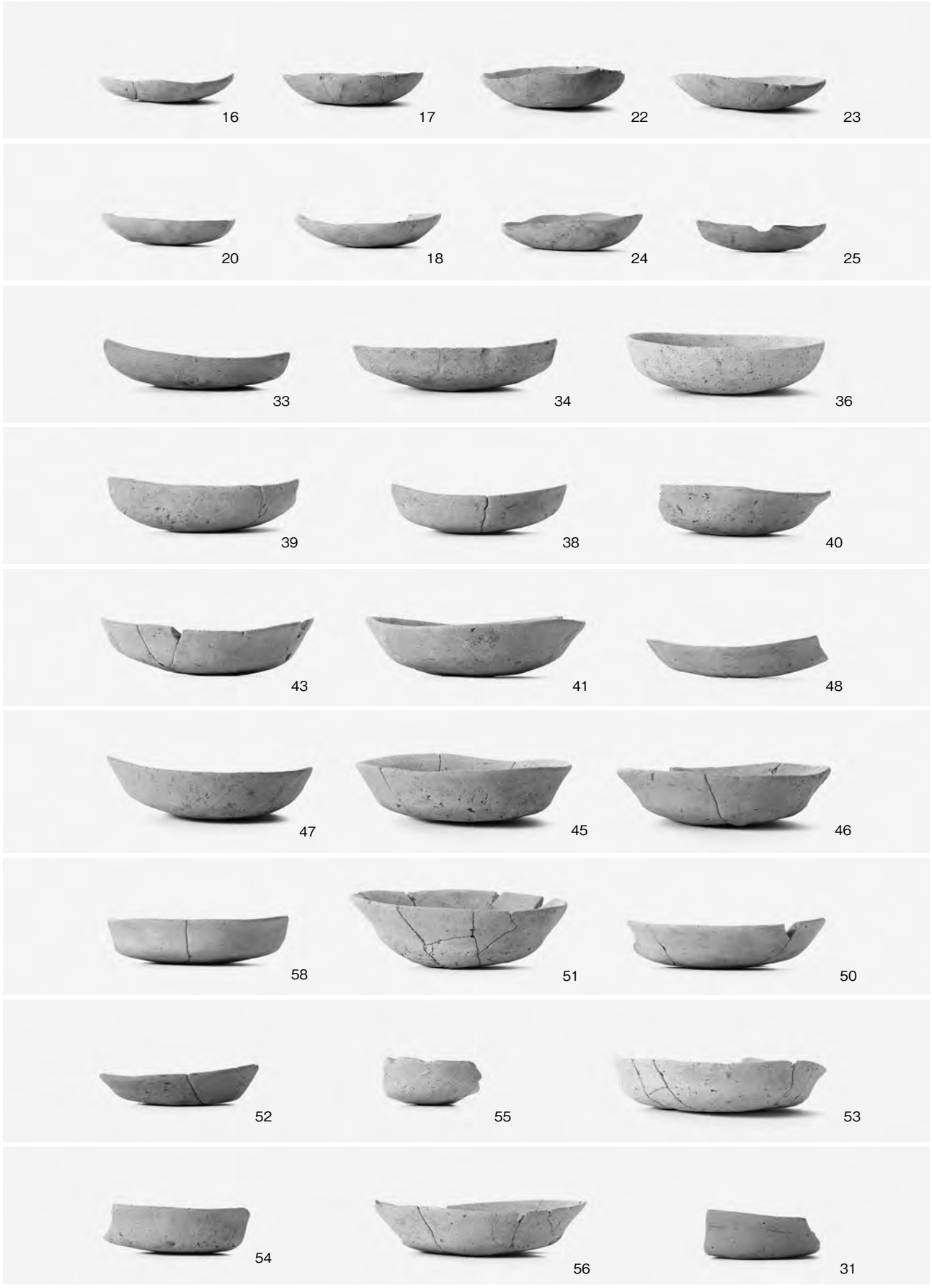
97



110

2トレンチ出土遺物

図版第 29　満願寺跡第 2 次



土坑ＳＫ20出土遺物


106


105


99


101


102


286


103

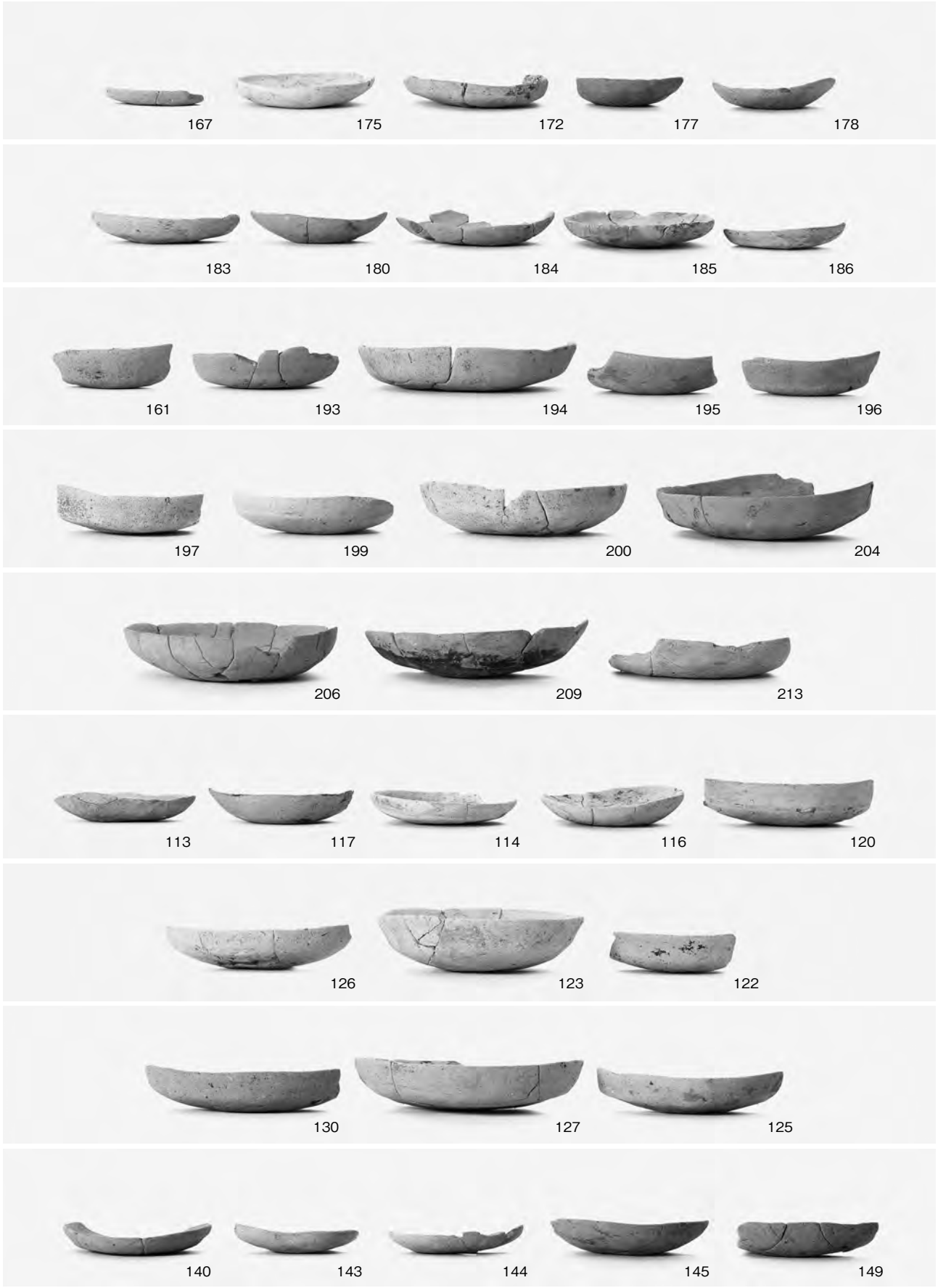

104


287


107

埋甕ＳＸ51出土遺物

図版第 31　満願寺跡第 2 次



整地層第18層出土遺物

図版第 32　満願寺跡第 2 次

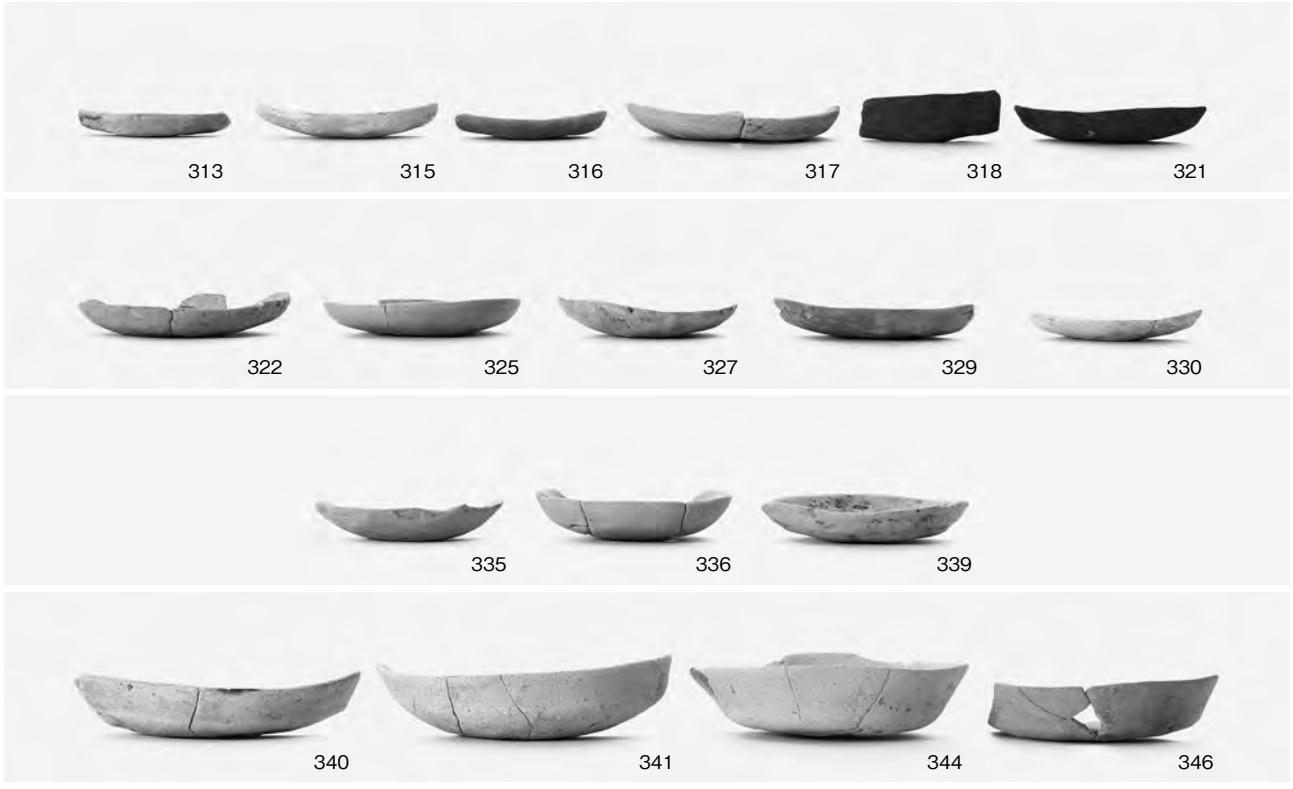


整地層第20層出土遺物

図版第 33　満願寺跡第 2 次



(1)整地層第20層出土遺物



(2)整地層第21層出土遺物

図版第 34　満願寺跡第 2 次













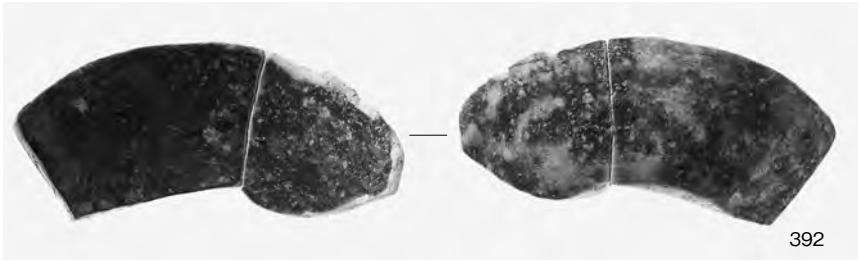


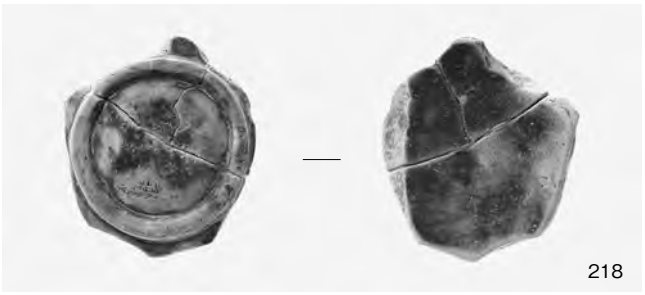


整地層第21層出土遺物

図版第 35　満願寺跡第 2 次


393


392


218


394


390


401


404


405


406

整地層第21層出土遺物

図版第 36　満願寺跡第 2 次


424　423


428　431　434


433


436


437


419


420

整地層第21層出土遺物



(1)土坑ＳＫ28出土黒釉白堆線文壺



(2)黒釉白堆線文壺　内面全景



(3)黒釉白堆線文壺　底部全景



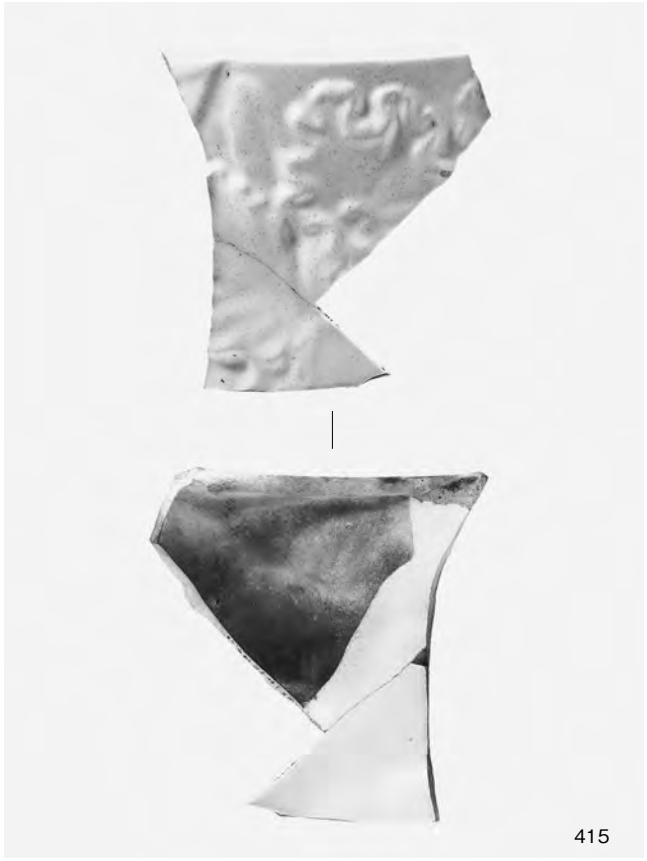
(4)黒釉白堆線文壺　内面及び断面拡大



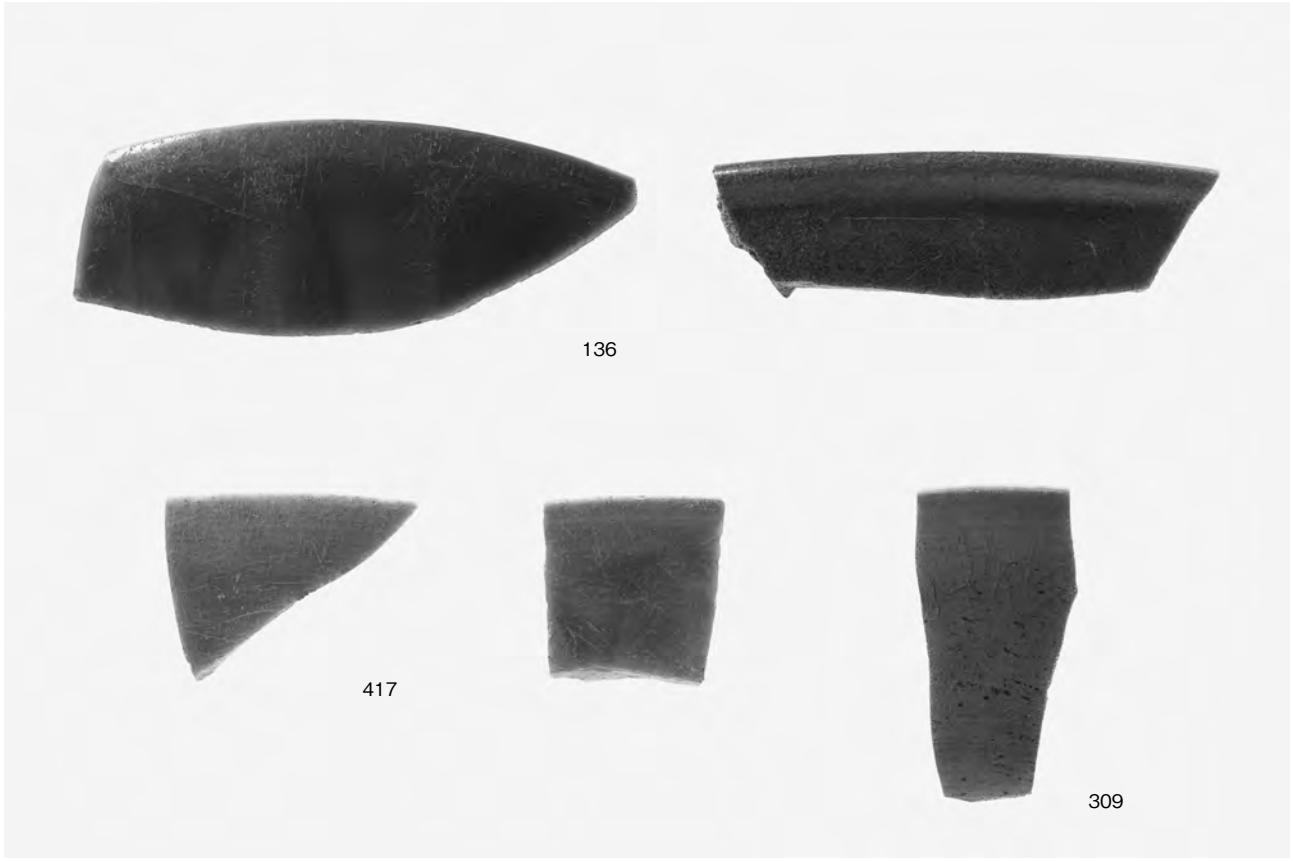
(5)黒釉白堆線文壺　垂線文拡大



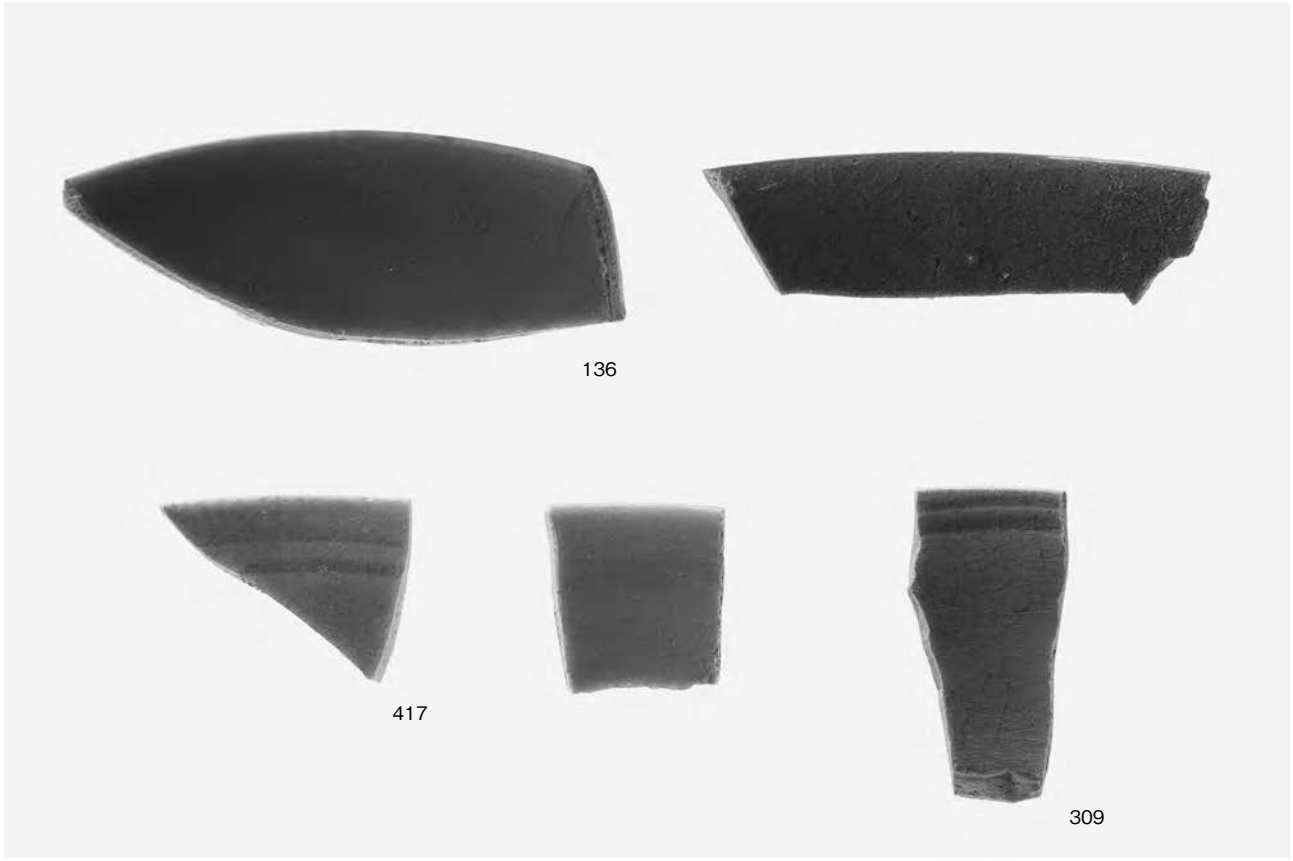
(1)炭化物層出土白磁四耳壺



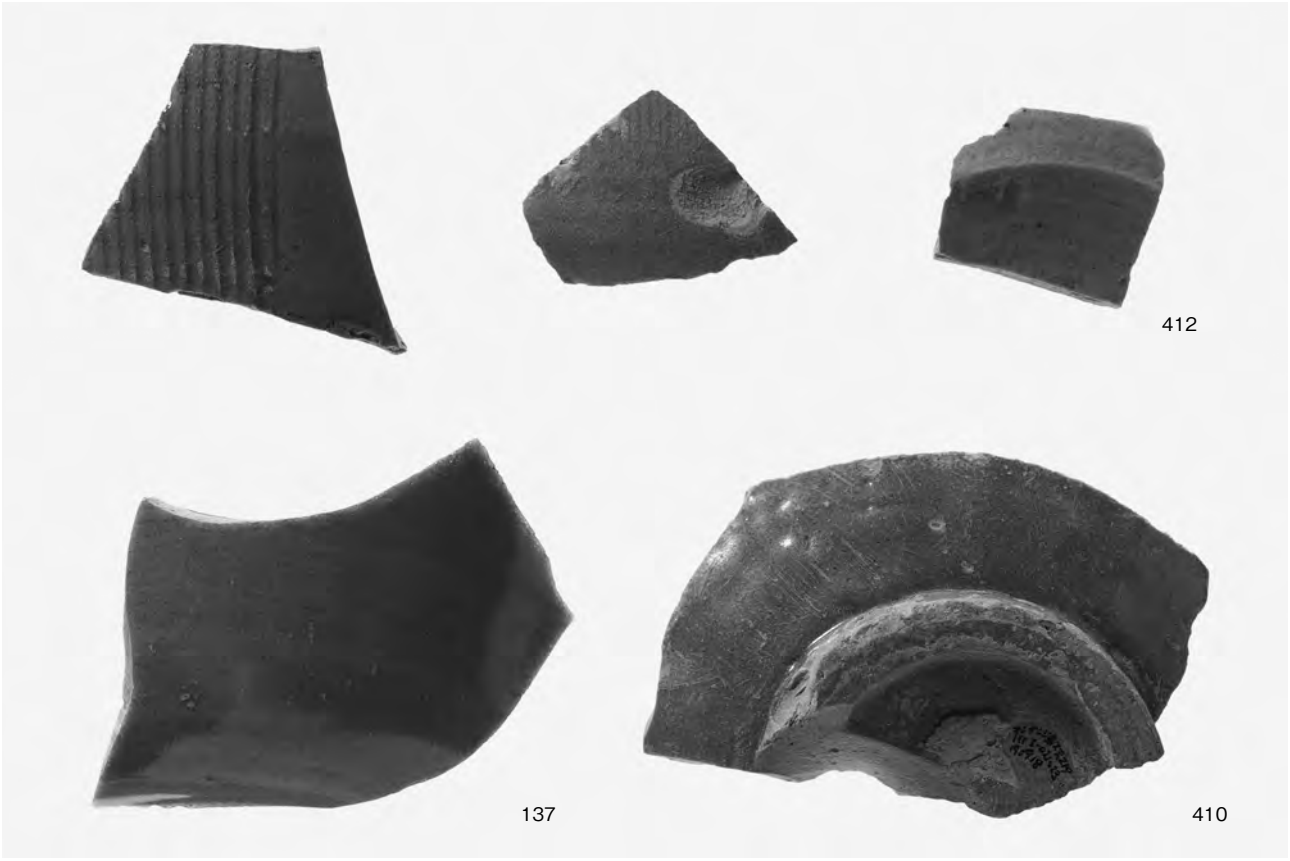
(2)出土遺物(中国製陶磁器)



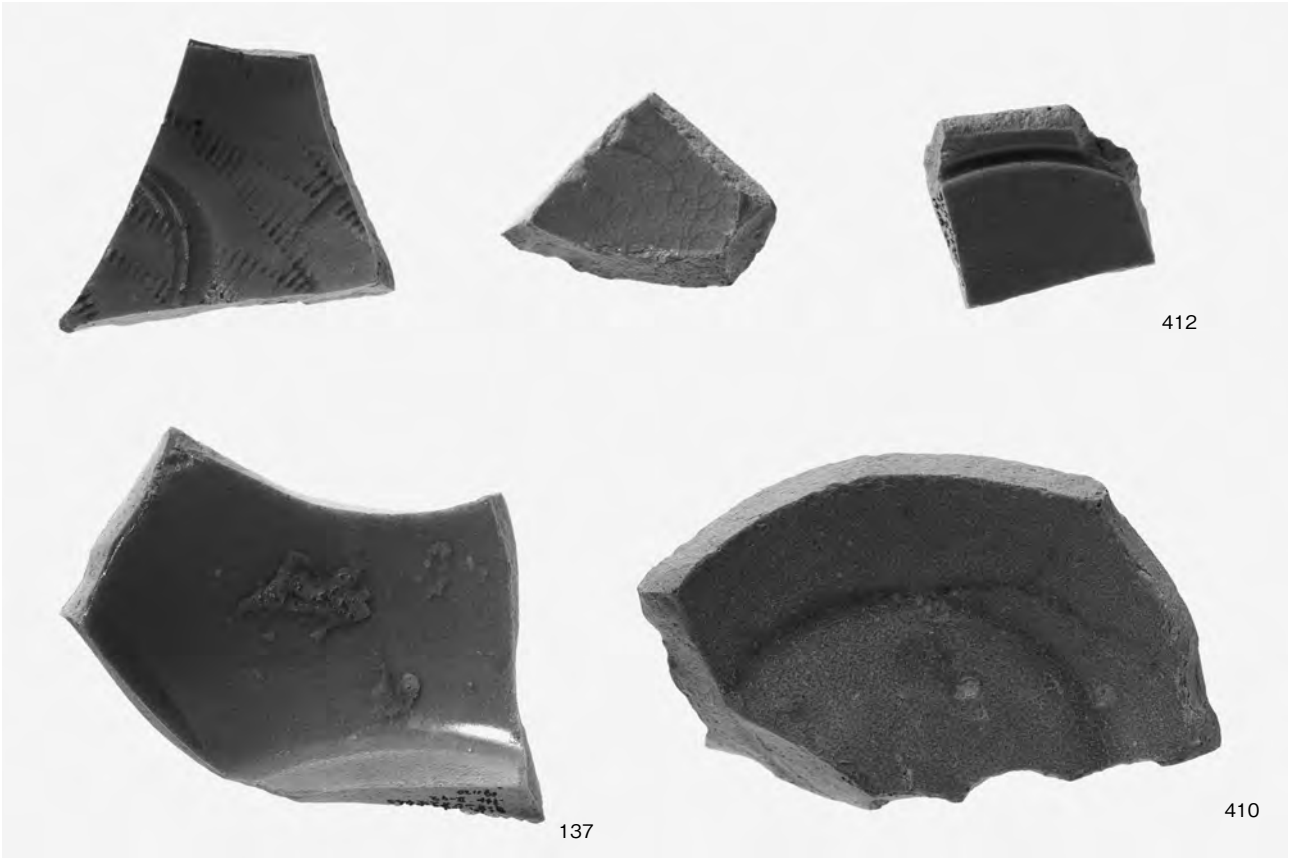
(1)出土遺物(中国製青磁　外面)



(2)出土遺物(中国製青磁　内面)



(1)出土遺物(中国製青磁　外面)



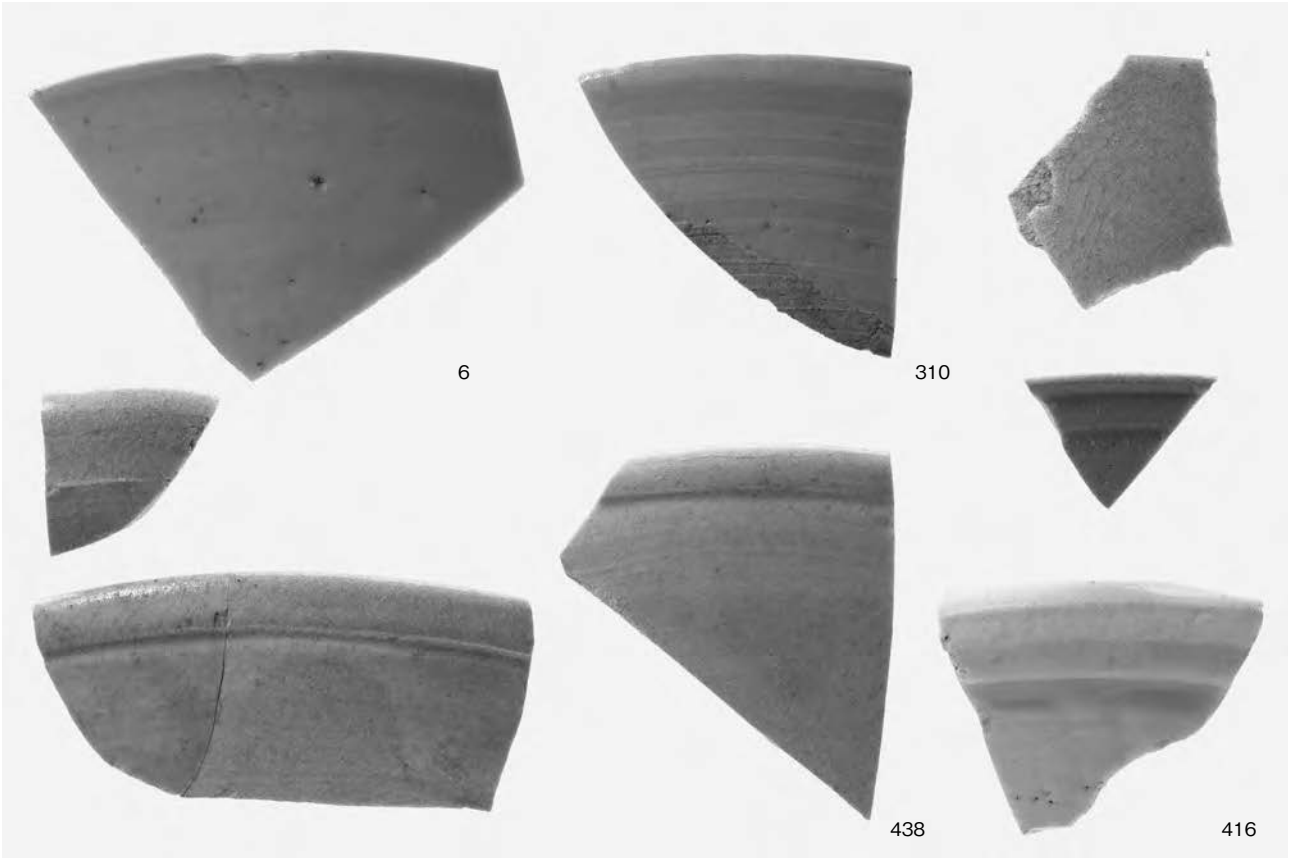
(2)出土遺物(中国製青磁　内面)



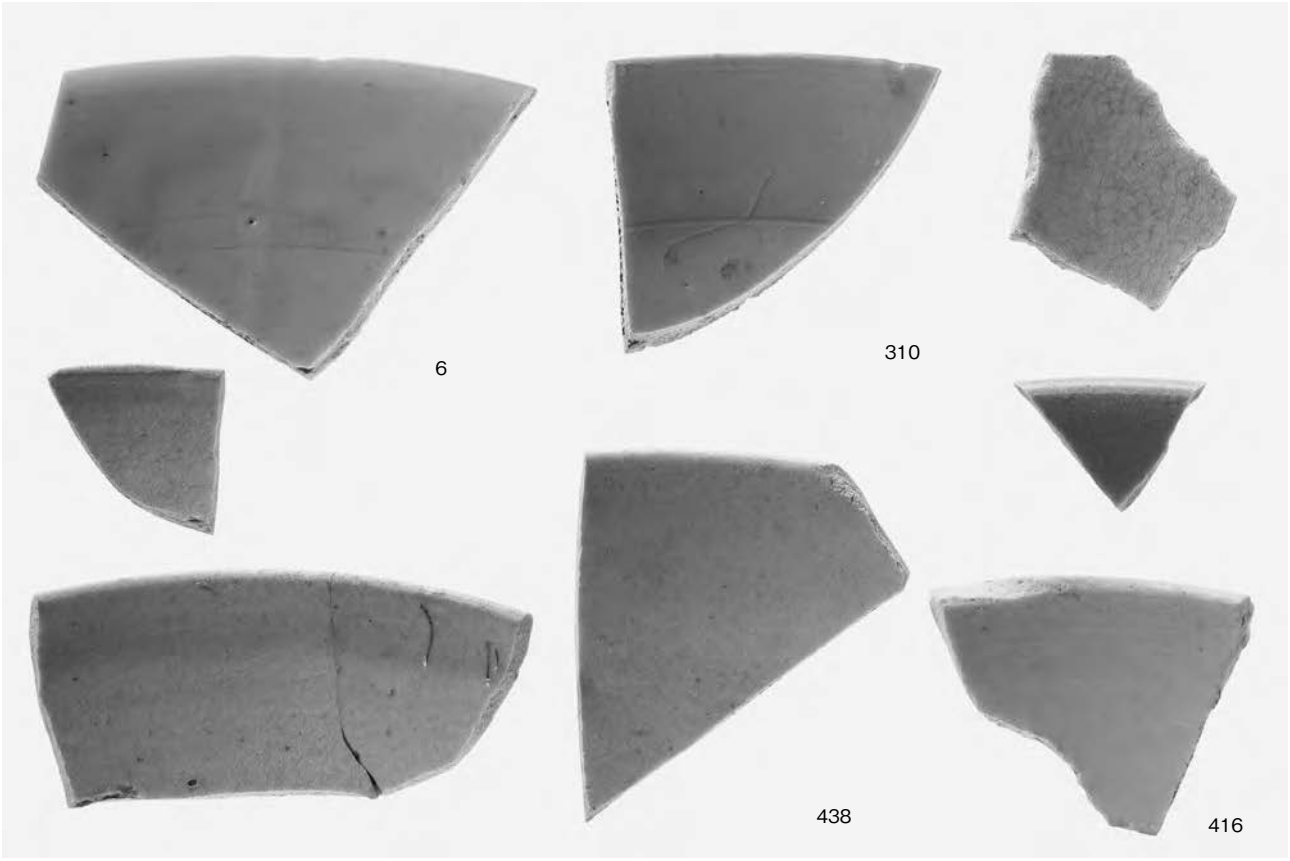
(1)出土遺物(中国製青磁　外面)



(2)出土遺物(中国製青磁　内面)

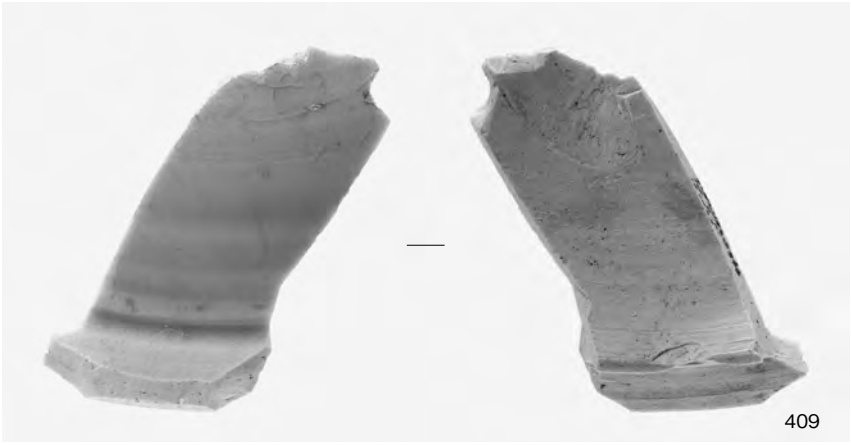


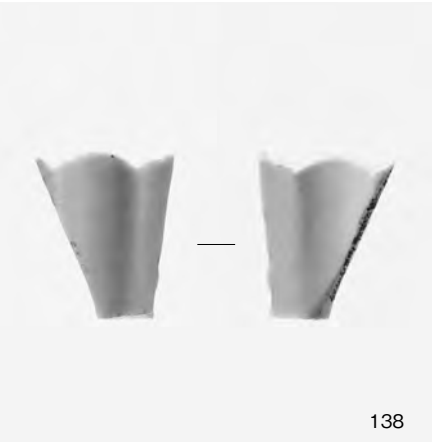
(1)出土遺物(中国製青磁　外面)

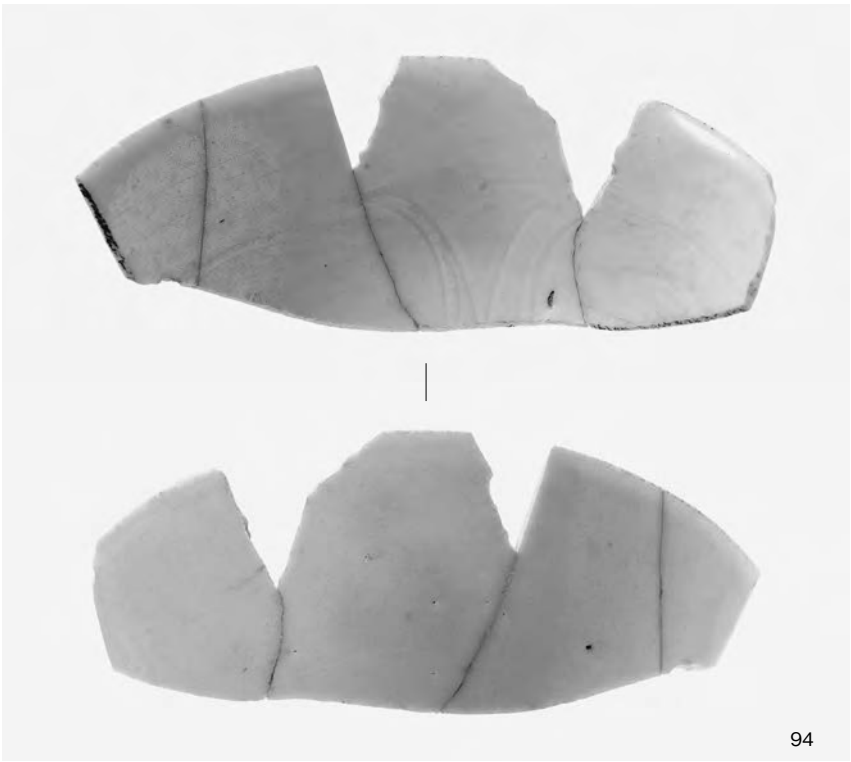


(2)出土遺物(中国製青磁　内面)

図版第 43　満願寺跡第 2 次

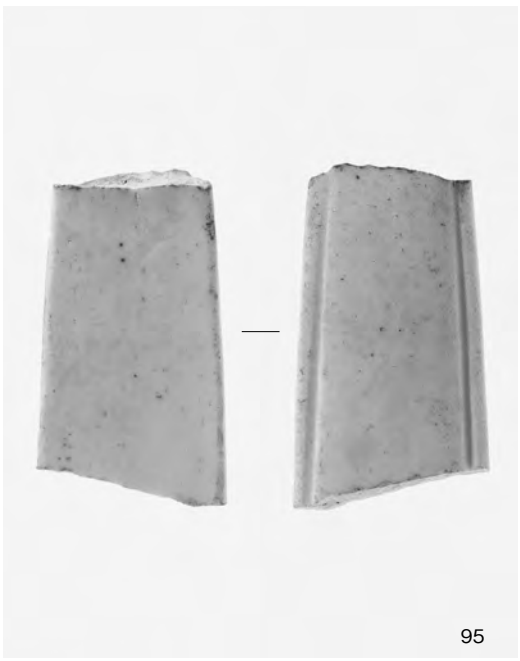

409


138

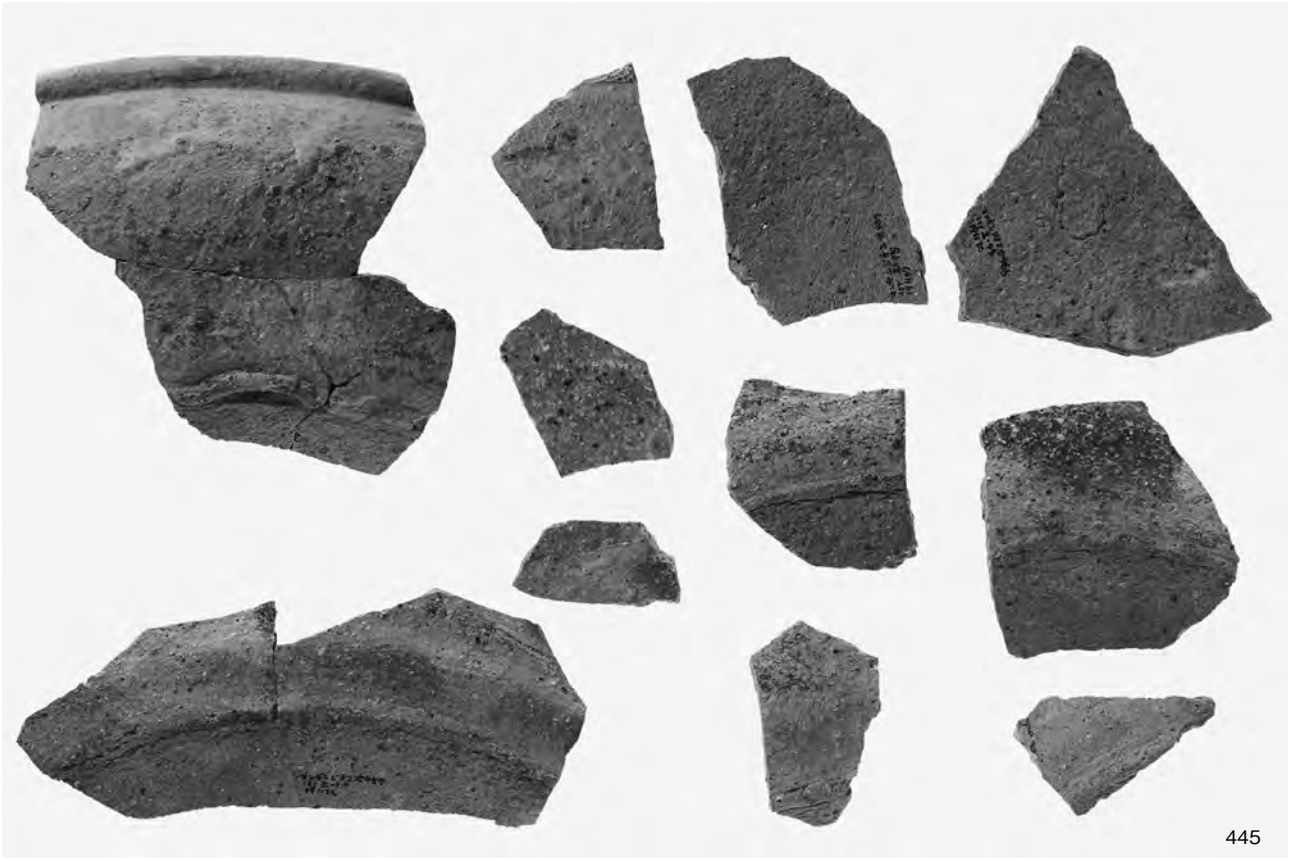

94


413


408


95

出土遺物（中国製陶磁器）

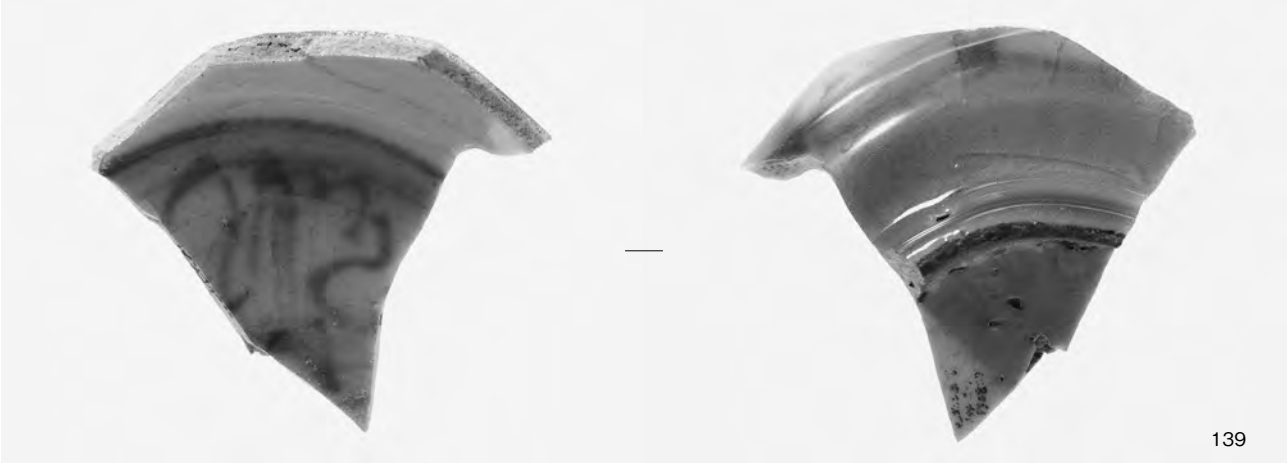


(1)出土遺物(中国製褐釉盤　外面)



(2)出土遺物(中国製褐釉盤　内面)

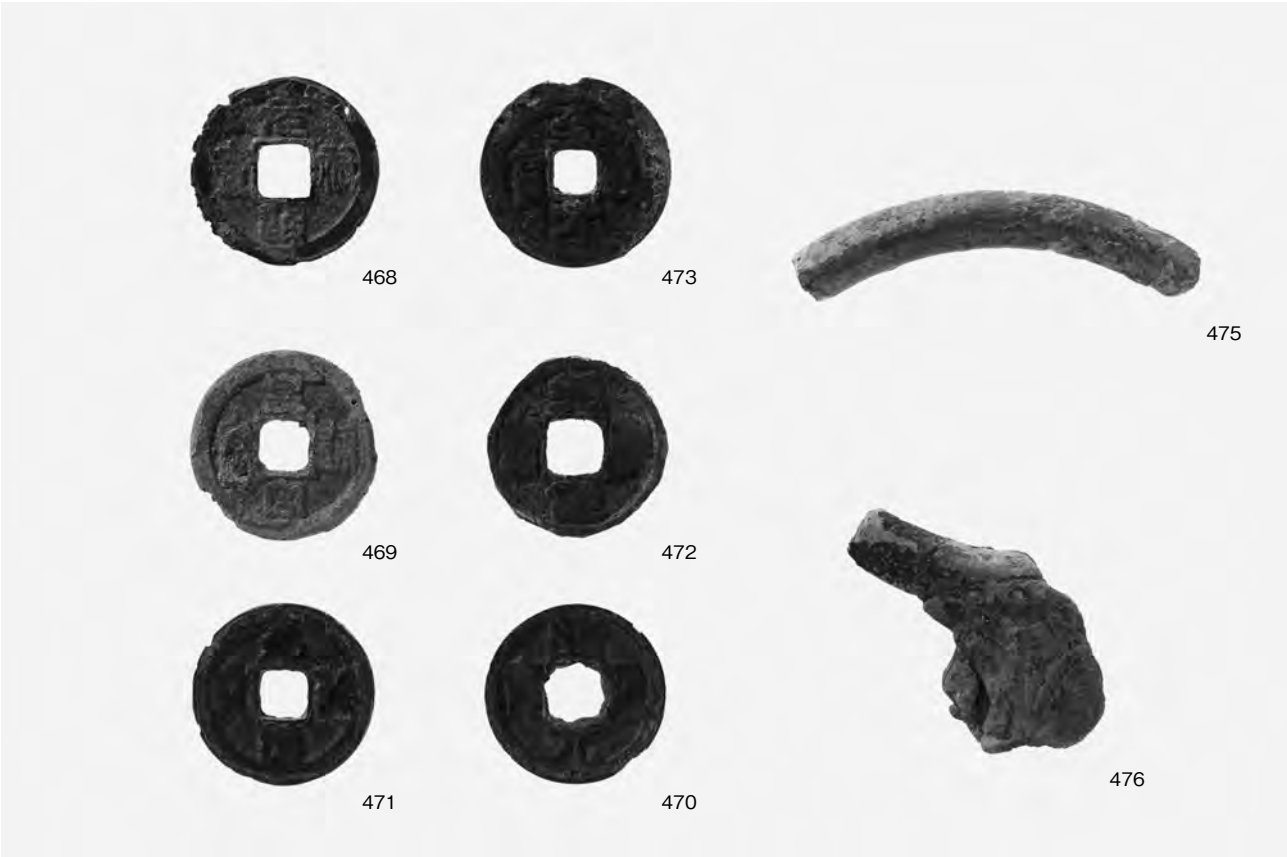
図版第 45　満願寺跡第 2 次





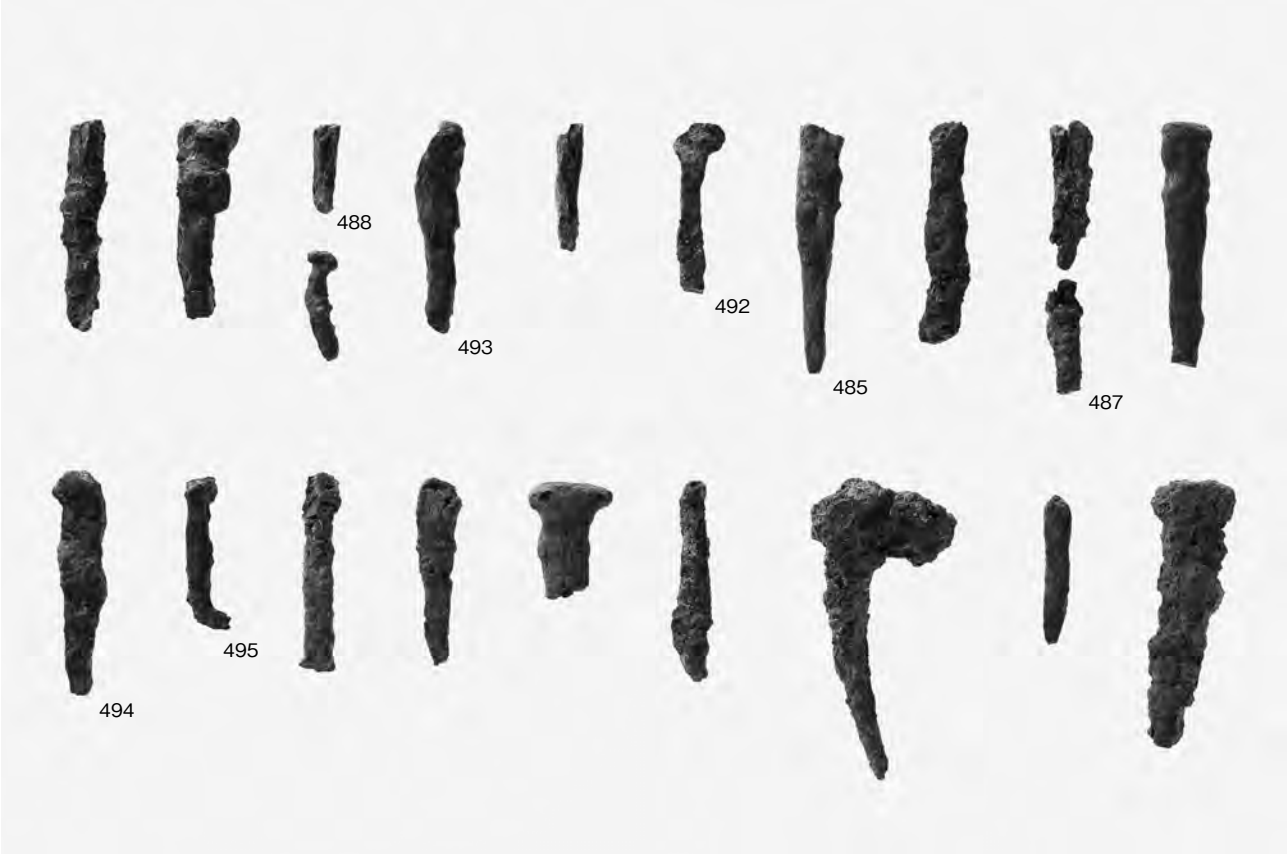


(1)出土遺物(中国製陶磁器・炭化米塊)

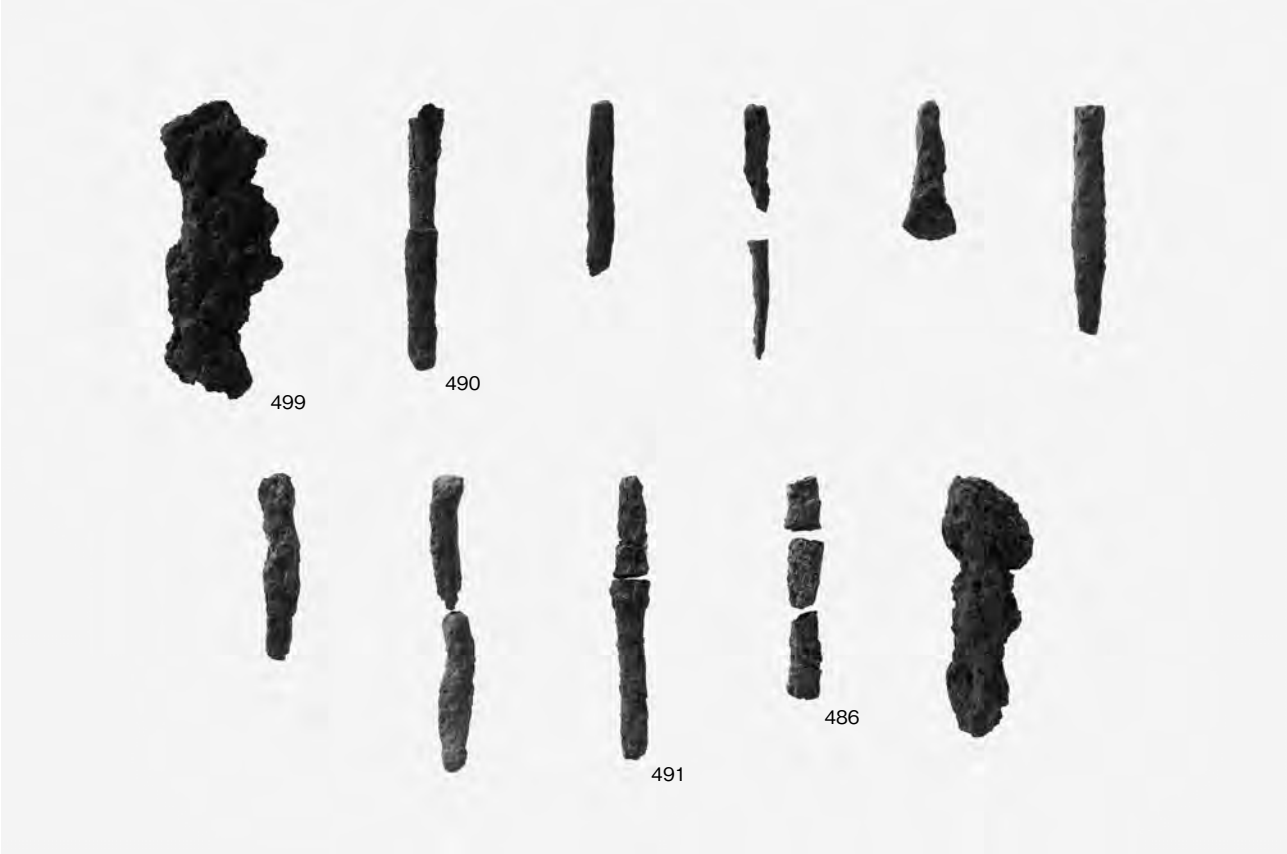


(2)出土遺物(銭貨・銅製品)

図版第 46　満願寺跡第 2 次

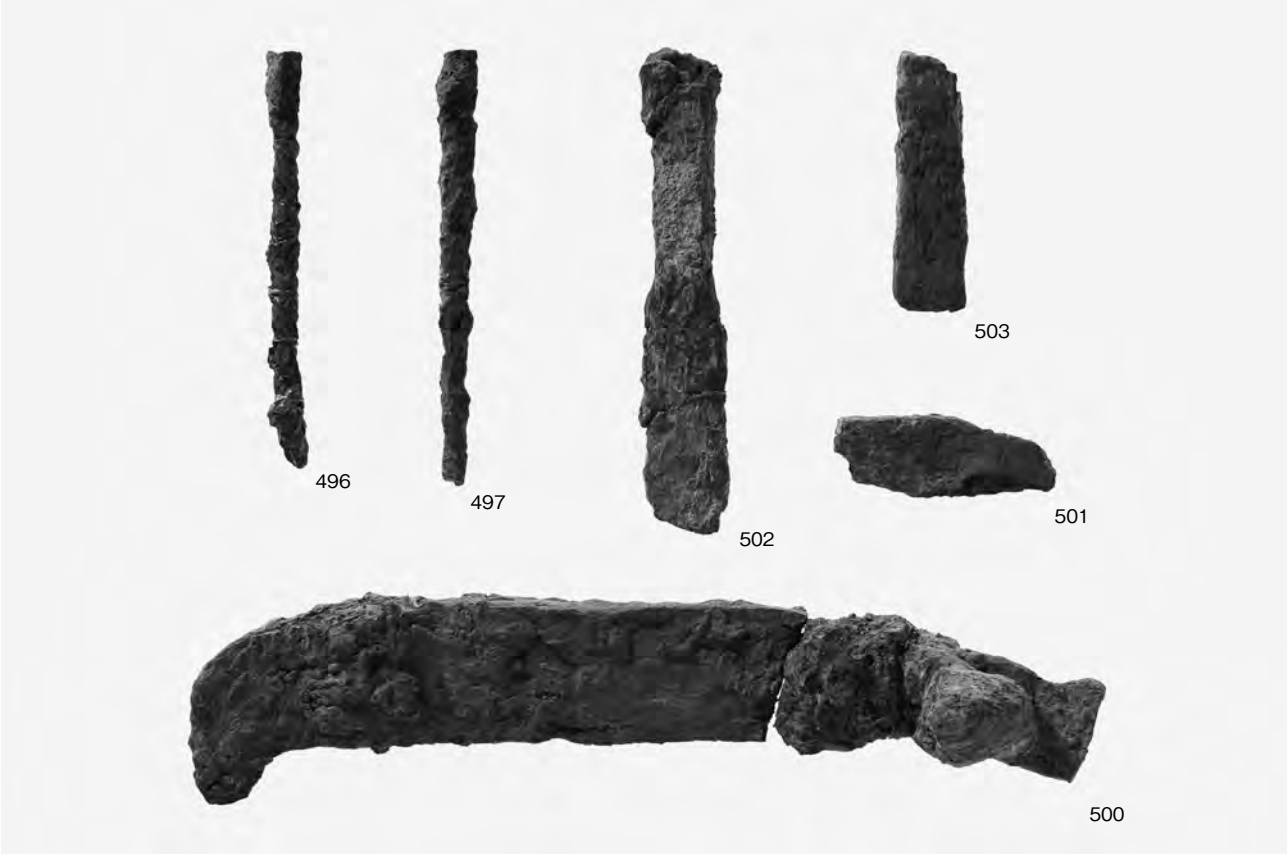


(1)出土遺物(鉄製品)

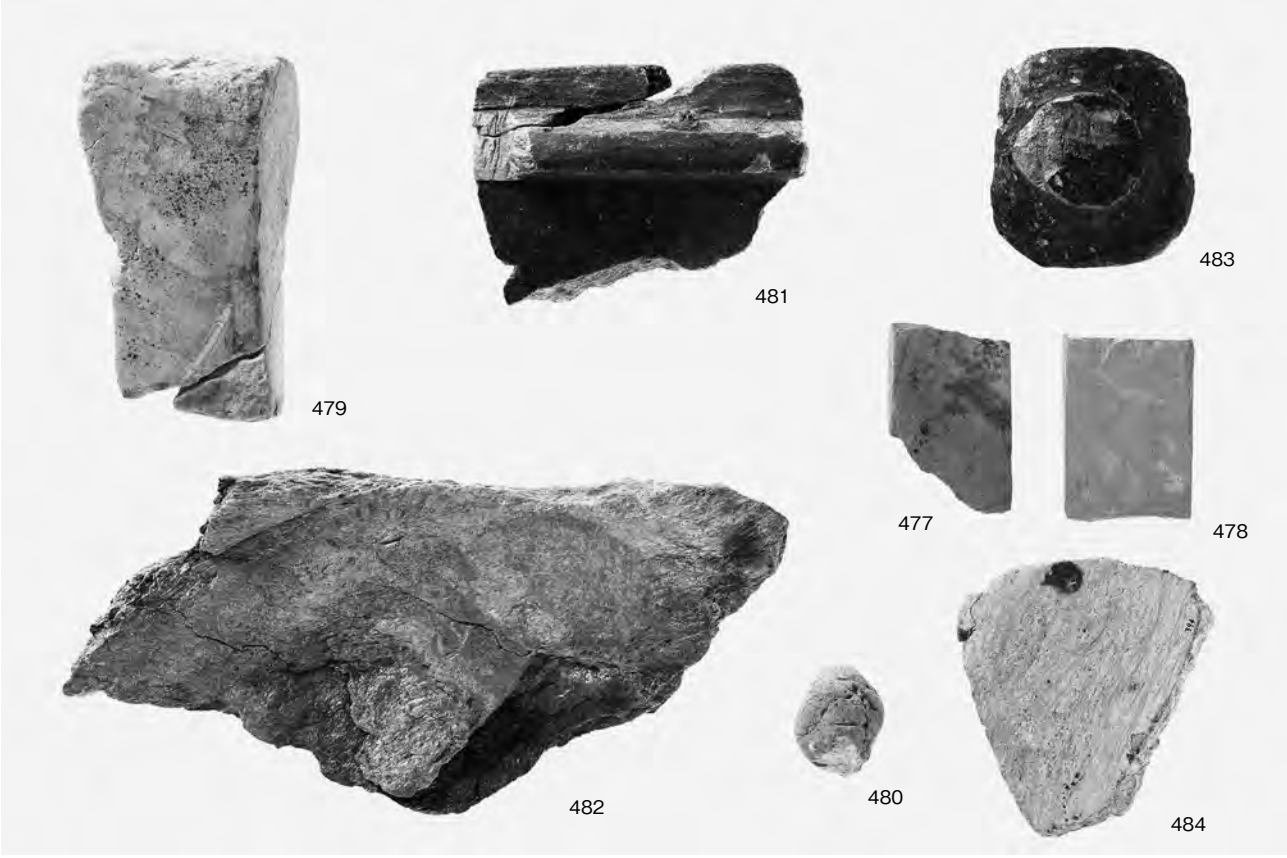


(2)出土遺物(鉄製品)

図版第 47　満願寺跡第 2 次

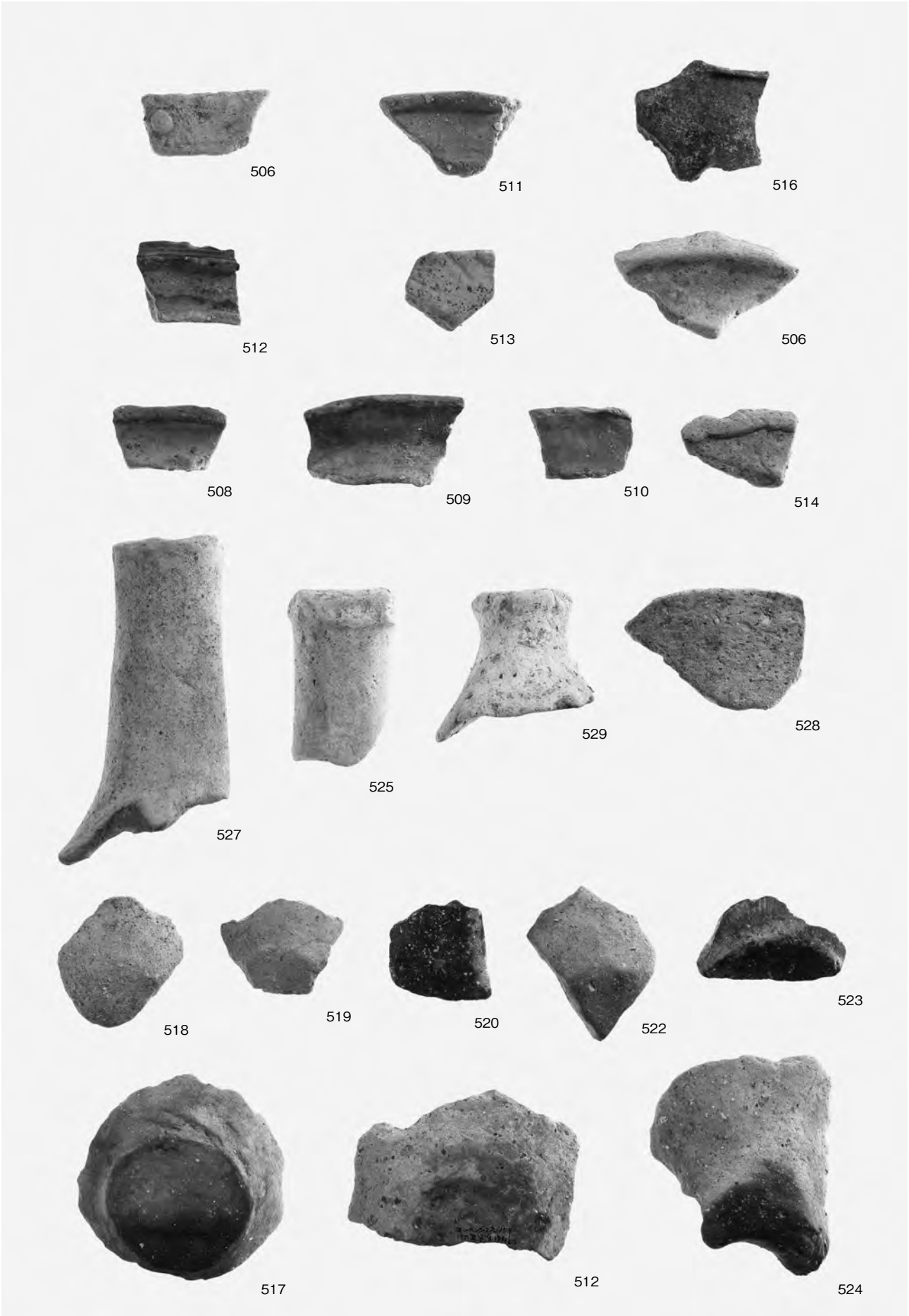


(1)出土遺物(鉄製品)



(2)出土遺物(石製品)

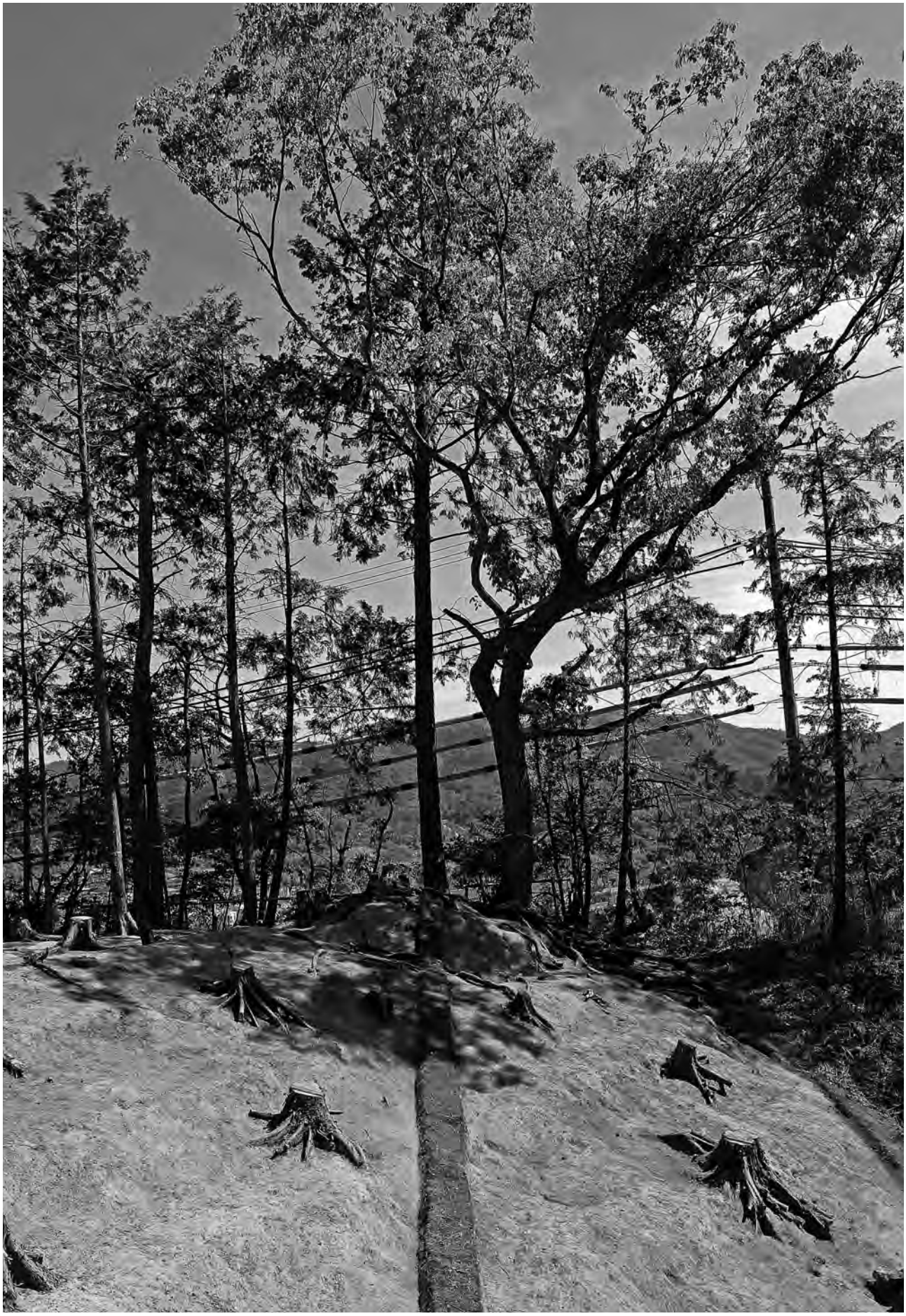
図版第 48　満願寺跡第 2 次



出土遺物（弥生土器）

図版第１　新名神高速道路整備事業関係遺跡

保安塚



１区塚全景（北から）

図版第２　新名神高速道路整備事業関係遺跡

保安塚



(1)調査地遠景(西から、空撮写真)　白川道が宇治田原盆地へ延びる



(2) 1 区調査区全景(北から)

図版第３　新名神高速道路整備事業関係遺跡

保安塚



(1) 1 区調査着手前状況(北から)



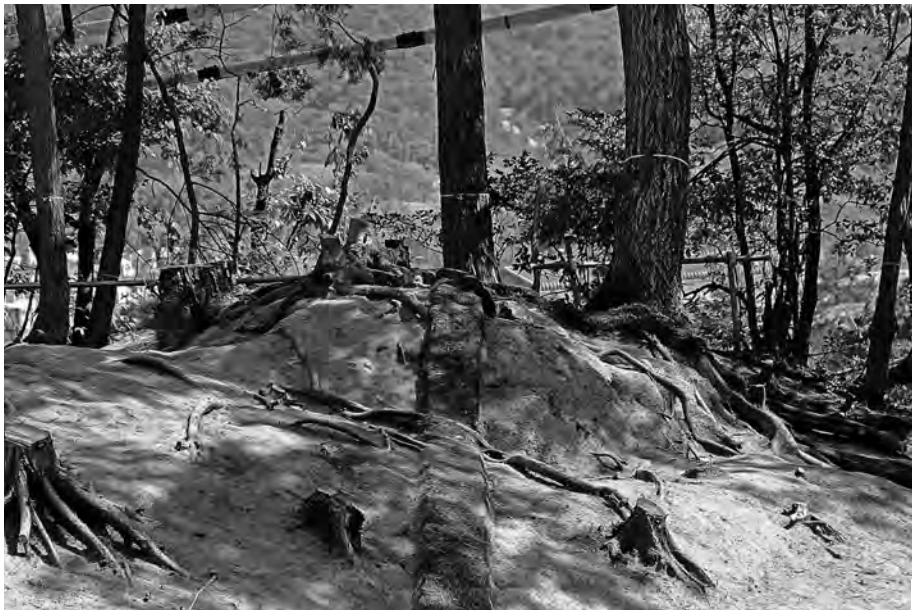
(2) 1 区調査着手前状況(北東から)



(3) 1 区調査作業状況(東から)

図版第４　新名神高速道路整備事業関係遺跡

保安塚



(1) 1 区塚調査状況(北から)



(2) 1 区塚調査状況(北東から)



(3) 1 区塚南畦断面(東から)

図版第５　新名神高速道路整備事業関係遺跡

保安塚



(1) 1 区塚東半部の状況(東から)



(2) 1 区塚テラス部の状況
(北西から)



(3) 1 区塚西半部の状況(西から)

図版第６　新名神高速道路整備事業関係遺跡

保安塚



(1) 1 区塚北畦断面(北西から)



(2) 1 区塚頂部断割断面(南西から)



(3) 1 区盛土下確認状況(北から)

図版第７　新名神高速道路整備事業関係遺跡

保安塚



(1) ２区完掘状況(南西から)



(2) ２区頂部の状況(北西から)



(3) ２区斜面部の状況(南から)

図版第８　新名神高速道路整備事業関係遺跡

保安塚



(1)土師器皿３・４出土状況(西から)



(2)土師器皿５出土状況(西から)



(3)土師器皿６出土状況(北から)



(4)土師器皿10出土状況(南から)



(5)土師器皿12出土状況(東から)



(6)土師器皿14・18出土状況(東から)



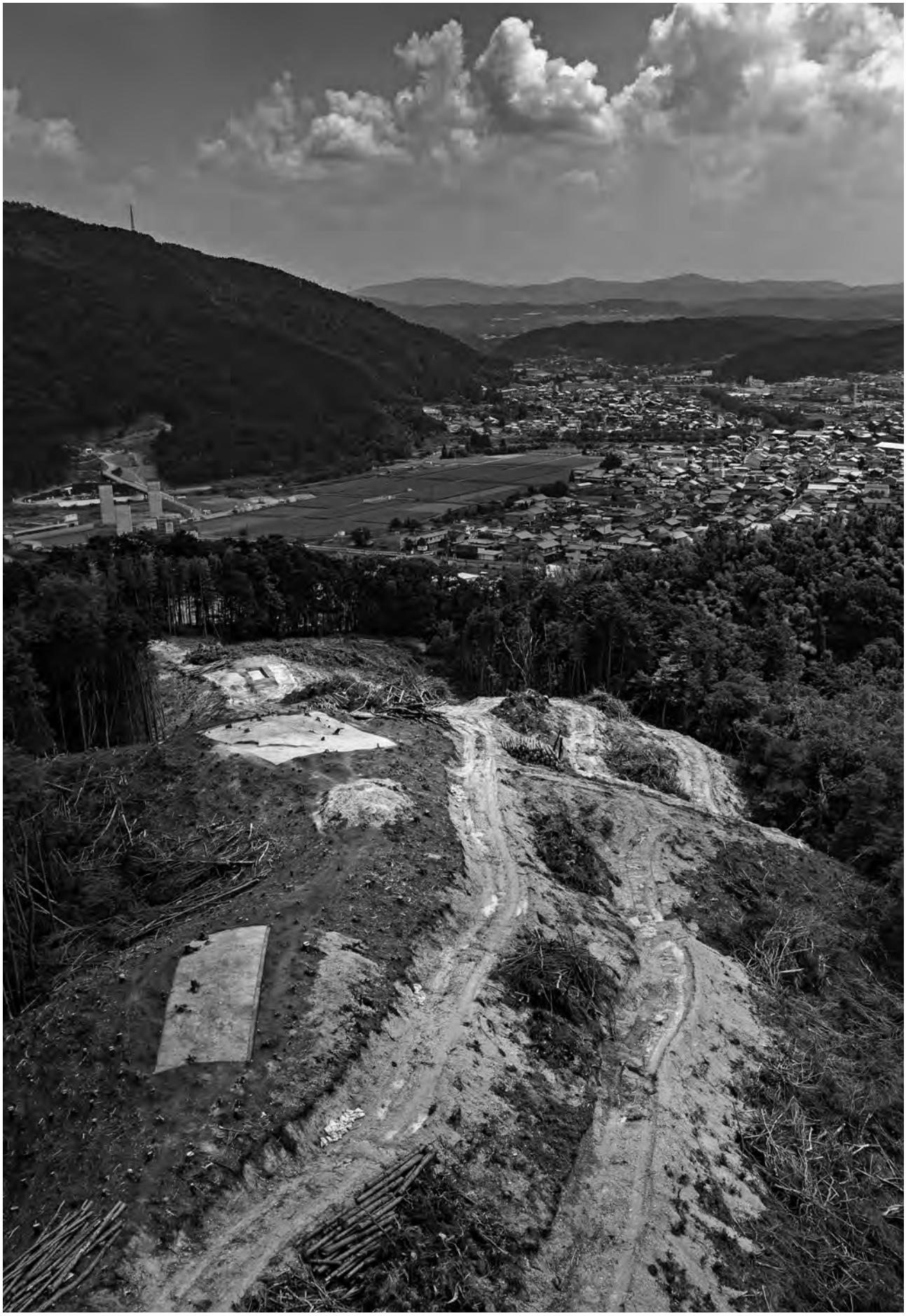
(7)寛永通宝28出土状況(東から)



(8)鉄銭29出土状況(南から)

図版第９　新名神高速道路整備事業関係遺跡

長井野塚



長井野塚遠景（南西から）写真左奥がトンネル区間入り口

図版第 10　新名神高速道路整備事業関係遺跡

長井野塚



(1) 1 区調査着手前状況(南西から)



(2) 2 区調査着手前状況(北東から)



(3) 3 区調査着手前状況(南東から)

図版第 11　新名神高速道路整備事業関係遺跡

長井野塚



(1) 1 区完掘状況(南西から)



(2) 1 区完掘状況(北東から)



(3) 1 区畦設置状況(西から)

図版第 12　新名神高速道路整備事業関係遺跡

長井野塚



(1) 2 区完掘状況(南西から)



(2) 2 区完掘状況(北東から)



(3) 2 区畦設置状況(南西から)

図版第 13　新名神高速道路整備事業関係遺跡

長井野塚



(1) 3 区完掘状況(北東から)



(2) 3 区完掘状況(南西から)



(3) 3 区南壁(北西から)

図版第 14　新名神高速道路整備事業関係遺跡

長井野塚



(1) 4 区調査着手前状況(南西から)



(2) 4 区完掘状況(東から)



(3) 4 区完掘状況(南から)

図版第15　新名神高速道路整備事業関係遺跡

岨田遺跡第１・２次



(1) １～９区調査区設置状況
（南西から）



(2) １～９区調査状況（北東から）



(3) ２区完掘状況（東から）

図版第 16　新名神高速道路整備事業関係遺跡

岨田遺跡第１・２次



(1) 3 区完掘状況(東から)



(2) 4 区完掘状況(東から)



(3) 5 区完掘状況(東から)

図版第 17　新名神高速道路整備事業関係遺跡

岨田遺跡第１・２次



(1) ６区完掘状況(東から)



(2) ７区上層(西から)



(3) ７区完掘状況(東から)

図版第 18　新名神高速道路整備事業関係遺跡

岨田遺跡第１・２次



(1)10区完掘状況(西から)



(2)11区完掘状況(西から)



(3)12区完掘状況(西から)

図版第19　新名神高速道路整備事業関係遺跡

岨田遺跡第１・２次



(1)13区完掘状況(西から)



(2)14区完掘状況(南西から)



(3)15区完掘状況(西から)

図版第 20　新名神高速道路整備事業関係遺跡

岨田遺跡第１・２次



(1)16区完掘状況(南から)



(2)17区完掘状況(北西から)



(3)17区完掘状況(南東から)

図版第 21　新名神高速道路整備事業関係遺跡

岨田遺跡第１・２次



(1)18区完掘状況(東から)



(2)19区完掘状況(南東から)



(3)19区南壁(北東から)

図版第 22　新名神高速道路整備事業関係遺跡

岨田遺跡第１・２次



(1)20区完掘状況(北東から)



(2)20区完掘状況(北から)



(3)21区完掘状況(南西から)

図版第 23　新名神高速道路整備事業関係遺跡

砂川古墳



(1)調査着手前状況(北から)



(2)調査着手前状況(西から)

図版第 24　新名神高速道路整備事業関係遺跡

砂川古墳



(1)砂川古墳上半部土層断面
（南から）



(2)下半部東西土層断面(北から)



(3)旧表土層からの遺物出土状況
（北から）

図版第 25　新名神高速道路整備事業関係遺跡

砂川古墳



(1)炭窯SY01検出状況(南から)



(2)炭窯SY01完掘状況(西から)



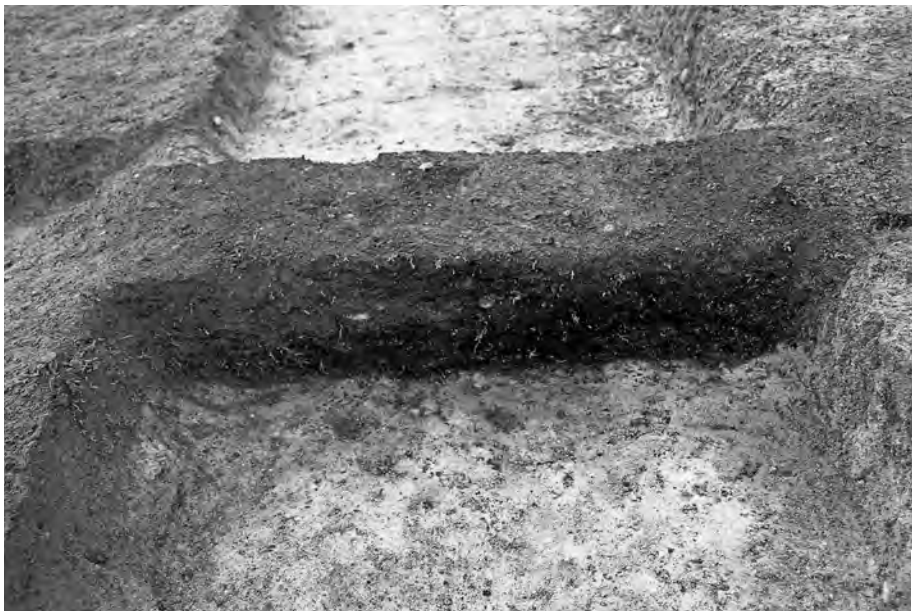
(3)炭窯SY01完掘状況(南西から)

図版第 26　新名神高速道路整備事業関係遺跡

砂川古墳



(1) 炭窯SY01燃焼室と
焼成室の境細部(南東から)



(2) 炭窯SY01焼成室土層断面
(西から)



(3) 炭窯SY01燃焼室土層断面
(西から)

図版第 27　新名神高速道路整備事業関係遺跡

奥城土遺跡



(1)調査地遠景(南東から)



(2)調査地遠景(北から)

図版第 28　新名神高速道路整備事業関係遺跡

奥城土遺跡



(1) 1 区完掘状況(南から)



(2) 1 区完掘状況(北西から)



(3) 1 区調査区東壁断面(南西から)

図版第 29　新名神高速道路整備事業関係遺跡

奥城土遺跡



(1) 2 区完掘状況(南から)



(2) 2 区完掘状況(北から)



(3) 2 区調査区東壁(南西から)

図版第 30　新名神高速道路整備事業関係遺跡

奥城土遺跡



(1) 3 区完掘状況(南から)



(2) 3 区完掘状況(北東から)



(3) 2 区調査区東壁(南西から)

図版第 31　新名神高速道路整備事業関係遺跡

禅定寺城跡第３次



(1)調査前全景(北から)



(2)調査前全景(北東から)



(3) 1 トレンチ全景(南東から)

図版第 32　新名神高速道路整備事業関係遺跡

禅定寺城跡第３次



(1) 2 トレンチ全景(南西から)



(2) 3 トレンチ全景(南東から)



(3) 4 トレンチ全景(北西から)

図版第 33　新名神高速道路整備事業関係遺跡

禅定寺城跡第３次



(1) ５・６トレンチ全景(北から)



(2) ５トレンチ全景(南から)



(3) ６トレンチ全景(北から)

図版第 34　新名神高速道路整備事業関係遺跡

禅定寺城跡第３次



(1) ７トレンチ全景(南から)



(2) ８トレンチ全景(西から)



(3) ９トレンチ北部断ち割り状況（南から）

図版第 35　新名神高速道路整備事業関係遺跡

禅定寺城跡第３次



(1) ９トレンチ検出石垣全景
（南西から）



(2)10トレンチ全景(北から)



(3)11トレンチ全景(南から)

図版第 36　新名神高速道路整備事業関係遺跡

禅定寺城跡第３次



(1)12トレンチ全景(南西から)

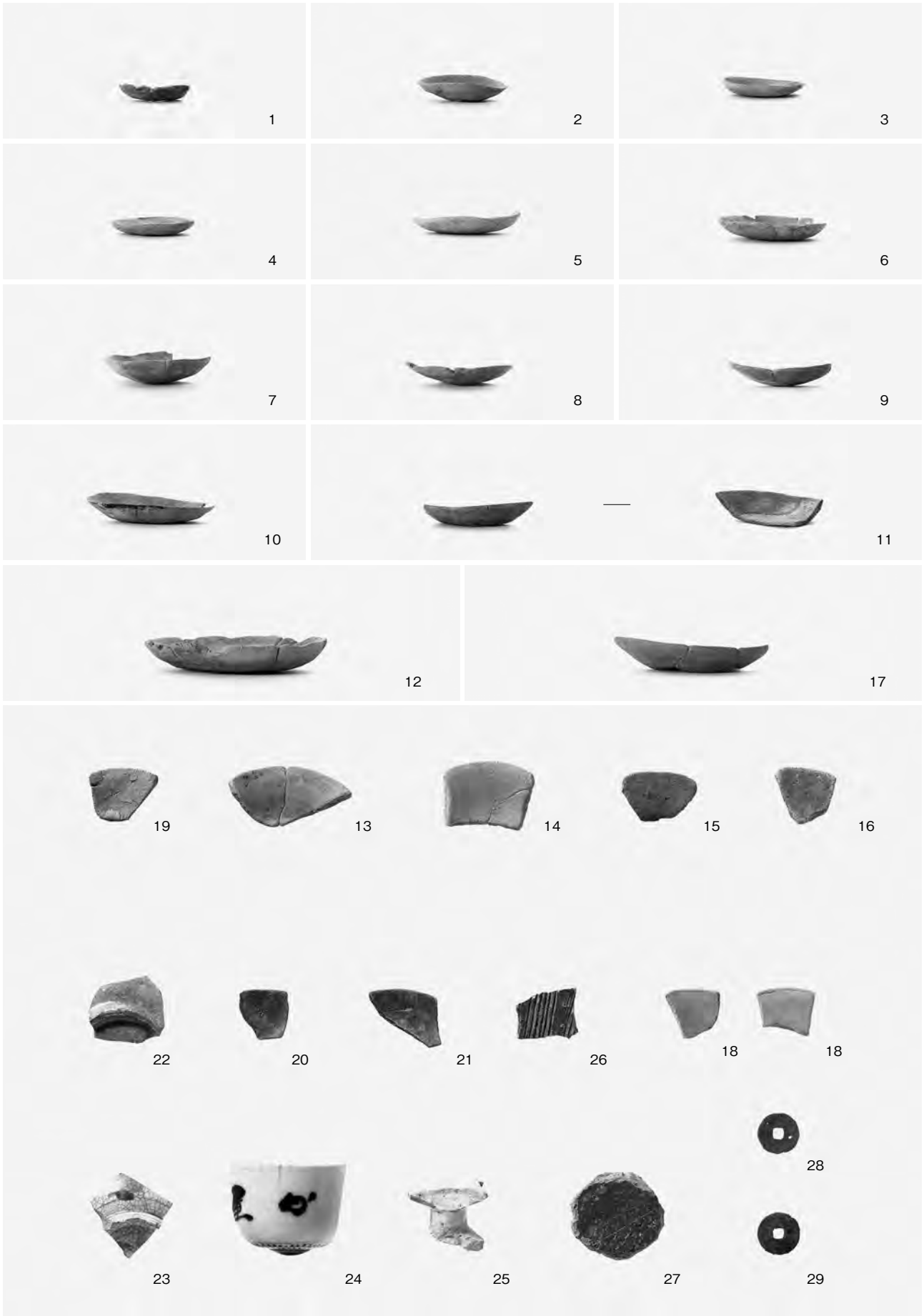


(2)14トレンチ全景(北東から)

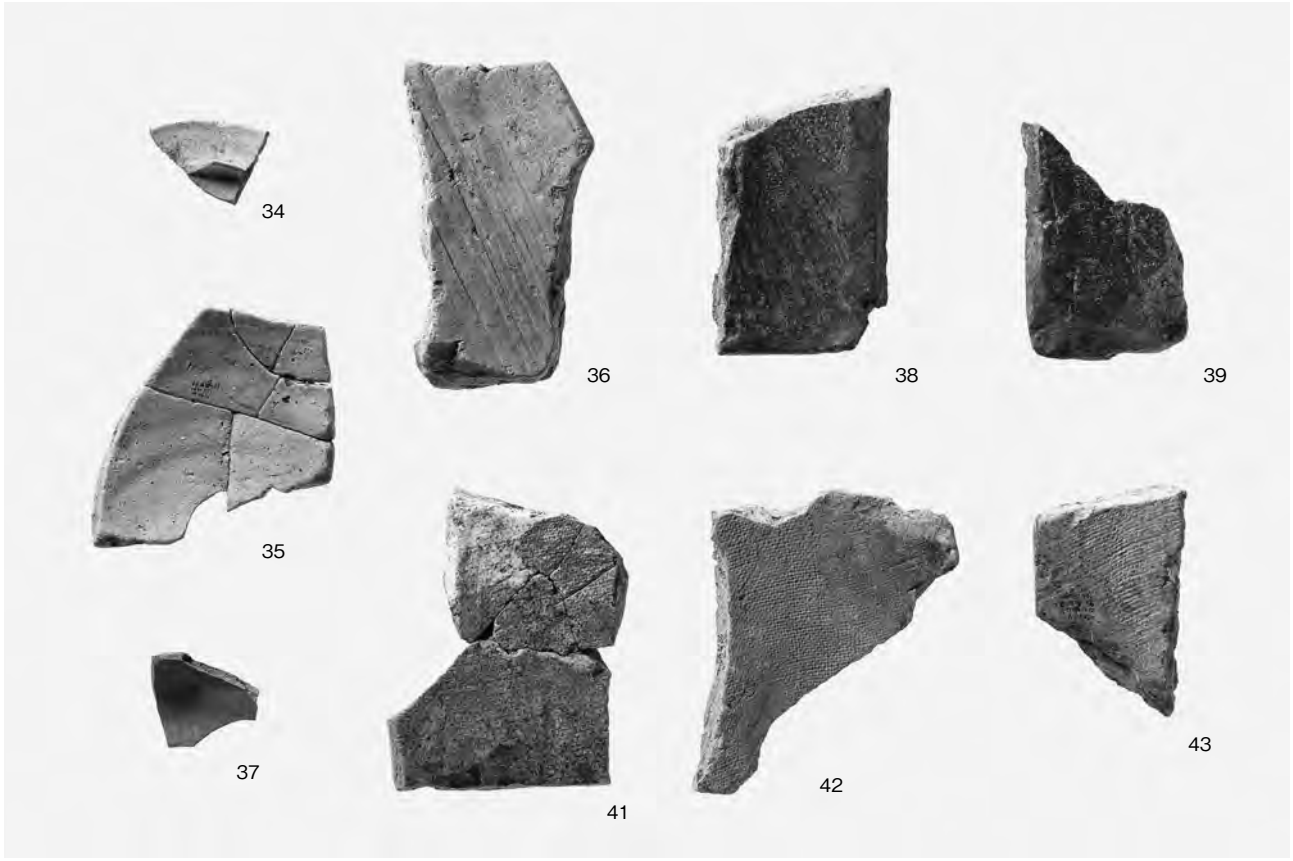


(3)作業状況

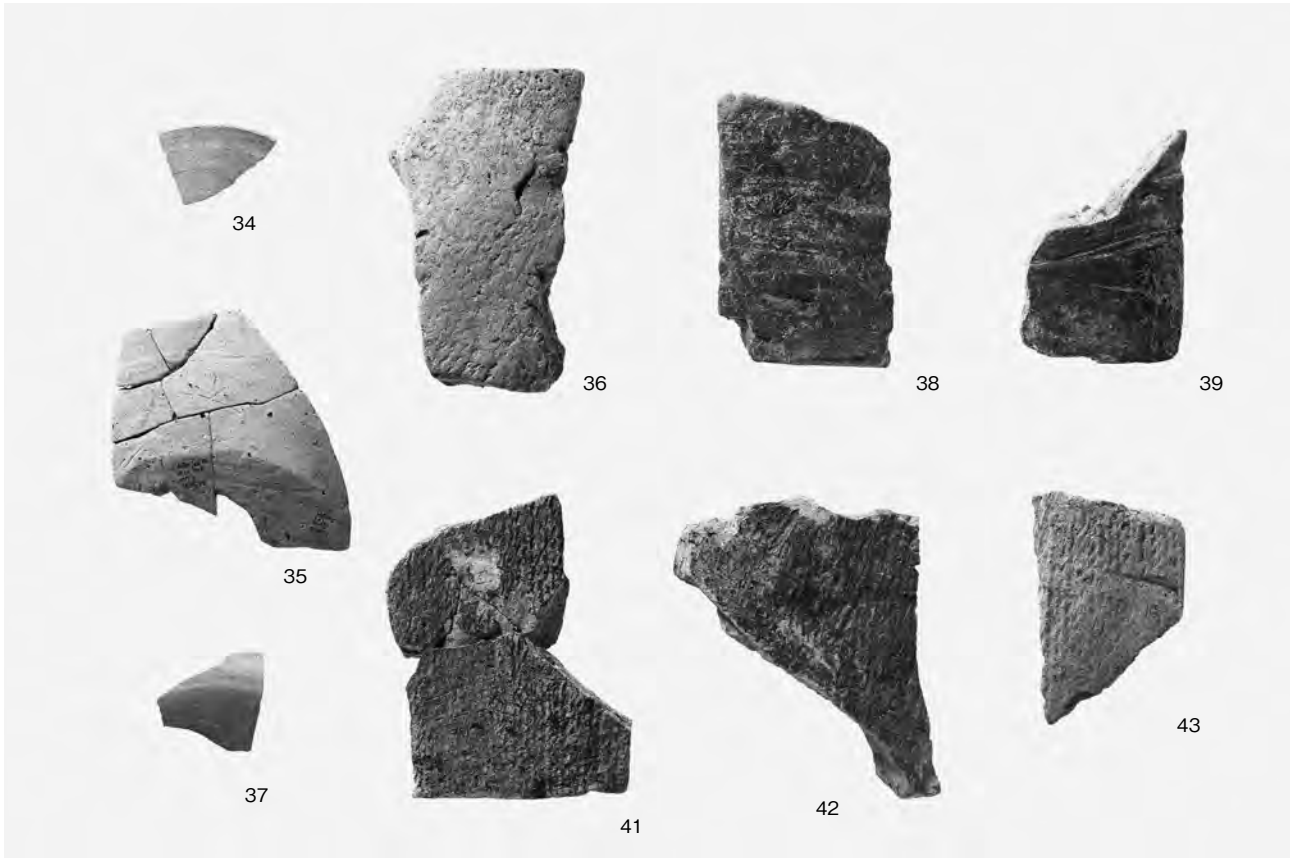
図版第 37　新名神高速道路整備事業関係遺跡



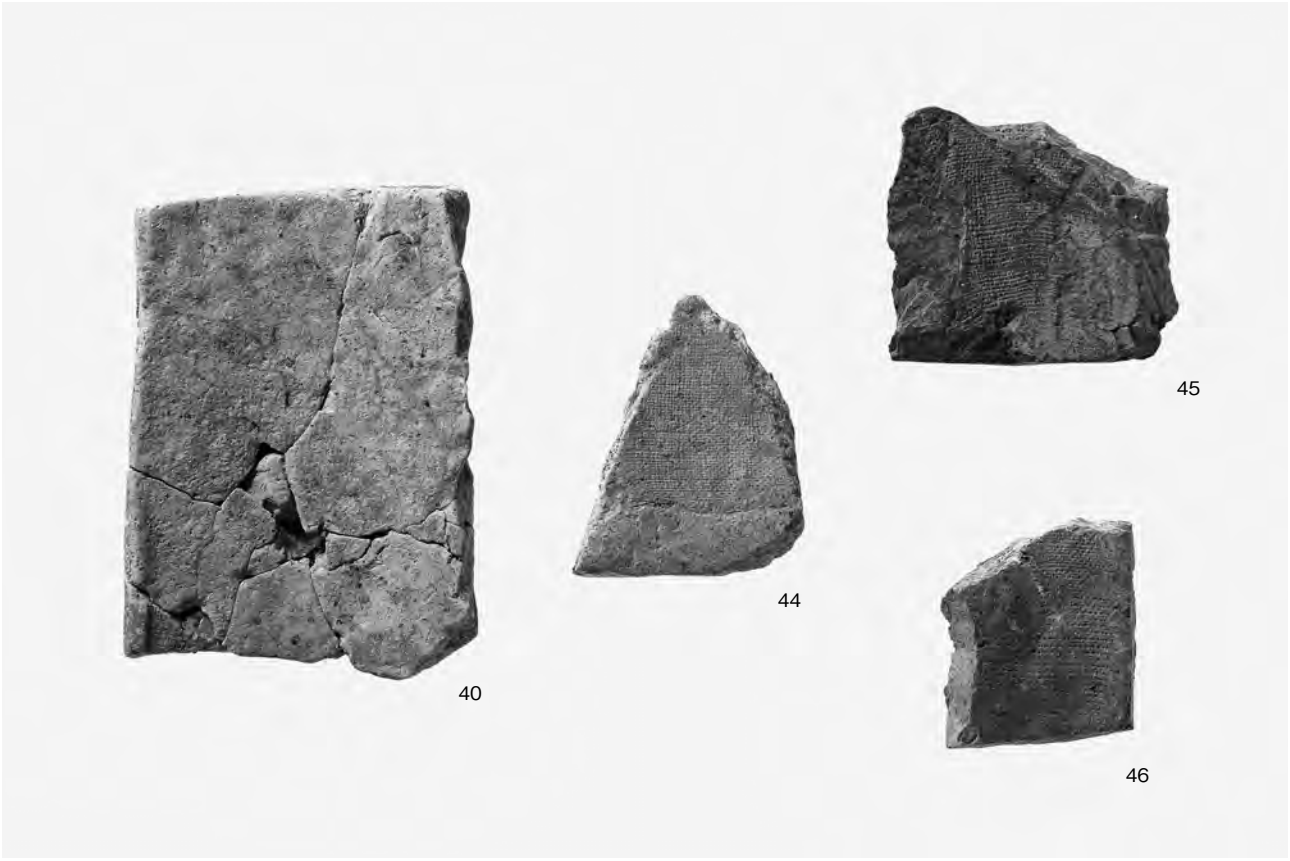
保安塚出土遺物



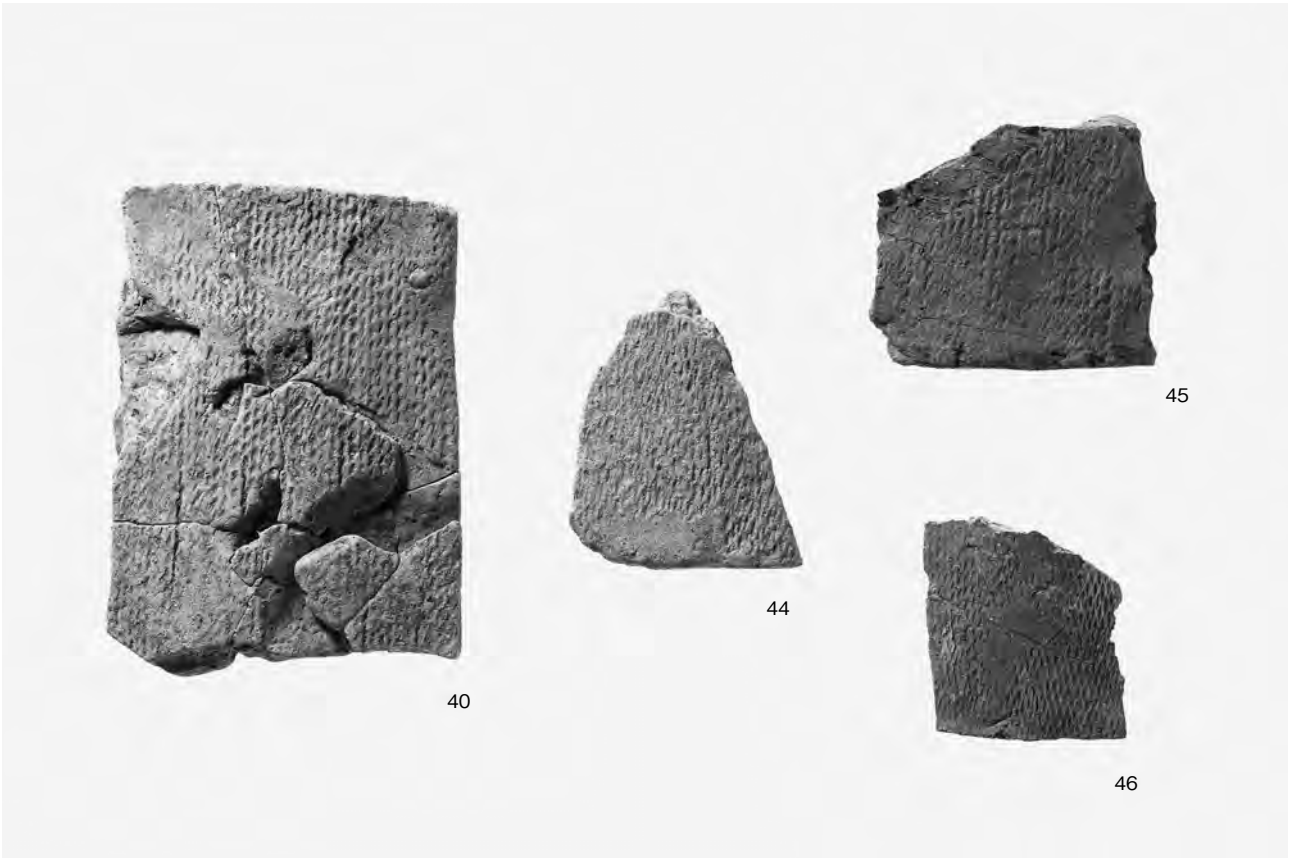
(1)岨田遺跡出土遺物 1 (凹面・内面)



(2)岨田遺跡出土遺物 1 (凸面・外面)

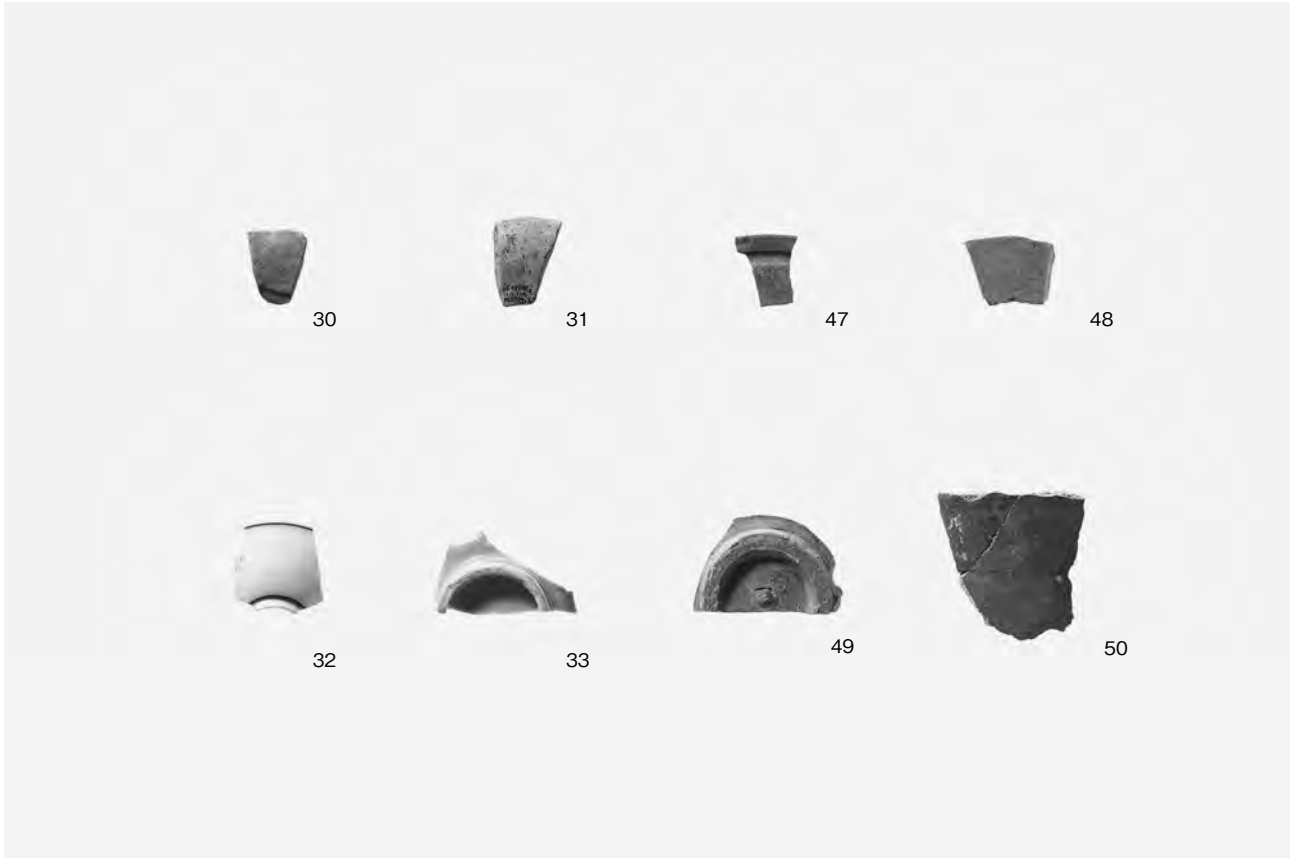


(1)岨田遺跡出土遺物２(凹面)



(2)岨田遺跡出土遺物２(凸面)

図版第 40　新名神高速道路整備事業関係遺跡



長井野塚、砂川古墳出土遺物

報告書抄録

ふりがな	
書名	
副書名	
巻次	
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第181冊
編著者名	加藤雅士・竹村亮仁・桐井理揮・橋本　稔・内藤　京・山中　凌
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002　京都府向日市寺戸町南垣内40番の3　Tel. 075(933) 3877
発行年月日	西暦2021年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		㎡	
まんがんじあと 満願寺跡第２次	まいづるしまんがんじちない 舞鶴市万願寺地内	26202	206	35° 25′ 41″	135° 20′ 24″	20101018 ～ 20110120 20110204 ～ 20110304 20110421 ～ 20111129	3,600	砂防堰堤建設
ほあんづか 保安塚	うじたわらちょうごうのくちうじやま 宇治田原町郷之口宇治山	26344				20190416 ～ 20190528		道路建設
ながいのづか 長井野塚	うじたわらちょうごうのくちながいの 宇治田原町郷之口長井野					20190701 ～ 20190806		
そまだいせき 岨田遺跡第１・２次	うじたわらちょうごうのくちいわやま 宇治田原町岩山		47	34° 51′ 01″	135° 50′ 21″	20151216 ～ 20160304	1,500	
			48	34° 51′ 05″	135° 50′ 37″	20160426 ～ 20160810	1,300	
すながわこふん 砂川古墳	うじたわらちょうぜんじょうじすながわ 宇治田原町禅定寺砂川		30	34° 51′ 57″	135° 52′ 27″			
			34	34° 51′ 57″	135° 52′ 30″	20151216 ～ 20160304	200	
おくじょうどいせき 奥城土遺跡	うじたわらちょうぜんじょうじおくじょうど 宇治田原町禅定寺奥城土		72	34° 52′ 11″	135° 53′ 03″			
			15	34° 52′ 20″	135° 53′ 24″		300	
ぜんじょうじじょうあと 禅定寺城跡第３次	うじたわらちょうぜんじょうじこさかもと 宇治田原町禅定寺小坂本					20190522 ～ 20190723	280	
						20171109 ～ 20180227		

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
満願寺跡第２次	寺院	弥生 鎌倉 室町	礎石建物跡・溝・土坑・埋甕	土師器・須恵器・瓦質土器・陶磁器・銭貨・金属器・石製品	
保安塚 長井野塚 岨田遺跡第１・２次 砂川古墳 奥城土遺跡 禅定寺城跡第３次	塚 古墳 散布地 城跡	古墳 中世 近世	溝・ピット・炭窯	土師器・須恵器・陶磁器・瓦・銭貨・石製品	

所収遺跡名	要　約
満願寺跡第２次	平安時代末から室町時代の遺構・遺物を検出した。礎石建物跡４棟、石組み溝１条を確認した。狭小な谷を造成し、建物が造られている。また鎌倉時代の礎石建物跡は、狭小な谷部に２棟の礎石建物が併存していたことが分かった。平安時代末から鎌倉時代の建物は僧坊、室町時代では礎石建物跡は、規模は小さく、仏堂と考えられる。出土遺物では、磁州窯黒釉壺を国内の発掘調査で初めて確認した。貿易陶磁器は椀以外にも壺類が複数見つかっている。今回確認した遺構・遺物は、満願寺の性格を考える上で重要な成果と言える。
保安塚	塚は宇治田原盆地西端部に近い山地内にある。調査の結果、塚は人工的な盛土によって作られたものであることが判明した。塚の平面形は4.3×4.44mの歪な円形で、周囲の裾部との比高は0.68～0.98mである。塚上からは人によって置かれたと考えられる土師皿や銭貨が出土した。土師器の年代は16世紀後半～17世紀を中心としている。宇治田原と宇治を結ぶ主要な道であった「白川道」に面した位置にあることから、元々は道に関連して作られた塚が信仰の対象になったと判断された。
長井野塚	遺跡は宇治田原盆地西端部に近い山地内にある。遺跡地図で塚とされているものや周辺の土地利用の有無を確認する目的で、４か所の調査区を設定した。調査の結果、塚を対象とした調査区では近世の遺物の細片が少量出土したのみで遺構は検出されず、塚の存在は認められなかった。他の調査区でも遺構・遺物は検出されず遺跡としての兆候が薄い場所と判断される。
岨田遺跡第１・２次	遺跡は宇治田原町北西部の禅定寺川左岸に位置する丘陵斜面上にある。ここでの土地利用を確認する目的で21か所の調査区を設定した。調査の結果、20区では他所から持ち込まれた現代の造成土に伴って縄目や叩き目をもつ瓦が少量出土した。他の調査区ではごく少量の須恵器・瓦・陶磁器が出土したのみであり、顕著な遺構・遺物は検出されず遺跡としての兆候が薄い場所と判断される。
砂川古墳	遺跡は宇治田原町北西部の禅定寺川左岸に位置する岨田遺跡に内包されるかたちになっている。遺跡地図では径７mの古墳として登録されているが、調査の結果、17世紀前半以降の人工的な盛土であることが判明し、古墳の存在は認められなかった。また盛土の下では11～13世紀代と考えられる炭窯１基を検出した。炭窯から出土した炭は、落葉広葉樹であるアカガシ亜属に限られており、周辺の植生史を考える上でのデータを得られた。
奥城土遺跡	遺跡は宇治田原町域中央の北端部付近に位置する山地の南斜面にある。ここでの土地利用を確認する目的で、尾根上に３か所の調査区を設定した。調査の結果、茶畑の造成に伴って土が動かされた状況を確認したのみで、遺構・遺物は検出されず遺跡としての兆候が薄い場所と判断される。
禅定寺城跡第３次	遺跡は宇治田原町北東部の滋賀県境に近い位置にあり、主郭の可能性がある丘陵頂部から斜面にかけて、14か所の調査区を設定した。調査の結果、山城とは関連がないと判断される時期不明の石積を検出したのみで、他に遺構・遺物は検出されなかった。すでに京都府教育委員会による中世城館調査で、山城としての特徴が認められないとされており、今回の調査はそれを追認するかたちになった。

京都府遺跡調査報告集 第181冊

令和３年３月31日

発行　公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の３
Tel (075)933-3877(代)　Fax (075)922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　三星商事印刷株式会社
〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代)　Fax (075)231-7141